

きみにとどこまで

2

V i v a e e

-後編-

笹竹颯夜

一九九二年四月――。

中庭に貼り出されているクラス分け表、新二年生の生徒たちがその前に群がり歓声をあげたりため息を吐いたり、まるで合格発表を掲示しているような空気がそこに流れていた。本城高校では一年から二年に進級する時に一度だけクラス替えがある。その前で、あかねが呆然と立ち尽くしていた。

「こんなのありかよ～」

勇斗も嘆いている。

「まあ、神様でもない限りみんなが同じになるなんてことはないって思ってたけど、意地悪なくらいバラバラよね」

元一年F組にぎやか組の名前は見事にバラバラになって掲示されていた。あかねはA組、麻耶はB組、ヒカルと颯土がC組、勇斗はE組、祐輔はF組。

「なんでここだけ一緒なの？こんだけバラけてるんだから群竹ちゃんあたりはD組になるのが普通だろぉ～」

勇斗は同じC組になったヒカルと颯土を交互に指差して文句を言った。

「ヒカルちゃんと群竹ちゃんだけ同じクラスでずっこいよぉ」

「ずっこいよぉって言ったって群竹くんだよ？」

ヒカルの言葉に、俺で悪かったな...と颯土はぼそり。

「まあいいじゃない。クラスが離れたって仲間じゃなくなるわけじゃないんだからさ」

祐輔は冷静だ。

「そうだよ。元一Fにぎやか組はこんなことで壊れる間柄じゃないはずでしょ。今までどおり楽しくやろ！」

ヒカルが右手を上げて号令をかけた時、その手をグッとつかんでヒカルの頭の上からひょいと顔をのぞかせたのは響だった。

「相変わらずのヒカルだな」

「ヒビク先輩...！」

ヒカルは真っ赤になった。響に会うのはジャック・ベリーの楽屋を訪ねた日以来だ。

「元気だったか？って訊こうと思ったけど訊くまでもないな」

響はヒカルのおでこをちょんとつつく。ヒカルはまるで林檎のように頬を紅潮させて響を見上げた。はにかんだその仕草はこれまでのヒカルとは様子が違う。颯土は三週間前の朝、バイクで出かけて行った二人を思い出した。

――そうか...、やっぱりな...。

今までとは明らかに違うヒカルに、`仲間、としての違和感はあるが、響とふたりで並ぶ`絵、として見るならば――。

「ヒカルと群竹はまた同じクラスなのか」

思考を遮られるような唐突な響の言葉に、颯土はハッと我に返った。そして、思わず、

「はい、すみません...」

と、口に出た。颯土のその言葉に皆の頭の上に疑問符がついた。颯土自身も自然に出てしまった自分の言葉にうろたえた。

「あ、いや...その...」

「何謝ってるの？群竹くん」

麻耶が思ったことをそのままストレートに言葉に出し、そしてあかねは不安気な顔をして颯土を見つめた。

「そうだぜ～、謝ってもらっただけじゃ足りないぜ。みんなのヒカルちゃんなのに群竹ちゃんが独り占めしちゃってさ～」

「だから、べつにそういう意味で言ったわけじゃ...」

さっきからずっとヒカルと響を見つめている颯土をあかねはずっと見つめていた。麻耶や勇斗に突っ込まれて困っている颯土を見ているのがどこか辛くて――、

「三年生はクラス替えなかったんですね」

あかねは話を別の方向に持っていった。

「ああ、クラス替えがあるのは二年だけだよ」

「ということは、もう二度とみんなが同じクラスになることはないんだな～。卒業写真もバラバラかあ」

「大久保くんってば、卒業写真なんて随分先のことだよな。私たち、まだ二年生になったばかりなのに」

皆の関心が自分の発言からそれで颯土はホッと息をつき、そんな颯土の仕草にあかねの胸は微かに痛む。だが、皆はふたりの心の動きにはもちろん気づかずに、あかねが振った話題が続いている。

「そうそう、僕たちの前に風間先輩たちを送り出さなきゃ」

ヒカルは思わず響を見た。

――そうか...、そうだった...。ヒビク先輩は来年の春には卒業してしまうんだ...。先輩がいない学校なんて想像できないのに...。

「おいおい、そんな寂しいことを言うなって。三年になったばかりだってのにもう送り出される話か？」

と、響が言うので今度は勇斗が話題を部活のことに変えた。だが、皆が話題を変えてワイワイはじめてもヒカルの心は、そしてあかねの心にも何かがズシリと重くのしかかったままだった。

◇

翌日の朝――。ヒカルが朝刊を取りにポストまで出て行くと、ちょうど新聞配達から戻って来た颯土と門の前で遭遇した。

「おはよう！続いてるねー。感心感心！」

ヒカルが声をかけると颯土は、おお...、とひとこと応答してそのまま自宅に入ってしまった。颯土が朝刊配達のアルバイトを始めてもうすぐ一ヶ月ぐらいになるのだろうか。毎朝四時半ごろに家を出て百件ちょっとの新聞を配り、自宅に戻るのはだいたい六時頃らしい。

「エライな一群竹くん。かなり見直したかも...」

.....と、見直したはずの颯土は今、机を抱きしめたまま爆睡中だ。寝癖もなく予鈴が鳴る前にはちゃんと教室に入っていたというのに、席に着いたと同時におやすみタイムに入ってしまった颯土はそのまま朝のホームルームも一時間目のロングホームルームも二時間目に入った今も同じ態勢で居眠りをしている。今、二年C組では前期の委員決めが行われている。図書委員、保健委員、美化委員と決まっていき、ヒカルは体育委員に立候補をしていた。そして今、誰も挙手するものがなく最後に残ってしまった中央委員の推薦投票が行われている最中だ。

――ずっと寝たまんまだけどいいのかなぁ、群竹くん...。

遠くの席で死んだように寝ている颯土をヒカルは心配するが、起きる気配はない。そのうちに開票結果が出た。

〔――中央委員――群竹颯土くん〕

黒板にそう名前が書かれ、拍手の音が教室中で響いてやっと颯土は目を覚ました。呆けた状態で目をこすり、黒板をじっと見る。ぼんやりした文字が徐々にハッキリしてきて、颯土はそこに自分の名前を確認した。

――中央委員...群竹颯土...、俺の名前だな....。

はぁ〜、と呑気なあくびが飛び出たが、

――中央委員って.....？

「お、俺?! 中央委員って?!」

やっと自分が置かれた状況を理解するまで覚醒した颯土が椅子から立ち上がった。

「みんなの投票で決まりました。前期の中央委員、よろしくお願いします」

今年の担任で生物の及川先生がやんわりと言った。

「投票って...?! 俺は誰にも投票してないけど...っ」

「何度も起こしたけれどずっと寝てましたよね、群竹くん。それは選挙権放棄ということにみなしておきます。が、みなさんは中央委員を群竹くんにやって欲しいみたいですから」

クラスの皆がにこにこ颯土を見て笑っている。

――こいつら...、絶対面白がってグルになってやがる....。

まったくもってその通りだった。無口で無愛想だが一年の時はいろいろな実行委員を経験していて決断力もあるから、と元一年F組から同じクラスになった誰かが颯土を推薦したのだ。反射的に遠くのヒカルに目を向けると、こちらを見てニッコリと笑っている。その笑顔を見て、

――とてつもなくイヤな予感がする.....。

颯土は未来を予想してため息を吐いた。何故、実行委員とか中央委員とか自分のキャラとは無縁なものに関わるようになってしまったのだろう。どう考えても不思議すぎるがひとつだけ確実に言えることは、そこにはいつも浅倉ヒカル以下にぎやか組と称する者たちがいて、今年もどういふわけかその組長格と同クラス――。

「今日の放課後、さっそく委員会がありますから中央委員の群竹くんをはじめ、他の委員に決まった人はそれぞれの委員会に出席してくださいね」

及川先生が穏やかに話した時、ちょうどチャイムが鳴った。

「中央委員は案外楽だよ？行事はだいたい実行委員会が出来し、いろんなことまとめるだけだから。頑張ってね！」

昨年度の前期と後期に中央委員を経験し、なおかつ全ての実行委員も経験したヒカルが教えてくれた。

「そりゃどうも...」

去年のヒカルの軌跡を、今年はそのまま自分がたどりそうな予感がするのは気のせいであって欲しいと願いながら、颯土は再び机を抱きしめ三度寝の態勢を整えるのだった。

今日はオリエンテーションの日。生徒たちは校庭に集まり、在校生は新入生をクラブに誘う。各部が様々な趣向を凝らして勧誘活動に励んでいた。

あかねは響や田村たちと校庭の隅にある梅の木の下で軽音楽部の勧誘活動をしていた。響や田村たちの身なりはただでさえ目立つ。それが生ギターをジャラジャラ鳴らしながら歌っているのだから自然と人だかりも出来る。

「一年生の皆さん！軽音楽部で～す！楽しい部活ですよ～。入ってみませんか～！」

あかねも演劇部で鍛えた発声で大声を出していた。そこへ、

「あの、風間先輩。僕たち、約束どおり来ました...」

おずおずとやって来たのは元墨川中学生の綾瀬たち六人だった。

「おお！少年たち、来たか！」

響はギターを田村に投げて少年たちに駆け寄った。綾瀬はまあいいとしても、他の五人は見るからに不服そうな顔をしていた。おそらく、音楽にはあまり興味がないのだろうが、怖い風間先輩に逆らったらどうなるか分からないから、という理由でやって来たのだろう。あかねはそんな彼らの気持ちを察しながら、実際にこの子たちと活動するのは私なのよね...、とやや恨みがましい視線を響に送っているが、響の方は、

「綾瀬、背が伸びたな～！」

「そうですか？そんなに変わってないと思いますけど...」

「いやいや、五センチは伸びたよ。牛乳、飲めるようになったのか？」

「それはもう...、毎日鼻をつまみながら頑張っで飲んでます！」

「よしよし！偉いぞー！その調子でいけばすぐに俺に追いつくな！」

などと呑気な話を綾瀬としながらアハハアハハと笑っている。

「はあ...」

あかねがついたため息を聞き漏らさなかった田村が、ポン、とその肩に手を置いた。田村はまるで全て分かっていると言うような目であかねを見つめ、

「心配するな。いざとなったら俺たちを頼れよ？」

と優しい言葉をあかねにかけた。

軽音楽部には他にも男子が三人と女子が二人、合計十一人の新入部員を迎えることができて廃部の心配はなくなったがヒカルの演劇部はというと――。

「ヒカル、どうだ？」

「全然駄目です...」

ヒカルは部舎の前で勧誘活動をしていた。

[――本城高校演劇部、墨川中学で公演！――]

宣伝文句を派手に書いたポップを掲げ大奮闘をしているのだが...、

「ヒビク先輩が描いたこれ...」

ヘビがのたうちまわっているような字に加え、へのへのもへじのような人だか模様だか分から

ない謎な物体が演劇らしきことやってる絵が描いてあるポスターを指差してヒカルは微妙な顔をした。それは響がヒカルのために描いたポップだ。原色使いでやたら派手だが、その派手さに惹かれて新入生が寄ってきてても、何故だかギョッとされて皆すごすごと帰ってってしまう。

「おかしいなあ。目立つはずなんだが…」

確かに目立つ。人目は引く。がしかし、それが入部意欲に繋がるかといえば別な話。

「い、今時の高校生は演劇なんてしないんですよね、きっと…」

ヒカルはポップの出来栄が集客と勧誘に影響しているとはとても言えない。

「そうかもな。軽音から一人出すか？」

「一人出すって…、そんなに余裕があるんですか？軽音楽部は」

「十一人入ったぜ！」

「そんなに～？！んじゃ、五人ぐらい回してくださいよぉ！」

「そりゃ無理だろう。とりあえず一人ぐらいは貸し出すぜ」

その時、ちょうど部舎の前を通りかかったのは綾瀬だ。

「おお、綾瀬、ちょっと来い！」

綾瀬は不安そうな顔をしてちょちょことやって来た。

「お前、悪いんだけど演劇部に回ってくれる？」

「ええ？！僕が演劇部にですかぁ？！」

目の前の宣伝ポップを見て、綾瀬はギョッとしてから身をすくませた。

「軽音楽部と演劇部は兄弟みたいなもんだからさ、かけもちでもいいぜ？」

「そんなぁ……」

綾瀬はヒカルを見た。その目の中には「ヒカル先輩助けてください、という綾瀬の切実な言葉が現われていると分かったが、演劇部としても死活問題を抱えているので、その訴えは涙を呑んで却下せざるを得ないヒカルだ。

「…綾瀬くんが入っても実働部員は私と綾瀬くんの二人だけです…。やっぱり演劇部の廃部はまぬがれそうにない…」

ヒカルは綾瀬の入部は決定事項として扱い、その上でのため息をついた。

「ため息なんてヒカルらしくないぜ。大丈夫、ヒカルがいるんだから！」

響は力強くヒカルの肩をポンとたたく。

「ヒカルは一人だってやるつもりだったんだろ？」

「もちろんです！部室を守らなくてはいけませんから！」

「んじゃ、頑張れ！いつものようにハツラツと昇っていけよ。俺たちも出来る限り応援するし、綾瀬をやるんだから一人じゃないだろ？」

「もう…、やるとか何とか…僕は物じゃないんですけど…っ」

綾瀬は諦めながらも小さな反発を控えめにぶつけてみた。軽音楽部だけでもどうしようかと考えていたのに、さらに演劇部まで掛け持ちで入部させられることになるなんてたまらないと思っている。そもそも音楽や演劇に精通しているわけではないし、響に出会わなければ間違いなく関わっていないジャンルのものだ。が、

「よろしくね、綾瀬くん！」

と、ヒカルに差し出された手を、

「はあ、こちらこそ...」

思わず握ってしまう。しまった！と思った時にはもう遅かった。ニヤついた響が名簿にしっかりアヤセと名前を書き込んでしまったのだ。

じゃ、俺は行くぜ、と響が立ち去った後、ヒカルと綾瀬は二人で顔を見合わせた。

「ヒカル先輩...、本当に二人で演劇なんて出来るんですか...？」

「う〜ん...。一人芝居っていうのは聞いたことあるけど、あたしたちにそれをやるのはちょっと無理っぽいし、あたしとしては一人でお芝居するのは寂しくてやだしなあ...」

と、ヒカルは考え込む。綾瀬はため息をついた。大変な部活に入れられてしまった、と思っている。これからのことを考えると憂鬱になった。だが、

「ま、心配しないでよ！何とか考えるから、ね？」

「は...い...」

不思議なことにヒカルの笑顔を見た途端、綾瀬は憂鬱も不安も綺麗に吹き飛んだ。それは本当に一瞬の間に消滅したと言ってもいいほどの変化だったので、

「ヒカル先輩の笑顔って、魔法でもかかっているんですか...？」

と、思わず素直に口に出す。ヒカルは、`は、はい...？、と、戸惑ったような微妙な顔をして首を傾げた。

「いえ、何でもないです...」

綾瀬はやや赤くなってうつむいた。

◇

学校から帰ったヒカルが自宅の門の中に自転車をしまおうとしていると、隣の家から颯土が自転車を転がして出てきた。

「よっ！どこかおでかけですか！」

「コンビニ」

「じゃ、あたしのあんまんも買ってきて」

「太るぜ？」

「いいの、太っても！」

ヒカルは少し赤くなって言い返す。

「そういえば...、部員確保出来たか？」

「うん、一人！」

「ひ、ひとり...？そりゃまたずいぶんと寂しいな...」

颯土は鼻の頭をポリポリかきながら、同情的な目を向けた。

「でも、いないよりはいいでしょ？ヒビク先輩がヒカルがいるんだから大丈夫だって言ってくれたし！」

ヒビク先輩ね...、と颯土は思う。

「なに？」

「いや、別に…」

颯土は自転車にまたがった。

「あんまんでいいんだな？」

「本当に買って来てくれるの?!」

答えずに颯土は自転車を走らせて行ってしまった。

ヒカルが玄関に入ると、そこで母親がニヤニヤしながら立っていた。

「ずいぶん仲良くなったこと～」

「立ち聞きなんて悪趣味」

ヒカルは靴を脱ぎながら母親を睨んだ。

「お隣にキンピラのおすそ分けをしようと思ったのよ。ふたりの邪魔しちゃ悪いからここで待っていたんじゃない」

母親の手には器に入ったキンピラが乗っていた。

「ふたりの邪魔って…、べつにそんなに気を使ってもらわなくてもいいんですけどー？」

「あらそう？うふふー。颯土くんも素敵だけどお母さんはヒビク先輩もタイプだわ～」

「何、言ってんだか！」

ヒカルは真っ赤になってバタバタと家に上がりこんだ。母にしても久美子にしても、しばらく前から響を勝手にヒビク先輩と呼んでアイドルにブレイクしているような騒ぎ方をしている。母などたった一度、しかもほんの一瞬しか会ったことがないはずなのに、ヒビク先輩ヒビク先輩とうるさい。

そして、颯土のことも同じぐらいに家では話題になる。最近の颯土は新聞配達のおかげで哲平の目覚まし攻撃が不要にはなったが、それでも哲平は未だに颯土の部屋に頻繁に出入りしているし、ヒカルも仲良くなろうぜ祭りを時々ゲリラ的に開催するし、そのおかげでかどうなのか、少しずつふたりで交わす会話も長くなって来た。ちょうど一年前には「仲良くなるには苦戦しそう」と言っていたが、苦戦の結果多少はお隣さんとして近しくなれて来ている。だからなのか、母は今日のようなことがあるとまるで微笑ましい光景を見るような目をするのだ。その母も颯土の母と順調に親交を深めているようで、今もキンピラを持って行ったまま帰ってこない。きっと立ち話に花を咲かせているのだろう。

「ヒーねえ、おかえりっ！」

着替えをすませてリビングに行くと哲平が駆け寄って来た。

「昨日の続きをやってよ～～！」

「わかった、わかった」

哲平はヒーローもののフィギュアやぬいぐるみを持ってきてテーブルの上にスタンバイさせた。そして、

「今日はレッドレンジャーが主役の『勇者！レッドレンジャー！』だよ！」

と、赤いフィギュアをヒカルに渡した。哲平は毎日ヒカルの帰りを心待ちにしている。ヒカルがこれらのフィギュアたちを使って自作劇を見せてくれるからだ。

『レッドレンジャーさま～、たすけて～！』

『こら、ワニ大将め！そのウサギちゃんをはなすんだ！その代わり俺が身代わりになってやる！』

と、ヒカルがストーリーをすすめると、
「え～っ！レッドレンジャーが代わりに食べられちゃうの～？」
哲平が横から口を出す。

『なんとお前は心の優しい男だ。私はカンゲキしたぞ』

ワニ大将がテーブルの下に消えて女の子のぬいぐるみが現われた。
『ワニ大将は本当は心の優しいお姫様だったのです。悪い魔法使いに魔法をかけられていたのです。けれど、レッドレンジャーの優しい心で魔法がとけました。お姫様とレッドレンジャーはめでたく結婚しましたとさ、おしまい！』

「あ～、よかった。レッドレンジャーが食べられなくて！」

哲平は心から安心したようだ。ふだんはやんちゃで生意気でも、こんな哲平はやはり幼稚園児らしくて可愛いと思う。間に合わせの人形でちょっと劇をしてあげるだけでここまで純粋に喜んでくれると本当の劇を見せてあげたいとも思う。

――でも、今年の演劇部は綾瀬くんとふたりだしなあ....。

ふたりで何が出来るだろう...と考えながら、ヒカルは手に持ったままのレッドレンジャーをぼんやり見つめた。

『レッドレンジャーさま。これからの演劇部に何かいい案はないですか？』

『俺にまかせておけ！』

『え？本当ですか？！』

『俺とヒカルがいるんだ！不可能なことはないさ』

『そうですよね！レッドレンジャーさま～』

独り、芝居がかった口調でレッドレンジャーに話しかけているヒカルに、哲平は、なにやってるの？と首をかしげる。その時、玄関のチャイムが鳴った。ヒカルが出て行くと、颯土がコンビニの袋を抱え、やや居心地悪そうな顔をして立っていた。

「あんまん配達に来たぜ」

「ホント？！あれ？たくさん入ってる！」

袋の中をのぞくとほかほかのあんまんが五つも入っていた。

「兄弟多いから取り合いになるだろ？」

「よくまあ、うちの内情をご存知で...。それにしても数が多いよ？」

兄弟は四人、あんまんは五個。どういう計算をして颯土は買って来てくれたのだろう？とヒカルは首をかしげ考えた。

「誰が二個食べればいいの？」

「.....お前でいいんじゃないか？太ってもいいんだろ？」

四個では数がよくないから深く考えずに五個買ってきただけなのに、誰が二個食べればいいのかを真顔で訊かれるとは思わなかった。颯土は呆れるのと可笑しいのが混ざり合った奇妙な感情を体験し思わず吹き出した。

「あ、ソージだー！」

哲平がリビングから走ってきて颯土の手を引っ張った。

「あがんなよ、ソージ！ヒーねえが劇やってくれてるんだよ！」

劇？と颯土はヒカルを見た。そのヒカルの手にはレッドレンジャーが握られたままだ。

「あはは...。劇というほどのものじゃないよ...」

「いいからいいから！ソージも一緒に見よう！」

「あ、おいっ！」

颯土は哲平に引っ張られ、そのまま初めてヒカルの家に上がりこむことになった。そして――。

『レッドレンジャーさま～、たすけて～！』

『ワニ大将め！そのウサギちゃんをはなすんだ！』

『誰が放すものか！ウサギは俺様に食べられる運命なのだ！』

ヒカルは哲平と颯土を観客にして、『勇者！レッドレンジャー！』を再演することになった。哲平は大興奮で見ているが、颯土の方は、

――くすぐってえ.....っ。

ただただ恥ずかしくて仕方が無い。ヒカルの演技もまともに見ていられないが、哲平とダイニングテーブルに並んで座り、目の前で`ヒーねえ、`が人形劇をやっているこの状況が恥ずかしい。今すぐこの場から逃げ出したいぐらいだった。哲平は颯土が買ってきたあんまんをさっそくかじっている。そして、五個のうち数が多かった一個は何故か颯土に手渡されていた。

『ひえ～～！わたしはあんまんやだいふくとは違います。食べられませんよお～』

『おお！俺様はあんまんもだいふくも大好きだぞ！』

んじゃこれをやるよ...、と颯土は手に持ったままのあんまんをワニ大将に差し出した。

『なんと！お前はいいヤツなのだ！気に入ったぞ！俺様の子分にしてやる』

そりゃどうも...、と言って颯土は立ち上がった。

「ソージ、帰っちゃうの？」

「ああ」

颯土はスタスタと玄関に向かって歩き出す。ヒカルが慌てて後を追った。

「待ってよ、あんまんのお金払うから！」

「いらねえよ、そんなの」

「駄目だって！」

ヒカルはサイフを取りに奥に走ろうとした。

「いいよ！バイト代入ったし。あれは奢る！謎な人形劇も見せてもらったし...」

「人形劇...？」

颯土が言った人形劇という言葉にヒカルは天啓を受けたような気がした。

「人形劇かあ...」

颯土は、ん？と訊き返す。

「ありがとう、群竹くん！あたし、やるべきことが見えた気がするっ！」

ヒカルはいきなり目を輝かせて叫んだ。

「……は？」

颯土はただ呆けたまま、そんなヒカルを見つめ返した。

「人形劇ですか?!」

素っ頓狂な声を上げて叫んだのは綾瀬聡だ。

「そう。劇は劇だと思わない？」

「そりゃそうでしょうけど...、演劇と人形劇ではそもそも『劇』の種類がまったく違うような気がするんですけど...」

綾瀬は三送会で観たダイナミックな音楽劇と、小さな台の上でちょこちょこ動くウサギとかカメを想像して比較していた。

「うん。全然違うよ?でも実働部員二人しかいないんだもん。仕方ないでしょ?」

颯土のひとつでひらめきを受けてから一週間。ヒカルは人形劇についてのあれこれを図書室や図書館などで調べてみた。指を使うもの、腕を使うもの、棒を使うものと、人形劇にも様々なタイプがあるようだが、自分と綾瀬で出来るものとなると限られてくる。それでもそこには光明がたくさん散りばめられていて、ヒカルのやる気は満々に膨らんでいた。

「二人で人形劇なんか出来るんですか？」

「手は二本あるからひとりが二役出来るじゃない?最高四人の登場人物が一度に舞台に出られるし、人形を持ち替えればいくらだって登場人物増やせるんだよ。凄いでしょ?」

ヒカルはニマツと笑った。

「ああ...、なるほど...」

「オリジナルで台本を作れば二人でも出来るよ。どう?今年の活動方針は人形劇ってことで」

「ヒカル先輩がそう言うなら、僕は従いますけど」

「ありがとう!頑張ろうね!」

そうは言っても、演劇部は事実上廃部のクラブだ。とりあえず名簿上部員が規定人数いるということと、昨年の実績を買われて部室の取り上げは免れた。だが予算まではとれない。

「ということでさっそく部費徴収!」

ヒカルは綾瀬の前に手を出す。

「ええ~?僕、さっき軽音でも部費取られたんですよ...」

綾瀬はぶうぶう文句を言いながらヒカルに部費を払った。

「あとでヒビク先輩たちにもカンパしてもらおうっと!応援してくれるって言ってたし」

「それがいいです!風間先輩たちにはい~~っぱい、これでもかってぐらいにガンガンカンパしてもらってください!」

と、綾瀬が自分の不遇を響たちに八つ当たりしながら叫んだ時だ。部室のドアがバタンと開いてあかねが飛び込んで来た。あかねは真っ赤な顔をして目をうるませていた。

「どうしたの?あかねちゃん?!」

「ヒカルちゃん...」

あかねは入り口を入ったところに立ち尽くしてヒカルの顔をじっと見つめた。泣きたいのを必死に我慢しているようで、肩だけがふるふる震えている。

「あかねちゃん、もう一回訊くよ？何かあったの？」

「私...、ヒカルちゃんのパワーを貰いに来た...」

今にも零れ落ちそうなぐらいに目に涙が溜まっているがギリギリのところで堪えている。

「もしかして、墨中のあの子たちが何かやらかしたとか？」

ヒカルは綾瀬にチラリと目を向けた。

「あいつらだけじゃないんですよ...」

「どういうこと？」

「あいつらもそうだけど、女子のふたりがあかね先輩に口ごたえはするし言うこときかないで無視もするし、部活に出て来ても雑誌広げてたり喋ってるだけでハッキリ言って邪魔してるとしか思えないというか...」

「そうなの？あかねちゃん」

あかねはうん、とうなずいた。

「あかね先輩は優しいから...」

「あかねちゃんしっかりしてよ。相手は一年生じゃない。部活に関係ないことやってたらそこはガツンと怒らないと」

「怒ったよ。そしたら集団無視が始まったんだよ...。一年生十人に対して私ひとり。みんなで団結して私今孤立してて...」

とうとうあかねの目から涙がぽろっと零れた。あかねせんぱあいと綾瀬も心配する。

「なにそれ...」

ヒカルの握った拳がふるふると震えた。

「.....あかねちゃんは今後の活動方針をしっかりと打ち出して、あとは一年生たちに丸投げしちゃえばいいよ」

「え？」

「一年生たちは団結してるんでしょ？バラバラよりはまだいいよ。あかねちゃんはヒビク先輩たちに相談をしてしばらくの間バンドを再開するとか、一年生たちとは別のことをおんなじ音楽室で展開しちゃうの」

たぶん一年生たちはおとなしいあかねの実力をみくびっているのだ。何も出来ないと思っているからバカにしているところがあるのだろう。本当は自分が出て行ってガツンと一発シメてやりたいところだが、さすがにそれだと余計にあかねの立場を悪くしてしまうだろうから...、とこれでもヒカルはずいぶんと怒りを沈めた形の提案だった。

「ヒビク先輩たちに相談をしておいで！」

「でも...、」

田村が何かあったら頼れと何度も言ってくれていたが、あかねは先輩たちに相談することを躊躇していた。頼れば何とかしてくれることは分かっているが――。

「だって...、ヒカルちゃんはひとりで頑張っているのに、私だけ先輩に甘えるわけにはいかないよ...」

ヒカルは部員二名の演劇部をゼロから盛りたてなくてはならないのに弱音なんてひとつも吐い

ていない。前向きに新しいことを考えながら笑顔を忘れないでいる。ヒカルみたいに笑顔で頑張ろうと、そう思って泣きたいのも堪えてきたのだ。

「あたしには綾瀬くんっていう頼もしい部員がいるから大丈夫だよ？」

「僕、頼もしいですかあ？」

「当たり前じゃない！綾瀬くんがいなかったら、あたしはひとりで何も出来ないんだよ？軽音の十人の一年生たちの百倍は頼もしいから！」

綾瀬は嬉しそうに目を輝かせた。

「だからあたしは大丈夫！あかねちゃんは遠慮しないで先輩たちを頼りなね。そもそも、その女の子たちはともかくとして、墨中出身の子たちはヒビク先輩が入れた部員なんだから責任取ってもらいな？」

そうですよ、と綾瀬もあかねを後押しした。

「そうか…。ありがとう。じゃあ、あとで田村先輩に相談してみる」

「一緒に行こうか？」

「大丈夫。相談ぐらいはひとりで出来るから…。ありがとうヒカルちゃん。少し元気が出たよ」

あかねは部室を出て行った。だが、下がった肩がまだ元気を取り戻していないことを物語っていた。

「そんなにひどいの？その女子たち」

綾瀬は、はい、と頷いた。軽音楽部と演劇部を掛け持ちしている綾瀬は今年のヒカルとあかねのように両部を行ったり来たりしているのだが、一年女子のふたりは初めからあかねを敵視しているようだと言った。

「何だかあかね先輩のことをカタキかなんかみたいに思っているようでやな感じなんです。陰険なイジメと同じですよあれは…」

「ふーん、何でだろうね」

ヒカルは腕を組んで考えるが、あかねがそこまで新入生に恨みを買う理由が思いつかなかった。

だが、その理由が一週間後の放課後に判明した。部活が終わり、生徒たちが下校を始めた夕暮れ時のこと。ヒカルが自転車を転がしながら校門を出ると、ちょうど颯土の自転車の後ろにあかねが乗ろうとしている場面に出会った。

「あらあらお二人さん、今日は一緒？」

声をかけると、颯土は照れくさそうに頭をかく。

「群竹くん、あかねちゃんをよろしくね～！」

颯土は無言で手を上げて応え、あかねは颯土の背中にしっかりとしがみつき、二人は薄暗くなった道の彼方に消えて行った。仲がいいな、と思いながらヒカルも自転車にまたがろうとした時だ。後ろから声が聞こえた。

「群竹先輩は水沢先輩なんかのどこがいいのかな？」

聞き捨てならない台詞にヒカルは思わず振り向いた。ヒカルがいる場所とは反対側の門の前

に立っていたのは軽音楽部の一年生女子ふたりだった。

「絶対におかしいよね。水沢先輩が群竹先輩の彼女だなんてさ」

「ああやって群竹先輩の自転車に乗せてもらっていい気になってるけど、全然似合っていないよって言ってやりたい」

「もっと苛めちゃおうよ」

「そうだね」

――なに、この子たち。

あまりの怒りでヒカルは自分の鼻がみるみるうちに膨らんでいくのが分かるほどだった。性格はともかく...見た目が凛々しい颯土は確かに女子生徒たちに人気がある。去年は同級生や先輩たちからもモテていたし、今年はまだ既に新入生ファンもいるようで空手の胴着でランニングしている時は、校庭に一年生のギャラリーが立ち並んでいる。それは、「何で群竹ちゃんのファンはいっぱいいて、黒帯のオイラにいないんだよ〜！」と、勇斗がぶうぶう言うほどだ。だからといってあかねを敵視するのは筋違いもいいところだろう。あかねが颯土の彼女だということは、もう去年からの公認なのだ。嫉妬して先輩イジメをするなんて冗談にもほどがある。

――ちょっくらシメてやるか。

「ちょっとちょっと」

ヒカルはふたりを自分の元に手招きした。繕って笑顔を見せてはいるが、内心はひっぱたいてやりたいと思うほどの怒りで煮えたぎっている。

「はい...？」

二人は怪訝な顔をしてヒカルの元に歩み寄ってきた。

「いいこと教えてあげるね。あかねちゃんと群竹くんってすごーく仲がいいの」

「はあ?!」

女子たちは顔を見合わせた。

「一年生の時からずっとなんだよね〜」

「はあ...」

「群竹くんはあかねちゃんを守ることには命をかける男だから、あかねちゃんが誰かにいじめられていたり下級生の誰かにバカにされたりしてるのを知ったらものすごく怒るよ！空手の必殺技が出ると思う」

ヒカルは「いじめられていたり下級生の誰かにバカにされたり、を強調して言った。一年生のふたりは顔を見合わせてややうろたえた。

「ねえねえ、あなたたち軽音楽部だよね？まさかとは思うけどあかねちゃんを苛めてなんかいないよね？」

「は、はい...」

「そうお？なんか軽音であかねちゃんが一年生たちに無視されているとか、そんな噂が聴こえてくるんだけど」

「そ、そんなことはないですっ」

ヒカルはふたりをキッとにらみ、ふたりはヒッと後ずさりする。

「なら問題ないんだけど、`もしも、あかねちゃんに八つ当たりしてるとしたら見苦しいだけよ」

ヒカルは目は誤魔化しは許さないとばかりに鋭く真っ直ぐにふたりを見据えていた。

「そんな、私たちは別に…」

「`もしも、水沢部長の軽音楽部がイヤならいつでも演劇部であなたたちを引き取るよ。でも、あかねちゃんは優しいけれどあたしはそうはいかないから。`もしも、たてつかれでもしたら飛び蹴り必殺技は出させてもらうけどね。どう？」

「い、いえ、いいです…」

「じゃあ、部活では水沢部長が言う通りのことをやりなさい。部長の言うことを聞けない部員はいなくていいんだし、本城高校は下級生が上級生にたてついてまかり通るほど甘いところじゃないわよ？覚えておきなさい」

最後の方は冷徹な言い方になってしまったとヒカルは自分でも思った。本城高校は先輩後輩の仲が良い平和な学校だが、一年女子ふたりは完全に怯えてしまったようだ。

――でもいいよね、これぐらい。

こんな一年生に親友のあかねをバカにされるのは許せない。しかも、お門違いなヤキモチなどというくだらない理由で。

――あかねちゃんと群竹くんは本当に仲がいいんだからねーだ！

ヒカルはふたりの女子に心の中であっかんべーをした。

ヒカルが一年女子と冷戦を展開している頃、颯土とあかねは駅に到着していた。

「じゃ、気をつけて」

颯土はいつもそうするようにあかねを駅で降ろすと手を上げてUターンをしようとした。

「あ、群竹くん…」

あかねは颯土の腕を取った。

「なに？」

「うん…」

なに？と聞かれればなんでもない。ただ、

――いつもここでさよならするだけじゃ寂しいよ。もう少し一緒にいたいのに…。

「どうした？電車来るぜ」

「うん、そうだね。送ってくれてありがとう…」

あかねはとぼとぼと改札の中に入っていく。

――群竹くんは私をどう思っているのだろう…。

不器用な颯土を理解し、求めすぎないようにしてきたが不安になる。周りの人間は自分たちを付き合っているふたりだと認めているようだが、本人同士は去年の夏の合宿以来何も変わっていない。颯土はあかねの心を受け止めただけで、自分のあかねに対する気持ちを言ったことはない。

あかねはそれでも満足しようとしていた。こうして颯土の自転車の後ろに乗せてもらえる、た

だひとりの女の子なのだから。

だが、二年生になってクラスが分かれてしまってから一緒にいられる時間も少なくなり、あかねの不安は日に日に募っていく。

颯土は変わった。以前のようにただ無口でいることも、ただ無愛想でいることもなくなった。でも――。

――群竹くんをそこまで変えたのは……。

それ以上考えるのが怖い。

改札をくぐっていくあかねの後ろ姿がやけにせつなかった。

「水沢！」

颯土は思わずあかねを呼び止めた。

「なに？」

なに？と聞かれればなんでもない。ただ、後ろ姿が寂しそうで気になっただけだ。

「いや、気をつけてな…」

「うん、ありがと…」

ホームに電車の入る音がしたので、あかねは小走りに去って行った。

――……。

あかねに対する気持ちは何なのか、颯土は自分でもよくわからない。ただ、あかねと一緒にいるのは心地がいい。ふんわりと暖かくてくすぐったいくらいに甘い、そんな空気は懐かしくて居心地がよくて――。

だが、同時に不安もある。それはいつまでも続くとは限らない不確かなものだ。人の気持ちは移ろい変わっていくもの。大切なもの、抱きしめていたいものほど手の中からすり抜けて行く。そして二度と戻っては来ない――。

――だから、このままがいいよな。このまま互いに深入りしない方が…。

颯土は小さなため息を吐いて頭上の鉄橋を走って行く電車を見上げた。

「七月に入ったら部内で発表会を開きたいと思います。みんなに一曲ずつ披露してもらいますのでそのための練習を各自でしておいてください」

あかねはヒカル言う通り一年生たちに課題を与えて丸投げした。

「発表会？なにそれ？」

「練習って何すればいいんだー？」

「意味わかんないんですけどー」

一年生たちがいつものようにバカにしたような口調で言った。いつもならしゅんとなって何も言えなくなるあかねだが、

「これまでに何度も説明して来たよね？聞いてなかったのならあなたたちが悪いんでしょ？もう一度説明して欲しいなら、お願いしますと私に頭を下げなさい。説明がいらないうらすぐにも始めてください。どちらもイヤだという人はここから出て行ってください。その場合、退部とみなしますからもう二度と戻ってこなくていいです」

――と、最大の勇気を振り絞って言い放った。一年生たちはポカンとした顔であかねを見るだけだ。あかねも厳しい目で一年生たちを見据える。いつもと違い口答えの隙を与えてくれないあかねの気迫に圧されているのか、一年生たちからは再度の説明を請う声もないが音楽室を出て行く者もない。かと言って何かを始める者もなく、初めての空気に戸惑っている様子が伺えた。

「説明はいらないうらね？それじゃ、七月に向けて頑張ってください」

あかねはそのまま音楽準備室の方に引っ込んだ。

準備室には田村と響がいた。

「あかね～、偉いぞ！よく言えたな」

田村があかねの元に飛んで行き頑張った後輩の頭をよしよし、と労うように撫でた。

「田村せんぱあい...」

張っていた糸が切れたあかねはそこにあったパイプ椅子に崩れるようにして座り込む。

「あとはしばらく様子を見ていようぜ？俺たちも明日から部活に参加するから心配すんなよ？」

「ありがとうございます。力のない部長で本当にすみません...」

今あかねが一年生たちに言ったことは、あかねに相談を持ちかけられ軽音楽部の現状を知った田村が、生意気な一年め！俺がシメてやる！と憤慨し、自分で吼える気満々で考えたシナリオだったが、部長の責任だから私が言います、とあかねが自ら一年軍団と対峙したのだった。

「そんなこと気にすんな。俺たちにも全然責任がないってわけじゃないんだから」

「ていうか、半分以上ヒビクの責任だよな」

田村につっこまれ、響は肩を縮めて言葉を詰まらせた。墨中連中を勧誘だけしておいてこれまで放っておいたのは明らかにお前が悪い、責任とってヤツらをしっかり指導しろと田村に叱られて、今響はここにいるわけだ。七月の発表会もとい部内コンサートには、響や田村たち三年生とあかねはバンドで参加することにし、明日から『ライジングサン』の練習を始める予定になっている。これが一年生たちにどんな影響を及ぼすかはやってみないことには分からないが、とり

あえず田村たちが七月まで部活に参加してくれるということで、あかねの不安はずいぶんと落ち着いた。

「でも、せっかくバンドを再開するならヒカルのマラカスも欲しいよなあ...」

響は準備室の棚に収納されているマラカスを手に取った。ヒカルが一年間振りまくっていたマラカスだ。

「そうなんですけど、ヒカルちゃんは今忙しくて...」

「忙しい?! あいつ、また実行委員でもやってんのか?!」

今の時期、なんか行事あったか? と響は考えるが、

「いえ、そうじゃなくて演劇部の活動です」

と、あかねは笑った。

「部員がふたりの演劇部が忙しいのか? 今度は何をやるつもりなんだ?」

「先輩、心配だったらあとで演劇部の部室を覗いてきたらどうです?」

そうだそうだと田村も同調する。

「あ? ああ、そうだな、そうするよ...」

田村とあかね、ふたりに同じ調子で言われ、響は居心地が悪そうに鼻をかいた。

その頃演劇部の部室では――。

「あーダメ! お話が繋がらない!」

ヒカルはシャーペンをテーブルの上に投げて大きな伸びをした。向かい側でチクチクと針を動かしていた綾瀬が手を休め、

「またですかあ〜? 頑張ってくださいよ、ヒカル先輩。もう人形は作り始めちゃってるんですから...」

ちっとも進んでいないヒカルのノートを覗き込んで心配げな顔をする。ヒカルは人形劇の台本を書き綾瀬は人形を制作しているわけだが、台本が思うように書き進められずにさっきからヒカルは同じ台詞を何度も吐いて何度も伸びをしているのだ。

「そーゆー辛気臭い顔をしないの! 大丈夫だよ、構想はちゃんと出来ているんだから、そのお人形はちゃんと登場させるよー」

「.....順番が逆なんだよなあ...」

綾瀬がぼそり、と呟いた。

「口動かさなくていいから手を動かさないよ」

「はーい。ヒカル先輩も手を動かしてくださいね〜」

「う...っ」

綾瀬くんってけっこう小生意気な子だったのね...、とぶつぶつ言いながらヒカルも再びシャーペンを手に取った。ヒカルが書いている人形劇の台本は完全なオリジナル作品だ。モチーフになっているものがあるとすれば、いつも哲平に見せている『勇者! レッドレンジャー』である。ワニ大将やレッドレンジャーやウサギのぬいぐるみたちがそれぞれ姿を替えて物語に登場しているわけだが、即席劇をちゃんとした台詞と流れのある物語にすることにヒカルは苦心しているのだ

った。

綾瀬が作っている人形は妖精だが台本の中にはまだ妖精が登場して来ない。そもそも綾瀬はヒカルの頭の中にどんなストーリーが構成されているのかわからない。

『妖精が出てくるの！』

ヒカルが台本の内容を綾瀬に伝えたのはこれだけだ。台本が出来上がってから人形制作に入ったのでは全体作業が遅くなるからと、ヒカルはまずは綾瀬にこの妖精を作らせているのだ。台本作りも人形制作も初めてのことでやり方など分からないから、ヒカルは頭に流れる場面をどうにか恰好つく文にしようと考えながら書いているし、綾瀬も人形の頭はもっと大きい方が見栄えるとか、手を入れる時に安定させるにはこう縫った方がいいだろうなど、自分で研究しながら作っている。

「で、ヒカル先輩？人形劇を作って誰にどこで観てもらうんですか？」

「あ」

ヒカルはシャーペンを持ったまま固まった。まったく考えていなかった。

「文化祭……とか？いろいろ…」

とは言ってみたものの、なにかしっくりと来ない。人形劇を思いついたのは哲平に見せてあげたいと思ったことがキッカケだったのだ。ということは、

「……幼稚園とかでやれたらいいなあ」

——あ…。これかも。

自分で言った言葉が自分の琴線に触れた。人形劇を子どもたちに見せてあげたい。

「それ、いいですねー。人形劇っていったらやっぱり幼稚園とか小学校ですよね」

「うん！」

たくさん子どもたちの前で生き活きと動く人形たち。子どもたちの笑顔と笑い声の中で歓喜する自分と綾瀬。そんな妄想がヒカルの頭の中を駆け巡った。

「じゃ、頑張りましょう先輩！台本急いで書いてくださいよー」

はいはい、とヒカルは夢から現実に戻り手を動かした。その時、部室のドアがノックされ入って来たのは、

「何やってんだ、綾瀬？」

目を丸くしている響だった。

「ヒビク先輩！」

途端にヒカルの目が輝いた。三年生の回廊は中庭を挟んだ向こう側の校舎にあり、一、二年生の回廊からはずいぶん遠い。毎日同じ学校にいても顔を合わすことはほとんどなく、響に会うのは久しぶりだったのだ。

「ヒカル、何なんだ、これ？」

響は綾瀬が縫い物をしているのが不思議でならないようだ。

「このテーブルの上に布切れが散乱しているのは何度も見て来たけど、今、すげー違和感がある…」

響は気色悪いものでも見るような目で綾瀬を見つめた。

「ヒビク先輩、変な顔しないでくださいよ。これ、ちゃんとした部活動の一環なんですから。今年の演劇部は人形劇でいこうと思ってるんです」

「人形劇？」

「はい。これなら何とかふたりでもできますから」

「なるほどね…。でもなんで綾瀬が？」

「綾瀬くんは中学校の時、家庭科の成績五だったんですって！だから人形作りは任せたんです」

「十段階で五だっただけなんすけど…」

綾瀬が小声で補足した。ちょっと見せてみろ、と響は綾瀬の手から作りかけの人形を取った。胴体に腕を入れ、頭と両手に指を入れて動かせるようになっているその人形はずいぶんと器用に作られている。

「しかし凄いな綾瀬。俺にはこんなの出来ないぜ？さすが家庭科五！」

「だから十段階でなんすけど…」

響は綾瀬に人形を返し、綾瀬はまた器用にチクチクと針を動かし始めた。

「で、ヒカルは何をやってるんだ？」

「台本を書いてるんですけど…」

苦戦してます、とヒカルは言った。

「苦戦…か」

「頭では物語が出来ているのに、文にしようと思うとなかなか書けないものですねー」

「それ、すげー分かるぜ？頭では曲のイメージがあるのに音符にしようと思うとなかなか出来ないのと同じだな」

かつて、音楽劇のテーマ曲に大苦戦をした響は、『ライジングサン』がそうだったぜ、と当時を思い出して懐かしそうに笑った。

「そーゆー時、先輩はどうやって抜け出すんですか？なんか私、どんどんツボにはまり込んでいくみたいで、全然まとまらないんです」

響は、うーん…と考えた。『ライジングサン』に限って言えば、ヒカルを見ていて浮かび上がったメロディがモチーフになった。ヒカルの明るさと輝きが自分の中の闇を消し去り、ただヒカルを見ているだけで次々と頭に浮かんだフレーズが言葉のように繋がって出来たのが『ライジングサン』だ。だが、そんなことはもちろん本人に言えるはずもない――。

「ヒカルはどんな台本を書きたいんだよ？」

「難しくないお話です」

は？と響は呆けた。

「何て言っているんだろう…？素直なお話って言ったらいいのかなあ…。たとえば、ありがとうとかごめんなさいとかをまっさらに言える心があって、誰かの為に自分が身代わりになるってこともまっさらに出来ちゃう、それがまっすぐに現われてただそれだけの、戦隊ヒーロー物にあるような純粋な正義と愛！みたいなお話です」

ヒカル、国語力ねえな…と、響は苦笑し呟いた。ヒカルの説明ではどんな話なのかがまったく見えてこない。だが、

「まっさらとかまっすぐって言ったら、やっぱヒカルなんじゃないか？」

と、響は笑った。

「物語の構成とかはよく分からないけど、今の話を聞いて、なんだヒカルのまんまじゃないか、と思ったぜ？」

「あたしのまんま…」

「あんまり深く物語を作ろうとか思わないで、とりあえず思いついた言葉思いついたシーンをそのまま理屈ナシで書いてみるよ？ヒカルの世界そのまんま」

「あたしの世界か…」

ヒカルはその場で思いついた言葉をそのままノートに書いてみた。すると、さっきまで全く浮かんでこなかった文章が自然体のままサラサラと流れ出した。

「先輩！」

「なんだよ大声出して。驚くじゃないか」

「凄いです！」

響はニンマリと笑った。

「な？深く考えないほうが案外出来るもんなんだって。特にヒカルなんか考えても頭が爆発するだけなんだからさ」

「ちょっと！せっかく感謝しようと思ったのに、それはあんまりです！」

響はアハハと笑ってから思い出したように言った。

「軽音でしばらくバンドを再開することになったんだが…、ヒカルは無理か？」

あ…、とヒカルは口を開けた。

「七月に部内でミニコンサートをやるんだとあかねと田村で決めたらしい。俺たちは『ライジングサン』で参加することになってさ。お前のマラカスがないと何かしっくりこなくてさ」

「…うう」

響やあかねたちとバンドはやりたい。去年までと同じようにみんなと一緒に『ライジングサン』を演奏したい。

――ヒビク先輩の歌に合わせて踊りたいけど…。

「すみません。どっちも中途半端にしちゃいけないものだから、あたしはこっちで頑張ります」

と、ヒカルは笑った。そうか、と響は少し残念そうにヒカルのおでこをつついた。

「台本仕上げて人形を作って、いつか幼稚園で人形劇が出来たらいいなーって思ってるんです。まずはうちのリビングでも開放して弟のお友達呼んで人形劇会やろうかなって」

ええ？と顔を上げたのは綾瀬だ。そんな話は初耳だ。

「初公演はヒカル先輩のうちですか？」

「うん！今決めたの」

にっこり笑うヒカルを前にして、綾瀬と響は顔を見合わせた。

「それって高校生の部活動なのかぁ…？」

響の頭の中には、チビッコに囲まれ一緒にお遊戯でもしているようなヒカルの図が浮かんでいる。それはそれで微笑ましいことではあるが――。

「もちろんですよ！だってどうせ予算もとれない部なんですよ？とりあえず出来ることをやるしかないじゃないですか！道があるから歩くんじゃないで、歩いたところに道が出来るんです。そしてその道は次の道に繋がっていくんです！」

「お前らしいな...」

響は微笑んだ。その時、突然何の前触れもなく頭にフレーズが浮かんだ。

「あれ...。俺も来たかも...」

なくしたくないと思う大切なフレーズだと思った。

「ちょっとそのノート一枚くれる？シャーペンも貸して」

ヒカルがルーズリーフを一枚響に差し出すと、響はそこに五線を書いて音符を並べた。サラサラと動くその手はいつみても鮮やかだとヒカルは思う。音符を書き終えた響は、とりあえずよし、とシャーペンをヒカルに返した。

「んじゃ、ヒカルも頑張れな！台本できたら見せてくれよな」

「はい！先輩ありがとうございました！」

響はニカッと笑って演劇部の部室から出た。

――ヒカルの世界って...、まさか `なにわ、がつく何かじゃねえだろうな...？

思わず笑ってから、響は今書いた走り書きのメロディを見つめた。

――このメロディはヒカルのカケラのようなもの...だな。ヒカルはヒカルらしくらしく跳ねて昇っていけよ。俺は俺で頑張ってみるからさ...。

階段を下りきったところでもう一度部舎を見上げてから、響は校舎の方に歩き出した。

部屋の窓を開けると爽やかな風が部屋の中に流れ込んできた。日曜日の今日は隣家のカーテンはもちろん閉まっている。

「群竹くん、新聞配達の後二度寝してるなあ」

こんなに天気の良い日曜日なのに、寝て過ごすなんてもったいない。だからネクラだって言われるんだ、とヒカルは思った。今日は哲平が通うすずらん幼稚園で保護者参観がある。

「ヒーねえも来て！」

と、朝早くから哲平に叩き起こされたヒカルは、子どもは大好きだし幼稚園という場所にも興味があるので母親と一緒に出かけに行った。

年長ひまわり組の教室一一。担任の先生ひとりに園児が二十人足らずのこじんまりとしたクラスだ。先生のピアノに合わせて園児が歌を歌ったり、保護者と一緒にリトミックダンスをしたり、ほのぼのとした優しい時間が流れている。子供たちがバタバタと歩く音も、廊下の水道が勢いよくジャージャー流れる音も、時々小さいざこざで喧嘩する声も、どれもこれも可愛く思えて仕方がない。

「じゃあ次は紙芝居を読みます。真ん中に来ておともだちと並んで座ってくださいね」

先生がにこやかに言うと、園児たちは一斉に移動をはじめた。そして先生に言われた通り真ん中に集まって体操座りをした。まだ始まっていないのに目はもう既に先生が持つ紙芝居に集中している。

――凄いな…。

子どもたちの興味があるものに対しての集中力の凄さにヒカルは驚いた。思わず高校の授業前と比較してしまう。先生が教科書を開いても喋っている人、いつまでも寝ている人、ぼんやりと窓の外を眺めている人…自分も含めてそんな感じだ。この園児たちの背中からは、今から始まる紙芝居のお話に対する期待がひしひしと伝わってきた。

――こんなに期待されちゃイヤカゲンな気持ちじゃ出来ないね。

ヒカルは前で子どもたちと向き合っている先生に注目した。若いがしっかりとした印象の先生だ。だが、子どもたちを見る目はどこまでも優しく、ヒカルも子どもと一緒に先生が読んでくれる紙芝居を楽しみに待った。

やがて始まったお話は『みにくいあひるの子』だった。小夜子の台本と違い白鳥の子をいじめるあひるは最後までそのままだったし、白鳥の子も成長して飛び発って終わり。あひると白鳥が分かり合って涙の別れはなかったし、それぞれ別の生き物であることを際立たせ、それらが相容れあわずに別の道を行くことを肯定も否定もしていない物語になっていた。子どもたちはそんな物語の断片に散りばめられた、可哀想とか悲しい可笑しいを自分の感情で決めて素直な反応を背中揺れで表す。

――子どもって受けるのも投げるのも直球なんだな…。

自分の人形劇を難しくないお話にしたい、と響に話したが、きつとこういうことだ、と今自分で分かったような気がした。感情に裏がないそのまんまを表したお話。うれしかったら笑う、悲

しかったら泣く、何かをしてもらったら感謝する、何かをしてしまったら謝る——そんなまっすぐな、それが普通であるそういうお話——。

「これで紙芝居は終わりです。どうだったかな？」

先生が子どもたちに訊くと、

「ヨッチニー、ヨッチニーってあひるが歩くのが面白かったー」

「白鳥の子が自分の仲間に会えてよかったー」

「あひるのお母さんが意地悪で悲しかったー」

と、子どもたちはそれぞれ感じたことを大きな声で話す。その目はキラキラ輝いているし、先生目の目も同じようにきらめいていた。

眩しい。

曖昧がない子どもたちと先生の姿に、ヒカルは言葉には出来ない何かが自分の中に芽生えたのを感じた。

帰りの歌を歌い終わった頃、各教室を覗いて歩いていた園長先生がそっと入ってきた。子供たちが帰りの荷物の支度をしている間、保護者たちは園長先生にあいさつをしたり雑談をしたり、母もにこやかに話をしている。先生が壁に飾ってあった子どもたちが描いた絵を一枚一枚丁寧にはがしながら、「ゆきちゃん、ゆうくん」と、その子に手渡し、「てっぺいくくん！」と、呼ばれた哲平が自分の絵を先生から受け取った。大きくなったらなりたいもの、というタイトルの絵だった。

「ねえ、哲平？これは何の絵？哲平は大きくなったら何になりたいの？」

哲平の絵は画用紙の真ん中に、やたらヒーローっぽい雰囲気を出している男の人とテレビのような箱が描いてあった。哲平のことだからなんとかレンジャーにでもなる気でいるのかな、と思って訊いてみたのだが、

「ボクは大きくなったらソージになるんだっ！」

胸を張って言い切った哲平の答えはヒカルが想像もしていなかったものだった。

——...ソージ？

ヒカルは一瞬頭にハテナマークが三つぐらいついたし、母も母の傍にいた園長先生もきょとんとした顔をしている。

「ソージって...隣んちの...？」

「うん！」

「隣んちの群竹颯土？」

「そうだよ！」

「大きくなったらソージになるわけ...？」

「うんっ！」

「.....これ、ソージなの？」

ヒカルが絵の男の人を指差すと、

「うん！カッコイイソージ！」

哲平は顔中笑顔にして笑った。

「何でえ〜？！何で群竹くんになりたいわけ〜？！」

ヒカルは思わず大声で叫んだ。あのソージのどこに哲平を惹きつけるカッコよさがあるというのだろう。せっかく早起きした天気の良い日曜日に二度寝をするネクラだし、いつも俯き加減だし、ぼそぼそ喋るし、ヒーローとはかけ離れているというよりまったく正反対ではないか。

「ソージは凄いんだよ！むずかしいゲームだって簡単にクリアしちゃうんだ。お姫様を助ける時だって絶対に死なないんだもんっ！」

「はぁ？！」

――じゃあ、この箱みたいなのはゲームってわけ？この子、そーゆーことで群竹くに憧れてるわけ？そーゆーことで毎日群竹くんの部屋に入り浸ってるわけ？まだ五歳児のくせにっ！

これは颯土に苦情を言わなければいけない。まだ幼稚園児の哲平にそんなゲームばかりを見せてるなんて！と、ヒカルの鼻が膨らんだ時、

「そうちゃん、相変わらずカッコイイんだね？」

園長先生がくすくす笑いながら哲平に話しかけた。

――そうちゃん...？

「えー？園長先生はソージのこと知ってるのー？」

哲平の目がキラキラと輝いた。

「よく知ってるわよ〜。昔のそうちゃんは今の哲平ちゃんみたいに元気でわんぱくだったけど、女の子にはとっても優しくて苛められてる子を助けるヒーローだったのよ？」

――うそでしょ？

ヒカルはポカンと口を開ける。

「それは知ってるよ〜！ソージが言ってたもん！女は弱いから守ってやらなきゃダメだよって！」

――うそでしょー？！

ヒカルはますます口を開ける。

「だからソージはササッとお姫様を助けちゃうんだ！絶対に危ない目にあわせないんだよ？」

「そうなの。園長先生嬉しいなー。そうちゃん、立派な男の子に成長したのね」

園長先生がヒカルに向かって言った。

「立派...かなあ...？」

ネクラで寝癖男だけど...、とヒカルは颯土の姿を思い浮かべる。

「今度会いたいわって伝えておいてね、哲平ちゃん」

「うん！」

幼稚園から帰り、ヒカルは哲平と一緒に群竹家の呼び鈴を押した。

「あら？ヒカルちゃん！どうしたの？」

「哲平が群竹くんにあげたいものがあるそうなんです.....」

「あら、何かしら？今起こしてくるね！」

――まだ寝てるわけ？もうお昼だよ……。

しばらくして、おもいきり不機嫌な顔をした颯土が渋々と出てきた。

「...なんだよ？」

「これ、ソージにやる！」

「.....は？」

哲平から渡された一枚の絵を見て颯土は首を傾げた。

「なに、これ？」

「あんただってさ！」

俺...？と、颯土は状況を把握出来ないで、絵を見つめたままポカンとする。

「園長先生がね、今度ソージに会いたって！」

「えっ？！」

突如、颯土はギョツとした顔でヒカルと哲平を見比べた。

「立派な男の子に成長してて嬉しいわ、`そうちゃん、だってえ〜」

「えっっ？！」

ニヤニヤ笑うヒカルを見て、颯土は一気に目が覚めたようだ。

「じゃあね、`そうちゃん、！」

呆然と突っ立ったままの颯土を残してヒカルは哲平の手を引いて自宅に入った。

そして、ヒカルは机の上に書きかけの台本を広げた。幼稚園で見た子どもたちの目を思い出しながら、頭で流れるストーリーと人形たちのイメージに直球で揺れる子どもの背中を重ね、そして、

――誰にでも必ずある…、

無愛想でネクラの颯土にさえあったものの名前を、響に言われたとおりそのまま理屈なしで書いたらそれがひとつの物語として繋がった。

――キララのハート。

優しい心。勇気の心。正義の心。愛する心。それは誰もが持っているきららかな心だ。ヒカルは`キララのハート、という名前から繋がったものを自分のまま、自分の言葉で夢中になって人形劇の台本として仕上げた。

「出来たあ.....っ」

初めて書いた台本をヒカルはぎゅっと抱きしめた。だが、タイトルを決めていなかったことに気がついた。だがそれも自然と頭の中に浮かんできた。

「キララ...」

もうすっかり暗くなった空に、星がひとつだけ輝いていた。

梅雨が明けて暑い夏がやって来た。軽音楽部のミニコンサートも無事に終わり、気がつくとなんちゃな一年生たちはいつの間にか借りてきた猫のようにおとなしくなっていた。あかねのピアノの実力は自分たちとは比較にならないし、三年生たちとぴったり息のあったバンド演奏はそのままプロデビューだって出来るのではないかと思うぐらいの迫力と華があり、『ライジングサン』一曲だけで一年生たちは見事にノックアウトされてしまったのだ。

——水沢先輩ってすご一女だったんだ…。

一年生たちは今さらながらに恐縮していた。自分たちはもしかしたらあかねが何も言わないことをいいことに、凄い人にとんでもない非礼を働いていたのではないか——。どんなしっぺ返しがあるのだろう。確か彼氏は空手部の副部長だ。黒帯の部長はあかねと仲が良いみたいだ。田村や響たちだって落ち着いているようには見えるが、あのド迫力の裏にはヤバイ顔がいくつも隠れていそうだ。

——やっぺー……。

知らぬが仏とは自分たちのことだったのか…と、一年男子たちは怯えていた。そして、颯士ファンの女子ふたりはヒカルにシメられた段階であかねイジメからは手を引いてはいたが、やってしまったことには変わりがないからこれまた怯えていた。だが、コンサートが終わったあとにあかねからあったのはしっぺ返しではなく、みんなお疲れ様でしたという労いの言葉と優しい笑顔だった。

「ヒカルちゃん、いろいろありがとう！おかげで何とかまとまったよ」

「何言ってるの！あかねちゃんが一年生たちを納得させたんだよ。ね、先輩たち！」

「そうだぜ！よく頑張ったな、あかね」

コンサートが終わり、一年生たちがみんな帰った音楽室で響たちとあかね、ヒカルはささやかなお疲れ様会を開催している。

「でも、今年の一年生はなんていうか…アクが強いですねえ。手がかかりすぎですよ…」

ヒカルはいつかの女子ふたりを思い出しながら小さなため息を吐いた。

「俺たちだってお前らが一年だったときには大変な一年が来ちまったと思ったぜ…。ヒカルはあのマラカスダンスだったしあかねはいつまでも俺たちのこと怖がってたし…」

「そうだったねえ～。ヒカルちゃんのマラカス特訓は大変だったなあ～」

ヒカル番をさせられていた田村と柏木がしみじみとつぶやいた。

「マラカスはそうだったかもしれませんが私たちは仲良くやっていたじゃないですかー。先輩にたてついたりなんかしませんでしたよぉ？」

ヒカルは鼻を膨らませて異議を申し立てた。

「ヒカルとヒビクはそうじゃなかったと思うぜ？よく喧嘩してたし…、そうだったよな、あかね？」

「確かにそうでしたね…」

あかねはヒカルと響を見比べて微笑んだ。

「……そうだったな」

と、響は一年前を思い出す。思ったことを何でも口にする生意気な後輩。ヒカルに対する最初の印象はそうだった。それがいつの間にか自分にとってはなくてはならない存在になっていった。明るくてまぶしくてその名の通りに光っている女の子――。響はなつかしそうな目でヒカルを見つめ、その視線はいつしかヒカルを通り越した遠くへと注がれた。

――ヒビク先輩…？

響の視線の先には音楽室のピアノがあるだけなのに、その一点をぼんやりと見つめる目は、どこかせつない色をしている。それは去年の文化祭でアンコールの『ライジングサン』を演奏している時に感じたものと同じようで、ヒカルは少し不安になる。

「でもまあ、とにかくよかったよ。これで俺たちも安心して引退できるってもんだぜ」

田村があかねの肩をポンとたたいた。

「がんばれよ、あかね！」

「田村せんぱあい…」

あかねは思わずベソをかいた。今回のことでは田村にずいぶん相談に乗ってもらった。田村はいつも親身になって一緒に考えて行動してくれた。田村がいなかったらここまで出来なかっただろう。これでもう、本当に田村たちとの活動は終わりだと思うとあかねは急に寂しくなり、さっきのベソとは違った意味での涙が込み上げてくる。もう二度と、この音楽室で田村たちと演奏をすることはないのだ――。

「お～、よしよし。泣くな泣くな」

田村はあかねの頭をいい子いい子となでる。

「先輩、本当にありがとうございました…」

あかねが潤んだ目で田村を見上げると、田村は真っ赤になって、

「そ、そんなに改まることないって……」

と、やや困惑したように、そしてやはりどこか寂しそうに笑った。そんな田村を横目にして、
「次はヒカルの人形劇だな。台本は出来たのか？」

と、訊いたのは響だ。さっき感じた不安を連れてくる雰囲気は、もうどこかへ飛ばしたいいつも通りの響だ。

「出来たことは出来たんですけどちょっと…」

すごいのが出来たんですよ！と横からあかねが言った。

「出来たんですけど…どうした？」

「`手、が足りなくなっちゃって…。先輩たち、ついでと言ってはなんですが…」

ヒカルは反応をやや探るように上目づかいに響を見た。

「俺たちの`手、を貸せって言うんだな？」

「さっすがヒビク先輩、察しがいい！」

「やれやれ、いつになったら引退できるのやら……」

ため息をつきながらも、どこか嬉しそうに笑ういつもの響だ。

――思い過ごしだったのかな…。

響に時々感じる不安が自分の思い過ごしであって欲しい、とヒカルは思った。

◇

数日後の音楽室――。響はヒカルが書いた台本をさっきから無言で読みふけっている。ヒカルはそんな響を目の前にして、まるで面接でも受けているかのような緊張感に縛られていた。音楽室の中は響がページをめくる音が時々響くだけ。ヒカルは自分の心臓の音が聴こえやしないかと心配で、手には汗まで握っていた。やがて最後のページを読み終わった響は、また最初に戻って表題を口にした。

「キララか…」

そして、もう一度中のページを開く。

・
・

表紙をめくるとまず登場人物の紹介があった。

キララ（妖精）

ジュン（人間の男の子）

ピュア（人間の女の子）

ピオンタ（いたずらうさぎ）

おじいさん（森にいる）

ひまわり（チューリップ畑に咲いてるお花の子）

チューリップA（いじわるな花）

チューリップB（いじわるな花）

ゴースト（エンドの谷にいるモンスター）

物語はジュンとピュア、ふたりの子どもが『キララのハート』を探しにエンドの谷に行く一本の流れが五幕になって構成されていた。その一幕一幕ではさまざまなことが起こるが、ふたりはひとつひとつ優しさや勇気や友情の心で解決しながら旅をする。そのあらすじはこうだ。

・一幕目――むかしむかし、地球がまだ生まれていない頃のとある星に美しい海の国と山の国がありました。海の国にはジュンという少年が、山の国にはピュアという少女が住んでいてふたりはとても仲良しでした。ところがある時、互いの国の美しさを妬みあった人々が争いをはじめてしまいます。心を痛めたジュンとピュアは森の中で妖精のキララに出会い、森の果て、エンドの谷にある『キララのハート』を持ち帰れば争いは止み幸せになれると教えられ旅立ちます。

・二幕目――森に入らずいぶん経った頃、ジュンとピュアは一粒食べたらお腹がいっぱいになる不思議な木の実を見つけました。これからの旅を考えてその木の実をポケットに入れようとした時、突然現われたウサギのピオンタに木の実を全て取られてしまいました。ピオンタはいたずらもので意地悪を言ったり嘘をついて騙したり、ジュンとピュアをさんざん困らせてからどこかへ行ってしまいました。ふたりはさらに森の奥に進んでいきました。そしてあたり一面にチューリップが咲いたキレイなチューリップ畑を見つけました。

・三幕目――チューリップ畑ではたった一輪だけひまわりが咲いていました。いじわるなチューリップたちがそのひまわりを目障りだから摘んでくれとジュンとピュアに言います。同じ花の

仲間じゃないか、と言うジュンにチューリップたちはそんな顔の大きな醜い子は仲間なんかじゃないと言います。ピュアは姿かたちが美しくても心が汚れていては本当に美しいとはいえないとチューリップたちを叱りました。そこへピョンタがやって来て意地悪な花は滅んでしまえと言いながらチューリップ畑を踏み荒らしました。ジュンとピュアは命の大切さはみんな同じ、とピョンタを止めました。自分たちが荒らされてようやく人の痛みを知ったチューリップは、ひまわりに謝り、ジュンとピュアにはエンドの谷には恐ろしいゴーストがいるから気をつけるようにと教えてくれました。

・四幕目――すっかり日が暮れた頃、お互いにひとつずつしか持っていない木の実を半分にして食べようとしていたジュンとピュアの前に現われたピョンタはその木の実を奪って逃げていきました。そしてさらに奥まで進むとピョンタに荷車を壊されてしまったおじいさんが、お腹をすかせて死にそうになっていました。ふたりは最後に残ったたった一粒の木の実をおじいさんにあげ、とうとうエンドの谷にやってきました。

・幕間――エンドの谷の手前でジュンとピュアは互いのふるさとを思い浮かべます。海に魚が戻ってくる、山にも小鳥が戻ってくる、そして幸せになれる！さあ、キララのハートはすぐそこだ。ゴーストなんか恐れずに行こう、とふたりは手を取り合いました。

・五幕目――いじわるピョンタがゴーストに捕まり、今にも食べられそうになっていました。さんざん困らせられたピョンタでも、食べられてしまうのは可哀想です。ジュンは自分が身代わりになると、ピュアはそんなジュンの身代わりになると言いました。するとゴーストは、番人の仕事は終わった、キララのハートを手にするがよい、と言って消えていきました。ところが、そこには何もありません。ガッカリと肩を落とすジュンとピュアの前に、妖精キララが再び現われて言います。あなたたちはもう、キララのハートを手にしているのです、と。キララのハートとは誰にでもある勇気と愛、友情と正義の心、即ちいのちそのものでした。争いをしている人々はその心を忘れてしまっているだけでした。ジュンとピュアの冒険を夢を見るように見ていた国の人々は、忘れていた自分のキララのハートを思い出し争いは終わりました。ふたつの国はひとつになり、やがてジュンとピュアの命は地球という星の命に生まれ変わってゆくのでした。

・
・

「うう...先輩。意味深に『キララか...』とか呟きっぱなしでいないでくださいよお...。私、まな板の上の鯉みみたいな心境なんですけど...」

響はアハハ、と笑ってヒカルをぐしゅっと撫で回した。

「これ、本当にヒカルが書いた台本なんだろうかと感心しちゃったよ」

「うう...、またそんな曖昧な感想を...」

「いや...、ヒカルらしい、いい物語だよ、ほんと」

「ほんとですか？私の世界を書けばいいんだってヒビク先輩が言ってくれたのでそのまんま書いていました」

ヒカルは嬉しそうに顔を赤らめて笑った。

――これがヒカルの世界...。

これまで何度も触れて助けられてきたヒカルの命のきらめきそのもの…。

「すごいな、ヒカル…」

響はぽつり、と呟いた。

「涙が出るくらいに感動したよ」

「またまたあ、ヒビク先輩、真面目に言ってくれてるんですか？」

ヒカルが響を見ると、響は真剣な面立ちでヒカルを見つめていた。

「先輩…？」

「—身につまされるぜ…。俺はもっと変わらなければ…ってさ。」

「がんばれよ！」

響はヒカルの背中をポンとたたいた。

「はい！」

「で、俺たちの手はどこで使うんだ？」

「そのことなんですけど、この間はヒビク先輩たちにお願いしちゃったけど、よくよく考えたら先輩たちはもう進路のことで忙しいはずだし、やっぱり迷惑はかけられないと思って…」

「よくよく考えなくてもわかってるだろうに…」

「そうですね…。すみません」

「謝るなって！別に俺も田村も迷惑なんて思っちゃいないさ。ヒカルのやることは百パーセント協力するぜ。手でも足でも貸してやるから遠慮なんかするなよ！」

「先輩…」

響の言葉に、ヒカルがじ〜んと感動に浸っていると、

「ヒカルちゃん、ここにいたんだ！演劇部の部室に行ったら綾瀬くんがひとりで縫い物していて、ヒカルちゃんは風間先輩とどこかに行っちゃったっていうから探してたの！」

あかねが駆け込んで来た。

「ごめんね。ヒビク先輩に台本を見てもらってたの」

「ここにいてくれてちょうどよかった。ヒカルちゃんに聴いてもらいたい曲があるの…」

あかねはスッとピアノの前に座った。

「この前、台本を見せてもらったときに浮かんだフレーズを歌にしてみたの。初めて作った歌だから風間先輩の前で披露するのは恥ずかしいけど…」

「もしかして、この人形劇の？」

あかねはコクンとうなづいてからスーッと深呼吸をし、鍵盤の上に指を置く。それから、快活な三拍子の前奏を奏で始めた。そして、歌——。人形劇の主題歌らしく、可愛らしい童謡になってはいるが心が穏やかになるような、それでいて一度耳にしたら温まった心と共に余韻をいつまでも引きずるような曲だ。

♪キラキラキラさあ手をつないで

キラキラキラみんなで守ろうキララのハートを♪

あかねのあどけないほんわかとした歌声に曲が絶妙に合っている。ヒカルと響は、後奏が終わってひざの上に両手を揃えて置いたあかねの指先を見つめ、その後に顔を見合わせた。

「俺、あかねのソロ初めて聴いた…。か、かわいい…！」

響がボーゼンとしたようにつぶやくと、やだ、先輩！と、あかねは顔を覆ってうつむく。

「あかねちゃん…、この曲、本当にもらっちゃっていいの…？こんな素敵な主題歌を…本当に？」

「もらってくれたら…嬉しい」

「あ…、あたし、感動しすぎちゃって、言葉にならないんだけど……」

響はヒカルの言葉にうなづきながら心底驚いていた。あかねのピアノの腕前はピカイチだと今までも認めていたが、あかねが曲作りの才能までを持ち合わせているとはさすがの響も見抜けなかった。

「たった今、ヒカルの秘められた才能に感動していたところだけど、あかねにもこれほどの才能があっただなんてオドロキだな。何で今まで隠していたんだ？」

響はポカンとしながら言う。

「やだな、先輩。褒めすぎですよ！私は今まで作曲しようなんて思ったことなかったんですから。歌だってこうやって人前で歌ったことなんてないんです」

あかねは真っ赤になって言い訳した。実際それが本当のところだ。自分がこんなにも大胆に自作の曲を人前で披露していること自体、あかねは自分でも不思議なのだ。

「ヒカルちゃんの『キララ』に惹きつけられたんです、きっと」

「そうかもな。あかねの中のキララのハートが輝きを解き放ったってことだ」

「そうです！先輩、うまいこと言いますね！」

「それほどの『キララ』だってことだ、ヒカル。俺が感動したって言ったの、信じろよ？」

「うん！ありがとう。あかねちゃん、ヒビク先輩！私、がんばりまーす！」

響がヒカルの頭をくしゃくしゃと撫でた。そのとき、

「あ～、ヒカル先輩、こんなところで油売ってたんですね。僕、針の持ちすぎで指が痛くなってしまいましたよ…」

膨れながら綾瀬がやってきた。

「ごめ～ん！あかねちゃん、ヒビク先輩じゃあまた！綾瀬くん行こう！」

ヒカルは綾瀬の腕を引っ張る。

「僕は休憩なし？」

腕を引かれる綾瀬はヒカルと響たちの顔を見比べながらうろたえる。

「あったりまえよ！頑張って人形作り続けるよ～！」

「とほほ…。僕ってやっぱり物扱いだよなあ…」

ぶつぶつ文句を言う綾瀬を無理やり引っ張ってヒカルは元気よく音楽室を出て行った。それを見送っていた響は、一瞬淋しげに笑うとあかねに向き直って言った。

「あかね、あいつの力になってやってくれよ」

「え？はい。もちろんそのつもりですけど…」

あかねは目を伏せた響の顔を見つめた。何かを思い詰めているような、深い瞳が揺れていた。

「先輩どうかしたんですか…？受験勉強も忙しいと思いますけど、でもヒカルちゃんは風間先輩

に見守ってもらえることが一番嬉しいんだと思うんです…」

「はは…。そうだといいいけどな……」

「絶対そうです！風間先輩がいるからヒカルちゃんはひとりでだってあんなに頑張れるんですよ？」

そうか、と響は口では明るく言うがそこに心が入っていない。どこか遠くを見つめている響の様子は今までの響らしくない。

「んじゃ、俺は行くぜ？あかねも部活、頑張れな！」

響はあかねを残し、ひとり音楽室を出て行った。

「風間先輩……」

堂々と背筋を伸ばして廊下を歩いていく響の後姿は、それがあまりにも凛々しすぎるから余計にあかねは不安になった。

「ヒカル先輩！出来ましたよ！完成です！」

綾瀬が最後に縫っていたピョンタの耳に玉を作り、飛び上がるようにして立ち上がった。綾瀬の向かい側で台本の最終チェックをしていたヒカルも目を輝かせた。

「やったね、綾瀬くん！」

綾瀬は先に出来上がっていた他の人形たちを次々とテーブルに並べ、うっとり眺めながら言った。

「僕たちって凄い…。たったふたりで、こんなに作っちゃいましたよ…」

「いやぁ…、人形作りに関しては、綾瀬くんひとりでやったようなモノだから……」

ヒカルが縫ったのは人形に着せる洋服の裾をまつたぐらいだ。

「綾瀬くんがいなかったらこんな可愛い人形たちは作れなかったよ」

家に持ち帰り、家族や兄弟たちに白い目で見られながらやった甲斐があります、と綾瀬は涙ぐむ。

「で、ヒカル先輩。ここから大事な話をします」

急に普通に帰った綾瀬が軽い咳払いをした。

「なにになに？」

「えっと…。人形は九体、演技する手はヒカル先輩と僕の合わせて四本、あとの五本の手はどうするんですか？本当に、風間先輩たちにお問い合わせするんですか？」

軽音楽部の先輩たち、響に田村、太郎次郎に柏木…で、ちょうど足りない五本分が補充はされるが…。

「お願いしないよ」

響は手も足も貸すと言ってくれたが、三年生をこれ以上引っ張り出すわけにはいかないのは最初から分かっていた。響や田村たちと一緒にできたらどんなに楽しいだろうと思わないわけではないが…、

「いつまでも先輩に甘えていちゃいけないもんね。これは私と綾瀬くんが始めたことだから」

「そうですね。僕もそう思います」

「今から部員を募ったところで期待はできないだろうから、クラスの友達に頼んでみようと思うの。綾瀬くんも手伝ってくれそうな人がいたら声をかけてみてくれない？スペシャルサンクスってことで」

分かりました、と綾瀬。公演予定日は八月二日。あと一ヶ月もない。人形を動かす手だけでなく、台詞や効果音の録音テープも今から作成しなければならないし、ことは急がねばならない。

「わりと、いきあたりばったりですよ、ヒカル先輩って…」

綾瀬はポツツと呟いた。

◇

「遠慮なんかするなって言ったのに…」

購買部でバッタリと響に会ったヒカルが、`手、の解約を告げると、響はどこかガッカリしたようだった。

「先輩、もしかして人形劇、楽しみにしてました？」

「ば、ばか。そうじゃねえけど...」

「ヒビク先輩が応援してくれてるって実感するだけで私頑張れちゃいますから...、だから応援されたいんです」

「ヒカル...」

「私、頑張ってみますから、先輩は見ていてください」

分かったよ、と響は笑った。

――どこまでも、昇って行くライジングサン、だもんな...。

「あっ、群竹くん！」

ちょうど購買部にやってきた颯土を見つけてヒカルは駆け寄って行った。その行き先を、響はその場で見守る。

「.....何？」

颯土はこちらを見ている響に軽く会釈をしてからヒカルに応えた。

「あのね...、」

ヒカルは人形劇の人形が出来上がったところから、足りない手のこと、これからやらねばならない作業のことを一気にまくし立てるように話した。颯土は聞いていて意味がよく分からないところは聞き飛ばし、どうにかヒカルの喋るテンポに頭を追いつかせながら聞く。そして、

「...いきあたりばったりだなあ」

ヒカルの話を聞き終わった感想をそのまま述べながら、ところで何故ヒカルがこんな話を自分にするのだろう、と考えている間に、

「だから、`手、を貸してくれない、中央委員！」

と、言われて、

「えっ?!」

と、意味もなく自分の右手をマジマジと見つめ、人形劇の手も中央委員の仕事なのかよ...と呟いた。だがすぐに、

「貸してやりたいのはやまやまだけど...、公演日のその頃はちょうど合宿中だ」

ということに気がついて、ホッと胸を撫で下ろす――が、

「じゃあ、台詞の吹き込みやって！それなら日程大丈夫でしょ？群竹くんの役は.....、」

さらにとんでもないことを頼まれて、さすがに、

「台詞は無理！」

間髪を入れずに断った。

「...うん。頼んでから群竹くんの役を考えたけど、なかったみたい。ぼそぼそ喋られてキララがくら一い話になっちゃったら困るし」

あっけらかんと舌を出して言うヒカルに、絶句する颯土。そんなふたりのやりとりを、ちょっと離れたところから見守っていた響は、

——アイツに頼むってのもいきあたりばったりすぎるなあ…。大丈夫かよ…。

と、密かに人形劇の前途を心配する。だが、そんなヒカルの奮闘ぶりを、やはり自分は見守っていく立場にあるのだなと、どこかでせつない納得もした。

「群竹くんがダメってことは、大久保くんもダメだよな？」

「ついでに、伊藤も結野も同じ日程で合宿だって言ってたぜ」

「じゃあ、みんな観にも来れないじゃない…っ」

「だから、いきあたりばったりだって言ったんだよ…」

うう…、と頭を抱えるヒカルに、響は思わず吹き出す。

「ヒビク先輩たちは観に来てくれますよね…？」

ヒカルが響を振り返り、ちょこちょこ近寄って確認する。

「あー、その日は模試が…、」

「ええ〜〜〜っ」

「なーんてな。冗談だよ！観に行くに決まってるだろ？心配すんな！」

響はアハハ、と笑ってヒカルの頭を撫でた。

「よかったあ！先輩にも来てもらえなかったら私大泣きするところでした！」

生徒たちが溢れかえる購買部は多くの声が混ざり合う雑踏だ。だが、ヒカルと響、ふたりがいる場所だけはまるで切り取ったかのように清涼な空気が流れている。いつもじっと見入ってしまうほどの光景は『絵』のようで、無意識のうちに心のファインダーでふたりを捉えている自分に颯土は気づいた。

「じゃ…、俺は陰ながら応援させてもらうということで…」

颯土はぼそっと言い、売り場の雑踏の中に身を投じた。

◇

ヒカルと綾瀬はそれぞれのクラスメイトに声をかけ、人形を動かす手伝いをしてくれるスペシャルサンクスが揃った。夏休みに入る一週間前から、自分と綾瀬を含めた五人のメンバーが集まって台詞の練習をおこない、放送部の友人に頼んで録音作業をおこなった。たった三十分の劇なのに録音にかけた時間は述べ十時間。効果音を作ったり音楽を選んだり、という作業も合わせるとまるまる一週間の時間がかかった。人形劇の練習は夏休みに入ってから本格的におこなわれた。毎日部室に集まって汗だくになりながらの練習だ。背景や小物の制作も同時に進め、毎日の時間はあっという間に過ぎていく。

「たかが人形劇だと思ってたけど…大変ですね」

キツイ体勢で上げっぱなしにしていなければならない腕は痛いし、狭い舞台下でバタバタ動く物干し竿とカーテンで作られた簡単な舞台はぐらぐら揺れて背景セットが倒れてきたりもするので、人形だけでなく自分たちの動き方も工夫しなければならない。初めての試みだから毎日毎日新しい工夫を考えながら、あーでもないこーでもないと言い合いひとつひとつを形にしていってヒカルたちだった。

——ああ…、部活をやってる！って感じだなあ……。

慌しく動いている中で、ヒカルはふと思った。最初は自分ひとりだった演劇部。綾瀬が入って

ふたりになり、それでもたったふたりで何をやっていけばいいのか途方に暮れていた時もある。

――ため息なんてヒカルらしくないぜ！いつものように昇って行けよ！

そう、響に励ましてもらって奮起して何とかここまでやって来られた。あの時、響の励ましがなかったらくじけていただろう。本当は人形劇も響たちと一緒にやれば楽しいに違いない。だが、

――ヒビク先輩には見てて欲しい。私がちゃんとライジングサンやってるか、見守ってて欲しいんだ…。

明日は本番。最後の練習が終わってみんなが帰ったあと、部室の後片付けをしていたヒカルは背後に人の気配を感じて振り返った。ドアの前に響が立っていた。

「ヒビク先輩…！」

「よお！」

響は手を上げて笑った。

「…先輩、どうしたんですか？」

三年生は部活もないはずなのに、とヒカル。

「どうしたんですか？って…、ヒカルを激励に来たに決まってんだろ？」

――え…？

「明日の本番頑張れよ、ってひとこと言わなきゃ何かおさまらないし」

響は天井を見上げながら鼻の頭をポリポリかく。

「ヒカルのやることは百パーセント協力するって言っておきながら、これに関しちゃ何も出来なかったから…、せめて…、」

響はドアの前からツカツカとヒカルの側までやってきて、そっと頭を撫でた。

――あ…。

ヒカルは頭の上にある響の手を見上げた。

「ひとりからよくここまでやって来たな！俺が褒めてやる。明日頑張れよ！」

「…はい。ヒビク先輩、ありがとう」

にこっと笑った瞬間、ぽろっと一粒の涙がこぼれた。

――ヒビク先輩が見てくれれば大丈夫。これからだって何でも頑張れる…。

「おーい…、泣かれるとは思わなかったぜ…」

「すみません。嬉しくてつい…」

ヒカルは指で涙の雫を払った。

「先輩たちに応援してもらって勇気が出たって言ってたあかねちゃんの気持ちがよく分かります。私も今、いつもの百倍勇気が出ましたよ」

そうか、と響はもう一度ヒカルの頭を撫でた。大きな響の手の中にヒカルの頭はスッポリ入ってしまうほどだが、この手の暖かさがヒカルの全ての原動力なのだ。

「明日、がんばりますね。だから先輩、見に来てくださいね！」

「おお」

部室の窓からは夕焼けの光がナナメに差し込んでいる。そのオレンジ色の光の中で、頷いた金

色の響の髪が優しく揺れた。

そして迎えた日――。ヒカルの家のリビングに、哲平の幼稚園の友人八人とその母親たちを招いての初公演である。リビングと続き間の和室は、哲平の友人たちや響やあかね、田村などが集まると足も崩せないほど一杯になった。哲平たち幼稚園児はもちろん前列に、響や田村たち男組は最後列の壁際に立つ状態になった。

「ヒーねえ、早くやってよ」

哲平から催促があり、それまで舞台裏で準備をしていたヒカルは舞台の前に立った。

「みんな、お待たせ！」

ヒカルの声に幼稚園児たちは歓声をあげる。ヒカルは壁際に立つ響を見た。響はうん、とうなずいて小さくガッツポーズをヒカルに送った。ヒカルは安心したようにうなずくと、それじゃ、始めまーす！と、舞台の後ろに入った。

舞台に綺麗に着飾った妖精のキララが登場すると、子どもも大人も感嘆の声をあげた。主人公のジュンとピュアがいじわるピョンタにいじわるをされると子供たちはピョンタに抗議をした。ジュンとピョンタが追いかっこをはじめれば、それぞれ思うキャラクターに声援を送り、恐ろしいゴーストが登場すると泣き出す子どももいるほどだった。捜し求めたキララのハートがどこにもない、とジュンとピュアが嘆くシーンでは、『どうして？なんで？こんなに頑張ったのに』と一緒に嘆き、キララが登場してキララのハートはみんなのいのちなんだ、と話す場面では水を打ったような静寂が会場を包んだ。

そしてエンディング。

三拍子の前奏がはじまり、録音したあかねの歌に合わせて登場人物たちが次々と舞台に登場してくると観客全員が手拍子をうち、子どもたちははじめて聴くはずの歌と一緒に口ずさんだ。

カーテンの後ろで人形を動かしながら、ヒカルは静かな感動を味わっていた。それはやり遂げたあとの充実感からくるものもあったが、それ以上にジュンやピュア、物語の登場人物たちと一緒に冒険をしてくれ、今ここで主題歌と一緒に歌ってくれている純粋な子どもたちの心が嬉しかったのだ。

ふと、自分の隣で人形を動かしている綾瀬を見ると、鼻水をズルズルすすりながら涙をボロボロ流している。

「あ、綾瀬くん...？」

「ぜんば〜い、ボグ感動です...。うぐぐっ。ボグの作ったギララちゃんやジュンぐんやピュアちゃんが...、こんなに愛ざれでええ...」

「わ、わかった、わかった...。わかったからその涙と鼻水何とかしなさいよ」

「でぎません。だっで両手がふさがってます...」

確かにそうだ。自分も綾瀬も両手に人形を入れていたのだ。

「はいはいわかった。いいからその顔でこっちを向かないでよ...。感動の瞬間が台無し...っ」

はい、と返し綾瀬はぐしゃぐしゃの顔のまま再び前を向いて、最後の演技に気持ちを集中さ

せた。今舞台では全ての人形が総登場して歌にあわせて踊っている楽しい場面だ。まさか舞台裏でキララの演技をしている黒子がこんなぐちゃぐちゃのでろでろになっているとは客席の誰もが思うまい。だが、客席の方でも涙を流している者がいた。

「ほれ、あかね」

と、隣にいる田村が自分のハンカチを差し出すほどぼろぼろになっているあかねだった。たったひとりからここまでヒカルはやったのだと思うと涙はあとからあとから溢れてくる。

「あ、ありがとうございます...」

あかねは田村のハンカチで涙を拭い、後ろに立つ響を振り返った。響の視線はまっすぐに舞台に注がれていたが、振り返って自分を見るあかねに気がつく、その視線をあかねに向けて微笑んだ。舞台では人形たちが最後のお辞儀をしている。園児とその保護者たちは立ち上がって拍手を送り始めた。

「もう一回見たい〜！」

子どもたちはアンコールを送る。ヒカルと綾瀬、そしてスペシャルサンクスの友人たちがいっせいに舞台に顔を出し人形と共にお辞儀をした。

「あれねえ、ボクのヒーねえなんだよ！」

哲平は自分の友人たちに人形劇をやってくれたのは自分の姉だということを胸を張って自慢した。

「哲平ちゃんのお姉さん」

ひとりの保護者がヒカルの前に歩み出た。

「とても素敵な人形劇をありがとう。感動しました」

「いいえ。こちらこそ見ていただいてありがとうございます！」

ヒカルはペコッと頭を下げた。

「私、すずらん幼稚園の父母会長をしている今野といいます。是非、この人形劇を幼稚園でやってくれないかしら？今日見られなかった子どもたちにもぜひ見せてあげたいの」

今野の言葉にヒカルは反射的に響の顔を見た。

「それとも、学校の先生にお願いしないと駄目かしら...？」

「いいえ、この人形劇は学校の有志たちでおこなっているものですから...。でも私たち、学生だから平日に幼稚園に伺うことができないんです...」

そうよね...と 今野が考え込んだ時だった。

「十一月、開校記念日があるだろ、ヒカルッ！」

響が後ろから叫んだ。

「そうか...！十一月二十二日が開校記念日で休日なんです。その日に合わせていただけるのなら...」

と、言いながらヒカルはメンバーの顔を見回した。自分だけがよくてもみんなが同じ気持ちとは限らない。だが、綾瀬もスペシャル隊も大きくうなずいていた。

「園長先生にご相談してみますね！たぶん大丈夫よ！」

――幼稚園で大勢の子どもたちの前で人形劇が出来る！

ヒカルの心は躍った。夢が現実になる！今野は園長先生の許可が出たら連絡する、とヒカルに告げ、自分の子どもの手を引いて帰って行った。仲間たちも次々と帰り、それを玄関で見送るヒカルの背後からあかねが声をかけた。

「ヒカルちゃん、やったね！ヒカルちゃんはずっと前からこういうことがやりたかったんだもんね！」

「分かってた？」

「前に小夜子先輩たちに言ってたでしょ？幼稚園や小学校の観劇会に出ましよう、って。あの時は何て突拍子もないことを言い出すんだろう、って思ったけどね！」

あかねはニッコリと微笑んだ。

「麻耶ちゃんや群竹くんたちにも見せたかったね」

「うん。でも合宿だから仕方ないよ」

あかねの軽音楽部は明日から合宿に出かける予定だ。ヒカルの演劇部は部員がふたりしかいないため、もちろん今年の合宿はなしだった。

「群竹くんとは連絡取り合っているの？合宿から帰って来たらすぐ沖縄に行っちゃうんだよね？」

あ...、うん...とあかねは否定も肯定もしない曖昧な返事を返した。颯土とは部活で学校に行ったときに会う以外に連絡の取り合いなどしていなかった。合宿に行く前もいつもと変わらなかったし、沖縄に行くことさえも特別本人の口からは何も聞いていない。

「はあ.....」

あかねは思わずため息が漏れた。

「ごめん。ため息なんかついちゃって...」

そう言いながらあかねはもうひとつため息をついた。

「あかねちゃん、大丈夫...？」

うん...、とあかねは笑った。颯土のことは今に始まったことではないから考えても仕方がない。

「それじゃ、私も明日の準備があるから帰るね。あ...、そう言えば...、」

あかねは思い出したようにヒカルに耳うちをした。

「ヒカルちゃん、何かこの頃風間先輩元気がないみたい...」

あかねに言われてヒカルはハッとした。随分前からヒカルも感じていたことだが、思いすごしであればいいと思っていた。

「あかねちゃんも...思ってたんだ」

ヒカルはリビングの方を振り返った。哲平が響と田村にまわりついて遊んでもらっている。

「風間先輩、哲平ちゃんに捕まっちゃったみたいね」

その時、田村がそーとリビングから出て来た。

「脱出成功！」

田村はあかねの陰に隠れるようにして靴を履き出した。

「ヒカル、お前の弟はなんだってあんなにしつこいんだ？もう俺、疲れた。ヒビクをオトリにし

てようやく解放されたぜ…」

「田村先輩、風間先輩を置いていっちゃうんですか？冷たいんですね～」

あかねがまだ哲平に捕まって苦戦している響を振り返りながら言う。

「あいつもたまにはガキの相手でもしてみろっての。俺の気持ちがわかるから…」

「田村先輩の気持ち？」

ヒカルとあかねが同時に訊く。

「お子さまランチなヤツらのフォロー、これでも大変なんだぜ？」

日ごろ、響や他の軽音楽部のメンバーたちを保護者的な目線で面倒を見ている田村は案外苦労人らしい。ヒカルはプツと吹き出した。

「田村先輩から見ると、お子さまランチ…なんですか、ヒビク先輩たち」

「そういうこと！さて、あかね、帰るなら一緒に行こうぜ」

田村はあかねの手を引く。

「先輩、本当に行っちゃうんですか～？」

ヒカルが慌てたように田村とあかねの後を追った。

「あとはよろしくっ！」

田村はあかねの手を引いてさっさと玄関を出て行ってしまった。

「お、おい、たむら～？！」

リビングから響が情けない声をあげた。ヒカルはツカツカとリビングに戻ると、

「こら哲平！」

と、一喝する。がしかし同時に、ぷぷっと笑い出した。

「ヒカル、笑ってねえでタスケテ！」

哲平が片手にいつもの目覚まし鉄砲もう片手に剣を持って、`悪者、の響を壁際に追いつめていた。

「うわっはっはっ！参ったか、キンパツゴーストめ！おれさまが成敗してやる！」

哲平は体を大きくゆすりながら高笑いをしヒーローになりきっている。

「先輩、こうなったら最後まで付き合って降参するかやられるかしないと終わらないです」

「そうだそうだ！さあ、降参しろ、キンパツゴースト！」

哲平は響を`キンパツゴースト、と命名したらしい。

「誰が降参なんかするもんかっ！屈辱にまみれて生き永らえるくらいなら、俺は誇り高い死を選ぶぞっ！」

観念した響はキンパツゴーストになりきることにした。

「なんだと？クツジョクとかホコリ高い死って何だ！」

言葉の意味がわからない哲平は、それでもヒーローの口調のまま問いたです。

「ハッハッハーッ！そんなことも知らないとは呆れたヒーローだぜ！いいか！俺様は誇り高いキンパツゴースト様だ！ヒカル姫、そなたを守りきれずに先立つ不幸をお許してください。私はそなたを心から愛しておりましたぞ！」

響は大仰に振り返りヒカルをじっと見つめた。その目はあまりにも真剣だった。

「あ、あの...先輩...？」

ヒカルの鼓動が速くなっていた。

――愛しているって...？先輩.....？

「さあ、ひとおもいに殺れい！」

響は哲平に向かって叫んだ。迫真の迷演技だ。

「ちょっと～、これじゃなんだかボクが悪者みたいじゃないか～！」

哲平は物語の展開に不満を感じて抗議した。

「お姫様をアイシテお守りするのはヒーローなんだからね！悪者はお姫様を捕まえて食べようとするんだよ！」

「あ、そうかそうか、悪いな、坊主...」

響は頭をポリポリとかくと、

「ひえ～っ！助けてくださいまし～～！降参します～っ！」

と言い直す。

「いばっていたわりには情けない奴だ！今回は見逃してやる！もう悪いことするんじゃないぞ！うわっはっはっ！」

哲平が腰に手をあててお決まりのポーズをとったところで、ようやくこの茶番劇は幕を下ろした。

「あー、おもしろかった！おに一ちゃん、もう一回やろうよ！」

哲平は響の腕を引っ張って言う。

「また今度な...」

響はげっそりしながらあしらった。

「今度って明日？」

「哲平、いいかげんにしなさいよ。おに一ちゃんだってもう帰らないといけないんだからね」

「あれ？もうひとりのキンパツゴーストの子分のに一ちゃんはどこ行ったの？」

哲平は突然田村のことを思い出したようだ。

「子分は親分を見捨てて逃げちまったよ！」

「口ほどにもないやつめ！」

と、哲平は腰に手をあてる。

「哲平、おやつが出来たからいらっしゃい！」

今まで台所に立っていた母親がようやく哲平を迎えにきた。

「やったーっ！」

哲平もやっとヒーローを廃業した。

「ヒビクさんも一緒にどうぞ」

響にブレイク中の母親はにこにこしながらテーブルに着くように誘った。が、

「いえ、俺はもうこれで失礼します...」

響がヒカルに「ヘルプ、な目を向けて断ると、母は、あら、残念ね...と、おもむろにガッカリする。

「お母さん、せっかく哲平から解放されたのに、ここで一緒におやつなんか食べたらまた『キンパツゴースト第2弾』に突入だよ。哲平のせいでヒビク先輩は田村先輩に置いていかれちゃったんだから」

ヒカルは響の期待に応え、哲平に聞こえないように小声で言った。

哲平にまた来ることを約束した響がようやく浅倉家を出ると、辺りはもう夕暮れ色に染まっていた。隅田川のほとりの墨田公園が見事な夕焼けに包まれている。響はしばらくそこにたたずみ、その夕焼けを見つめた。

響を家の外に送りに出たヒカルは、そんな響の様子にさっきのあかねとの会話を思い出した。今ここにいる響はまた、さっきまで哲平と遊んでいた時の響とは違う。

――ヒビク先輩...、どうしたの...？

そう訊きたいのに訊くのが怖い。それが何故だかわからなくて不安が大きくなる。

「元気な坊主だな、お前の弟」

突然我に返ったように響は言った。

「え？ ああ、すみませんでした。哲平、どういうわけかお兄さんが好きなんですよ。いつもは隣の群竹くんが被害にあっているんです...」

「隣の...？ ああ、群竹...。そういえばいつもの連中が見えなかったなあ...」

「いま、みんなは合宿に行っちゃってるから...」

「ああ、そうだったな。合宿かあ。なつかしいな」

響は再び川の方を見つめる。

「もう一年たつんですね。軽音部と演劇部の合同合宿から」

もう二度とあの時のメンバーでの合宿は実現しない、と思うとヒカルは淋しくなった。半年後には響は卒業してしまう。

――半年後も私はヒビク先輩のそばにいられるのだろうか。

ずっとずっとそばに...。

「ヒカル、不良しょうか」

響の背中を見つめていたヒカルに、突然振り返った響が言った。

「不良？」

「よく言われたよな、あかねやお前に。バンドは不良だとかバイクは不良だとかさ」

「そうでしたね...」

「今度のは本当の不良だ。今夜二時に迎えに来る。そっと家を抜け出して来いよ」

言って響はウィンクをしてみせた。

「二時って...、そんな時間からどこに？」

ヒカルの不安そうな顔をじっと見つめ響は、

「駆け落ちしようぜ...」

と、つぶやいた。駆け落ち...？！と叫んで心底驚いたヒカルの顔を見て響は、

「はっ！ 何だよ、ヒカルのその顔！ チャウチャウみたいだぜ！」

吹き出して笑った。

「先輩！からかわないでください！信じやすい性格なんです！」

「悪い悪い。日光に行かないか？あの湖。ライジングサンを見るには二時には出て行かないと、二人乗りじゃ高速には乗れないからさ」

「本当に？！行く！行きます！」

「んじゃ二時な！寝坊しないでくれよ。真夜中に呼び鈴鳴らすわけにもいかないからな！」

「はい！絶対に大丈夫です！」

響は手を上げて駅へと向かう道へと駆け出して行った。その後ろ姿を見守りながらヒカルがうっとりとしたずんできると、

「この不良娘が～～」

母親が家の中から出て来た。

「げっ、もしかして聞いていた？」

「若い者はいいですね～。ふ～ん、二時にね～」

母親はわざと意地悪な目をしてヒカルを見る。

「行ってもいいでしょ？ライジングサンを見るから二時なんだよ」

ヒカルは懇願するように母親にとりすがった。

「もしもお母さんが聞いてなかったら黙って出て行った？」

「そんなことしないよ！ちゃんと話すつもりだったもん！」

ヒカルの即答に母親は満足そうに笑うと、

「しょうがないわね。お母さん、ヒビク先輩のファンだし。お父さんには内緒にしておいてあげる」

と、ヒカルのおでこをつついた。

「ありがとう！お母さん、大好き！」

その夜ヒカルは胸の高鳴りを抑えきれず、結局眠れないまま二時を迎えることになった。

約束どおり響が午前二時に迎えに来て真夜中の国道をひたすら走り、辺りがうっすらと白ばむ頃によく中禅寺湖に到着した。

「ヒビク先輩...、私、バイクに酔ってしまいました...」

「マジ?!」

いろは坂の連続カーブがこたえたようだ。バイクに慣れていないヒカルはカーブを曲がる時に体をどのように傾けたらいいのかわからず、目を閉じてただ響の背中にしがみついていた。だが、それだけじゃない。東京からここまで走る間ずっと響の背中にしがみついていた。こんなに長い時間響に触れていたのはもちろん初めてだった。響の背中は広くて温かくて、いつか熱を出した時に家まで送ってくれた時と同じ匂いがした。ドキドキとときめく想いと、ひたひたと忍び寄るせつない不安が入り交じり、その緊張もあってバイクに酔ってしまったのだ。

「んじゃ、深呼吸」

響は以前ヒカルに教えてもらった通りの方法で深呼吸をし、ヒカルにも勧めた。

「少し楽になったみたいです...」

「バイクに酔うやつってのもめずらしいぜ？」

響は呆れ、ヒカルは首をすくめる。

「バスで来た時はあれだけ元気だったくせに変わったヤツだな」

「どうせ私は変わってますよ」

バイクに鍵をかけ、まだ夜明け前の湖畔を響は歩き出す。後ろで束ねた金色の髪が白い空気の中で優しく輝いている。一年前、同じ場所を歩いた時と同じ光景がここにあった。

——ヒビク先輩はどうしてここに私を連れてきたのだろう...。

ヒカル姫、そなたを愛していました——昨日、哲平と遊んでいた時に言った響の言葉が心から離れない。遊びの中でのたわごとだということは百も承知している。だが、あの時の響はどこか思い詰めたような目で自分を見つめていた。このところの響はいつも何かを考えているような雰囲気があった。それはずっとというわけではなく、いつものように話をしていてふと会話が途切れた時、今までここにいた響が身体だけを残して心だけどこか遠くに行ってしまうような——。

だから、不安でたまらない。本当に響が遠くへ行ってしまうようでせつない。

——このままずっとヒビク先輩のそばにいたい。先輩が卒業しても、大人になっても...。

響はどう思っているのだろう。自分をどんな存在として見ているのだろう——。今まで時々頭をかすめたことだ。だが、あえて考えないようにしていた。自分と響の関係に答えを出してしまうのが怖かった。当たり前のように傍にいるから、このままでいられればそれはこれからもずっと続いていくはず——。

——でも...。

ヒカルは真っ直ぐに湖の向こうを見つめている響に目を向けた。今、やっと顔を出した太陽で

深緑色の湖面の先が白く光っている。

「ヒカル、見てみろよ」

響がさした指の先に、今ここから昇ろうとしている光が湖の水平線に一筋の線を輝かせていた。

「ヒカルの太陽だな」

響は少しチャカしたように言う。

「ヒビク先輩の太陽でもあるんですよ！」

「俺の太陽か…」

響はまた遠くを見つめた。言葉どおりの遠くではなく心を飛ばした遠くだ。突然に響が遠い存在になってしまう気がして、ヒカルは怖くなった。

「ヒビク先輩！」

突然のヒカルの大声に、響は驚いて振り返った。

「な、何だよ…?!」

「最近の先輩、少し変です！なんだか今までのヒビク先輩じゃないみたい！どうしたんですか？悩み事でもあるんですか？」

ヒカルは心の中にあった不安を一気に吐き出すように言った。

「あかねちゃんも心配していました！私は…最近の先輩を見ているとせつなくなります…！」

ヒカルの真剣なまなざしを受けて響はしばらく無言でいた。だが、ハッと笑うとヒカルのおでこをチョンとつついた。

「俺は別に何も悩んじゃいないぜ？」

「嘘です！ヒビク先輩、時々凄くせつない目をして遠くを見てる！心がここにはないみたいで…そんなのヒビク先輩らしくなくて…私は…」

鼻を膨らませ、涙目になっているヒカルに響の方が目を丸くした。

「…そんなつもりはなかったけど、そういう時があったとすれば、たまたま曲のフレーズなんかを考えている時だったんじゃないかな。頭にメロディが流れ始めるとそれでいっぱいになるから心ここにあらずになっちゃうし」

「本当ですか？」

「ああ、本当。お前に嘘は言わないさ」

「今もそうでした？」

「ああ。あの太陽を見て浮かんだフレーズがあったから頭の中で音符を並べてた。ヒカルの大声で全部すっ飛んじまったけどな！」

響はいつものようにアハハと豪快に笑った。

「何だ、そっか…。心配して損したなあ…」

心から安心したように笑うヒカルの顔を見て、響はフッと笑った。

「なんだ、そんなに心配だったのか？」

「そりゃもう…。なんだか先輩が遠くに行っちゃうような気がして…」

え…？と響はヒカルを見た。

——俺が、遠くに……。

「……、心配させて悪かったな…」

ヒカルの頭にポンと手を乗せ、響は太陽に目を向けた。晴れた空にその光はまぶしい。

「ライジングサン…。懐かしいですね！一年前もここで先輩と同じ太陽を見て、先輩はあの『ライジングサン』を作ったんでしたよね！」

「ああ、そうだな」

「あの時、ここで先輩とした話をそのまま歌詞にしてくれて、私すごく嬉しかったんですよ！」

ヒカルの笑顔に朝日が輝く。

「時の流れって不思議ですよ？あの時、先輩はお父さんのことは何も知らないって言うのに、ジャックさんに会うことが出来た…」

「そうだな…。俺はさ、思い出っただけは必要ないものだと思ってた。過去は過去。振り返ったところで何の意味も無い。まあ、俺には振り返るような過去なんてなかったし。自分に誇りさえあれば、今をしっかりと生きていけば、欲しい未来はあると思ってた。そしてそれは間違いじゃないとは今でも思う…。でもな…、」

響は左側にいるヒカルを見下ろした。ヒカルはずっと響を見上げている。

「未来まで大切に持って行きたい思い出ができたんだ。それは俺の原点になった。それが一年前この場所で『ライジングサン』の詞になった時間…。お前の前で言うのも照れちゃうんだけど…」

響は目を上に向け鼻をかいた。それはこれまでも何度も見てきた照れたときの響がする癖だ。

「ヒビク先輩…」

「ヒカルのおかげでずっと恨んでた親父に会うことが出来た。親父は俺が思っていたような冷たい人間じゃなかった。ヒカルがああ言ってくれなかったら、親父に感謝するって言うてくれなかったら、俺は多分今でも親父を憎んでいただろうし、一生そんな気持ちのまま人生を送ったかもしれない…」

ヒカルは、コンサート会場で抱きしめてくれた響の温もりを思い出した。

「……そういえばあの後、お父さんとお母さんは？」

響と母は一緒にジャックのコンサートを聴いたのだろうか。ジャックと母は会えたのだろうか。あの後のことをヒカルは響から何も聞かされていなかったのだ。

「コンサートにはおふくろも一緒に行ったし、俺たちは三人で会って食事をした」

「ほんとですか？！お母さんとジャックさん、会えたんだ…」

よかった…、とヒカルは笑った。

「けどさ、ジャックとおふくろの間は十九年前に終わったことなんだ。だからそれ以上のことは何も変わってない。おふくろは十九年の間、ジャックを待っていたわけじゃないんだ…」

「え…？そうなんですか…」

ヒカルは今度は悲しくなった。愛し合った二人が時の流れの溝に埋もれ、それを忘れ去ってしまうことにヒカルはせつなさを感じずにはいられない。

「そんな顔するな、ヒカル。だからといって、二人が十九年間互いのことをまったく忘れていた

ってわけでもないんだぜ」

「……」

「ジャックの音楽はジャズだけど、何年か前に一曲だけスタンダードなバラードを出したんだ。

『スイートラヴ』ってタイトルがついた優しい曲さ」

ヒカルは、スイートラヴ...、と呟いてから思い出した。CDに収録されていた、甘い言葉が繋がったような曲だ。

「その曲知ってます。有名ですよネ？」

「ああ。ジャックの代表曲のひとつだよ。これは昔、まだ恋人だった頃にジャックがおふくろのために作った曲だったらしい。フレーズの中にふたりにしかわからない旋律があるみたいでさ...。ジャックははるか彼方の日本にいるおふくろにこの曲でメッセージを送った。おふくろはそれを受け止めた。ふたりの間はそれでよかったんだ。思い出として心に刻み、それぞれの人生を送ることを選んだんだと思う...」

「それじゃあ、これからも？」

「あのふたりはあのままさ。でも、ジャックが俺の親父であることには変わらない。ヒカルが言った通り俺の中の音楽の血はジャックから受け継いだものだって今は思うから...」

響はまた遠くを見つめた。一羽の水鳥が湖面から空へ羽根を広げて飛び発っていく。

「.....だから俺は今、ジャックに感謝している。心から...」

素敵なことだ、とヒカルは思った。

「サンキューな、ヒカル...」

「そんな、私は...」

響がこの場所に自分を連れてきたのは、このことを伝えるためだったのだろうか。そうだとしたら、何故急にそれを自分に伝えようとしたのだろうか...。

——ヒビク先輩...。

やっぱりいつもとどこかが違う。ヒカルの胸に不安がまた蘇ってきた。

「なんだか眠くなってきたなあ」

響は大きなあくびをしながら両手を伸ばした。

「一眠りするか！」

「ここでですかあ？」

「俺は別にこのままヒカルちゃんとエッチなホテルに行ってもいいんだけど？」

「な、何言ってるんですか、先輩のバカ！」

ヒカルは真っ赤になって響の背中をたたく。

「ほらな。そう言うに決まってるじゃない。だからここでいいよ」

響は砂浜にゴロリと横になった。

「ヒカル、ちょっと膝貸してくれない？」

言うなり、響は立ちつくすヒカルの腕を引っ張り無理やり座らせ、その膝の上に頭を乗せた。

「そんじゃおやすみ。少したったら起こしてね」

「もう、先輩！」

ヒカルの抗議を聞くまもなく響はまぶたを閉じた。

誰もいない夜明けの湖畔で、自分の膝を枕にして眠る響の寝顔をヒカルは見つめる。すっかり寝息を立ててしまっている響に、半分は呆れもしてもう半分はやはりこのひとときが嬉しいと思う。

――ヒビク先輩が卒業しても私たちが大人になっても、ずっと一緒にいたいよ。

そう、心の中で思っただけなのに、胸に込み上げてくるのは拭いきれない不安とせつなさだ。

ただ、好き。響が、好き。こんなふたりの時間が、いつまでも永遠に続いてくれることを願ってしまう――。

「浅倉と風間先輩...？」

宿舎の窓から外を眺めていた颯土は、目の前の湖畔で膝枕をしているカップルを見て我が目を疑った。

「どうしてこんな朝っぱらにこんなところにいるんだ...？」

時計を見るとまだ五時半だ。毎朝の朝刊配達の結果で早起きが習慣になっていた颯土は同室の誰よりも早く目覚めていた。勇斗はまだそこで眠っている。颯土たち空手部は去年と同じ宿舎での合宿を行っていたが、演劇部の合宿は今年は無いとヒカル自身が言っていたはずだ。

――まさか、ふたりで旅行.....？

でなければ、こんな早朝にずいぶん東京から離れたこの場所にいるはずがない。だが、昨日はあんなに大騒ぎをしていた人形劇の公演があったはずだ。ふたりの傍にはバイクが停めてあった。あれは、いつかヒカルを迎えに来た響が乗っていたバイクだ。

「.....っ」

ヒカルと響がどうだなんて自分には関係ない、ということに気がついた颯土は窓を閉めようとした。なのに、どういうわけか二人から目を放すことができない。ヒカルの膝を枕にして心地よさそうに眠る響。そんな響の顔をじっと見つめているヒカル。うっすらと朝もやのかかる中のふたりの光景は美しかった。颯土は思わず指でスクエアを作りその中にふたりをおさめていた。

「浅倉...」

颯土がつぶやいた時だ。

「ヒカルちゃんがどうしたの〜？」

まだ布団の中にいる勇斗が寝ぼけた目をこすりながら、颯土の立つ窓際に顔を向けた。

「な、なんでもない。なに寝ぼけてるんだよ、お前」

颯土はうろたえて、そそくさと窓を閉めた。

「だって今、浅倉とかなんとかつぶやいてなかった？」

「.....あ.....、朝だ、って言ったんだよ」

颯土は即座に話をつくろった。

「そっか...。まあ、あかねちゃんが恋しくなったってんならわかるけど、群竹ちゃんがヒカルちゃんの名前を独り言で呼ぶはずもないしね〜」

「く、くだらないこと言っていないでそろそろ起きろよ。早朝ランニングもはじまるぜ」

「そうだね～」

もともと起き出す勇斗を横目で見ながら再び窓の外に目をやると、そこにはまだ膝枕をした二人の姿があった。

◇

夏の日が翳った頃に響はヒカルを家に送り届けた。ヘルメットを取ったヒカルの鼻は日に焼けて真っ赤になっていた。直射日光の下で長い時間、響に膝を貸していたからだ。

「あら、ヒカルの鼻がトナカイさんになっちゃったなあ…」

「先輩のせいです…」

悪かった、と響は笑い、そして――

「…じゃ、元気でな…！」

ひとこと、呟くように言って直ぐにバイクを走らせて行った。

「せ、先輩…?!」

響の不自然な言い方にヒカルは思わず後を追ったが、あっという間にバイクは角を曲がってしまった。

――元気でな…って、なんだかもう会えないみたいな言い方だったよ…。

新学期になって再び学校で会うまで元気で過ごせよ、と響は言いたかったのだと思う。いや、それ以外の意味があるはずはない。

――なのに…。

街道を遠ざかっていくバイクの排気音が響いている。だんだんと遠くなるその音が、そのまま現実につながってしまう気がしてヒカルの不安は大きく膨らんだ。

一週間の合宿が終わり、颯士の沖縄への出発が二日後にせまっていた。『ピクチャーライフ』の賞金と五ヶ月間の新聞配達で必死にためたアルバイト料で、交通費と二十日分の宿泊代、食事代が賄える。二十日の日程のうち、半分はテントでキャンプをすることになると純平が言っていた。現地での移動ももっぱらレンタサイクルということらしい。あてのない気ままな撮影旅行だからそれで十分なのだろう。

自分が写真撮影を目的にして、カメラマンの純平の撮影旅行に同行するなんてまだ信じられない。だがそのためにこの五ヶ月間、苦手な早起きに挑戦をして新聞配達をしてきたのは事実。

――俺、どうかしている。

何度も考えた。雑誌で見た沖縄の風景に強烈な憧れを抱いたのは確かだ。いつかは行ってみたいと思っていたのも事実だ。だが、それは何も撮影旅行でなくてもいいのだ。今、ここに貯めた資金があれば旅行会社のツアーで沖縄の土を踏むことだって可能なはず。

――でも…。

颯士は机に投げてある『ピクチャーライフ』を手に取り、自分が撮影したヒカルと響のページを開いた。四日前の湖で偶然見て指のスクエアに入れたヒカルと響の構図と、この写真のイメージが重なっていく。

隣に住むおてんば娘。おせっかいでうるさいクラスメート。

そのヒカルが響の前では全くの別人のように見える。ふたりが並んだ風景はかなしいくらいに美しく輝いて見える。そして、そう感じた時の自分は、自分で理解できない感情にとらわれていく。

いつか純平が言っていた。写真の中に言葉が全部つまっている、と。それならそれを確かめてみようと思った。自分が何を感じ、そしてこれから何処に向かって歩いていくのかを。

「颯士、電話よ」

母親がコードレスの受話器を持ち、颯士の部屋をノックした。

「俺に？」

颯士に電話がかかってくるなどほとんどない。

「水沢さんって女の子から」

「ああ…」

颯士はコードレスを手を取った。そして母親に部屋を出るように言う。

「はいはい…」

母親が階段を下りきった足音を確かめてから、颯士は電話の保留を解除した。

『あ、群竹くん？』

受話器の向こうからはあかねの透き通った声が響いた。電話なんてどうしたんだ、という言葉が颯士は心の中でつぶやいた。今まであかねが颯士に電話をかけて来たことなどなかったし、颯士もかけたことはない。

『…群竹くん、明日あいてる？』

少しためらうようにあかねは言う。

「あさってからの準備はあるけど、別にこれといった予定は...」

『そう、それじゃ...、』

あかねは口ごもり、

「？」

『デートしよう？』

と、思い切ったように言った。

「で、でーとお？！」

颯土は裏返った声を発し、顔はみるみるうちに赤くなった。これが電話でよかったと思うほどに狼狽えている。

『そ、そんなに驚かなくていいでしょう？あさってから沖縄に行っちゃうんだし、いろいろ買い物とかもあるんじゃないかなって思ったの...』

電話の向こうで半ベそをかいているあかねの様子が受話器を通して伝わってくる。

『迷惑だったらいいいよ...』

「そ、そうじゃないんだ...」

言ったきり颯土は黙り込んだ。受話器の向こうであかねも黙り込んでいる。重苦しい沈黙――。

――助けてくれ！

颯土は心の中で悲鳴をあげていた。先の言葉が見つからない。どうしていいのかわからない。「Tシャツが何枚か足りなくて、...買いに行こうと思ってたんだ。だ、だ、だから...、一緒に行くか？」

颯土はやっと言葉を搾り出した。

『うん！じゃあ渋谷に行こう！』

「渋谷？！」

『駄目...？』

「い、いや、わかった。明日一時に待ち合わせをしよう」

『うん！一時ね！』

通話を切って颯土はホッとため息をついた。だが、わざわざ渋谷まで行かなくてもTシャツなどそこのコンビニでも売っているし、近所にはフクスケ洋品店がある。たかがTシャツを買うのに電車に乗って渋谷まで出かけていくのは正直言って億劫だが、女というのはそういうことに無駄な時間を使い好んで徒労をするものなのだろうか...？

――謎だ...。

いくら考えてもTシャツを買いに渋谷まで行く理由が分らない。颯土は考えること自体が億劫になった。とにかく明日は、これまでの人生で初めてのデートというものを自分はするらしい。いったいどういうことをデートと呼ぶのかも分らないが、あかねからの誘いをイヤだとは思わなかった。

◇

通話が切れた受話器を持つ手が震えていた。胸を打つ鼓動が普段の二倍ぐらい速く、痛いくらいだ。自分から颯土に電話をかけてデートに誘うなんてことは、あかねにとっては大変な偉業だった。互いに部活があるから夏休みとはいっても毎日学校で顔を合わすことは出来たが、それだけ。合宿前は何も言わず行ってしまい、帰ってからも音沙汰は特になしの颯土だ。ヒカルが言ったような連絡の取り合いなど当たり前のようにしていないから、このまま黙っていては颯土は何も言わずに沖縄にも行ってしまう。そうすれば新学期になるまで会えないのだ。

――それが当たり前の私たちなんだけど…。

颯土の不器用を理解したくて多くを望まないようにしていた。だが、出会った頃からはだんだんと変わっている颯土なのに、自分たちの間は何ひとつ進展していかないことに不安は大きくなるばかりだった。そんなのはもうイヤだと思ったからあかねは勇気を出して受話器を取った。本当は颯土の方から誘って欲しい。ショッピングや映画やコンサートにも一緒に行きたい。何でも無いことを電話でお喋りもしたい。

――そして、いつもそばにいたい…。

傍にるのが当たり前の特別なふたりになりたい。互いを想う気持ちを伝え合えるふたりになりたい。自分は颯土の何なのだろう、そして颯土は自分の何なのだろう。これまでいくら考えてみても答えは出なくて、周囲の認識に自分だけが置いてきぼりになっていた。でも、颯土にその答えを求めることは無理なことだ――。

――群竹くんは自分から想いを語ろうとはしない人だから…。

ならば、自分の方からぶつけてみるしかない。もうこれ以上あやふやな想いを抱えたままじゃいられない。私の彼氏、俺の彼女と自分たちが認め合いたい。

――だから…。

自分は颯土が好きだということ、そして颯土はどうなのかという答えを明日出そう。怖いけれど。怖くてたまらないけれど――。あかねはまだ震えている自分の手を見つめながら心を決めるのだった。

待ち合わせの場所は、颯士とあかねがそれぞれ利用する最寄り駅から互いの路線が交わる途中駅のホームの一番後ろ。午後一時の約束だったが、十分を過ぎても颯士はまだ来ない。あかねは颯士が来るであろうホームの先を見つめながら、うるさく騒ぐ胸の鼓動を抑えようと必死になっていた。

ふと目を向けた線路の脇に向日葵が咲いている。凜と真っ直ぐに太陽を見上げ、真夏の青空の下で鮮やかな黄色を輝かせているその堂々とした姿に、震えるぐらいにドキドキしていた心が励まされたような気がした。あかねは、スーッと大きく深呼吸をした。そして心に決めた。

——群竹くんが来たら元気に手を振ろう。明るく笑おう。この向日葵みたいに。

・
・
・

人で溢れる渋谷の街——。颯士は今日何回目かのため息を吐いた。行きたいところにまっすぐ歩けないことが、こんなにイライラすることだとは思っていなかった。今まで渋谷という街に用はなかったし、たぶんこれからも自分にとっては必要のない街だと思う。こんなに人で溢れる往來を歩き回るのはごめんだな、と思った颯士は出来るだけ駅周辺の近場でさっさとTシャツを買ってしまいたかった。だが、あかねが『あそこ行こう、ここ行こう』と颯士を連れまわし、『このTシャツは群竹くんって感じじゃないから違うお店に行ってみよう』とか、颯士が適当なものを手に取ると、『それじゃデザインがつまらないからこっちにしなよ』とか、色々と口を出すのでたかがTシャツ一枚を買うのにずいぶんと時間がかかり、颯士はくたくたになった。

——こいつ、こんな強引な性格だったか？

いつもと違うあかねの態度に、颯士はかなりの違和感を感じている。まるで、隣りにいる誰かさんに連れまわされているような錯覚が起きたりもして——。

「はあ...」

耳で聴こえた颯士のため息は今日これで六回目だ。数えたくないのに、なんでもなく過ごしている隣でふいに肩を下げて息を吐く仕草に敏感になってしまっているあかねだった。

人で溢れる渋谷の街を自分と颯士は肩を並べて歩いている。ハタから見ればきっと恋人同士に見えるに違いない。だが颯士はさっきからため息を繰り返すばかりだし、何度も腕の時計を見ては時間を確認している。

——そんなに早く帰りたいの...？

今日の颯士の買い物は沖縄に持っていく着替えのTシャツだけだ。近場のお店で適当に決めてしまおうと考えている颯士の気持ちはわかっていた。だが買い物が済んでしまったらきっとこのまま帰るだけ。いつも駅で別れるときと同じように、`気をつけて、`ありがとう、だけの言葉を交わしてバイバイだ。その後は新学期までの一ヶ月、また不安と寂しさに覆われる。少しでも長く一緒にいたいから、なるべくすぐにTシャツを決めないようにさせた。ため息をつかれたら向日葵。時計を見たらまた向日葵...。せつない想いが湧き上がってくるたびに、ホームで見た黄色

い花を思い出して顔の下に沈みこんでいる笑顔を引っ張り出して明るく声をかけてきたけれど――。

「何か飲まないか？」

慣れないショッピングに疲れ果てた颯土が言った。

「うん、疲れたもんね」

あかねは目の前のファーストフード店を指差した。だが、店内は若者であふれ座る場所を確保出来そうにない。颯土は心底うんざりした顔をして斜め向かいの喫茶店を指差した。

喫茶店の中も人で混雑していたが何とかテーブルを確保することができ、二人はようやく一息ついた。

「明日からだね」

あかねはテーブルに出されたおしぼりで手を拭きながら言った。

「ああ...」

颯土は無愛想に頷いた。

「気をつけて行ってきてね」

「ああ...」

「...しばらく会えなくなっちゃうね...」

「ああ...」

「群竹くん...」

「ああ...」

「寂しいよー」

――向日葵は...もう、ダメみたい...。

ああ...、と単調に相槌を打った後、違和感に気付いた颯土は突然顔を上げてあかねの顔を見た。

「水沢...?!」

あかねは涙をポロポロこぼしていた。

「泣くなって言わないでね...」

「どうしたんだよ、急に...」

颯土はわけがわからず戸惑った。

「私ね、群竹くんが好きなの.....」

「水沢...」

隣の席では四、五人の若者が大声で笑っている。そして後ろの席ではカップルがいちゃつき、その隣では強面の男が言い争いをしている。同じ空間を共有している人達が、自分達以外の人間の感情や行動には無関心でそれぞれの時間を過ごしている喫茶店。あかねにとっては一大事の涙も、颯土にとっての戸惑いも他人にはまるで感心のないこと。そんな空間の中で――。

「好きだからいつも一緒にいたいと思っていたの...」

あかねは涙の中に必死に笑顔を浮き上がらせて言った。

「俺は...」

「ごめんね。私の勝手な思いなの。でも、聞いて...」

あかねは両手で涙を拭いた。

「群竹くんの全部を理解して受け入れたいって思ったの。群竹くんは人と馴れ合うのが嫌いだし思っていることを口に出したりもしない...。でも、それでもそばにいたいって思っていたから求めすぎないようにしていた。きっといつかは普通の恋人達のように同じことで笑ったり感動したりできるって信じてた...」

あかねの瞳からはまた涙がハラハラと零れた。

「水沢.....っ」

「もう、やだな。涙ばかり出てきて！ごめんね。本当にごめん！群竹くん困るよね。泣くな、っていつも言われたし。でも...、」

あかねは颯土をじっと見つめた。

「...でも、そういう時はいつも私の後ろを見守るように歩いてくれてたから...」

「それは...、」

——お前が危なっかしくて見てられなかったから...。

「だから、群竹くんもきっと私のことを好きでいてくれてるって勝手に思い込んでいた。ううん、そう信じたかったのかも...」

颯土は黙ってうつむいた。言いようのない罪悪感が心に広がった。

「あの頃からすると群竹くんは変わったよね。でも、私の前での群竹くんはやっぱり変わってなかった。群竹くんに変化があるのはヒカルちゃんがいる時だけ...」

あかねの言葉に、颯土は反射的に顔を上げた。

「お、おい...?!」

「いいの。何となくわかっていたから...。でも、それを確かめるのはとても辛かった...」

「やめろよ、水沢。俺は...!」

颯土は半分腰を浮かして叫んだ。俺は浅倉のことなんて——。

「群竹くん...?」

——浅倉のことなんて...、どうなんだよ...。

何を言おうとしたのか自分で分からない。ただ、あかねにヒカルの名を出され、強く否定したい気持ちだけが先走って。

「...群竹くんは、どうして、わたしと一緒にいてくれるの？」

「それは...、俺がお前と一緒にいるのは、お前が...、」

——温かいから、居心地がいいから...。

そうだ。あかねの気持ちをわかっていながらそれに深入りしようにしなかったのは自分だ。それでいて居心地のいいスペースは確保しておきたかった。勝手なのはあかねじゃなく自分なんだ、と、颯土の罪悪感は一気に膨らんだ。

「悪いのは俺だ...。ごめん...」

「謝る...の...?」

颯土は無言でうつむいている。

「そう...だよね...」

全身を失望感で包まれたあかねは、膝の上で重ね合わせた両手をぎゅっと握り締めた。

「今日、群竹くんはため息ばかりついていた。時計ばかり気にしていた。やっぱり私じゃダメなんだなって思った。だから私...、」

あかねは一瞬颯土を見て、その後きゅっと目を瞑った。

――最後は向日葵...がいいよね...。

次に目を開いたとき、あかねは微笑んだ。

「もう、いいよ」

え？と颯土は顔を上げてあかねを見た。

「もう...私のこと考えなくていいよ。私も戻るから...」

「水沢...」

「だからもう、群竹くんも無理しないで、自分の心に正直に...、正直に.....、」

颯土が他の誰かを想っていてもこのままさよならはしたくない。だから颯土を好きになる前の自分に戻りたい。

だが、ここまでがあかねの限界――。これ以上は言えず、颯土の顔を見られなくなってあかねは喫茶店を飛び出した。

――向日葵には...、ヒカルちゃんには...遠いよ...っ。

あかねは振り返らずに人ごみの中を駆け出した。

傷つけてしまった。自分が傷つくことを恐れていたために罪もないあかねを傷つけてしまった。

――俺は亮（あいつ）と同じじゃないか。

もう二度とあんな思いはしたくないから心にバリケードをはって生きてきた。自分を守ることに必死だった。それが...！

カラン、とあかねが飲んでいたレモンティーの氷が音を立てた。

「水沢...！」

その音に弾かれるように颯土はあかねの後を追って外に出た。だが、多くの人々が行き交う雑踏の中にあかねの姿を見つけることは出来なかった。

やりきれない気持ちをかみしめ、重たい足を引きずりながら家の前まで帰ると隣の家からちょうどヒカルが出て来た。

「よっ！」

ヒカルは颯土の姿を見つけるといつものように片手を上げて声をかけてきた。そのくっつくような明るさが鼻につき、颯土はプイッと横を向くとヒカルを無視して門の中に入ろうとした。

「ちょっと、何怒ってるの？」

「べつに...」

「だって暗いじゃない。何かあったの？」

「お前には関係ないだろ？いちいちうるさいんだよ、でしゃばり女」

そう言い捨て颯土は家の中に駆け込んだ。

「な？何ですってえ？！ちょっと！群竹くん、出てきなさいよっ！」

家の外でヒカルがわめいている。颯土はそそくさと靴を脱ぎ捨て二階の自屋に飛び込んだ。

「群竹くん！むらたけ——っ！」

下でヒカルがまだ騒いでいる。

「何があったか知らないけど、人に八つ当たりするなんて男らしくないじゃない！ベ—っだ！バカ颯土！」

玄関に向かってアッカンベ—をしているヒカルの顔が目には浮かんた。

——何やってんだ、俺…。あいつの言う通りじゃないか。八つ当たりをするなんてガキみてえだ。

颯土は少し反省をした。だが…、

「バカ群竹！アホ颯土！スットコドッコイのネクラ男！」

あいつの方が俺の何倍も言って返してるな、と颯土はため息をついた。今、下で大騒ぎをしているヒカルと響という時のヒカルは本当に同一人物なのだろうか、と、颯土は開いたままになっている『ピクチャーライフ』を横目で見た。

——群竹くんに変化があるのはヒカルちゃんがいるときだけ…。

あかねの言葉が蘇った。

——そんなことあるはずがない…っ！ないんだ…！だって、あいつは…っ。

颯土は一瞬微かに浮かんた己の感情を強く否定した。ふと、時計を見ると午後六時を指そうとしている。あかねはあれからどうしたのだろう。ひとり傷ついて帰り道をたどったのだろうか…。そう思うと颯土の心は痛んだ。だが、あかねが求めるような恋人にはやはりなれないだろう。あかねを結果的に利用してしまった自分の罪は消えない。もうあかねとは今まで通りの`仲間、でもいられない。あかねは許してはくれないだろうし、自分で自分を許せはしない——。

どこまで考えても沈みきった心には決着がつきそうにもなかった。颯土は明日からの旅の支度にとりかかることにした。

◇

大体の支度を終えた頃、カーテンを閉めた窓にコトリと何かがあたる音がした。

「またか…」

もう何度か聞いている音だ。時々ゲリラ的に開催される`仲良くなろうぜ祭り、や数学のプリントが課題で出た時などに。カーテンを開けると案の定向かいの窓にヒカルがいた。少し膨れた顔をしながら仁王立ちしている。

「何だよ、まだ文句があるのか？さっきのことなら謝るよ。悪かったですね。『でしゃばり女』は撤回します」

颯土にしては珍しく長文の台詞を吐いた。

「いつまでも根に持つ性格じゃありませんよ～」

「じゃあ何だよ。今、人と喋る気分じゃないんだ」

「いつも人と喋る気分じゃない人がそんな台詞を言っても説得力がありませ〜ん」

颯土はハーッとおもむろにため息を吐いて窓を閉めようとした。すると、向こうの窓から何かが飛んで来た。それを颯土は反射的にキャッチした。

「何すんだよ！」

颯土は自分がキャッチした物を見た。そして、妙に目がチカチカするその代物を見てギョッとなった。ヒカルが投げてよこしたのは透明のビニール袋に入ったままの、赤、青、黄色と派手な原色をふんだんに使った、とあるキャラクターのトランクスだったのだ。

——パ、パンツ？！

「な、何なんだよ、これ？！」

「お餞別！何枚あったって役立つものでしょ！それ買うの結構恥ずかしかったんだからね！」

颯土がいつも行くコンビニに売っていたものだ。いったい誰がこんなものを買うのか、と思っていたそれが今自分の手の中にある。

——こいつ、あのコンビニでこれを買ったのか？！

颯土の顔がみるみる赤くなっていく。

「それじゃ、ハブにかまれないように気をつけて頑張ってきてね！ふんっ！」

ヒカルは激励の言葉を言ったあと、パイと顔を背けて窓を閉めようとした。

「ああ、待てよ！」

颯土は慌ててそれを制止した。

「サンキュー…」

「どういたしまして！あたしの勇気を称えてちゃんとはいてよね、それ！」

「あ、ああ…。ありがたく…」

手に持つトランクスを見つめながら返答に困っている颯土を見て、ヒカルはプッとふきだした。

「無事に帰ってくるんだよ？麻耶ちゃんのお兄さんってサバイバル旅行が好きらしいから群竹くんにはキツイかもよって麻耶ちゃんが言ってたよ？」

「…そうなのか？」

「だから怪我なんかしてあかねちゃんに心配かけないようにね」

ヒカルの言葉に颯土の心はまた痛む。

「わかってる…、じゃあな！」

颯土はそれだけ言うと窓を閉めカーテンを閉じた。

——あかねちゃんに心配かけるな…か…。

手中のド派手なトランクスとは逆に、颯土の心は地味にくすむ。それでも、その餞別を颯土は荷物の奥に詰め込んだ。

那覇空港に降り立ったとたん、暑い陽射しと乾いた空気が肌を刺した。颯士はしばしその場にたたずみ大きく息を吸い込んでいた。これが沖縄の空気なのか――。

「群竹くん、ハイこれ」

純平が颯士にカメラを手渡した。

「一眼レフの使い方は知ってるよな？フィルムは市販のものでオッケーだよ。とりあえず十二枚は入っているけどなくなったら自分で補充してね」

「はあ...」

颯士は手渡されるままカメラを手にした。

「何を撮ればいいんですか...？」

「そんなこと僕に聞くなよ。自分が撮りたいって思ったものを自由に撮ってみればいいじゃない？こんなふうにね」

純平は自分のカメラのシャッターをきった。

「何を撮ったんですか？」

あたりは荷物を持って歩く人と送迎のリムジンバスしかない。

「風」

「風？風って...」

――そんなもん、写真に撮れるのか？

「言葉じゃ説明できないね。何せ風だから。あとで現像したら見てみな」

「はあ...」

――大丈夫か？このオッサン...。

「さ、行こうか。とりあえずチャリンコを借りて今夜野営する場所を探そう」

「え？宿は？」

「最初から贅沢はしないの。この先何があるかわからないんだから資金は大切ね」

「まあ、それもそうですね...」

いきなりサバイバルかよ...と颯士が思っている間に純平はさっさと歩き出した。

ふたりは空港のそばのレンタサイクルショップで自転車を借りた。

「このチャリが僕達の旅の大事な足になるんだから大切に使わないとな」

純平はその自転車をカメラに収めた。

「さあて、足も手に入ったし、もうどこにだって行けるよ。僕個人としては国際通りの街並みや人々を撮りに出たいけど...」

純平のライフワークは確か人間と空間で、限られた空間で生きる人間の自然な姿を写真にしてそこから哲学をどうたらこうたら言ってたな...、と颯士は思った。だが今、颯士は人が大勢集まる場所に行きたいとは思わなかった。まっすぐ歩けないとイライラするし、それに、

――水沢...。

渋谷での重い出来事を連想して、せっかく沖縄に来たというのにさらに暗く沈んでいきそうだ。海に行きたい。あの写真にあったようなエメラルドグリーンの海を間近で見たい。

「...でも、群竹くんは海がいいよね、きっと...」

純平は、颯土が自分が撮影した海の風景に惹かれここに来たということを忘れてはいなかった。

「はい」

「じゃあ、キャンプする場所を探しがてら海岸に行こうか」

純平は早速自転車にまたがり、テントを張れるいい場所があるといいんだけど...、とぶつぶつ言いながらペダルに足をかけた。

雑誌で見る沖縄の海は海岸に人影はなく、ただ広いグリーンの海が広がっている風景だったが、現実の海岸は海の色が透き通っているということ以外は、海水浴の人で溢れる伊豆などの海岸と変わらなかった。それでも那覇市内を脱出し海岸通りを自転車で二時間も走ると、人も途切れた静かな海がやっと広がった。純平と颯土は道端に自転車を止め、途中で買った缶ジュースを開け一気に飲み干した。そして純平はさっそくカメラを取り出した。

「群竹くん、あの風景を見て何を感じる？」

純平はぼんやりとオレンジ色になりつつある空と海を指差した。

「.....」

言葉にはうまく言い表せない。ただ美しい。それが颯土の率直な感想だった。

「言葉無しね...」

純平は空にカメラをむけてシャッターをきった。颯土も思わず自分のカメラを出していた。それを見た純平はニヤリと笑った。

「あの太陽が海に沈む瞬間を想像してごらん？」

颯土は言われた通りに想像してみた。今はまだ水平線の上にある太陽がだんだん水上の線に重なっていき、それにつれて辺りは薄いオレンジ色から朱に染まってゆく。そして太陽が水平線の下に沈む直前にはエメラルドの海に赤い絵の具を落としたようにオレンジがにじみ、やがてそれらは水の底に消えて辺りは蒼になる...

撮ってみたい。その移り変わりをあますところなくカメラに収めてみたい。颯土はファインダーをのぞいた。

「今、君が心に描いた光景ね、それがそのまま写真になる。そしてそれが君の言葉になるよ」

颯土はファインダーから目を放して純平を見た。

「写真は撮り手の心が写される。心から美しいと思ってシャッターをきるとそれは美しい写真になる。たとえばあそこにひとりの女性がいるだろ？」

純平は遠くの海岸にたたずむひとりの女性を指差した。

「彼女を撮ってみよう、とファインダーをのぞいてズームアップ！」

純平はカメラに望遠レンズを取り付けた。

「うわーっ！すっげー美人！と心から感動する」

純平の被写体になっている女性はジャンプスーツの上半身を脱いで腰のところでしばっていた

。長い髪を風に泳がせ夕暮れ時の海を見入っているようだ。かなり遠いのでその表情まではわからない。望遠レンズをのぞいている純平にはよく見えるのだろう。

「その感動のままシャッターをきる！」

純平は半分本気で舞い上がりながら次々とシャッターをきっていた。瞬くフラッシュとカシャカシャというシャッターの音が女性の位置にも届いたようだ。彼女はクルッと振り向くとツカツカとふたりに向かって歩いて来た。

「ちょっと、あんた！何を勝手に写真写しとんのんや！」

可憐な見かけとはずいぶんかけ離れた勇ましさと剣幕で、彼女は純平の前に立ちはだかった。
「す、すみませ〜ん！」

と、口では言いながらも純平はまだシャッターを切り続けている。

「図々しいやっちゃ！めっちゃ腹立つ！そのカメラこっちによこしいや！」

彼女は純平の手からカメラを奪い取った。

「フィルム抜いたるっ！」

「わーっ！それだけは勘弁してください！ぼ、僕の`風、や`自転車、や`暮れなずむ海、が台無しになってしまう〜！」

純平はあたふたしながらウロウロしたり土下座したりしている。何が`暮れなずむ海、だ、自業自得だ。と、颯土。

「そなん、うちには関係あらへん」

彼女は今にもカメラを開けようとする。

「だーっ！ヤメテ〜！そのカメラには僕のカメラマンとしての命がつまっているんですよ〜！」

「カメラマン？あんた、カメラマンやの？」

「そうです！こ、これ！」

純平はズボンのポケットから名刺入れを出し、一枚の名刺を彼女に差し出した。

「光創社カメラマン結野純平？聞いたことあらへん」

「そりゃそうでしょう。普通出版社のカメラマンなんて有名人じゃないですから。証拠証拠、群竹くん、あの雑誌貸してくれる？」

純平に言われて颯土は面倒くさそうにナップザックの中からいつもの雑誌を取り出し渡した。純平は自分の撮影した写真が掲載されているページを開き、それを彼女に差し出して見せた。

「ほんまや。名前が載ってるわ。うちはいやらしいオッサンが盗み撮りしてるんかと思ったわ」

彼女はカメラを純平に返した。とりあえずひとつのトラブルは解決したようだ。

「オッサンって...、僕はまだ二十八才ですよ...」

「りっぱなオッサンやんか」

「オッサンじゃなーい！」

「オッサンや！」

純平と彼女は今度は新たなトラブルに突入したようだが、颯土はふたりから少し離れ海の方に向き直った。太陽が水平線と重なり、想像していたようにエメラルドの海にオレンジ色をにじま

せている。純平たちのくだらない会話を聞いているよりも、こっちの方が颯土にとっては価値のあるものだ。ファインダーをのぞき、そして沈みゆく夕日を追いながら何枚もシャッターをきる。オレンジ色は水平線の上で一本の線になり、やがてあたりは静かな蒼一色に包まれた。十二枚のフィルムがそこでちょうど終わった。太陽が沈みきった海はこれから闇の世界を迎える。その一瞬前の蒼の世界。颯土はその風景にしばらく浸っていた。

「あの子もカメラマン？」

彼女が颯土を指差した。

「そう。優秀なカメラマンのたまご」

純平は颯土に向かって手招きをした。

「若いのにすごいんやね。うち、久保田麻希。よろしゅうね」

麻希は颯土に右手を差し出す。その差し出された手をどうしたらいいのか分からずに戸惑っている颯土の手を、麻希はそっと握って握手をした。

「彼女、京都からあのバイクで来たんだってさ」

純平が指差した道端にブルーのバイクが停車している。

「え...？ひとりで...？」

颯土は少し驚いて聞き返した。

「まあ、そうや。本当はひとりってわけでもないんやけど...」

麻希の言う意味が飲み込めない颯土は曖昧な相槌を打つ。ジャンプスーツだし髪は長いし...、
——レディース...とかでどっかに仲間が待機してるなんて...。

と、颯土が「レディース総長麻希、の図を想像していると、

「ふ～ん、あんたええ男やなあ？もてるやろ？」

麻希の方は颯土の顔をマジマジと見つめながら呑気なことを言った。

「...いやべつに...」

「なんやこっちは純平と違ごてずいぶんクールやねえ～？」

麻希の口からポンポン飛び出す関西弁は人が苦手なはずの颯土にも妙に心地いい。いつもなら初対面の人間に対してはかなりガードを張る颯土だが、そんな暇も無いほどに麻希という人間はスッポリとうちとけて来た。

——あれ...？この感触は...。

颯土のどこかで何かが触れた。

「あんたらテント張る場所探してるんやろ？ここを少し行ったところにええ場所知ってるんや。うち、そこにテント張るつもりなんやけど一緒に行く？」

「行く行く、行きます！なあ、群竹くん」

純平はすっかりその気になっている。

「ほな、うち先に行ってるわ。あんたら後から来いや」

麻希は停めてあったバイクに駆け寄りシートに颯爽とまたがった。そして、ヘルメットをかぶろうと髪をかき上げた瞬間、颯土は思わずシャッターをきっていた。

カメラは無反応...。

「そっか...、さっき全部...」

颯土はカメラを見つめてつぶやいた。

「カメラマンの常識。フィルムの準備は怠るべからず」

横で純平がささやいた。

翌朝。目覚めた颯士はいつもと違う目の前の風景に一瞬混乱した。

——どこだ？ここ…。

自分のベッドじゃない。狭い。イビキがうるさい…。

——イビキ…？

そこまで考えて颯士は跳ね起きた。隣で純平が大イビキをかいて眠っている。

——そうか、ここは沖縄の海岸で昨夜はテントの中で眠ったんだ。

腕時計を見るとまだ五時を過ぎたばかりだった。昨夜は暑かったからTシャツは汗まみれだ。海水はシャワー代わりになるだろうか？ならなくても汗ぐらい流せるだろう。いやでも海水も汗も塩っぱいのは同じだ。

——ああでも水を浴びたいし…。

結局、颯士はTシャツを脱ぎ捨ててトランクス一枚の格好でテントの外に出た。テントの前には昨夜の酒盛りの跡が散乱している。純平と麻希が随分と缶ビールを空けていた。未成年の颯士は当然一滴も飲ませてもらえず、どんちゃん騒ぎのふたりの横で波の音に耳を澄ませているだけだったが、いい加減いつまでたってもお開きになりそうもない酒盛りには付き合っていられなかったので、ひとりでさっさとテントに引っ込んだのだった。隣の麻希のテントを見ると、まだ寝静まっているようだ。

——しかし、女のくせにひとりでバイクで来るなんて変わった人だ…。

とりあえず散らかっている空き缶を端の方に寄せてまとめ、颯士はそのまま海に向かって歩き出した。

波打ち際に立つと少し冷たい水が足を濡らした。そこで少し足踏みをして水の冷たさに足を慣らしてから、颯士はジャブジャブと海の中に入って行った。道路に面した海岸ではあるが車の通りもまだあまりない。等浅の海は波も静かで水面は穏やかに揺れている。足元を見ると透き通った水の中には小さな魚がひらひらと泳いでいた。

颯士はしばらくの間水平線の方に向かってたたずんだ。何処までもグリーンに広がる海を今は自分が独り占めしている。

——すげえや…。

ずっと憧れていた沖縄の海と風。想像していた通りの空気。その中に、今自分が立っていることが不思議だった。

「おはよう、颯士！」

後ろから麻希の声が聞こえた。

——颯士？

母親以外の女性に、`颯士、などと親しげに名前を呼ばれたことなどなかった颯士は、その聞きなれない響きに少し戸惑いながら振り向いた。麻希が波打ち際に立っていた。

「お、おはようございます…」

そう言うってから颯士は頭を海水につけてガーッとかきむしやった。

「水浴びしてるのー？」

麻希は叫んだ。

「……」

見れば分かるだろう、と思った時、裸同然の自分の格好に気がついた颯土は少しうろたえた。
「うちも行こうかな！」

と、麻希が言うので颯土は慌てて波打ち際まで戻り、
「ど、どうぞ。俺は行きますから」

と、しどろもどろに言った。
「別にあがらんでもええやんか」
「いえ、俺はもう…」

颯土はそそくさとその場を立ち去ろうとする。
「でも、まだ水が冷たいからやっぱりやめておこう。お師匠さんはまだ寝てはるの？」
麻希がかまわず話し掛けてくるので颯土は行くに行けずに、
「まだ大イビキ…」

と、答えた。
「昨夜は随分遅くまで騒いでたもんなあ。あんたのお師匠さんておもしろい人やわ」
別に俺の師匠じゃない、と颯土は思った。
「うち、これから石垣島に行くの。颯土らも行く予定なんやて？」

石垣島？そんな話は初耳だった。
「石垣島にはね、うちの大切な秘密の海岸があるの」
「秘密の海岸？」

「うん。そしたらな、あのお師匠さん、僕達も秘密の海岸を探してるんですよ～、なんて言うて。かなり酔っ払ってたけどね。これはうちについて来る気やな、って思たから、うちはのろいチャリンコなんか待ってられへんから勝手に探しや、って言うたのよ。そしたらな…、」

麻希はそこで言葉を止めた。
「そしたら…？」

「急ぐのも哲学ではあるがのんびりいくのもこれまた哲学。待つ時、そこに急ぐ間に見落としたものが見えるものなり～、なんて真面目な顔をして言うのよ、あの人」

麻希は芝居がかった口調で言い、くすくすと思い出し笑いをする。どうやら昨夜の純平がそのように喋ったらしい。

「はあ…」
「あの人チャリンコを使てるのもそうなんやって。自動車やバイクじゃスピードがありすぎて大事なものを見落としてしまうて言ってたわ…」

麻希は急に寂しそうな顔をした。
「ほんまにそうやと思う。時にはゆっくりと行くのもええことかもしれんね。あのオッサン、ええかげんに見えて、ほんまはすごく真面目な人なんやね」

そうだろうか？ただ、麻希を口説くための方便だろう、と颯土は内心想っていた。

「まあ、うちも別に急ぐ旅でもないし、あんたらと少し一緒に行かせてもらうことにしたの。ええやろ？」

「それは別に…」

麻希の旅の目的は何なのだろう、と颯土は一瞬思った。その時、

「は～っくしょん！」

思わず大きくしゃみが飛び出した。

「あれ、颯土。濡れたままやないか！はよ着替えんと風邪ひくよ！何してるんよ！」

——何してるんよ、って…、話し掛けてきてマシンガントークをかましたのはそっちだろ…。

まるで、どこかの誰かさんみたいな性格してるな、と颯土は思った。

「ほな、また後でね！」

麻希は自分のテントの中に戻って行った。颯土も直ぐにテントに戻った。タオルで濡れた体と髪をぬぐい、ザックの中をのぞいて着替えを探す。ビニール袋に入ったままの目がチカチカするトランク스가目に飛び込んで来た。

——どこかの誰かさん、か…。

颯土はビニールを破いてそれを手に取った。何故だか妙にくすぐったかった。

ようやく純平が起き出した頃は、隣の麻希のテントはすっかりとたたまれていた。バイクをフェリーに積んで石垣島を目指すつもりでいた麻希だったが、予定を変更し空港にバイクを停めて純平たちと飛行機で石垣島に渡ることにしたのだ。島ではレンタサイクルを借りる。

「先に行って、空港のロビーでのんびり待ってるね」

バイクの麻希は一足先に出発した。

「純平さん、本当に石垣島に行くんですか？」

寝ぼけた顔で歯を磨いている純平に向かって颯土は言った。石垣島に行く予定など最初からなく、今日からはさらに南を目指して自転車を走らせることになっていたはずだ。

「気ままな撮影旅行だからね、イレギュラーはつきものさ。石垣島には行ったことないし、それに僕ね、麻希ちゃんに惚れちゃったみたい」

「ああ？！」

そんな勝手な私情で予定をコロコロ変更されたのではかなわない。

「もちろん、被写体としての彼女に惚れた、って意味だよ。群竹くんも撮ってみたいって思ったでしょ？彼女のこと」

「ああ…、」

颯土は昨日、無意識に麻希にレンズを向けたことを思い出した。

「カメラマンとしての血が騒いだ、ってことさ」

「そんなんじゃないです！だいいち、俺はカメラマンになろうなんてまだ決めてないし！」

颯土はムキになって反論する。

「まあいいさ。とにかく石垣島には行ってみようよ。こことは違った雰囲気があると思うしね！」

純平はモソモソと身支度をはじめるのだった。

石垣空港を降りると思っていたよりも拓けた街並みがあった。メインストリートはお洒落な店が立ち並んでいるし、流行のファッションに身を包んだ若者たちが多く行き交っている。石畳の道路には潮風でややさびついた車が往来し街らしいざわめきがあった。だが、風は独特の香りを放ち乾いている。三人はレンタサイクルショップを目指して歩いていた。その最中、純平は街や人にカメラを向けて次々とシャッターをきっていた。

「この街の空気は僕の琴線を刺激してくれるなあ」

人や空間の表情を撮影することをライフワークとしている純平にとってはそうかもしれないと、街の風景を見て颯土はその気持ちが少しだけ分かるような気がした。

「麻希ちゃん、秘密の海岸って遠いの？」

「バイクで一時間ぐらい行ったところにあるんよ。自転車だと半日はかかってしまうな」

「そっか…。じゃあ後から追っても追いつけないなあ」

純平は大仰に考え込んだ。

「何や？どないした？」

「いや、僕、しばらくこの街を歩いてみたいんだ。この街に住む人の話も聞きたいし観光客の表情も撮ってみたい」

「そうか…。ほな、うちひとりで行ってくるわ」

最初からそのつもりやったからええよ、と麻希。そんな麻希をぼんやり見つめながら、――秘密の海岸に何があるんだろう。

と、颯土は頭の片隅で思った。そもそも『秘密の海岸』というのは何だろう。どういう意味で『秘密』なのだろうか。そして、麻希がひとりでその場所に行く理由は何なのだろうか。

「悪いね麻希ちゃん。これでも僕はカメラマンだから騒ぎ出した血を抑えられなくてさあ」

純平の言い方は大げさだがそれは事実なのだろう、と颯土は思った。今朝、純平にカメラマンとしての血が騒いだと言われたときは何となく反論してしまったが、今この風景を感じて何となくが分かった。初めてシャッターを切るのに夢中になった文化祭のあの時が、まさにそれだったのだろう――。

「そうだ！颯土貸して！」

唐突に、麻希は颯土の背中をポンとたたいた。

「え？！」

颯土はギョツとした。

「ひとりで行ってもええんやけど颯土とふたりやったら心強いし。そこ、家も人も全然あらへんところやから夜はちょっと不安だったりするんよ」

今から半日かけて行くとなると到着する頃には日が落ちている。今夜はそこにテントを張ることになるだろう。

「麻希さんとふたり…、つきり？！」

颯土は考えてもみなかった展開にうろたえた。

「あんた、ヒツジの皮を被ったオオカミやあらへんやろ？」

「ち、違いますよ！」

「じゃあ何も問題ないやん。ええやろ？純平」

「う～ん…」

純平はしばらく考えてから颯土に手招きをした。そして、

「麻希ちゃんをモノにしてくるか？」

と、その耳元でささやいた。

「純平さん?!」

颯土は仰天して思わず叫んでいた。

——何言ってんだ、このエロおやじはっ！

「な、何を勘違いをしているのさ。さっきも言ったけど被写体としての彼女だよ」

純平は今にも自分を殴りそうな雰囲気 of 颯土を慌ててけん制する。

「被写体…？」

「そう。これは僕のカンだけど、彼女はキミにとってのキッカケになってくれると思うんだ」

「俺のキッカケ…？」

なんのキッカケなのか颯土には意味がわからない。

「まあ、キミにはわからないよ。でも多くの人間を見てきた僕にはわかっている」

何なんだ、それ、と颯土は思った。とにかく行っておいで、と純平は自分が持っていたテントを颯土に手渡した。

「ちょっと…！」

麻希とふたりでキャンプなんて冗談じゃない！

「話をついたんか？」

麻希は手帳に何かを書き込みながらふたりに問う。

「ああ、ついたよ。群竹くんを貸しますから煮るなり焼くなりご自由にどうぞ」

「純平さん！」

「別に煮たり焼いたりせえへんって！ほな行こうか、颯土」

麻希は手帳を一枚破って海岸の場所を記したメモを純平に渡した。

「用事が済んだらあんたも来たらええわ。うちら待ってるから」

「えっ?!」

——そんなのいつになるかわからないじゃないか！それまで麻希さんとふたりなのか？！

そんな颯土の表情を、純平は楽しそうに眺めながら、

「なるべく早く追いかけるようにするから！」

じゃあ！と手を上げて街の中へと歩き出していった。

◇

純平と別れ、颯土と麻希はレンタサイクルを借りてそれぞれの荷物をくくりつけた。途中にはもう街がない、ということで当面の食料も買い込んだ。

「あとは花を買うだけや」

花なんか何するんだ？と颯土は思ったが麻希は花屋を見つけると、颯土をそこに待たせたままスタスタと店の中に入っていき、しばらくして白い薔薇の大きな花束を持って出て来た。

「やっと出発や！」

麻希を先頭にして、二台の自転車はゆっくりと走り出した。

街は突然途切れ、目の前には何処までも続く一本道と海だけの景色が広がった。すれ違う車も人もなければ後ろから追ってくるものもない。緩やかな勾配を繰り返す道は自分だけのもののようそこに続いていた。海から来る潮風はサラサラと乾いていて照りつける太陽の暑さも全く気にならない。まるで別世界のようだ、と颯土は思った。ここではわずらわしい感情や人との関わりなど全く関係ない。ただ乾いた風と太陽と海があるだけだ。

「颯土、どないかした？」

呆然とペダルをこぐ颯土に横に並んで走っていた麻希が訊いた。

「べつに…」

「前に来た時はバイクやったの。だからこの道もサーッと通ってしまったんや。あっという間にね。けど、こうして自転車をこいでいると長い道やったんやなっということが改めてわかったわ。あそこにもここにも可愛らしいお花が咲いてるやん？バイクじゃそなん見えへんもん」

そう言う麻希の横顔は嬉しそうに微笑んでいた。

——あ、また…。

昨日感じたものと同じ、何かがどこかに触れて懐かしい感じがした。

「うち、バイクは好きや。スピードを出すのも好きやしあちこちツーリングするのも好き。けど、何や今まで損してたかな、って思ったりしてるん。時間をかけてゆっくり行くのもええよね。あんたのお師匠さん、えらい人やわ」

そう言われても、颯土には純平をえらい人とは思えない。麻耶の兄貴だということもあるが、いつも純平が言うことは颯土にとっては理解不能なことばかりだからだ。今回のこれだって、麻希が自分にとってのキッカケになる、なんて言っていたがさっぱり意味がわからない。

「でも、あんまりのんびりしてたら暗くなってしまうから、少しだけピッチをあげようか！」

麻希はスッと颯土の前に出た。二台の自転車は、果てしなく続いているように思える一本道を競い合うように交互に前に出ながら走った。

そして、辺りが薄暗くなりかけた頃、麻希と颯土はこんもりと盛り上がった林の前に到着した。海沿いの一本道がT字路で終着し、それを左に折れてしばらく走った頃から海は姿を消して代わりに低い山並みが現れていた。

「ここは？」

麻希は林の前に自転車を止めていた。

「秘密の海岸や」

「ここが？」

颯土にはどう見ても林にしか見えない。見回してみても海岸らしいものは見当たらない。

「不思議やろ？でも、すぐにわかってしもたら秘密やなくなるやん」

麻希は林の中に足を踏み入れた。颯土も後をついていく。そして薄暗い木々の間を数十メートルほど進むと、突然目の前が拓けた。

「これは...？これが秘密の海岸...」

「そう。ここが秘密の海岸や」

真っ白な砂浜と透き通ったグリーンの海がそこにあった。誰もいない。足跡もない。まるでいにしえからずっと変わらず穢れない時を流しているように、静かな波が寄せては返すだけの空間――。

「こんな林の奥やろ？この海岸はきっと地元の人しか知らへん場所なんや。観光客には秘密の」

「だから、秘密の海岸か...」

「そう」

麻希はゆっくりと砂浜に足跡を刻み始めた。

「四年前、うちはここにツーリングに来たんや。偶然ここを見つけてそしてな...」

麻希は手に持っていた薔薇の花束をじっと見つめた。

「サトル...、うちまた来たよ...」

麻希はそうつぶやくと波打ち際に歩いて行く。

――サトル...？

颯土は後を追わずに麻希の背中を見守った。麻希は白い薔薇の花束を片手に下げたまま、随分長い間海を見つめ波の音を聴きながらそこにたたずんでいた。太陽はすっかり沈み辺りは蒼の時間を迎えている。海から吹く穏やかな風が麻希の長い髪と白いTシャツをなびかせていた。

颯土は思わずカメラを構えていた。次の瞬間、麻希は花束を海に向かって放り投げた。レンズを通して見えるその動作がまるでコマ送りの映像のように断片的に見えたのは、颯土が夢中でシャッターをきっていたからだ。気がつくと、麻希は両手を膝についた姿勢でフーッと息を吐いていた。

「撮ったの？」

そのままの姿勢で顔を向けた麻希が微笑んだ。

「あ、すみません...。勝手に...」

「別に謝らんかてええよ。あんた、カメラマンの卵やし」

麻希が投げた花束が、戻っては波にさらわれることを繰り返しながらふわふわと沖の方に運ばれていく。蒼い水面に真っ白な花が見え隠れしながら、やがてそれは見えなくなった。

「さあ、真っ暗にならんうちにテントを張ろう。夜になるとここはホンマに真っ暗になってしまうからね」

麻希に言われて颯土は辺りを見回した。確かに街灯もなければ家もまったく建ってない。二人は自転車からそれぞれのテントを降ろすと隣り合わせにテントを張った。

しばらくすると、海岸は麻希が言ったとおりの闇に包まれた。懐中電灯を灯さなければ腕時計の針も見えない。波の音以外は何も聞こえない。下界とはまったく隔離された空間に颯土と麻希はいた。

「何時？」

テントの前に座ってパンをかじっていた颯土は灯した明かりに時計を近づけ、そろそろ九時です、と答えた。

「今日は慣れない自転車をこぎすぎて疲れたわ。うちはもう休むね」

「あ、はい…。おやすみなさい」

颯土はペコリと頭を下げる。

「颯土も早寝しい。あんまり遅くまで起きてるとオオカミが出るで」

「えっ？！オオカミ？！」

説得力のある場所だけに、颯土は思わず飛び上がっていた。

「あはは！そんなわけあらへんやんかあ。もう、子どもやねえ」

麻希はケラケラ笑いながら自分のテントの中に入って行った。

――なんだ…。冗談か…。

でも――。颯土は後ろの真っ暗な林を振り返って息を飲み込んだ。星の瞬きと月の明かりしかない空間。人の気配をまったく感じない空間。目を閉じなくても何も見えない空間。ただ、静かな波の音と、微かな虫の声があるだけだ。ひとりではあまりにも寂しい。颯土はパンの欠片を固唾とともに呑み込み、自分もそそくさとテントにもぐり込んだ。

颯士、颯士、と遠くで誰かが自分を呼んでいる。

——……んだよ。目覚まし、まだ一個も鳴ってねえのに起こすんじゃないよ…。

自分を呼ぶ声に朦朧と目を開けた颯士は、そこにまたもや見慣れぬ風景を見て混乱した。

——えっと…、ここはどこだ…？どこだっけ…？

「颯士！まだ寝てるのー？」

——あの声はおふくろじゃないよな…。えっと…。

颯士は跳ね起きた。

「秘密の海岸だ…」

五ヶ月間も続けた新聞配達をやらなくなったからか最近朝の調子が悪い。

「颯士い！いくらなんでもそろそろ起きたらー！」

麻希がテントの外で叫んでいる。時計を見ると、

「十一時半?!」

颯士は慌ててテントを飛び出した。

「お、おはようございます…って時間じゃないけど…」

「もう昼や。うち、たいくつしてひと泳ぎしてきたわ」

麻希は水着姿にバスタオルを巻いている。

「今日は一日ゆっくりとここで遊ぼう！」

「遊ぶって…、？」

「シュノーケルしたり魚とったりしようよ」

「はあ…」

「じゃあ、はよう颯士も着替えてきいや！うち、海で待ってるわ！」

麻希はバスタオルを放り投げてバタバタと走って行く。

——やれやれ…。

颯士が水着に着替えて再びテントの外に出ると、海の中から麻希が大きく手招きをした。

「はよう、きいや！」

水しぶきが光に反射してキラキラ光っているその中ではしゃぐ麻希は、

——浅倉…ヒカル……？

颯士は目をこすった。

「何だ、俺…？」

颯士は自分がわからなくなり、呆然と立ち尽くして麻希を見つめた。

「もう、何してるんや！颯士！」

麻希はふてくされて叫ぶ。颯士はおそろおそろカメラを手にした。

——どうして麻希さんが浅倉に見えるんだ…？

その答えを無意識にレンズに求めたのかもしれない。颯士は麻希の姿にヒカルを重ねて何枚も何枚もシャッターをきっていた。

「そんなにうちの写真撮ってどないするんや？」

麻希が海からあがって呆れたように言った。

「うち、そんなに美人か？」

「いえ、そういうわけじゃ...、」

と、言いかけた時、颯土は麻希に思いきり背中をたたかれた。

「そういう時は、はいそうですって言うもんや！それがレディーの扱いってもんや。よう覚えておき！」

「はい...」

颯土はたたかれた背中をさすり、暴力的なところもそっくりだな...と小声で呟いた。そんな颯土を横目で見つめ、麻希はクスッと笑った。

「あんた、好きな子おる？」

「いません」

即答する颯土に麻希は目を丸くした。

「ずいぶんあっさりしてるんやね」

颯土はフンと顔を背けた。麻希は砂浜にべたりと座ると、横で棒立ちしている颯土の手首を引っ張って隣に座らせた。

「あんた、何でカメラマンになりたいの？」

「別にカメラマンになりたいなんて思っていないです...」

「うそやあ！」

麻希はまた目を丸くした。

「ほな、なんで純平と一緒にいるんや？」

「それは...、」

颯土は偶然写した写真が『ピクチャーライフ』大賞をとってしまったいきさつからを、ただどしく麻希に話して聞かせた。その写真を見てみたいと、麻希が言うので、颯土はバッグの中から『ピクチャーライフ』を出してきて見せた。

「...なんや、せつない写真やなあ...」

雑誌に見入っていた麻希がポツリと言った。

「せつない...？」

「うん、こっちの男の子の方。この子のせつない想いがよう伝わってくるわ...。けど、すごく綺麗な写真やね。なんや不思議な気持ちになるわ...」

以前、純平もそんなことを言っていた。だが、颯土の知る響のキャラクターは、神々しいほどの圧倒感はあるけど、せつない、という言葉からはかなりかけ離れている。

「こっちの女の子の方は、うちに似ているところあらへん？」

麻希に言われて颯土はギクリとした。たった今、麻希とヒカルが完全に重なっていたからだ。

「こーゆー顔、自分でもしてるなーって思うときがあるから」

笑顔のヒカルを指差し笑って、麻希は『ピクチャーライフ』を颯土に返した。

「あんたと関わってみたいと思った純平の気持ちがうちには分かるような気がするよ。あんた、

ええカメラマンになると思うわ」

「だから俺は別に…」

麻希はくすっと笑った。

「颯土、あんたは乾いた風やね」

「乾いた風？」

「そう。一生懸命に乾いた風になろうとしている。うちがずっと前に好きだった男もそんなとこあってんよ。自分の本当の心を奥の方に閉じ込めて鍵をかけて、目に見えるところでは爽やかなふりをして。けど、鍵のかかったところにある心は土砂降りの雨が降ってるのや。それを人に知られるのがいややから、そいつはわざと何でもない顔をしてごまかしてた。あんたもそうや」

「…ごまかしてる？」

「何かを恐れてごまかしてる。うちにはそう感じる」

言われてしまった、と颯土は思った。

——俺が恐れるもの…、

それは、大切なものを失ったときの絶望、それに縛られ身動きが取れなくなる自分自身。

「もっと素直になったらええのに。好きなものは好き。大事なものは大事にするんや」

——大事な…もの…。

「うちが好きだった大事な人…、サトルはね…」

麻希は遠い海を見つめた。

「サトルって…」

麻希が昨日、この海岸に来た時につぶやいていた名前だ。

「死んでしもたんや、四年前に。バイクの事故でね」

——死んだ…？！

颯土は麻希の横顔をじっと見つめた。膝をかかえ、遠い海を見つめていた麻希がゆっくりと颯土に顔を向け寂しげに微笑んだ。

「サトルとは沖縄の、こないだ颯土たちとはじめて会ったあの海岸で出会ったんや。二人とも高校三年やった。うちは京都から一人でツーリングに来ていて、サトルは茅ヶ崎からやっぱり一人で来ていたんや。その後この石垣島で偶然再会してここの海岸で一緒にキャンプしたの…」

だから昨日、麻希は海に花束を投げ込んだのか、と颯土は思った。

「ここでうち、サトルとファーストキスをしたんやで」

ええやろ？と麻希は自慢するが、颯土にはコメントのしようがない。そんなことよりも——。

「その人がさっき言ってたどしゃぶりの…？」

麻希はうん、と頷いた。

「ここで出会ったサトルをうちは好きになった。サトルもうちのこと好きだって言うてくれた。けど、サトルの本当の心は別の女の子にあったんや。ずーっとね。アイツはその子への想いを振り切るためにツーリングに来たんやね。その女の子とは色んなわけがあってどうしても結ばれへん。アイツはそう思い込んでたけどホンマはそんな複雑なものやなかったの。土砂降りの心にカガけてカラッ風になったふりをしていただけ。そういう自分に酔っていたとも言えるのかな

。子どもやったしね」

「子ども…」

颯土のどこかが痛んだ。

「そや？だって高校三年やったし、狭い世界しか見ていないくせにそれが全てやったんやもの。サトルもそしてうちもや」

でも、と麻希は遠くを見つめた。

「サトルがうちを好きやって言うた時、うち分かってしもたんや。コイツの気持ちはうちに向いてへん。自分では気づいてないけどサトルの心は最初から同じ女の子にしかあらへんって。だからうちは友達のままいよう、って言うた。その後あいつはすぐに逝ってしまったの…」

土砂降りの心にカギをかけてカラッ風のふりをしていた、と言葉で言えば格好いいかもしれないが、実際は麻希の心を裏切り続けていた最低の人間だったのではないか。それはまるであかねの気持ちを利用して自分と同じだ、と颯土は思った。

「…麻希さんはそいつのこと恨んでないんですか？」

ためらうようにして颯土は訊いた。

「自分を裏切っていた相手を許したんですか？」

麻希は颯土の目をじっと見つめて微笑んだ。

「なんや、颯土、真剣やな？」

颯土は思わずうつむく。

「恨んでなんかないよ。サトルはうちを裏切っていたわけやないもん。うちはね、サトルという時間がうれしかったの。サトルのことがホンマに好きやったからサトルと一緒にいる時間は幸せやったよ」

「そいつの心が他にあっても…？」

「うん。サトルと一緒にツーリングしたこと、ここでキャンプしたこと、サトルと共有した時間と空間はうちの大事な宝物や」

そんなに好きだったサトルがいなくなってしまった時、麻希はどうしたのだろう。大切なものを永遠に失ってしまったという絶望をどうして乗り越えられたのか。人をそれほどまでに好きになり求めてしまうと、それが壊れたり失ったときの傷は求めた心の大きさに比例するのではないか――。

――俺は……、亮…。

少年のころ、自分にとってはかけがえのないものに裏切られそれを失った。その心の傷がトラウマになり、それからは他人を遠ざけて生きて来た。二度とあの時と同じ絶望を味わいたくないから。人と深く関わるということは絶望ももれなくついてくる、そう思っていたから。

だが、ヒカルというおせっかいに心の扉をたたかれ、あかねという優しい手がそれを開いてくれた。なのに、そんなあかねの心を踏みにじり傷つけて、今また自分は手にしようとしていたものを失いかけている…。

――私ね、群竹くんが好きなの……。

――群竹くんは、どうして、わたしと一緒にいてくれるの？

——もう...私のこと考えなくていいよ。

あかねが流した涙のイメージが目の前で揺れる海の輝きに重なった。つぶれそうなほどに胸が苦しい。

あかねを傷つけて泣かしてしまったのは、自分。絶望を与えてしまったのも、自分——。

——水沢のことが...好きだった。

好きだったから求められなかったのだ。失うことが怖くて、いなくなってしまうのを恐れて。

自分はいったい今、何をすればいいのだろうか。どうしたらいいのだろうか。自分の心の中の土砂降りは何なのだろうか。

颯土の目から一粒の涙がこぼれ落ちた。無意識にこぼれてしまったそれを、颯土はあわててめぐい払っていた。

——俺が涙を...?!

そんな颯土を見て、麻希は肩をトンとつついた。

「あんたが何に苦しんでるのかうちにはわからへんけど、うちはあんたよりは少しだけ人生長く生きてるから人と人のことなら少しだけ言うてやれるかもしれへんよ」

「え...?」

颯土は顔を上げて麻希を見つめた。

「サトルが死んだ時、うちはもちろん悲しかった。ずっと泣いてたよ。けど、そんなつらい時でもうちはやっぱりサトルと過ごしたわずかな時間の思い出を大切にしていたの。つらいからサトルのことを忘れようとか忘れたいとは思わなかった。サトルが他の誰かを想っていたとわかっててもや。だから別れたことを悲しむよりも一緒にいたこと、その時間があつたことをこれからも大切にしていこうと決めたんよ...」

「一緒にいたこと...」

颯土はポツリとつぶやいた。

「そう。今でもサトルはうちの中にいる。サトルのことを思い出すと楽しい。これからもずっとそうやと思うわ」

だからはじめに会った時、麻希は一人じゃないって言ったのか、と颯土は思った。だが....、

「サトルってやつはもういないんだろ...? いないやつへの想いにずっと縛られて行くのか?」

それこそ颯土が恐れる地獄だ。もうどうにもならないものに心を縛られてしまう。哀しみ、絶望——。

「そんなことあらへん。サトルへの想いはうちの大切な思い出や。一生忘れへんけど縛られはせえへんよ。ただ...、」

麻希はまた遠くの海を見つめた。颯土は黙って麻希の次の言葉を待った。

「——ただね、うちは自分の気持ちをサトルにはひとことも伝えられなかった。それが心残り...。だからね、サトルに会いに来たの。うちの思い出はここにあるから、ここにいるサトルに会いにきたの」

「麻希さん...」

「うちね、来月結婚するのよ」

麻希は少し恥ずかしそうに言った。

「えっ 結婚?！」

「そんなにおどろかんかってもええやん」

「だって...サトルに会いに来たって...」

「ふふ。四年ぶりにここに来て、うちやっぱり思ったよ。サトルのこと好きになってよかったって。サトルに出会えて本当によかったって。人はね、出会いもあれば別れもくる。生きている以上、いつかは必ず別れる時は来るんよ。だからこそ一緒にいられる時間が大切なんやない? わずかかも知れへんけどその時間を大事にせな。人間ってそうやって嬉しい事も辛い事も受け入れながら生きていくものやと思うよ...」

麻希はニッコリと笑った。その笑顔がまたヒカルと重なって見えた時、颯土は分かった。響といるヒカルが美しく輝いて見えるのは、ヒカルがその時間を心から大切にしているからだ。それは響の方も同じ。同じ想いを通い合わせるその心が伝わってくるから、自分はそんな二人の姿に感動を覚えるのだ。ずっと前に失くしてしまった心、それをヒカルが放つ輝きによって呼び戻されようとする一瞬にきっと自分は心が動く――。ヒカルの持つ真っすぐな素直な心に自分は気がつかないうちに強い憧れを抱いていたのだろう。麻希とヒカルが重なって見えたのは麻希の中にもヒカルと同じものがあったからなのか。

「――今、俺が大事にしなくちゃならないものは...、」

颯土はつぶやいた。

「あんたにはもう分かったみたいやな。顔がそう言うてる」

颯土は照れたようにうなづいた。

「じゃ、お師匠さんが来るまでいっぱい遊ぼう！うちは颯土と出会ったこの時間も大切にしたいんや！」

麻希は颯土の手を引っ張って海に入っていくのだった。

◇

翌日純平が到着し一日を三人で過ごした後、石垣島から那覇に戻って来た三人は空港で別れることになった。純平と颯土は当初の予定通りレンタサイクルで本島を南下することにし、麻希は京都に帰るフェリーに乗るため港に向かう。

「楽しかったよ、颯土」

麻希は颯土に右手を差し出した。颯土はためらいなくその手を握った。

「俺も、いろいろありがとう...」

「あんた、ホンマにええカメラマンになれるよ。がんばってや」

「――はい」

純平が横でニンマリする。

「うちな、茅ヶ崎の人と結婚するの。海岸の国道沿いにある『海風』ゆう喫茶店を旦那さんと二人でやるんや。そしたらいつでも遊びに来てや」

「茅ヶ崎の人って...」

「サトルの親友だった人なんや。うちと彼、サトルに対して同じ想いを大切にしているの」

ふふ、と麻希は笑った。

「...幸せになってください」

「ありがとう。颯土がそない言うてくれてうち、すごくうれしいわ！」

麻希はバイクのエンジンをかけ、

「ほななっ！」

左手を上げながら街道へとバイクを走らせて行った。

「純平さん、麻希さんが俺のキッカケになるって言いましたよね？」

麻希の後ろ姿を見送りながら颯土はポツリと言った。

「なっただろ？」

「どうしてわかっていたんですか？」

「...君の写真さ」

「...俺の写真？」

「君が無意識に求めているものが君の写真の中でしゃべっていた。麻希ちゃんに会った時、僕にはその言葉が分かったような気がしたんだ」

「言葉...？」

「群竹くん、今、麻希ちゃんに対してどんなふうに思っている？」

「...今...」

――色々な意味で、綺麗な人...だった。

「君が今思ったそれが答えかもしれないね！」

無言で想いをはせている颯土に純平は言った。

「さあ、僕たちも旅の続きを再開しよう。またいろいろな街でいろいろな出会いが待っている！」

純平はスタスタと歩き始め、颯土も後を追いかけた。真夏の陽射しと風がふたりの背中を押ししていた。

麻希と別れてからは本島を南下しながらの撮影旅行だったが、それも今日で折り返し。明日からはまた那覇、さらにその北を目指しながら自転車を走らせることになる。

純平が好んで行くところと颯士が見たいと思う風景とはかなりのズレがあった。沖縄の海、空、太陽に憧れそんな風景をたくさん見たいと思っている颯士だが、純平は町や村で生活する人々を取材したり、そこで暮らす子どもたちを撮影したり、時には一緒になって夢中で遊んだり...、あまり綺麗とは思えないものの撮影ばかりに夢中になっている。そのセンスがいまひとつ理解できない颯士にとっては、魅力のない場所ばかりに連れまわされている感じが拭えずにやや不満もある。石垣島の秘密の海岸のような場所を探してみたいとも思ったし、また海に太陽が沈む風景を見たいとも思ったし、そういう写真を撮ってみたいとも思っていた。

「群竹くん、今日はちょっと贅沢をして屋根の下に泊まろうか？」

とある村で純平が思いついたように言った。もうキャンプにも慣れたし泊まる場所はどうでもいいと思っていた颯士だ。ただ、そろそろまともな食事がしたいという希望はあったので、

「そうしましょう...」

と、返事をする、

「今、この村に知り合いがいるんだ」

と、純平は言う。

「今...って？」

「ま、ちょっと変わってるヤツだけど一晩ぐらいは泊めてくれるだろう」

純平は自転車を走らせた。その後ろを追いかける颯士は、

——あんまり変ってる人には会いたくないなあ...。

と、心の中で呟いた。

「...ここ？」

よく家の庭先にあるような、プレハブの物置小屋を少し大きくしてドアと窓をつけたようなその家の前で自転車を止めた純平に、颯士は半信半疑で訊いた。

「そう、ここ」

——テントの方がでかくないか...？

ぐるっと見回しながら颯士は思った。

「幸一くん、いるかい？」

純平はまるで隣ん家の幼馴染に声をかけるようにして、開け放たれたドアから中を覗き込んだ。

「いるよ」

狭い小屋だ。中に人がいるとしたらすぐそこにいる、というわけで返事は間髪を入れずに返って来た。

「どうしたんだい？純ちゃん？」

純平の後ろからチラッと中を覗くと、頭にタオルを巻いて白いランニングシャツ一枚姿の痩せた男が、こちらを見もせず手元でやっている作業を続けながら応えていた。そして、
「お客さんも一緒なの？入れば？」

男はまたもやこちらを見もせず言う。

「純平さん...？」

「ま、邪魔しないように入らせてもらおうよ」

純平が先に小屋の中に入った。

男は純平の高校時代の友人で中山幸一という。美術工芸家でアトリエは都内にあるが、夏の間はこの村の`別荘、にこもって貝殻や珊瑚細工をやっている、ということを経一が作業をしている間に純平が話してくれた。

――別荘ね...

颯土は小屋の中を見回した。雑然としたフロアは足の踏み場もないくらいに工具や細かい粉が散乱している。周囲に設置されている棚には作品や材料と思えるものが並べられていた。

「もうすぐ終わるからその辺に適当に座ってて。あ、でもその粉はあとで集めて使うから踏まないでね」

幸一は背中を丸めて作業を続けながら言う。

――踏まないでね、って...。じゃあ座るとこないじゃん...

粉はたぶん材料の貝殻や珊瑚を加工するときに出るものだろう。キラキラ光ったガラスの粉のようだった。純平が早速それらの粉をカメラに収めている。幸一の周囲は粉だらけだったので、颯土は壁際の棚の前に位置を決めて座り込んだ。

「何年ぶりかな？」

作業しながらの幸一が言った。

「うーん...。幸一くんの結婚式以来だから...」

「四年ぶりか」

――四年ぶり？

颯土は少し驚いた。それにしてもふたりはつい昨日も会っていたような口ぶりの再会だったからだ。

「さあ、出来た」

幸一は作業を終え、ずっと下を向いていた顔を初めてこちらに向けた。

「あらら純ちゃん、随分オジンになったんじゃない？」

「お互い様でしょ」

ふたりは顔を見合わせて笑う。四年ぶりに会う友人同士なのに打って響き合っているものを二人の間に感じる。それが不思議でもあるし懐かしいような気もする颯土だった。

幸一が作っていた出来上がったばかりの作品は手のひらに乗るぐらいの小さなものだった。それを親指と人差し指でつまんで、

「これ、どう？」

と、純平に見せて笑った。

「随分愛らしい作品だなあ」

「これは娘っ子へのお土産。そして、こっちは嫁さんに」

先に出来上がっていたものがあつたらしい。颯土は粉を踏まないように気をつけながら身を持ち出してそれらを見ようとした。すると、幸一はふたつを颯土の手のひらに乗せてくれた。

「...いいんですか？」

「うん、いいよ」

薄い桃色の、娘っ子へと言った方はウサギ、嫁さんへの方はハートの形に加工した小さなペンダントトップだった。別に特別な施しがしてあるわけじゃない、たぶん何処にでもあるようなものだ。それでも、そのふたつの作品には言葉に出来ない想いが詰まって膨らんでいるように見えた。そんな作品たちを見て、胸の中にふつつと湧き上がるものが何なのか分からないうちに

、
「こんな道楽と一ちゃんて苦労かけてるからねえ」

と、幸一が言った。

——ああ、そうか...。この人の家族への想いが言葉になってたんだ...

不思議な感動を覚え、颯土は首から提げていたカメラを手にした。その様子を見ていた純平がニヤリと笑い、

「幸一くんの作るものって不思議だろ？」

と颯土の耳元で囁いた。

「...え？」

「言葉、が聞こえるんだよね」

「純ちゃん、またそんなこと言って」

幸一は笑った。

「僕はただ素材のありのままを生かしながら別の形に加工してるだけだよ。とくにここで作るものはみんなそう」

「素材のありのまま？」

颯土は周囲にある作品群たちを眺めた。貝殻や珊瑚で作られたそれほど大きくない作品たちは、花の形だったり人や動物のようだったりな姿を現している。それらはもちろん工芸品ではあるが、不思議とナチュラルに見えた。

「ここでしか出来ないものたちだからね、そういう作品は」

何となくではあるが、幸一の言わんとしていることが颯土には分かった。言葉にはできない想い——。この場所の空気と風景の中でしか感じられないものを手先に込める想い——。どうしてそんなことが分かるのか自分でも不思議だった。

「そして僕は、そうやって生きてる人とその空間を写真に撮りたいわけ」

と、純平がシャッターを切る。

何かが降ってきたような気がした。どこかが刺激された。

ふと並ぶ作品群に目を向けると音符の形に加工された小さなペンダントが仲良くふたつ並んでいた。一瞬で連想したのは文化祭でステージに立っていたヒカルと響だ。

「このペンダントは…」

「ああ、それも素材の形を自然に加工したらそんな作品になったんだよ。偶然にも同じような形のものに仕上がっちゃったけど黒珊瑚もなかなかだろ？」

幸一はそう言いながら散乱している粉を箒で集める。純平はそんな幸一を何枚も写真に撮っていた。

「これ、珊瑚なんですか」

「うん。黒珊瑚は数珠に使われたりするのが一般的な素材だけどこうやって加工するのもなかなかでしょ？」

「これ...買えませんか？ふたつ一緒に…」

ヒカルと響に渡す土産はこれしかない、と思えた。言葉の詰まった作品。ナチュラル。そして、仲良く並んだ八分音符――。

「いいよ。売ってあげるよ」

「ありがとうございます！」

純平はそんな会話をする颯土と幸一を写真に撮って満足気に笑った。

あまり綺麗だとは思えなかったものが少しだけ輝いた。純平のセンスが何となくだがわかったような気がした。

未来に何があるかは分からない。

――でも…。

とにかく、この`師匠、について行こうと颯土は思った。そして、この旅が終わるころにはひとつの答えを出せる自分になっていられるようにと…。

二十日間の沖縄旅行を終え颯士は東京に帰って来た。純平は撮影したフィルムを現像すると言って羽田からまっすぐに会社に向かった。

颯士は駅の電話ボックスにいた。手帳に友人の電話番号など控えていない颯士は、電話帳を開きうろ覚えの住所を探してナンバーを押した。一件目、二件目は間違いだった。そして三件目。

『はい、水沢です』

聞き覚えのあるふんわりとした柔らかな声が受話器の向こうで響いた。

「...、俺、群竹...」

颯士は通話口に口を押し付け、つぶやくように自分の名を告げた。

『...本当...に...？群竹...くん...？』

あかねは信じられないといった口調で、途切れ途切れに訊き返す。

「今、駅にいるんだ」

『駅って...？そこの...？』

「ああ...」

颯士は一呼吸ついた。言おうとしている次の言葉を出すためには、今までの人生で最大の勇気を出さなくてははいけない。

『群竹くん、どうしたの...？』

あかねが心配気な声で言う。その響きはとても優しくかった。沖縄に発つ前日に自分はあるなにもあかねを傷つけたのにもかかわらず...

――俺は...、変わらなければいけない。

沖縄で麻希が言っていたように自分の大事なものに対して素直にならなければいけない。失うことを恐れるばかりの今までの自分は一粒の涙と共に沖縄に捨ててきた。今この時を大切に、あかねとの時間を...大切にしたいのだ。

「――会いたいんだ」

『会いたって...、私...？』

「お前しかいないだろ...？」

受話器の向こうであかねは一瞬沈黙してから、

『す、すぐに行く...！待ってて！』

突然電話を切った。

颯士は電話ボックスから出て、あかねが走ってくるであろう方向をじっと見つめた。こんなにも胸が鳴っている。遠い昔に亮（あいつ）に会いに行くために初めてひとりで電車に乗った時のような、心地よい緊張感。懐かしい心の躍動だった。

だが、あの時は――、

颯士が次の感情を心の奥から引っ張り出して来る前に、通りのコンビニの角をあかねがサンダルばきのまま駆け曲がって来た。転ぶなよ、転ぶなよ、と心配しながら颯士はあかねに向かっ

て走った。

「群竹くん！」

颯土を見つけたあかねは泣きべそをかきながら叫ぶ。

「きゃっ！」

歩道の石畳の段差にサンダルをつっかけたあかねが、前のめりに倒れそうになった。

「あかねっ！」

颯土はダッシュであかねの元に急ぎ、間一髪のところであかねを抱きとめた。

——つかまえた...！俺の大切なもの...！

そのまま颯土はあかねを抱きしめた。

「群竹くん...?!」

「俺、お前が好きだ...」

迷う前に、あかねを抱きしめたまま颯土は言った。

「...うそ...」

あかねは颯土の腕の中で首を振る。

「うそじゃない...！好きだよ...っ！」

道行く人々が颯土の叫び声に振り返りながら通り過ぎて行く。それほどの大声で颯土はあかねに思いを告げた。

「信じられないよ...。だって群竹くんはヒカルちゃんを...」

あかねの瞳から涙がポロポロこぼれおちた。それを指でぬぐいながら颯土は言った。

「あいつは俺には必要な仲間だ。けど、俺のそばにいて欲しいのはお前なんだ。俺、そのことに気がついた...」

出会った時からずっと気になっていたのは、ヒカルじゃなくあかねだった。あのホームルーム合宿の時から、あのときあかねと過ごした時間から自分の心はあかねに向いていた。それなのに素直に求められなくて、あかねの心を傷つけて——。

「今更なんだ、って思うよな...?」

あかねは激しく首を横に振った。

「そんなことない...。そんなことないよ...」

あかねはしゃくりあげるように泣きながら言う。

「もう、泣くなよ...」

——泣き顔は...見たくない。

「群竹くん...」

「俺とつき合ってくれるか...?」

あかねはうん、とうなづいた。何度も何度もうなづいた。颯土はあかねの手を引いてすぐ横の路地に入ると、あかねの背の壁に両手をついてじっとあかねの瞳を見つめた。その瞳がそっと閉じられると同時に、颯土はくちびるをあかねのくちびるに重ねていた。ビルの谷間の狭い空と颯土とあかねの顔が同じあんず色に染まっていた。

三年生の回廊に向かう階段をヒカルはためらいがちに上っていた。新学期になってから十日が過ぎていた。三年生の回廊は中庭を挟んだ反対側の校舎にあるため、部活動も終了している響とは同じ学校にいるにもかかわらず顔を合わせることもない。いつものように頭の上から「よお、ヒカル！」と神出鬼没に声をかけて来る響の声を待っていたヒカルだったが、未だ響はその姿を見せない。

一ヶ月前、日光に行ったきり響とは会っていなかった。ヒカルを家まで送り届けた響は、「元気でな」と、ひとこと言って走り去った。あの時の響の言葉がひどく気になる。元気でな、なんて、もう会えない人に言う言葉のようだ。新学期になって十日も経っているのに同じ学校にいて一度も顔を見ないなんておかしい。今までこんなことはなかった。

ヒカルの手にはひとつのペンダントが握られていた。八分音符の形に加工した黒珊瑚にシルバーのチェーンがついている。ヒカルの首には同じペンダントがさげられていた。ヒカルと響を撮影した写真が『ピクチャーライフ』で大賞を取ってしまったことを気にしている颯士が、沖縄の土産に揃いのペンダントを選んでくれたのだ。だがああいう性格だから自ら響に手渡すのも面倒だということでヒカルが預かっていた。それを渡しに行くという口実で、今ヒカルは三年生の回廊に向かっている。そういった口実でもなければ響に会いに行く理由がない、ということが今、ものすごく悲しい。

三年A組の前を通りかかった時、ちょうど田村が教室から廊下に出て来た。

「田村先輩！」

ヒカルは救われたような気持ちで田村に駆け寄っていた。

「あれヒカル、めずらしいな！どうした？」

「ヒビク先輩に渡すものがあって来たんですけど、何だか一人じゃ行きづらくて…。田村先輩、一緒にヒビク先輩の所に行ってくれませんか？」

さすがのヒカルも独立した三年生の回廊をひとりで歩くのは気が引けてしまう。田村と一緒に心強い、とそう思ったのだが…。

「それがさあ、ヒビクの奴、新学期になってから学校に来てないんだよ」

「え…？」

抱いている不安が膨らんだ。新学期になってから一度も学校に来ていないなんて、響に何があったというのだろう。

「田村先輩…、ヒビク先輩どうしちゃったんですか…？一学期から様子がちょっと変だったので心配なんです」

「実は俺も分からないんだ。八月にヒカルんちで人形劇やっただろ？あの時にヤツが言ってたことなんだけど…、」

――来週から野暮用でしばらく出かけてくる。新学期にはたぶん間に合わないと思う……。

「野暮用…ですか？」

「アイツ、それしか言ってなくてさ。俺もつつこんで訊かなかったんだけど、ここまで音沙汰が

ないと訊いておきやよかったと思って」

ヒカルの不安はますます大きくなった。響が田村に言った来週とは一緒に日光に行った直後だ。それなのに、あの時響はひとこともどこかに行くなんてことは言っていなかった。

今年になってからの響の様子と元気でなの言葉…。響は誰にも、親友の田村にさえも話せない何かを抱え、考えていたのではないだろうか――。

――ヒビク先輩…。

ヒカルの不安はどんどん大きくなり、田村を見上げる目も頼りなく揺れる。

「心配すんな、ヒカル。大丈夫だって。すぐに帰ってくるさ」

田村はそんなヒカルを元気付けるように明るく言った。

「はい…」

「ヒビクが来たらお前のところに行くように言っとくから」

「お願いします…」

これ以上ここにいっても仕方がないので、ヒカルは今来た廊下を戻るしかなかった。足取りも重く階段を下りて行くと、

「ちょっと待って、浅倉ヒカルさん！」

後ろから声をかけられてヒカルは立ち止まった。振り向くと、そこには校内でも美人の先輩で通っている大島雪乃が立っていた。

「大島先輩…？」

雪乃は引退するまでバスケ部の部長をしていた。スラリとした長身だし顔は整った美人なので後輩からのあこがれの的だ。だが、今まで個人的に話したことの無い雪乃が自分をフルネームで呼び止めるなんて、いったい何の用だろうとヒカルは内心驚いていた。

「ちょっといい？」

口調は優しいが、目は鋭くヒカルを見据えている。

「はい…」

「回りくどいのは嫌いなたちなんで率直に言うわね。浅倉さん、風間くんとはつきあっているの？」

思いもかけない質問にヒカルはおもむろに戸惑った。

「あら、質問の仕方が悪かったのかしら？」

「いえ…」

「それじゃ、答えてくれない？」

答えろと言われても、何て答えたらいいのかわからなかった。互いに互いを想う気持ちを言い合ったことなどないし、ただ、今までごく自然に傍にいただけなのだから…。

「あはは。ごめんね。突然何かと思うわよね？私ね、一年の時から風間くんのが好きだったのよ。でも部活も忙しかったし告白するチャンスにも恵まれなくて…」

あっさりと自分の想いを語る雪乃にヒカルはがく然とした。一年生の時の響がどうだったのかは知らないことだが、そういえば去年は雪乃はよく響の傍にいた。何かの用で響の教室を訪ねた時や部活が終わったあとの牛乳屋で、一緒のふたりに遭遇したこともある。そんな時の響には必

ず田村や他の仲間たちも一緒だったが、雪乃の方はずっと響を――。

「去年の終わりごろからあなたの存在が気になり始めたんだけど、時に流されるままに今まできちゃったのよ。でもそろそろ卒業も控えているし、私も自分の想いを叶えたいって思ってるの。けど、もしあなたたちが付き合っているのなら私の入る余地なんかないじゃない？だから確かめたくて」

雪乃は笑顔を携えながら淡々と話す。

「だからはっきりと言ってくれていいのよ。直接風間くんに訊けばいいことなんだけど、彼、新学期になってから学校に来てないじゃない？あっ、もしかしてその理由も知っていたら教えてくれない？」

「ヒビク先輩が学校を休んでいる理由はわかりません。それに私とヒビク先輩はつきあっているわけじゃありません...」

ヒカルはありのままを答えた。

「そう。よかったわ。それじゃ私、彼に告白してもいいかしら？」

ヒカルの胸が痛んだ。駄目だとは言えない。ヒカルが響を好きなのと同じように雪乃も響が好きなのだ。だが、はいどうぞ、とも言えずにヒカルは返事が出来ないでいた。足が自然と震える――。

「あ、ごめんね。浅倉さんにこんなこと聞いても仕方がないわよね？選ぶのは風間くんなんだから。じゃあね！」

サッパリと言い切って雪乃は階段を駆け上がって行ってしまった。選ぶのは風間くん、と言った雪乃の言葉がヒカルの心に重くのしかかった。響が選ぶというのだろうか。自分か、雪乃か、そのどちらかを...。そんなこと考えてもみなかった。もしも響が雪乃を選んだら...？雪乃じゃないとしても、響の心が自分じゃない他の誰かにあったとしたら...？

「ヒビク先輩、どこに行っちゃったの...？」

ヒカルは思わず声に出してつぶやいていた。

――ヒビク先輩に会いたい...。今すぐに会いたいよ...！

だが、響はそれからさらに一週間経っても姿を見せなかった。田村は相変わらず何も知らないようだし、響の担任に訊いても休んでいる理由を教えてくれない。ヒカルの不安は頂点に達していた。もう、このまま不安な気持ちを抱えたままではいられない。これは直接響の家に行って確かめるしかない――。ヒカルはそう決心し、放課後、響の家に向かったのだ。

◇

電車に乗り、迷いながらも何とか住所を捜し当てて立ち止まった場所は小さな賃貸マンションの前だった。はじめて来る響の家は大通りからは離れた住宅街の一角にあった。響はこのマンションで母親と二人で暮らしている。

ガラスの扉を押して中に入ったエントランスにはポストが並んでいる。その三階の端の部屋に小さく風間というネームプレートが貼り付けてあった。ヒカルが目の前の階段を上ろうとした時だった。上から下りて来る靴音が聞こえ、ヒカルは足を止めた。下りて来たのは響だった。

――よかった！帰ってきていた！

響は下で見上げているヒカルには気づいていないようで、やや早足で階段を下りてくる。

「ヒビクせ...！」

響に駆け寄ろうとしてヒカルは思わず立ち止まっていた。響の後ろから追いかけるように雪乃が下りて来たからだ。

「待ってよ、風間くん！」

雪乃は響に追いついてその腕に自分の腕を絡ませた。

――.....ヒビク先輩っ！

ヒカルは頭のとっぺんからつま先までの自分の感覚を失い、ただ茫然となった。今、ほんの少しの間、何も考えることが出来ずにその場に立ち尽くす足だけがガクガクと震えている。

「ヒカル...?!」

響は階段を一番下まで下りきった時、目の前に茫然と立つヒカルに気づいて驚愕した。ヒカルは何も言わず、色を失った顔で響を見つめていた。

「あっ、浅倉さん。この間はいきなりごめんね。でも、浅倉さんのおかげでほら？」

雪乃は響の腕に絡ませた自分の腕を人差し指で差した。響とはつきあっていないとヒカルが答えたことが、一年生の時から響を想っていた雪乃が想いを告げるゴーサインになったから「浅倉さんのおかげで、ということになるのだろう。

――でも、そんなことは言って欲しくなかった。私のおかげなんてそんなのヒドイ...

ヒカルは唇をかみ締めた。

「どうした、ヒカル？」

響は少し上ずった声で、それでもいつもの口調で言った。ヒカルはかみ締めた唇の力を緩め、極力笑顔を作りながら、

「先輩に渡さなくちゃいけないものがあったので、私、ずっと先輩が学校に来るのを待っていたんですよ！」

...と、普段と変わらない浅倉ヒカルを演じた。

「悪かったな。ちょっとヤボ用が長引いちまって...」

響は言いながら腕に絡まった雪乃の腕をさりげなくほどく。なによ、と雪乃が不服そうな目を響に向けた。

「先輩、全然学校に来ないから心配してこんな所まで来ちゃったけど、何だかお邪魔しちゃって...すみません」

ヒカルはペコリと頭を下げる。

「いや、ヒカル...」

響は再び絡んだ雪乃の腕とヒカルの顔をチラチラ見比べながら内心ではうろたえた。だが、表にそれは出さないように隠した。もう、絡まっている雪乃の腕も解かない。

「渡したいものってこれです」

ヒカルは八分音符のペンダントを響の手のひらに乗せた。

「ペンダント...？」

まあキレイ、と雪乃は響の手の上に乗った小さな黒珊瑚に見入った。

「これ、群竹くんの沖縄のお土産なんです」

「群竹が俺に？」

「はい。『ピクチャーライフ』のモデル料...だって.....」

ああ、あれか...と響は思い出すように目線を上に上げた。

――ヒビク先輩...っ。

ヒカルは突然込み上げて来た涙を必死に押しこめた。あの写真は、颯土が写した文化祭の時の自分たちは――。

――あの時は...、あのころのヒビク先輩は...！

当たり前のようにいつも傍にいてくれたのに、ああ、あれか、なんて気のない言葉になってしまうほど響にとっては薄いものだったのか。自分と響の間には最初からこれほどの温度差があったということなのか――。

「じゃ、ちゃんと渡しましたからね！」

ヒカルはくるりと回れ右をした。その時、ヒカルの首元で同じペンダントが揺れたのを響は見逃さなかった。

「ヒカル...！」

一瞬のうちにエントランスを走り去って行ったヒカルの後を、響は思わず追いかけてようとしていた。それを、

「風間くん?!」

雪乃に呼び止められて響は踏みとどまったのだ。

――そうか...、これでいいんだ...。

「風間くん、やっぱり浅倉さんにつきあっていたの？」

「いや...」

響は力なくかぶりを振る。

「でも、なんだか...、今の感じは...」

「そんなんじゃないんだ。俺はあいつにとっちゃただの先輩だからさ...」

「じゃあ、風間くんにとっての浅倉さんは...なに？」

――俺にとってのヒカルは...。

響は深い息を吐き、答える代わりに首を横に振る。

「まあ、いいわ。卒業まで傍にいさせてもらえるならなんでも」

雪乃はニッコリと笑う。

「お前、変わってるな。それってけっこう図々しいぜ？」

「そうかもね。でも、風間くんがそれまでに私を好きになってくれればもっといいんだけどね！」

雪乃は響の左側にスッと立った。

「悪いけど、たぶんそれはないだろうな...」

「そんなにはっきり言わないでよ。これでもずいぶん勇気を出して告白したんだから」

「...そうだったな。悪い...」

「もしかしたらってことだってあるじゃない？私っていい女だし」

と、雪乃が悪びれずに言い放った。

・
・

昨夜、ミヤボ用、から帰ったばかりの響に雪乃から電話があった。

『風間くん、いた！いきなりで悪いんだけど、私、一年の時から風間くんのこと好きなのね。つきあってくれない？』

響が電話に出た途端、雪乃は本当にいきなり直球を投げてきたのだ。

『……は？本気かよ？』

雪乃とは一年の時から同じクラスで共にいろんなことをやってきた。ずっと一緒にいたというのに、今になっての思ってもいなかった告白に響は大いに戸惑った。

『何度も告白しようとしたのよ？一年の時も二年の時も。だけどいつも邪魔が入ったりタイミングが悪かったりで言いそびれちゃって』

そのうちにヒカルが出現してしまい、もうダメだわ...とかなり落ち込んだ、と雪乃は言った。

『だけど私もやっぱり諦められなくて、この間浅倉さんに直接訊いちゃったわ』

『なっ？！ヒカルに何言ったんだ！』

響は思わず電話口で怒鳴った。

『そんなに怒らなくてもいいじゃない。風間くんとつきあっているのかどうか訊いただけよ...』

ヒカルはつきあっていないと答えたらしい。当たり前だ。

『だから安心して告白したの。私とつきあってくれない？』

雪乃の性格は分かっている。スポーツマンらしくストレートでさっぱりしている雪乃に回りくどい言い訳は無用だ。だから、

『悪いがつきあえない』

響も直球で返した。電話の向こうで一瞬雪乃は言葉に詰まった。だが、すぐに態勢を整えなおし、想う人がいるのかと、訊いてきた。響はあて答えなかった。しばらくの沈黙が流れ、やがて雪乃は思い切ったように言った。

『私を拒絶する理由がないなら、せめて卒業まで傍にいさせてくれない？私の一方通行でかまわないから...』

さっきまでとは違い、雪乃の声は思い詰めたように震えていた。だが、どんなに想われていても応えることは出来ない。胸が痛んだ――。

『...バカ言うなよ。そんないいかげんなこと出来るはずないだろ』

『イイカゲンでもいいの。じゃないと一年の時から風間くんを想い続けて来た私のハートが可哀想なのよ』

雪乃は引かずに食い下がった。

『俺の気持ちはどうする？』

『この際どうでもいいわ』

あっさりと言い放つ雪乃に、響は呆れると共に思わず吹き出していた。そして、勝手にし

ろよ...、とつぶやいてしまったのだ。

・
・

さっき、突然雪乃がやって来た。さっそく一方通行の押しかけ女房しに来たわ、と新学期になってからのノートを持って来た。だがやはり雪乃とふたりでノートを写す気分にはなれず、口実をつけて逃げ出す途中でのヒカルとの遭遇だった。ヒカルが自分を心配してここまで訪ねて来てくれたことは素直に嬉しかった。だが――、

――俺はもうあいつを見守ってやることは出来なくなる...

そして、何よりも自身のヒカルへの想いを断ち切らなくてはいけなくなる――。だから、雪乃のことをあえてヒカルに弁解する必要もない。ヒカルにとっての自分は最初から好きな人リストに名を連ねるただのヒビク先輩であり、自分にとってヒカルは愛しい人からただの後輩へと気持ちを切り替える必要があるのだから――。

「ね、お茶でも飲みにいかない？」

呆然と立ちつくす響に雪乃が言った。

「...そうだな」

響は肩で小さく息を吐いた。

◇

どこをどう歩いて来たのかまるで記憶がなかった。気がつくと、ヒカルは自分の家の前にたたずんでいた。踏ん張っていないと立っていることも出来ないほど体中の力が抜けてしまっている。こんな絶望感はずっと生まれて初めてのことだ。少し気を緩めると涙があふれ落ちそうになる。いったん涙を流してしまったら二度と止められそうにない。ヒカルは歯を食いしばるようにして溢れそうになっているものを止めていた。

――ヒビク先輩、ヒビク先輩、ヒビク先輩...

その名だけがぐるぐると全身を巡っていく。不安の答えはこういうことだったのか。

――やっぱり遠くに...行っちゃったね...、ヒビク先輩...

ついこの間までここにいてくれたのに、もう遠すぎる。一步でも動くと涙も声も零れそうだ。家の門に手をかけたまま、ただただ呆然としている時だった。

「何、突っ立ってんだ？」

後ろから声をかけられてヒカルは我に返った。声の主は振り向かなくても分かっている。だが、今振り向いたら見られたくない顔を見せてしまうことになるからヒカルは応えなかった。

「変だぞ？お前」

いつもなら何かしら言い返して来るヒカルが身動きひとつしないことに不審を抱いた颯土は、ヒカルの肩に手をあてて顔をのぞき込んだ。月の明かりに翳り、うつむいて目を伏せるヒカルの顔はあまりにも哀しく儚かった。

「浅倉...?!」

颯土は思わず息を飲み込んだ。だが、次の瞬間、

「な～んてね！」

突然ヒカルは顔を上げた。

「あっ、群竹くん、もしかして心配しちゃったりして？」

ヒカルはいつもの調子で言ってケラケラ笑った。

「バッカじゃねえの、お前！何考えてんだか！」

凶星を言い当てられ、颯土はうろたえて怒鳴った。お元気娘のあんな沈んだ顔を見せられて心配しないはずがない。

「あはは。ごめんごめん！ちょっと冗談が過ぎちゃった？」

ヒカルはいつもの笑顔の中で舌を出した。

「あっ、群竹くんからのお土産、今日やっとヒビク先輩に渡してきたからね！」

「あ？ああ」

「べつにヒビク先輩とおそろいにしてくれなくてもよかったのに。私とヒビク先輩って、おそろいのペンダントをつけるような間柄じゃないんだから！」

そのままヒカルは家の中に駆け込んでしまった。よく言うぜ、何が間柄じゃない、だ、と颯土は思った。

自室に入ったヒカルは何となくラジオをつけたまま、着替えもせずに机にうつ伏せた。

――ヒビク先輩は雪乃先輩を選んだ...

そう思うとまた涙が込み上げて来た。だが、またそれを必死にこらえた。

――泣かない...っ。

こんなの全然自分らしくない。響にとって自分は最初からただの後輩だったのだから。響が誰を想っていようと誰とつきあおうと、そんなことは響の勝手だ。それを自分が悲しんで泣くなんておかしい。

――絶対におかしい！

自分を恋を失った悲劇のヒロインにはしたくない。一人でメソメソ泣くのもイヤだ。けれど――。

夏の合宿、体育祭、熱を出して送ってくれた時のこと、文化祭、ジャックに会いに行った時のこと...。振り返るといつも響が傍にいた。それは当たり前のように――。

「ヒビク先輩...！」

もう限界だった。もうどうにもならない。

――どうして...？どうして...？！ああ、あれかなんて...、ヒビク先輩ヒドイよ。追いかけてもくれなかった.....！ヒビク先輩のバカ！バカ！バカ！

突っ伏した机の上を激しく手で打つ――。

『次の曲はジャック・ベリーでスイートラヴ』

――スイートラヴ...？

目の前のラジオが喋るDJの声にヒカルは反射的に顔を上げていた。そしてラジオからは柔らかな優しいピアノのメロディが流れてきた。

甘くせつないバラードの調べがヒカルを包むように響き渡る。ジャック・ベリーが響の母に贈ったメロディ。遠くアメリカから日本にいる昔の恋人に送ったメッセージ。ふたりにしか分からない旋律――。

湖畔で語っていた響の言葉がよみがえる。あの時響ははっきりと言っていた。未来にまで大切に持って行きたい思い出が出来た、と。それは『ライジングサン』の詞になったヒカルとの時間で、それが自分の原点になったと。あの日、それを伝えるために自分をあの湖に連れ出してくれた響だった。

「ヒビク先輩...」

ヒカルはラジオを見つめたまま曲に聴き入った。

『ジャックの音楽の中では珍しいスタンダードなバラード曲の『スイートラブ』を聴いていただきました。この曲は、リリースされた当時にいろいろと憶測が飛び交った一曲でしたね。遠い昔に別れた恋人へのメッセージであるとか、ジャック引退説にまで憶測が飛躍したこともファンには記憶に新しいことと思います。さて、つぎの曲は...、』

ヒカルはラジオのスイッチを切った。

――ヒビク先輩を信じよう。ヒビク先輩と過ごしてきた時間を大切にしよう...。

響が今まで傍で見守ってくれたことは本当のことだ。そこに響のどんな想いがあったのかはもう分からないが、それによって自分が自分らしく頑張れたのも本当のこと。

――好きになってもらいたいから、好きになったわけじゃないから。ただただ、好きだから。

これからも今まで通りの自分でいよう。響がいるから頑張れる自分で――。

ジャックのメロディがまだ胸の中で響いている。そしてヒカルには少しだけ寂しさを残した笑顔が戻っていた。

十月一一。どこから漂ってくるのかわからない金木犀の甘い香りが空気全体と混ざり合っている。自宅から学校まで自転車で来る間、途切れることなく追いかけてくるその香りには眠気を誘われる。

自転車を校舎横の駐輪所に置き、生あくびをしながら校庭を横切って昇降口に向かった颯土は、フェンスの外周を歩いて登校してくる響の姿を見かけた。いつもなら田村やその他のにぎやかな先輩たちとぞろぞろやってくる響が、今朝は女子の先輩を傍らに連れている。その先輩は学校内でも美人で有名な元女子バスケ部長大島雪乃。颯土も名前は知っていた。どこかに違和感があったが、そろそろ予鈴も鳴る頃だったのでそれほど気にもせずに教室に向かった颯土だ。だが――。

「...うそだろ？」

昼休みにあかねと中庭でランチをするのはいつものことで、だいたいはあかねが一方的に話をし自分は相槌を打つだけで終わる休憩時間だが、今日は訊き返さずにはいられなかった。

「私もそう思いたいけど...本当みたいなんだよ。みんなが噂してる...」

あかねは自分の弁当に手もつけずに涙ぐむ。校内一の校則破り風間響と校内一の美人大島雪乃がつきあいはじめたらしい、と数日前から噂されていることを颯土は今まで知らなかったのだ。

――ありえないだろ、それ...。

今朝、噂のふたりと一緒に登校する場面を見てはいたが、響があ先輩とつきあうなんてことは信じられない颯土だった。

「ヒカルちゃんの様子はどう？」

「あいつは何も変っちゃいないぜ...？」

さっきも数学の宿題を見せろと言われ、いやだ、と意地悪をしてやると、
『中央委員のくせに冷たいっ！』

と、わめかれ拳句の果てには「あっかんべーっ！」と真っ赤な下瞼を見せられたばかりだった。

「...無理してるのかな？」

「いや...、そんな風にも感じない」

それは本当だった。今の颯土にはヒカルが無理をしている時はどこかでそれがわかるから。

「その噂、絶対に間違いだぜ...」

どこからか漂ってくる金木犀の甘い香りに、颯土は何故か胸をえぐられるような気がした。

放課後までのわずかな時間で響と雪乃の噂はさらに大きく広まった。目立つもの同士で似合いのカップルだと、ふたりに憧れる生徒たちは口々に噂していた。

――似合いのカップル？冗談だろ...？

響と雪乃が似合いのカップルだとはどうしても思えない。確かに見た目は二人とも美しい。だが、颯土が今まで見てきた心に浸透する美しさとは違う。違和感が拭えない。認められな

い――。

――風間先輩の隣にいて自然なのは……、

「どうゆうことなの？風間先輩ヒドインじゃない？」

麻耶はヒカルを思い息巻いた。

「見損なったよな、風間先輩！」

祐輔や勇斗も怒りをあらわにしている。ヒカルと響の関係を今まで見て来た仲間たちの間では、響に対する不信と非難が燃え上がっていた。いつもの仲間たちが次々とヒカルの二年C組に集まっての放課後だ。

「ヒビク先輩は何も悪くないよ。だってあたしとヒビク先輩はつきあっていただけじゃないんだもん。」

渦中にあるヒカルはいつもと変わらない調子で仲間の非難から響をかばう。颯土は何日か前、自宅の門の前で呆然としていたヒカルを思い出した。

――私とヒビク先輩って、おそろいのペンダントをつけるような間柄じゃないんだから。

あの時のヒカルの言葉は、このことをすでに知っていたからだったのか。あのヒカルの顔はやはり嘘ではなかったのか。ふとヒカルの首元を見ると、自分があげたペンダントが揺れていた。

「浅倉…」

「やだなあ、みんな。ヒビク先輩のことそんなに怒らないでよね。本当にあたしとヒビク先輩とはなんでもなかったんだもん。これからだって今までどおりだよ？」

「でも…、」

ヒカルの気持ちを誰よりも分かっているつもりのあかねはまだ収まらない。

「はいはい、この話はもうおしまい！あたし、今こんなことにかまっている場合じゃないんだ。もうすぐずずらん幼稚園での人形劇公演があるから」

父母会の会長である今野から正式な依頼があったのは一週間前だった。こちらの要望通り、開校記念日で休日になる十一月二十二日に幼稚園のホールで観劇会を行うことになったのだ。

「一ヶ月半しかないから練習もしなくちゃならないし、演出も変更してグレードアップしようかと思っているしね。またまた忙しくなりますわ～！」

「ヒカルちゃん…」

「それじゃ、あたし、これからみんなと打ち合わせがあるの。またね！」

ヒカルは教室を出て行った。

「無理してるって感じでもないよね…」

ヒカルの去った後を見つめたまま麻耶が呟いた。

「麻耶ちゃんもそう思った？」

と、あかね。

「本当にヒカルちゃんと風間先輩は何でもなかったんじゃないの～？」

皆はとりあえずうなづいた。だが、颯土だけは違っていた。

――夏の湖畔…。

指で作ったスクエアの中のヒカルと響。それだけじゃなく、いつもいつもふたりは……。

「一緒にいられた時間が…」

ふと、夏の沖縄で麻希が言っていたことを思い出した。相手が誰を想っていたのかまわらない。一緒にいられた時間が大切なんだと…。

「群竹、何か言ったか？」

「いや、何も…」

「あ、見て見て、風間先輩だ」

麻耶が校庭脇の部舎の前をのんびり散歩するように一人で歩いている響を指さした。

「あ、ヒカルちゃんが行ったよ～。このまま行くとあの二人、かちあっちゃうよ～」

ヒカルが響が歩いて来る方向と対向するように歩いている。

「何か、まずくないかい？」

仲間たちは教室の窓からのぞきながらやきもきしていた。

「のぞき見なんかやめろよ」

颯土がたしなめる。

「のぞき見じゃないよ～。心配だから見守ってるんじゃないか～」

勇斗の意見に皆がしたり顔でうなづくのだった。

◇

みんなとしゃべっていて随分遅れてしまった。もうサークルのみんなは演劇部の部室に集まっているだろうし、綾瀬がイライラしながら自分を待っているだろう。ヒカルは少しうつむきかげんに、それでも足早に歩いていた。

響はまるで思い出をたどるように校舎や部舎をながめながら、頭の中で今作っている曲のイメージを組み立て歩いていた。先に見つけたのは響だった。そして思わず立ち止まり、前から歩いて来るヒカルを見つめた。

——そうか、幼稚園での公演を控えているんだっけな…。

響は演劇部の部室を見上げた。今までならためらわずに「ヒカル！、と大声で声をかけるところだ。だが今はもう、ヒカルの顔をまともに見ることが出来ない。十日前、ヒカルがペンダントを持って来たあの日から自分も自分の周囲もおかしくなっている。

——今、ヒカルには会えない…。

響はくるりと踵を返した。だが、

「ヒビク先輩！」

今までと何ら変わらない、ヒカルの自分を呼ぶ声に響は立ち止まっていた。そしてゆっくり振り返ると、そこには太陽のような笑顔のヒカルが立っていた。

「よお、ヒカル…」

「久しぶりですね、先輩。同じ学校にいるのに、三年生とはなかなか会えないものですね」

「ああ、そうだな…」

響はそれ以上の言葉が出て来ない。ヒカルの笑顔がまぶしすぎて目がくらみそうだった。

「幼稚園から正式な依頼が来たんですよ！これからみんなとミーティングなんです」

「そうか、がんばれよ」

「はい。先輩もがんばってくださいね」

ヒカル言葉に響はビクリと反応した。

「俺が何をがんばるんだ...？」

「何って...、受験勉強とかいろいろ忙しいじゃないですか、三年生は」

「あ...、そうだな...」

響は空を仰ぎながらホッと息をついた。

「それじゃ、みんなが待ってるから。ヒビク先輩、また！」

ヒカルは手を振りながら響の横を通りすぎ、部舎の階段を駆け上がって行く。その一瞬、ヒカルの首に下がるペンダントがまた揺れるのを響は見た。

「ヒカル...」

響はポケットに突っ込んであった左手を目の前に持って来た。制服の袖の下で手首に二重に巻き付けられている揃いの八分音符がそこでゆらゆらと揺れていた。

「あっ、ヒビク先輩！」

突然頭の上から声がして、響はあわてて手をポケットに入れ直した。そして上を見上げると、ヒカルが手すりから上半身を乗り出していた。

「危ねえぞ！何やってんだ、お前！」

響は思わずいつもの口調になって叫んだ。

「言い忘れてましたけど、十一月二十二日には先輩も来てくれますよね?!」

返答に詰まる響は答えあぐねる。

「来てくれないんですかーっ?!」

ヒカルはますます身を乗り出す。

「お、落ちるぞ、ヒカル！その手すり、サビついててヤバイんだから！」

「来てくれないんですかーっ?!」

ヒカルはわざと手すりに体重をかけてもう一度言った。

「行くよ！行く！行くからそこから離れろって！」

響はおかしいくらいに慌てている。ヒカルはペロッと舌を出して手すりから離れた。

「こんのっ！ヒヤヒヤさせるなよな！」

「えへへっ、すみません！でもよかった！今度は麻耶ちゃんや群竹くんたちもみんな来てくれるんです！だから先輩も田村先輩や雪乃先輩と一緒に来てくださいね！」

ヒカルの口から雪乃という名前が出て響はいたたまれない気持ちになった。ヒカルも雪乃と自分がつきあっている者同士と思っているのだろう。あえて弁解を避けたのは自分なのだからそれでいいはずなのに、こんなにあっさりと一緒に来いと言われると響の心は複雑に揺らいた。

「あっ、幼稚園の方にはみんなのことスタッフだということにしますから！」

ヒカルは無邪気に言って笑った。

――俺は、このままで本当にいいのだろうか...

響は一瞬の間に考えた。

「ヒカル、観劇会には田村と行くよ...！」

ヒカルは安心したように笑うと部室に入って行った。そして響はドアの閉まった演劇部の部室をいつまでも見上げていた。

◇

教室でのぞき見していた仲間たちは顔を見合わせた。

「ヒカルちゃん、元気だったね」

勇斗が最初に口を開いた。会話の内容は聞こえなかったが、ここから見ていたヒカルは普段と変わらない明るさとはつつさを発散させていた。

颯土は、まだ演劇部の部室を見上げて立っている響を見つめていた。が、他の仲間たちはヒカルが部室に入った段階で観察をやめていた。ヒカルさえ元気であれば響がどうであろうと関係ないといったところだ。

「結局、風間先輩もヒカルちゃんも、お互いを特別に想い合っていたわけじゃなかったってことだよね～」

「そうなのかもしれないね。風間先輩がああのバスケット部の先輩とつきあってるのもべつに自然なことだったんだよ、きっと」

と麻耶。

「何だか悪かったよな、僕たち。風間先輩のことさんざん悪く言っちゃって」

そして一瞬の沈黙。

「さ、部活行こう...」

最初に立ち上がったのは祐輔だった。その後を、私もと麻耶が続く。仲間たちはそろそろと自分たちのすべき行動に戻って行った。今まで大騒ぎしていたことが急にばからしく思えた。

そして二年C組には颯土とあかねだけが残った。

「風間先輩、まだ立ってるね...」

さっきからずっと窓の外を見つめたままの颯土の後ろからあかねが校庭を覗き込んだ。

「ああ...」

「風間先輩、本当に大島先輩のこと好きなのかな...」

というあかねのつぶやきに、

「違うだろ」

颯土は即答した。

「群竹くん、風間先輩の気持ちがわかるの？」

言い切る颯土にあかねは少し驚く。

「いや、分からないけど...」

響が想う人間がいるとしたら、それはヒカルのはずだ、と思うだけだ。

「風間先輩が好きなのはヒカルちゃんしかいないはずだよね...？」

「あかねもそう思うのか？」

「だって、群竹くんが写した写真を私は今でもはっきりと覚えているもん。あの写真の中の風間先輩、ヒカルちゃんをまっすぐ見つめていた。せつなくなるくらいに...」

――まただ。

どうして純平や麻希やあかねまであの写真の響を`せつない、と言うのだろう。確かに舞台衣装を身にまとった二人が見つめ合い、幻想的な雰囲気は出ている写真だとは思いますが、それがどうしてせつないのだろうか。

「あかね...、」

颯土は今の疑問をあかねにぶつけてみた。

「...それはね、たぶんヒカルちゃんと風間先輩が対照的だからなんだと思う...」

「対照的？」

「そう。あの写真に限ってのことなんだけど、あの中でのヒカルちゃんは、はちきれそうなほどに生き生きしていてうれしそうで幸せな笑顔で風間先輩を見つめていたでしょう？でも、風間先輩はどこかかげりのある笑顔なの。ヒカルちゃんが好き、だけど、それを内に秘めているというか、秘めなくちゃならない理由が風間先輩の中にたぶんあったんだと思う。写真の中でそれは全身に現れていた感じで、まるでピエロみたいに」

「ピエロ？」

「サーカスのピエロって派手に顔を塗っておどけた演技をするけれど、おどければおどけるほど、切なく見える感じがしない？文化祭の時の風間先輩も、顔には派手なペイントをしていたけど...」

あかねの言葉が颯土の腑にすんと落ちてきた。

「.....分かった気がする」

「風間先輩って普段はああだけど、見かけよりもずっと繊細な人なんじゃないかな...」

――なるほど...。

「群竹くんが風間先輩のそんなところが見えないのはね、きっと群竹くんもそういう人だからなんだと思うよ？」

「俺が？」

「そう。似てるところあると思う。群竹くんと風間先輩...」

そうなのだろうか、と颯土は思った。光の中にいる響とネクラと呼ばれる自分とでは住む世界が初めから違っていると思うのだが――。

颯土は乾いた風やね――と、麻希が言った言葉を思い出す。心の奥の土砂降りをごまかして一生懸命乾いた風になろうとしていると。響の内にも、誤魔化さなくてはならない真実の何かがあるのだろうか。

響はまだそこにたたずんでいた。少し強くなってきた秋の風に金色の髪をサラサラと揺らす響はどこか寂しげに見える。

「なんだかせつないね...」

「ああ...」

今までひとつの絵として見てきたヒカルと響のバランスが崩れてしまったようで、それがやるせない...。どうしてこんなにも気になるのかわからない。響が誰と付き合おうと自分には関係ないことなのに――。

「もう、帰ろう？」

あかねがカバンを颯土に渡す。颯土はそれを受け取って二人は一緒に教室を出た。

あかねと颯土が肩を並べて昇降口までくると、校庭から戻って来た響とバッタリ会った。

「よお、お二人さん！相変わらず仲が良いねぇ！」

二人の姿を見るなり、響がいつものように大声で声をかけて来た。

「群竹、土産サンキュ。ちゃんとヒカルから受け取ったぜ」

響は手首に巻いたペンダントを見せた。

「いえ、たいしたものじゃなくて…」

「あ、それ、ヒカルちゃんとお揃い…」

響の手首で揺れるペンダントはヒカルの首にぶら下がっていたものと同じだ。なのに、

「ん？あ、そうなんだ…？」

響は、まるで知らないふりをする。誤魔化しているかのようなそんな響の態度に、颯土は無性に腹が立った。夏の沖縄の小さな小屋で仲良く並んでいた八分音符のペンダント。それを目にした時の想いがしぼんでいくような気がした。

違う。ナチュラルじゃない――。

「俺、気を使ったつもりだったんですけど揃いじゃかえってまずかったですね、今の風間先輩には」

颯土の口から出た響を非難しているともとれる強気な言葉にあかねは心底驚いた。

「群竹くん…？」

響は息を飲み込むようにして颯土の顔を見つめている。颯土は颯土で響の顔を鋭く睨む。二人の間にピンと張りつめた見えない糸があるような緊張感がその場に流れた。

――みんながどうであれ、やっぱり俺は認められない。

何故そこまで拘ってしまうのか、自分で自分の気持ちが分からない颯土だが、ヒカルと響ふたりと一緒にいてひとつの`絵、になる光景と輝きを失いたくない。

――浅倉の、輝きを……。

「ハハハ…、何言ってるんだよ。俺はうれしいぜ、ヒカルとペアーなんてな！」

その緊張を破ったのは響だった。

「大切にするよ、サンキューな！」

響は手首の八分音符をプルンと指ではじくと、手を上げて校舎の中に消えて行った。その後ろ姿をじっとにらんでいた颯土は、ふう…と、ため息をついて肩の力を抜いた。

「群竹くん、どうしてあんなこと？」

「分からない…、勝手に口から飛び出した…」

実際、言ってしまうってから焦ったのは自分自身だった。

「群竹くん、優しいんだね…」

「は？俺が優しい？」

「だって私もひとこと言ってやりたかったもん、ヒカルちゃんの為に…」

「…そうか。そうだよな…」

——風間先輩の隣で笑っている浅倉と、浅倉の横でよりいっそう鮮やかな風間先輩を見ていたい。ふたりのその自然な輝きが好きなんだ、俺。

響が誰と付き合おうと口を出す権利などないのに、こんなにも抵抗したい自分がここにいる...。

——ペアーのペンダント、手首じゃなく首につけてもらいたい。浅倉は...手首には巻いてないよ、風間先輩——。

自転車の後ろにあかねを乗せ、駅までの道をゆっくりと走る。夕暮れの道に行くふたりを金木犀の香りがどこまでもどこまでも追いかけて来た。

体育祭、文化祭と秋の行事が続いた本城高校――。

体育祭で二人三脚を一緒に走ったヒカルと颯土は、絶妙なコンビネーションを全校生徒に見せつけ敢闘賞を受賞した。いつの間にか息が合うようになっているふたりにあかねはやきもきしっぱなし。つつい颯土を睨んでしまったり、睨まれた颯土は拗ねるあかねをなだめたりと、競技以外のことでへとへとになった。

同じ理由で密かにジェラシーを募らせた響は、出場した借り物競争で『黄色のハチマキ』と書かれた借り物に『黄色のハチマキをしめたヒカル』を借り、堂々とヒカルの手を引いてトラックを走った。

そして文化祭。

「本城高校が誇る写真家群竹颯土（ピクチャーライフ大賞受賞賞金十万円獲得!）が撮る！」

こんなキャッチコピーを打ってアトラクションが大繁盛をしたのは二年C組の『ときめき写真館』だった。お客はウェディングドレス、チャイナ服、忍者服など、十点ほど揃えられた普段あまり着られないような衣装をまとい、模造紙に描いた背景の前でカメラマンの颯土にポラロイド撮影をしてもらえる。出来上がった写真は可愛い手作りのフォトフレームにセットしてもらえる、という`夢のような、アトラクションだった。

『本城高校が誇る写真家っていうのはやめてくれないか！』

と、颯土は訴えていたがもちろん却下。朝から晩まで休憩も出来ないほど大盛況の写真館でポラロイド写真を撮り続けた。ちなみにあかねはウェディングドレスで、麻耶は長ランを着て写真を撮った。そしてヒカルは――。

・
・

文化祭も終了に近づいた頃、ときめき写真館も客が途切れ店仕舞いの準備に取り掛かっていた。

『ヒカルちゃんは写真撮ってもらったの？』

颯土のところに來ていたあかねに訊かれたが、ヒカルにそんな暇は今までになく撮影してもらうのは諦めていた。

『せっかくなんだから撮ってもらいなよ？もうお客さんも来ないみたいだし。ね、群竹くん？』

別にいいぜ、と颯土も言うのでヒカルは一旦片付けた衣装からウェディングドレスを選んで着てみた。ドレスを選んだのは、先に撮ったあかねがえらく可愛かったからだ。

――乙女の憧れだもんね。

『どう？似合う～？』

半分照れ隠しで裾を持ち上げながらお姫さまのようにクルッと回ってみると、颯土には「馬子にも衣装」と言われ、あかねは「似合いすぎている」という理由で涙ぐみ、そんなあかねと颯土は顔を見合わせ頷き合って――、

『ヒカルちゃん、ちょっとそのまま待っててね？すぐに戻って来るから！』

あかねが向かったのは三年F組のホラーハウスだった。ちょうど終了したところで、ドラキュラ伯爵を演じた響が衣装を着たまま廊下に出てきた。

『風間先輩！ちょっと私と一緒に来てください！』

『じゃ、着替えてくるから...』

『そのままがいいんです！素敵な花嫁さんが待ってますからっ！』

『...は？』

わけがわからないまま、響はあかねに連れられて.....、

『ヒカル...？』

『ヒビク先輩...！？』

二年C組の教室でウエディングドレスを着たヒカルに会い響は呆然とし、ヒカルも今ここにドラキュラの響が現れたことに呆然とした。

『ときめき写真館最後の写真を撮りますから...』

颯土は見つめ合うヒカルと響を促した。チャペルの背景の前にドラキュラ伯爵と花嫁は並んで立つ。だが――。

『その背景はいらない...な』

颯土が指示を出し背景は取り除かれた。

――純白の花嫁と漆黒のドラキュラ伯爵...。ふたりがいれば背景なんてなくていい。

ファインダーを覗いて見る絵は去年の文化祭で見た絵と同じ輝き。

――これだよな。

『...ドラキュラと花嫁だったら...、やっぱポーズは...！』

響はヒカルをひょいと抱き上げた。その瞬間、シャッターを切った颯土だ。そして続けてもう一枚。ふわりと舞ったドレスの花嫁とドラキュラ伯爵、そして、その後にじっと見つめ合うふたりの`絵、が出来上がった。

『...ヒカルはどっちがいい？』

二枚を見比べて響が言った。ヒカルが手にしたのは二枚目の方。

『じゃ、俺はこっちのハリウッド風をもらうかな！』

響はニカッと笑った。

・
・

今、ヒカルの手にはその時のポラロイド写真がある。響と雪乃が付き合いはじめてからは、もう響とは以前のような交流はない。校内で会うこともほとんどないし会っても響の隣にはいつも雪乃がいるから会話をすることもない。だから、この写真が撮影できたのは奇跡だった。

「嘘の写真でも、ヒビク先輩の花嫁になれて幸せ...かな」

そう、言葉に出したら、胸が詰まった。颯土がくれたペアーのペンダントも、颯土が撮ってくれたこの写真も、本当は見るだけで胸が痛い。時々たまらなくせつなくなっていて、泣きたくもなる。明日は開校記念日ですずらん幼稚園での人形劇公演だ。響はきっと来てくれるだろうが雪乃と一緒にだろう。一緒に来てくださいと言ったのは自分なのに、学校ではないところで響と雪乃が並

んでいるのを見るのはきっとせつない。

「はぁ……」

思わず深いため息が漏れたとき閉めたカーテンの向こうで、カラカラ...と窓が開く音がした。反射的にカーテンと一緒に窓を開けると、向かい側の窓から颯土が身を乗り出し、窓の下の方を向いて何かしている。

「...群竹くん、何してるの？」

顔を上げた颯土はおもむろにギョッとしてそのままの状態に凍結した。窓の下に垂らした右手には、何故か珈琲カップが握られている。

「...もしかして、中身を捨てた？」

ヒカルがカップを指差すと颯土は観念したように、捨てました、と白状した。少し残したまま置きっ放しになっていたカフェオレが、そろそろ臭ってきたから窓から捨てたところをヒカルに見られてしまった、というわけだ。

「カフェオレじゃそりゃ臭うねえ、牛乳っぽく...。だからって窓から捨てることはないんじゃないの？」

「うるせーな。下まで捨てに行くの面倒だったんだよ」

「ほんと、面倒くさがりなんだね。でもそのカップはどうするの？そのまま放置しておいたらきっとカビが生えちゃうよ？」

「あ、後で片付けるよ...」

「.....だったら別に窓から捨てることないじゃない。片付ける時にちゃんと流しに捨てれば...」

「だから、いちいちうるさいの！俺は、窓からカフェオレを捨ててみたかったの！それだけ！」

なにそれー、とヒカルはケラケラ笑い出した。

「お、お前はこんな時間に窓開けて何やってたんだよ」

「べ、べつに。星空でも見ようかなっ.....、」

颯土の部屋の窓が開いたから、とは言いにくくてとっさにそんなことを言っただけが今夜は星はひとつも出ていない。

「.....て思ったけど、やめて、明日は晴れそうかなって、ちょっと外の空気を確認しただけ」

「苦し紛れの言い訳言ってる？」

「ぜ、全然？」

ヒカルは外気に身を晒し息を大きく吸い込み、

「...さ、さぶっ」

と、震えた。颯土はプッと吹き出した。

「なんなんだよ、お前。変じゃねえ？」

「はいはい。どうせ変ですよ。明日本番だからね。ちょっと緊張してるみたいよ」

「緊張してるのか？お前が？」

あからさまに意外な顔をして颯土は言った。

「あのね。あたしのこと、本当にバケモノかなんかだと思っていない？」

「違うのか？」

先ほど笑った逆襲をさりげなく受けて、うっ...とヒカルは詰まる。

「.....でも、偶然イケナイ群竹くんの現場が見られてちょっとは気分落ち着いたよ」

「イケナイ群竹くんの現場って...たかがカフェオレを窓から捨てたぐらいで...」

偶然ではなかったが、今、こうやって颯土と話が出来たことでさっきまでの少し沈んだ気持ちが逃げて行ったのは本当だ。あのままの気持ちで明日を迎え、響と雪乃に会っていたらきっとせつなさのドツボにはまってしまっただろう。颯土の`カフェオレ窓から廃棄、は、本人が意図したことではないにしてもヒカルの気持ちを切り替えてくれるいいキッカケになってくれた。

——ここに、群竹くんがいてくれてよかった....。

「な、なんだよ？」

自分をじっと見ているヒカルに、颯土はややうろたえる。

「なんでもないよ。明日は観に来てね？」

「ああ...。ていうか、俺、荷物持ちじゃなかったっけ？」

「あ。そうだった...」

見に行くも何もないだろう、と颯土。

「やっぱ、お前、変だぜ？大丈夫か？」

「うん。本当はちょっと落ち込んだりもしてたんだけど、今はもう大丈夫だよ！じゃ、明日ね」

おやすみ、と言ってヒカルは窓を閉めた。

「落ち込んでた、か.....」

颯土はもうカーテンも閉まった向かいの窓を見つめて呟いた。そして、いい加減寒くなったのでこちらでも窓を閉める。ヒカルがどうして落ち込んでいたのかは分からないが、そういう時もあるのだろう。

——バケモノじゃないんだからな...。

少し様子が変わった今夜のヒカルだったが....、

——明日の公演、成功すりゃいいな。

向かいの窓に向かって声を出さずに颯土はエールを送った。

木枯らし一番が吹いた十一月二十二日、ヒカルたち本城高校の人形劇サークルはすすらん幼稚園での公演当日を迎えた。空はどんよりと曇り空気もやたらと冷たい。もう厚手のコートが必要なくらい秋は終わりを告げている。

サークルメンバーは朝早くから幼稚園に集合し荷物の搬入と舞台の設置をしていた。その作業にはにぎやか組と響と田村が加わっていた。

「あーっ、キンパツゴーストとその子分のに一ちゃんだ！」

響と田村の姿を見つけた哲平が二人を指さして叫んだ。

「どれどれ、キンパツゴーストどこーっ？！」

哲平の仲間たちが次から次へと集まって来る。

「こらーっ、みんなーっ！静かに待っていないと人形劇はじまらないわよーっ！」

先生が園児たちに号令をかけると、今までワイワイ騒いでいた園児たちはピタリと静かになり、自分たちのいるべき場所にもどるのだった。

すごい！

ヒカルは感動した。家ではまったく言うことを聞かない哲平までもが、先生の言うとおりに従い一人前の幼稚園児をやっている。

「幼稚園の先生ってのも気分よさそうだなあ」

響が感心してつぶやくと、

「そうでもないわよ。毎日が格闘技なんだから」

後ろで響のつぶやきを聞いていた一人の若い先生がややムッとして反論した。響はアハハ...と乾いた笑いをこぼしながら鼻の頭をポリポリとかく。そんな何気ない光景がヒカルにはまぶしく見えた。今までは当たり前だった響が傍にいるこんな風景がひどく懐かしいものに感じてしまう。当たり前だったのはもう遠い過去...、そう思い知らされたようで、どんなに気持ちを頑張っても寂しさは突き上げてきた。

「ヒカル、何ボケッとしてるんだ？大丈夫か？」

田村がヒカルの肩をポンと叩いた。

「ヒビク先輩、今日は雪乃先輩と一緒にじゃないんですね...」

思わず気になっていたことがポロリと口に出てしまった。

「ヒカル...」

「あ、いえ、何でもありません。荷物運んでしまわないと...！」

ヒカルがあわてて立ち去ろうとした手を田村は咄嗟につかんで言った。

「あいつ、一緒に来るって言ってたんだ。けど、ヒビクがそれを許さなかったんだぜ」

「え？」

「けっこうごねてたぜ、大島の奴。ヒビクが`来るな、って許さねえもんだから。結局諦めたみたいだけどな」

「そうなんですか...。一緒に来ればよかったのに...」

ヒカルは呟いて荷物の搬入に向かった。

「...ったく、どいつもこいつも...！」

田村は忌々しそうにつぶやいた。

——一緒に来ればよかったのに、なんて嘘だよ。私、やな子だな。ヒビク先輩が大島先輩が来ることを許さなかったって聞いて喜んでる...。

「おい浅倉！ぼーっとしてると怪我するぜ？」

ぼんやりしたまま荷物を運ぶヒカルの手から、颯土はダンボール箱を取った。

「あ、ごめん...」

覇気のないヒカルの顔に、颯土は昨夜落ち込んでいたと話していたヒカルを思い出した。

「幼稚園での人形劇、夢だったんだろ？あかねが言ってたぜ」

「うん」

「じゃあ、落ち込むのは終わってからにすれば。`もったいない、から」

あら、そうちゃんじゃない！まあまあ大きくなって！と園長先生が嬉しそうに寄ってきたので颯土は逃げ出し、話はそこで終わった。だが、ヒカルは園長先生から逃げて行く颯土の背中を見送りながら両目を見開いて立ち尽くしていた。

——夢...。そうだよ...っ。

幼稚園の子どもたちに人形劇を見せてあげるという夢が、今叶っているところなのだ。自分の感情に囚われてぼんやりしているのは`もったいない、。

——ありがとう、群竹くん！

ボケッとしていたりぼーっとしていたりで今日が終わっていたらあとで後悔してしまうところだった。今日のこの時間を大事にかみ締めなくてはもったいなさすぎる。夢が叶うその場所に、大好きな仲間たちと大好きな響と一緒にいてくれるこの時間を——。ヒカルは笑顔を取り戻し、テキパキと動き始めた。

◇

準備が整い園児たちがホールに集合すると『キララ』の幕が開いた。舞台を改良し奥行きを出したことによって人形たちの演技の幅も広がり、ヒカルの家で初公演を行った時とは比べものにならない人形劇になっていた。ホールの一番後ろの席でスタッフということになっている響や颯土たちが観劇していた。一年前の『みにくいあひるの子』と同様、颯土は写真をそして祐輔はビデオ撮影をしている。

初公演の時と同じように人形の演技に併せて子どもたちの体も揺れる。ストーリーと演技に引き込まれた子どもは舞台のジュンたちと一緒に冒険をしている。

「頑張れジュン！ピョンタに負けるなー！」

「おじいさん、木の実を食べてー」

「ゴースト、ピョンタを放せー」

子どもたちが舞台に向かって叫ぶ。笑う。泣く。舞台と客席がひとつになっている。それは後ろから園児たちの背中と舞台を見ている響たちにはよく分かった。

——すごいな、ヒカル...。

響は改めて思った。肩になんの力も入れず自然体のまま、人々の心を温かさで満たすヒカルは陽の光そのもの――。

――俺も、がんばらなくちゃな…。

キララのハートが見つからず、国の争いを止められないと嘆くジュンとピュアに妖精キララは優しく言う。

『キララのハートとは、良いことは良い悪いことは悪いとはっきり言える正義の心、人に優しくしおもしろいやりをもつ愛の心、何事にもひるまない勇気の心、そして友達を大切に思う友情の心、そういうキレイな心のこと…それはあなたたちのいのち、そのものなのです』

その全部がヒカルの心なのだと響は思った。『キララのハート』はヒカルそのものなのだ。そして、さらに妖精の言葉は続く。

『キララのハートはどんな人のいのちにもあるものです。でも、人々はそれを忘れてしまっているのです。自分のことだけしか考えていないから、当たり前のことを思い出せないでいるのです』

――今の俺は『キララのハート』を忘れてしまっている…な。

自分のことしか考えていないから――。ヒカルのことと雪乃のことと…。正義も愛もみんなどこかに置き去りにしてしまっている。分かっている。それは分かっているが…。まぶしすぎるのだ。ヒカルという光が――。

――今の、こんなちっぽけな俺のままじゃヒカルの輝きに目がくらむばかりだ。もっと自分を磨かないと、自分をもっと光らないとヒカルに堂々と愛を語ることなど出来やしない――。

気がつくとうエンディングを迎えていた。人形たちが舞台に総登場し、子どもたちが『キララ』の歌に併せて一緒に歌っている。ふと横を見ると勇斗や麻耶たちが立ち上がって一緒に手拍子をうちながら歌っていた。響はスッと立ち上がった。そして麻耶たちと一緒に歌い始めた。「ヒビク…」

隣にいた田村も立ち上がった。

――ヒカル…。いつか必ず俺のキララのハートを手に入れて、お前を本当に守ってやれるような男になってみせるから…。いつか、必ず…！

瞼を閉じた瞬間、決意の雫が響の頬を伝った。

「――ばかじゃねえか、お前！」

田村の怒鳴り声が夜の静寂を破るように響いた。

「カッコつけんのもいいかげんにしろよ！」

最近の響の行動にどうにもこうにも合点がいかなくなった田村は、人形劇が終わった夜、響を近くの公園に呼び出した。響の秘密主義には慣れていた田村だが、三年になってからの響は不言の暴走が多すぎる。一ヶ月以上も音沙汰なしで消えていたかと思えば、戻ってきたらいきなり雪乃とつきあい始め、そのことについて説明も弁解もしない。響が何の考えもなしで行動しているとは思えないから余計に腹が立つのだ。

「カッコなんかつけてねえよ...」

冷たい風がふたりの頬を刺す。こんなふうに睨み合うのは初めてだった。

「最近のお前が変だってみんな分かってるけど言わねえだけなんだぞ。話したくないなら話さなくてもいいけど、辻褄が合わねえことやってんじゃねーよ！ヒカルが好きなんじゃなかったのか？何でそこすっ飛ばしていきなり大島とつきあったりしてんだよ？！」

「大島とはつきあっちゃいないさ...」

はぁ？と田村は間が抜けた声をあげた。響と雪乃はどう見ても誰が見てもつきあっているとは思えない。登下校時には必ず雪乃は響の隣を歩いているし、昼休みも一緒にランチをしている。ふたりはクラスも同じだから休み時間も教室で一緒にいることが多い。

「そのどこがつきあってねえって言うの？俺が非モテだからってバカにすんなよ？！」

響はフーッとため息をついた。そして、

「何、熱くなってんだよ田村.....」

と、つぶやいた。

「悪かったね！お前は涼しすぎだろが！余裕がないくせに余裕ぶって、だからカッコつけだっ
て言ってんだよ」

「余裕がないのに余裕ぶってか...。よく分かってんな、田村」

けど――、と、響は田村を見た。

「余裕ぶっちゃいねーよ。マジで余裕がないんだ。自分にも時間にも...」

時間にも？と田村。

「今のままの俺じゃ全然ダメだろ...。だから、俺はもっと自分を光らせねーとさ」

「だから、それがカッコつけてるって言うんだよ！何が全然ダメなんだ？ダメだとしたっていいじゃねーかそれで！お前はお前で十分だろが！どこがいけないんだ？俺にはちっともわっかんねーっ！」

普段、冷静に物事を外から眺めているような田村がこれほどの感情をぶつけてくるのは珍しい。それほどに田村が自分を心配していることは分かった。だが――。

「しょーがねえよ...。俺の価値観、俺の問題だから...」

「はあっ！お前はいつだってそうだよ！自分一人で生きているみたいな顔をしてさぁ！お前と俺

の価値観にいったいどれだけの違いがあるっていうんだ?! 尝试してみろよ!」

「田村...」

――田村が怒るのは無理ねえな...。

自分が田村ならやはり怒るだろう。確かに今、自分が取っている行動はめちゃくちゃだ。どこにも筋が通っていない。だが、そんな自分だからこそこのままでは――。

「ヒカルが可哀想だぜ...」

田村はポツリとつぶやいた。

「ヒカルはお前のお宝だったんじゃないのかよ」

「ああそうだよ...! 一番大事な宝だよ!」

響の叫び声が夜空を突き抜けていった。

「だったら...!」

「けど、俺だけのものにはならねえ宝なんだよ」

唯一しかないのに独占できない宝物。独りが持つには眩しすぎる宝物。

――それがヒカルなんだ...。

響は小さく息を吐いてゆっくりと歩き出した。

「ヒビク...?」

田村も響の後を追うように歩き出した。そして、ふたりはふたつ並んだシーソー台に座った。キィと金具がきしむ音がやたら大きく響いてふたりは辺りを気にしたが、たった今、これ以上の大声で怒鳴り合っていた。

「ヤバかったな、俺たち...」

「通報されてたりして...」

中学の頃は似たようなスリルを毎日ふたりで体験していた。校則を破って先生から逃げたり、喧嘩ふっかけて不利になって逃げたり、しかも大声で笑いながら――。

「中学の時、お前とか太郎次郎に出会うまでの俺はさ...、やたら尖がっていただろう」

「そうだな。けど、そうしてないと自分を見失っちまいそうだったお前の状況は理解してるつもりだぜ?」

響は、はっ、と笑った。

「俺は涼しい顔の下に隠した腹の中で、生き別れになった親父のことをどうしようもなく憎んでたし、俺を侮蔑してた連中のこともいつか見返してやるって思っていた。俺はそういう醜悪心を持ち続けていたんだぜ...」

「それは普通だろ? お前の境遇なら俺だってきっとそうだったぜ」

普通――。おそらくそれは間違っていないのだろう。普通の人間なら誰もがそうだ...、という場所に自分の感情はあったし、田村や他の連中だってきっと同じだ。

「けどな...、ヒカルは俺に言ったんだよ。親父に感謝する、って...」

「感謝...?」

「ああ。それмогоく自然に、まったく自然に言ったんだよ。俺がここに生きているのは親父のおかげだ、俺の音楽は親父から受け継いだ財産だ、俺の `響` は `ヒビク`、なんだって、俺らし

く堂々と響いているってさ...」

「ヒカルがそんなことを...」

「目からうろこってああいう時に使う言葉なのか？」

さあ、知らね...、と田村。

「とにかく、ヒカルが言った言葉は俺の`普通、じゃなかった。ヒカルのあの一言で俺はいろんな意味で解放され、だから『ライジングサン』が出来た」

「あの時か...！」

田村は、合宿所の談話室でのことを思い出した。できあがっていた楽譜に歌詞を書き込んでいた響の晴れやかな顔も同時に浮かんだ。

「なのに、俺ときたらヒカルを無意識に自分だけの宝箱にほうり込んでカギをかけちゃうことばかり考えてた。ヒカルを誰にも渡したくない、触れさせたくもない。俺だけのヒカルでいて欲しい、しちまおうって無意識にだぜ？気がついた時、自分が怖かったぜ...。ヒカルは俺を解放してくれたのに俺はあいつを縛ろうとしていたんだ...」

「だから諦めたわけか...」

問題は自分の方だと、以前響は言っていた。

「あいつに好きだって言っちゃったら、もう自分で自分が抑えられそうになかった。輝いてるお宝をくすんだものにしてしまいそうだった。俺はそういう身勝手に未熟な男だ。こんな俺を、あいつは先輩、先輩って慕ってくれる」

ヒビク先輩、と明るく笑うヒカルの顔はいつでも目に浮かばせることが出来る。その時のヒカルは自分だけのものだから――。

「だから俺は、あいつを見守ってやろう、あいつがやることを百パーセント以上で支えててやろう、って決めた。なのにさ...、」

響はやや自嘲的に笑った。

「支えられているのはいつも俺だったんだぜ？俺はあいつの前を歩いているつもりでいて、振り向いた時のあいつの笑顔に救われていたんだ。情けねえ話だよな...」

響は肩で息をついて空を見上げた。木枯らしが厚い雲をどこかへ連れ去ってくれ、いくつもの星がきらめいていた。

「あいつがそばにいないくちや、俺は自分の親父にも会いにいけなかったんだぜ？何が俺のお宝だ、だろ？」

「ヒビク...」

「だから、俺...、」

響は顔を真っすぐに田村に向けた。

「アメリカに行く」

「アメリカ...？」

「ピアニストになる...」

田村はゴクリと息を飲み込んだ。響の目が真剣だったからだ。

「ピアノは弾けないんじゃないかったのか？」

「それは嘘…」

やれやれ…、と田村はため息をついた。

「…ったく。どこまで秘密主義のカッコつけ男なんだよ、お前…」

「はは…。曲を作るのにはピアノが一番やりやすい。本当は一番得意な楽器…」

「何だよな、俺たちのピアニストを探すのにあんなに苦労してばかみたいだ…」

「おかげであかねに会えたんだから文句言うな…」

響はにやっと笑った。

「なっ？はぁ？！」

シーソーから勢いよく立ち上がった田村が、台の角に脛をぶつけて飛び上がる。

「おいおい。大丈夫かよ？」

いていて一とそこらを走り回る田村は、

「…で！アメリカの話！」

と、脛を押さえながら続きを促した。

「ああ。夏にジャックのツアーに参加させてもらったんだ。扱いはアルバイトのバンドボーイってことだったけど、親父としてのジャックじゃなく、世界のジャック・ベリーを目の当たりにして強烈なショックを受けたよ。音楽的にさ。ジャックにピアノを聴かせたら『なかなか上手に弾くじゃないか』だぜ？参ったよ…」

「お前のヤボ用ってのはそれだったのか…」

田村がつぶやき、響はうなづいた。

「音楽学校の適性試験…、ちょっと面倒な課題出されてさ…。時間がかかっちゃった。ほんと、何をやっても赤子同然…。俺はアメリカに自分のプライドを木っ端微塵にされにいったようなもんだぜ」

「音楽学校？まさか、決めてきたのか？」

響は頷いた。

「俺が自分に試練を与えるのはこれしかない、って思った。ジャックがいるアメリカで音楽を磨くしかない。音楽を磨くことでしか、俺自身を磨くことはできない」

「いつから行く？」

「卒業したらすぐー」

暴走魔…、と田村は呆れた顔で呟いた。

「いつ帰って来るんだよ？」

「とりあえず五年はやって来ようと思ってる…」

「五年…？！ヒカルはどうする…？！」

「…どうもしないさ。あいつは俺がいなくたって何ら問題はないだろう…」

——問題は俺の方…。

「……あいつへの想いを引きずったままじゃアメリカに行ったら何も変わらない。だから大島のこともあいつに弁解しなかった。あいつの為じゃなく、自分の為に」

「そんなにヒカルに惚れてるってのに自分に嘘つくんじゃないよ！俺たちまだ高校生だぜ！人生

悟り切った大人じゃないんだ。欲しいものは欲しいって素直にダダこねてもいいだろう？！お前の気持ちも分かるけど、それじゃあまりにもヒカルが可哀想だ！」

「お前がそれを言うな…」

響はニヤリと笑った。

「な、何だよ…？」

「お前だって俺と同じだろう？あかねに対する自分の気持ちに嘘ついてんじゃねーのか？お前こそ欲しいものは欲しいってダダをこねろよ」

田村はバツが悪そうに頭をかき、

「いいんだよ、俺は。あかねの幸せってやつを見守ってるだけで…満足なの！」

と、わざと腰に手をあてて言った。

「人生悟り切った大人みたいだ」

「フン！俺のことなんかどうでもいいの！お前だよ、お前！ヒカルはこの話知ってるのか？」

響は首を横に振った。

「このまま行っちゃうのは賛成しないな。五年は長いぜ？そんなにヒカルは待っていてくれないだろう」

「だろうな…。でもいいんだ。俺はここで一旦あいつへの想いに決着をつける。自分で認める俺になれば、その時にかっ攫いに行くからさ！」

「芸術家の気持ちってのは理解しかねるな…。もしもその時ヒカルがもう誰かの嫁さんになっててガキなんかもいたりしたらどーするんだよ？そんなのシャレになんないぜ！」

「そうだな。けど、もしそうになってたらその時の俺が答えを出すだろ…」

「カッコつけやがって…」

「つけてねえって…」

つけてるだろう…、と田村。

「けど、やっぱりこれ以上自分に嘘はつくなよ…。決着つけるのと嘘は違うと思うぜ？」

「だな…。心配かけて悪かった…」

響は素直に言って、手首のペンダントをはずした。そして、それを目の前でゆらゆらとゆらしながら首にかけた。その様子をじっと見守っていた田村は響の肩をポンとたたき夜空を見上げて歩きだした。

「キラキラキララか…」

田村は星を見上げながら呟く。

「キララのハート…か」

響は首にかけた八分音符をそっと握り締めた。

十二月一一。木枯らしに枯葉が舞う校庭を白い胴着の空手部が裸足でランニングをしている。走る颯土をじっと花壇の前で見守っているのはあかねだ。コートの襟を立ててマフラーをしっかりと巻いて、冷たい風の中にいても、それを気にしないほどに颯土を見ていたいひたむきな気持ちがあかねの姿からよく伝わってくる。

「あかねちゃん、いいなあ...」

今日のヒカルは少しだけ沈んでいた。お弁当を忘れてしまい、昼休みに購買部に行ったものの残っていたのはジャムパンひとつで途方に暮れていたら、たまたま居合わせた双子の次郎がコロッケパンをくれた。せっかくだから一緒にランチをしようということになり、ふたりで屋上に上がったら響と雪乃が特等席で仲良くランチをしているところを見てしまった。

分かってはいることだが、見たくない風景だった。無視をして通り過ぎるのはイヤだから明るく挨拶をしたが、

――やっぱりせつないんだよ...。

だから、あかねのあんな風景を見るとちょっと妬けてしまう。演劇部は今日は休み。今日だけじゃなく、先月の幼稚園公演で有志人形劇団はとりあえず解散になったから綾瀬とふたりでやることもなく、ほとんど休部状態なのだ。

ヒカルは窓から外を見るのをやめ、鞆を持って教室を出た。麻耶も部活だし話し相手もないから、もう今日はおとなしく帰ろう。

もの寂しさを感じながら廊下を図書室の前まで歩いて来たとき、

「ヒカルちゃん、帰るの？」

後ろから声をかけてきたのは柏木だった。どうやら柏木はこれから図書室にこもって下校のチャイムが鳴るまで読書をするらしい。バンドでは激しいドラムを叩いていた柏木だが、普段は読書が趣味で放課後はほとんど毎日図書室にいる。

「そう思っていたんですけど...、私も柏木先輩と一緒に読書してもいいですか？」

柏木の顔を見たらなんだかホッとして、もう少し一緒にいたいとヒカルは思った。

「もちろんいいよ？」

柏木はいつも座っている窓際のテーブルに着き自分の本を広げた。ヒカルも本棚から適当な本を手に取り、柏木の向かい側の椅子を引こうとした。

「あ...」

窓の外の花壇の前にはランニングが終わった颯土とあかねがいた。あかねは颯土の額に手を当てて流れる汗をハンカチで拭ってあげている。木枯らしになのか自然なのか、あかねの頬は紅く色づき白い息を吐きながら――。

柏木はヒカルの視線を追い、仲がいいね、と笑った。

「はい。ちょっと妬けちゃいます」

ヒカルは視線を本に戻して引きかけていた椅子を引いた。が、柏木はまだ校庭を見たまま言った。

「ヒカルちゃん、本当は読書なんてする気なかったんじゃない？」

「え？どうしてですか？」

柏木は視線を校庭からヒカルが用意した本に注いだ。

「...それ平家物語の巻第九だけど...、読めるの？」

あ、とヒカルは自分が手にしていた本を見た。中身は漢字ばかりで読めないどころか意味不明だ。

「へ、平家物語好きなんです！春はあけぼの一ってやつ」

それは枕草子だよ、と柏木は笑った。

「うう...。すみません。さっき、柏木先輩の顔を見たらちょっとお話してきたいなーって思ってた...」

「それは光栄だなあ...。でも...、」

柏木は校庭の梅の木のあたりに顔を向けた。ヒカルも釣られてそちらに目を向ける。

――ヒビク先輩？！

両手をズボンのポケットに入れた響が、ひとりで空を見上げて立っていた。

「あれ、風間くんがメロディを考えている時にするポーズだね」

「メロディを...」

「きっと繋げたい曲があるんだろうね。でも、あの顔は苦戦している顔だな」

柏木はヒカルを見て微笑んだ。

「そうなんですか...」

「ヒカルちゃんが励ましてあげれば、きっと風間くんもいいメロディが閃くかもしれないよ」

サラリと言って柏木は開いた本に視線を落とした。

「あの...柏木先輩？」

「ん？ヒカルちゃんには図書室より校庭の方が似合ってるな、って思っただけだよ？」

――図書室より校庭...。

「そうですね...！じゃ、行ってきますね！」

「ああ。またね」

柏木はチラッと顔を向けて言い、ヒカルが去ったあとは校庭を見つめていた。やがて梅の木の下に走っていくヒカルが見えた。

「...まったく、世話が焼けるふたりだよ」

ヒカルの行き先を確認してから柏木はやっと自分の読書タイムに入った。

◇

響はポケットに両手を突っ込み冬の空を見上げた。頬につめたい木枯らしがあたり髪も制服もヒラヒラと宙を泳ぐ中で、ずいぶん長い時間頭にあるいくつかのフレーズを繋げようとしているが上手くいかない。もう何ヶ月も前から作っている曲だ。はじまりはあの出会いから。これはもう決まっている。水が滴る向こう側で初々しい笑顔を携えて――。

『軽音楽部の部長さんの風間ヒビク先輩ですよ？』

柔らかな光が射し込む廊下で自分の名を初めて「ヒビク」と呼んだあれが全ての始まり。

『これ、どうやるんですか？』

珍妙なマラカスダンスを披露された時も、

『風邪ひいちゃいますよ！これ、貸してあげます』

おもいきりひまわりの柄がついた傘を差し出されたあの時も、

『ヒビク先輩の響はヒビクってことだったんだなって思うんです』

いのちの底に染み込んだあの言葉も、

『歩いたところに道が出来るんです。そしてその道は次の道に繋がっていくんです！』

輝いていた目、こぼれた涙、そして、

――ヒビク先輩！

そう呼ぶ声、顔、ヒカルのをすべてをメロディーにしたい。だが、たくさんありすぎるフレーズが一度に押し寄せてくるからなかなか上手く繋がらない。教室、音楽室、部舎、校庭、どこを見てもヒカルが笑っていて、こんな木枯らしが吹いていたってそのイメージは暖かい。メロディは次から次へと浮かんでくるが、どうやってひとつにしたらいいのか今の響には分からなかった。

「ヒビクせんぱいっ！」

ふいに声をかけられて響は振り向いた。木枯らしの中、鼻の頭を赤くして白い息を吐くヒカルが立っていた。

――ほんと、お前はいつだって同じ笑顔だな....。

春も夏も秋も冬も青空の中で輝く太陽のように笑う。その輝きは目に明るいだけじゃなくいのちの底に刻み込まれていく光だ。

「...苦戦中、ですか？」

黙って自分を見つめるだけの響にヒカルは言った。

「...苦戦？」

「柏木先輩が言ってました。今、ヒビク先輩はメロディを繋げてるようだけど苦戦してるな、って」

ヒカルは図書室を振り返って笑った。

「...さすが柏木。よくわかってるな...」

響も図書室を見て苦笑する。

「...そ。苦戦中....。それもかなり、ね...」

ヒカルを前にして響はらしくないため息を吐いた。

「ヒビク先輩ったら、自分を誰だと思ってるんですか？」

「...は？」

響は顔をヒカルに向けて首を傾げた。

「先輩はヒビク先輩なんですよ？いつも私に`頑張れ、ヒカル！`のひとことで元気をくれる奇跡のヒビク先輩なんですよ？」

――奇跡のヒビク先輩...て....。

ヒカルの言い方に響は口をポカンと開けた。むずがゆいくらいに恥ずかしい台詞なのに、ヒカルが言うと本当のこのように聴こえる。

「先輩の響は...、」

「響くってこと...って言いたいんだろ？」

「そうですよ！先輩がそこにいるだけでメロディなんです！焦らないで今、先輩の中にあるメロディを大切にしてください」

「そうだな。わかったよ」

――焦ってたのか、俺...。

溢れてしまいそうな想いを早く繋げてしまいたくて。でも、違う。ヒカルの言うとおりに、大切にひとつずつ...。

「...音痴のヒカルに言われちまうなんて、俺立場ねえな」

――ヒカルこそ奇跡...。またひとつ、メロディにしたいヒカルが増えた。

「私は音痴ですけど、そーゆーことは何故かわかるんです」

光。輝き。

――ヒカル...。

「響、は `ヒビク、。ヒカルは――。

いつかこのメロディがひとつに繋がった時は、その名前をタイトルにしようと響は決めた。

一九九三年 元日――。正月でも浅倉家は朝が早い。お年玉を楽しみにしている哲平が、まだ皆が寝静まっている頃から目覚まし鉄砲を鳴らし、

「ヒーねえ、くーねえ、つよに一、起きろっ！」

と、わめくからだ。新年のあいさつを家族の間で交わし、お正月料理をお腹一杯に食べてお年玉をもらうところまではいい。だが、それからが何日か続くお正月モードをもてあましてしまう毎年のヒカルだ。

晴れ着は去年母が久美子とお揃いで買ってくれた。ヒカルは山吹色、久美子は深緑で同じ花柄。ちょっと大正ロマン風のお洒落な着物だが丸洗いOKの安物だ。お正月しか着ることもないから今日は二人揃って着てみた。

「せっかくお正月っぽく着物も着たことだし百人一首でもやろうよ」

久美子がかかるたを持ってきたのでやる気になってみたが、

「風そよぐ 奈良の 小川の 夕暮れはあ〜」

と、詠まれたところで、

――は？

なヒカルだ。結局ふたりとも歌を知らないからだれるだけ。よくテレビで観るような、パシッとかるたを弾いて飛ばす爽快な遊びが出来るわけもなく、坊主めくりがいいところ。すぐに飽きてしまい台所のおせちをパクパクつまむ。お腹が苦しくなったところで今度は、

「羽つきしようよ！」

と、久美子。食後の運動にちょうどいいから、

「どうせやるなら本気でやろう！」

ヒカルは筆ペンを取り出した。だが、これも慣れない晴れ着のせいでうまいこと動けず羽は見事に道路に落ちる。ふたりの顔には瞬く間に○、×、△の黒い模様でいっぱいになった。

「ヒーねえの顔、もう書くところがないよ」

「うそでしょ？そんなにヒドイ？」

「真っ黒！こんな顔、ヒビク先輩には見せられないよ！」

「い〜もん。どうせ見せないから！」

ヒカルが膨れた時だった。カシャッという音とともに一瞬の閃光がまたたいた。

「えっ、何?!」

ヒカルが見回すと、再び同じ音と同じ閃光が走り、

「ピクチャーライフにでも出すかな。また大賞取れるかもしれないし！」

颯土が隣家の門からカメラを持って出て来た。

「何てとこ撮るのよっ！」

「ひっでえ顔！」

颯土はふたりの顔を指差して笑った。そんな颯土の笑顔を見て、

「あたし、群竹くんが笑ったの初めて見たかも…」

横で久美子が半分呆然としながら言った。

「わ、悪いか...」

「ううん。前からいい男だと思ってたけど、笑うと一段とス・テ・キ！」

と、久美子はチャカす。

「ぶっとばすぞ、お前！」

颯土に手を上げられて久美子はきゃ〜と叫びながら家の中に入ってしまった。

「お前の妹はやっぱお前の妹だよな」

「どういう意味よそれ」

プーッと膨れたヒカルの頬を見て、颯土はこれと同じものをついさっきどこかで見た気がした。だが、どこで見たのかを思い出せない代わりにシャッターを切った。

「あ！また変な顔撮った！ほんとに『ピクチャーライフ』に出すつもりじゃないでしょうね？」

「出すわけないだろう、こんなしょーもない写真...」

と、答えながら颯土はまだ考えている。

「しょーもない写真で悪かったですね。あんたがどれほどの写真を撮ってるのか見せてもらいたいものだわ、ぜひ！」

「はいはい...。あっ、そうだ。お前を呼んで来いっておふくろからの伝言があったんだ」

「おばちゃんが？」

「ああ。ぜんざいだか雑煮だか作ったんだとさ」

ここでようやく颯土は思い出して叫んだ。

「餅だ！」

「だからお雑煮でしょ？お邪魔するよ」

「そうじゃなくて、お前の顔！」

はあ？！とヒカルはおもむろに怪訝な顔を颯土に向けた。

「膨れた顔、どっかで見たなと...。よかった...思い出せて...。何だったか思い出せないと気持ち悪いし...」

颯土が独りごとのようにぶつぶつ喋っている間にもヒカルのはらはら膨らんでいる。これが本当に餅だったらそろそろプシュッと音を立てて割れるのだろうが、ヒカルは手に持っていた羽を颯土に投げつけた。

「いてっ！何すんだよ！」

「顔洗ったらお邪魔しますっておばちゃんに言っといて！」

ヒカルはプンブン膨れながら家の中に飛び込んだ。

「何怒ってんだ、あいつ...」

本気で分かっていない颯土だった。

◇

群竹家には颯土の父もいた。休みとくればコタツで寝てばかりいる自分の父親と違い、颯土の父はきちんと身支度を整えサッパリとした姿で食卓についていた。息子はあんなだがその両親はふたりとも温和で話好きだ。おしるこをご馳走になりながら学校でのことなどを語ってあげると

ふたりとも喜んで話を聞いてくれる。

そして、この家の息子といえば両親の相手をヒカルにまかせ、自分はさっさと二階の自室に上がってしまっているのだ。

――なんか面白いの。

「そうそう、ヒカルちゃんに訊こうと思っていたの。颯土がいないからちょうどいいわ」

颯土の母が声をひそめ、二階を気にしながら言った。

「最近水沢さんって女の子から颯土によく電話がかかってくるのだけど、どんな子かしら？」

ヒカルは思わずニヤついてしまった。以前の颯土にしたら女の子から電話があるなんて考えられないことだろうから、母が気になっているのも大いに頷けてしまう。

「とっても可愛くて優しい子だよ、おばちゃん！あたしの親友なの」

「まあ、そうなの？」

あかねはこの家にも来たことがあるはずだが、この母は覚えていないようだった。

「ねえねえ、もしかして...、その子と颯土って...」

母が訊きたいことは分かったが、

「うーん...、それはあたしからは何とも言えないよー。本人に訊いた方がいい...と言ってもアレだけど...」

あの颯土があかねの話を母にするはずもない。

「アレなのよ...。でも、まあいいわ。颯土に女の子のお友達が出来るとなんて奇跡みたいなもの。出来ればヒカルちゃんが彼女になってくれたら嬉しかったんだけど」

「おばちゃん？」

この母は以前も、ヒカルちゃんが颯土のお嫁さんになってくれたら...などということを書いていたが、その手の希望にヒカルはコメントの返しようがない。

「うそうそ。冗談よ」

颯土の母はあっけらかんと笑った。

まだいたのか、と颯土が下りてきたのはヒカルがおしるこを二杯ほどご馳走になった頃だった。写真が観たいというヒカルに颯土は渋々承諾し、今、颯土の部屋でふたりは写真のファイルをめくっている。

――本当に群竹くん変わったなあ...。

一年の頃の颯土の鋭い眼差しを思い出しながらヒカルはしみじみ思った。

「わあ、この写真、すごくキレイ...」

ヒカルが手に取ったのはぼんやりとオレンジ色に染まった空と海の写真だった。

「何か、パズルかなんかにありそうだよ。この写真」

「この写真には続きがあるんだ」

颯土は次々に写真をヒカルに渡した。同じアングルで撮った写真だ。空間の全体が薄いオレンジ色から濃いオレンジ色へと変化し、太陽が海に重なり沈み行く瞬間と、沈んだ後の蒼の写真。どれも美しい風景の写真だった。

「これ、本当に群竹くんが撮ったの？」

「ああ」

ヒカルはそれらの写真をじっと見つめ、

「あんた、天才だわ...」

と、つぶやいた。

「ばか言え...」

「本当だって。この写真からこの場所の匂いとか風とか空気が伝わってくるもん。あたし、自慢じゃないけど今まで写真を見てそんなふうにしたことってないよ？」

颯土は少し照れ臭そうに笑った。

「あっ！この人何？！」

ヒカルは麻希の写真を手に取って叫んだ。

「あーっ！この人ばかりこんなにいっぱい撮ってる！あかねちゃんに言っちゃおう！」

「や、やめろよな！この人は沖縄で出会って何日か一緒にキャンプしたライダーなんだよ」

と、颯土は少しあわてて説明した。が、

「なに？一緒にキャンプだとお？ぜったいあかねちゃんに言いつけてやる！」

ヒカルは余計に意地悪な顔をする。

「だから！」

颯土はヒカルの手から麻希の写真を奪い返そうとした。

「うそうそ、冗談だって！写真見れば分かるよ。でも群竹くんが変わったのってこの人の影響だったりして〜？」

鋭い！と、颯土は内心ギクリとした。

「変わったって...、」

「沖縄前沖縄後って...、群竹くんは使用前使用後のように変わった感じがしてた。変わったって言うのは変かなあ？でもそうだよな。今までの群竹くんとは違うんだから。今までだったらこんなふうに群竹くんの部屋で写真見せてもらうなんて考えられないことだったし、群竹くん、しゃべらなかったし...。そー考えるとすごい変わったよね、あんた！」

「くだらないこと言ってんなよ。写真、見ないならしもうぜ」

「あー、見る見る！」

ヒカルは颯土がしまいかけた写真を奪うように手に取った。

「でもこの人、どこかで見たような...」

ヒカルは麻希の顔に見入る。お前だろ...、という言葉が颯土は飲み込んでいた。

「何かどれもいい顔してるね。この花束を持ってるのなんか最高にキレイだよ？」

「その花束、この人の死んだ恋人への手向けなんだぜ」

颯土はポツリと言った。

「え？本当？じゃあ、この写真は...」

「ああ。その場所は恋人との思い出の場所なんだってさ。彼女はその花束を手向けるために京都から一人でバイクで来ていたんだ」

「でも、ぜんぜん悲しそうには見えない...」

麻希が花束を海に投げ込む瞬間を連撮した写真を次々と見つめてヒカルは言う。どの写真でも麻希は優しい笑顔を浮かべていた。

「別れを悲しむより、一緒にいた時間を大事にしているって言ってた」

そう言って、颯土はヒカルの顔を見た。ヒカルは麻希の写真をじっと見つめてからそれを置き、別の写真を手に取った。

「これ...って...」

それは去年の文化祭で颯土が撮った写真の中の一枚だった。『ピクチャーライフ』に投稿されたものとは別の、響とヒカルが肩を寄せあってステップを踏んでいる写真だった。

「なつかしいね～。私とヒビク先輩、すごく楽しそうに笑ってる」

「ああ。欲しけりゃそれ、やるよ」

「ほんと！？ありがとう！」

ヒカルは嬉しそうにニッコリ笑った。

「...私とおんなじだね。その人」

ヒカルは写真の麻希を指さした。

「ああ、そうだな」

大切な人と一緒にいた時間を大事にしている麻希とヒカル。颯土は写真の麻希と目の前のヒカルを見比べて、やはり似ていると思った。

「群竹くんはカメラマンになるの？」

「...わからない...。けど、結野の兄貴にはついて行ってみようと思ってるんだ」

「それじゃ、写真はこれからも撮り続けるんだ？」

「まあな」

「新しい写真撮ったらまた見せてね。私、群竹くんのファン第二号になるから！」

「第二号...？」

ずいぶん半端なファンだな、と颯土。

「だって第一号はあかねちゃんでしょ」

途端に颯土の口元がしまりなく緩んだ。

「もう...。ニヤケすぎだよ？」

真っ赤になってニヤケてなんかない、と言う颯土にヒカルはケラケラ笑う。

「ねえねえ。せっかくのお正月だから、これから墨田公園でも散歩に行かない？」

「...べつにいいぜ」

「え？いいの？」

ヒカルはやや驚いた。以前の颯土ならこういう時もジロリと睨まれたため息をつかれたただけだったろう。颯土の部屋の窓からは自分の部屋が見える。これも、あっちからマメに消しゴムを投げ続けた功績なのか、とヒカルは思わずにんまりした。

それじゃ行こうかとふたりで部屋を出ようとしたとき、颯土にあかねから電話が入り散歩はお流れになった。だが、ヒカルはほっこりと嬉しかった。いつもはつまらない元旦も今日はいいー

日だった。このままひとりで散歩してもいいかな、と思いながらヒカルは群竹家を後にした。

新学期を迎え三年生たちは受験が始まり、ヒカルやあかね、勇斗や祐輔たちも部活の引き継ぎなどが忙しくなりはじめ本城高校内もなんとなく落ち着かない雰囲気漂っていた。三学期はこうして慌ただしく過ぎてしまい、あっと言う間に卒業式を迎えてしまうのだろうか、と思い、「ハーッ」

ヒカルは今日、何回目かのため息をついた。

「ヒカル先輩、今日は随分ブルーになってますね？何かあったんですか？」

さっきから頬杖をついてため息ばかりはいているヒカルを綾瀬は心配する。

「別に…。私だってたまにはブルーにもなるのよ」

「まあ…、我が演劇部の未来を思えばため息が出てしまうのもわかりますけど…」

綾瀬もため息をついた。演劇部の時期部長はもちろん綾瀬に決まっていた。といっても、来年度は綾瀬一人。ヒカルが残留したとしても二人。このままでは演劇部はまちがいなく廃部になってしまう。

「来年は演劇部を改めて人形劇サークルでスタートを切ったほうがよさそうですね？」

「それは駄目！演劇部の名前は未来まで残すこと！部室も守ること！この二つが時期部長であるあんたの使命！」

と、ヒカルは急に熱くなった。

「そんな～」

「私だって頑張ったんだからね。綾瀬くんもがんばりなさい！出来るだけ協力するから！」

「何をどう協力してくれるんですか？」

「春のオリエンテーションでインパクトのある勧誘活動をするしかないね」

ヒカルは、去年響が言ったこととまったく同じ台詞で答えた。

「…そうですね」

「大丈夫！なんとかなるって！廃部にさえならなければどうにでも出来るんだから頑張ろう！」

ヒカルが笑ったので、はい、と綾瀬は頷いた。去年、いきなり演劇部に回されて途方に暮れていた時、この笑顔には魔法がかかっているのだろうか、と思った。ヒカルが笑っていればそれだけで力が沸いてくる。だからさっきのようにブルーでいられるのはツライのだ。

「さ、帰ろ…。綾瀬くん、あとよろしくね～」

「よろしくって…？何もやることないじゃないですか」

「部室の掃除！」

「またですか？ここんところ演劇部の活動は掃除ばかりですよ？こんなにキレイじゃないですかー」

いつも掃除ばかりさせられている綾瀬はぼやいた。

「文句言わないの！お先に！」

ヒカルは綾瀬を一人残して部室を出た。

外に出て手すりに肘を当て校庭を眺めると、空手部が勇斗と颯土を先頭にグラウンドをランニングしていた。いつものようにあかねが花壇の前に座り、颯土をじっと見つめている。

「――恋人の～勇姿を見つめひざかかえ～過ごす放課後の、校庭かな～、ちょっと字余り～」

ヒカルは思わず手すりに体重をかけ、下を覗き込むようにして大きなため息をついた。その時、

「こら！ヒカルッ！」

下から大声でしかられて、

「ハ、ハイ！」

ヒカルは飛び上がった。

「その手すりはヤバイんだって前にも言ったろ？！さわるな！もたれるな！のりだすな！」

怒鳴っていたのは響だった。

「ヒビク先輩！」

今までため息をついていたヒカルの顔がパッと輝き、ますます手すりから身を乗り出した。

「おい！こら！」

響が部舎の階段を駆け上がってヒカルの腕を引っ張った。

「全く！学校もいいかげん修理するか取り替えるかしらよな！こーゆーおたんこなすがいつ落ちるか知れねえんだからっ！」

響はヒカルの手を握ったままわざと大声で叫んでいた。部舎自体が古い建物だから二階のフェンスも老朽化している。鉄の手すりは錆付いていて手でこすると赤茶色の粉がサラサラ舞うほどだ。さすがに折れたり外れたりはないだろうが、ヒカルのようなお転婆はありえないことをするから、と響にはずいぶん前から注意をされているヒカルだった。

「先輩...、おたんこなすっていうのはひどすぎです。それに、こらっ！っていうのはやめてくださいよ。子どもじゃないんだから...」

「んじゃ、スットコドッコイがいいか？」

ヒカルは、もう...と言ってからケラケラと笑いだした。何がおかしいんだ...？と言いながら響も吹き出していた。二人はそろって階段を下りた。

「ところで、さっきの歌はなんだ？恋人の～なんだからんだらってやつ...」

「やだなあ、先輩聞いてたんですか？群竹くんを待つあかねちゃんを見てたら自然に出来ちゃったんです。い～な～って思って」

「まあな。羨ましくていっちゃそうなんだろうが...」

陰で泣いてる男もいるんだぜ...、と、響は花壇に座るあかねを見た。

「はい？何か言いました？」

「いや？」

響はフクザツなため息を吐いて誤魔化す。

「ここ最近、今までに輪をかけて仲がいいんですよ、あの二人。見ているこっちがはずかしくなっちゃう...」

あかねが花壇で颯土を待つのは毎日だ。中庭でランチするのもほぼ毎日だ。一緒に帰るのも毎

日だ。きっと、誰も見ていないところでは手を繋いだり腕を組んだりしているに違いない、とヒカルは思っている。

「そりゃ、ヒガミってやつだ」

「ええ、おっしゃる通りでございます...」

と、ヒカルはペコリと頭を下げその頭を再び持ち上げた時、ふと気がついたように言った。

「先輩、また背が伸びたんじゃないですか？」

「そんなことないだろう」

「ううん。だって先輩と並んで歩くの久しぶりだから分かるんです。前は、私先輩の肩より上にいたのに、ほら、今は先輩の肩に届くのがやっと」

「んじゃ、お前が縮んだんだ」

「んなわけないでしょう、もう...」

響と肩を並べて歩くのは夏の日の日光以来のことだった。雪乃が登場してからは響の隣のスペースはいつでも雪乃が占領していたからだ。

確かにヒカルの位置が低くなったな、と響は思っていた。そんなふうに感じられてしまうほど随分長い時間が流れてしまったのか、と。

「先輩、進路は決まったんですか？」

唐突なヒカルの質問に、響は思わずビクリとして立ち止まった。

「大学受験するんでしょ？もうそろそろですよね？」

「あ、ああ。まあな...」

響はあやふやに答えた。卒業後に行く音楽学校は大学ではない。ミュージシャン、アーティストを目指す者たちが世界中から学びに集まる音楽の専門学校のようなものだ。

「どこ受けるんですか？やっぱり音大？」

「まあ、そんなところかな...」

「そうですか...」

ヒカルはおもむろにガッカリした。

「どうしたんだ？」

「だって、音大じゃどうやったって無理だもん、私...。絶対に先輩と同じ大学には行けないなーって思って」

響は、はっと笑った。そして、ヒカルのおでこをチョンとつついた。

「別にいいだろう、俺と同じ大学に行かなくたって」

「そうですけど...、出来れば同じ大学に入った方がいつでも先輩に会えるじゃないですか」

「なんだあ？ヒカルちゃんは俺と離れるのが寂しいのかあ？」

そうチャカしながら、響の心の中ではヒカルの言葉がうれしくもあり、せつなくもある。このままのヒカルをポケットにでも入れてアメリカへ連れていけたらどんなにいいだろう。

――...ったく、こんなこと考えてちゃ何も変わらないだろ...。

響は己の愚かな妄想をすぐさま抹消した。

「そりゃ寂しいですよ。先輩と離れるのはお父さんが単身赴任で遠くに行ってしまうような...」

「お父さん...?! 俺、お父さんか?!」

ヒカルはまたケラケラと笑った。真冬の寒さがどこかへ飛んで行ってしまうほど暖かな感情が沸いてくる笑顔で。

「じゃあ、同じ大学はあきらめたとしても、先輩、卒業してもいつでも会えますよね？」

笑顔のままヒカルは響の顔を見上げた。

——会えない。いつでも会えない。少なくとも五年は会えない…。

響は言葉に詰まる。自分で決めたことに揺らぐ——。

「ヒカル...、俺な...」

卒業式の後すぐにアメリカに行くことを打ち明けよう...と、響は考えた。言って、そして——。

——そして何だ？ 待っててくれとでも言うのか...。いつになるか分からない未来までヒカルを縛るつもりなのか——。

そんな言葉につまる響の態度に、ヒカルは突然思い出した。

——そうだ。ヒビク先輩には雪乃先輩がいたんだよね...。

つい、いつもの調子で話していたが、もう今までの響じゃないのだ。

「な～んて、言ってみただけですよ、先輩！ 深い意味はありませんからそんなに悩まないでください」

「ヒカル?!」

「でも、もしも万が一私が音大に入ったとしても、あっちいけよ！ なんて言わないでくださいね！」

ささやかなヒカルの本心——。

「それじゃ、先輩。受験頑張ってください！」

ヒカルはペコリと頭を下げると、にっこりと微笑んで立ち去った。

「お、おい、ヒカル！」

響が後を追った時は、クラスメートに出会ったヒカルが快活に喋りながら共に歩き去る後ろ姿を見せていた。

卒業式まであと一ヶ月。そして、渡米まであと一ヶ月――。

「...ごめん。大島」

見事な夕焼けが西の空に映える屋上で、響は雪乃にアメリカに行くと言った。

「...何で謝るの？」

潤んだ瞳を隠しもせず、それでも華麗な笑顔を携えて雪乃は呟いた。

「曖昧でいたつもりはなかったけど、大島を傷つけてたのは確かだろ」

「...風間くんが謝る必要ないじゃない？私が勝手にくっついていただけなんだもん。そりゃ、ちょっとは期待してたところもあったけど」

雪乃はくるりと響に背中を向けて、フェンスのはるか向こうの空を見上げた。

「風間くんはやっぱり浅倉さんが好きなんでしょ？」

上を向いたまま雪乃は言う。

「好き...というのとはちょっと違うかもな」

――好き、嫌い...、そういう言葉で片付けてしまえる思いじゃない。

「じゃあ、愛してる？」

――その言葉も...また違う。今はまだ重過ぎる.....。

響はゆっくりと首を振る。

「...言葉に出来ないほどの想いかぁ」

雪乃はまたくるりと振り返って響を見た。

「...悔しいなぁ」

言葉と同時に一粒の涙が頬を伝った。

「大島...」

「ごめん、気にしないで？あまりにも悔しくてさ」

雪乃は指で涙を払う。

「あたし、一年の最初っから風間くんのこと想ってたけど、あの頃の風間くんはちょっと今と雰囲気違ってたよね？女の子を寄せ付けないっていうかさ」

「.....」

響は答えずにさっき雪乃が見ていた西の空に目を向けた。紅い夕焼けとまだ残っている青空が融合して紫の線を引いている。

「でも二年になってからの風間くんは、そういう雰囲気を払拭したというか、自然体になって...、私はますます好きになっちゃった」

響は心の中で苦笑する。

「あたしさ、悪いけど自分に自信があった。風間くんの傍にいて似合うのは学校中であたしだけって思ってたもん」

響は、思わず声を出して笑った。嫌味なく言えるところはまったく雪乃らしい。

「...まさかあたしより似合っちゃう子が入学してくるなんて思ってなかった。そして風間くんが

その子の虜になっちゃうなんてことも...ね」

――虜...か。

「あまりにも悔しくて押しかけ女房して...、ちょっとだけ勝った！なんて思ってたけどやっぱりダメだったかぁ」

雪乃はまだぼろりと涙をこぼす。そして、これは、悔し涙だからね、と言いながらそれを払う。

「風間くんがアメリカに行っちゃうなら...、かえってその方がいいわ。スッキリと諦められるしそれに浅倉さんだって...、」

雪乃は言葉を切ってからため息をひとつ吐いて、

「あたしってやなセーカクだな...」

と、呟いた。しばらくの間、どちらも言葉を出さずに同じ空を見上げる。そして、

「...うん、わかった！もういいよ。少しでも風間くんの傍にいられて満足したことにするから！」

雪乃は心を決めたような晴れやかな笑顔を見せる。

「...サンキュ」

響は複雑な面持ちで言うしかなかった。

「...浅倉さんに早く言ってあげなさいよ。ついでに想いも伝えちゃいなさいよね。こんなこと言いたくないけど、ここで風間くんの態度がハッキリしてくれないとあたしも辛いから」

「ああ、伝えるつもりでいる...」

――けど...、それは、今をどうにかする言葉じゃなく――。

「...ああ、悔しいなあ！」

雪乃はもう一度そう言ってからカラリと笑った。

響が昇降口まで降りてくると、今、ちょうど帰ろうとしているヒカルが靴を下ろしたところと出会った。

「ヒカル」

響がそばに立って声をかけると、ヒカルはかがんだ姿勢のまま顔だけを上に向けた。

「あ、ヒビク先輩っ！今帰りですか？」

「ああ」

「今日はひとりなんですか？」

「...ああ」

「そっか...。私の家が駅の方だったら先輩と一緒に帰れるチャンスだったのに、まるっきり反対方面なんてざーんねん！」

「.....ヒカル」

卒業まであと一ヶ月。そして、渡米までも一ヶ月――。伝えたい想いはまだ完成していないけれど.....、

「ヒカル、デートすっか！」

響は下ろされたヒカルの靴を手にしてもう一度下駄箱に戻した。

「...えっ?!デート?」

響の言葉と行動に、ヒカルは目を丸くして立ち尽くす。

「俺とデートはいやか?」

「...いやだなんて、そんなことは...」

しどろもどろに答えるヒカルの腕を取り響は、

「じゃ、行こう!とっておきの場所へ!」

と、やや強引に廊下を戻って歩き出す。

「...デートって学校の中?」

ヒカルは腕を引かれるままちょこちょこついていく。ヒカルの腕をしっかりと握り、響は廊下の先の階段を一段一段踏みしめるように昇り始めた。

——たぶん...、これがヒカルとの最後のデート...。

ボタン、と勢いよく屋上の扉を開けると、目の前に広がったのはまばゆいほどのオレンジ色の空——。

「うわあ〜!キレイですねえ!」

扉の前に突っ立ったまま、ヒカルは声を上げた。

「屋上からこんなにキレイな夕焼けが見られるなんて...今まで知らなかった」

「いいだろ...?学校の中だってこーんな場所があるんだぜ?」

響は握ったままのヒカルの腕を取って屋上を歩き、ヒカルをフェンスに近づけて自分はその後ろに立った。

「本当に真っ赤だ...。あ、先輩、あっちには月も見えるし一番星も!」

真上を見上げてヒカルは空を指差した。目の前のその黒髪に響はそっと顔を近づける。柔らかで清らかな石鹸の香りをかみしめて、気づかれないようにさり気なく唇をあてる。いつかこの同じ屋上で飛行機が描いた線を指差し、私も空にお絵描きがしたい、とヒカルは言った。あの時の青空と今日の夕焼けは、この石鹸の香りと共に忘れることはないだろう。

お絵描き、幼稚園、人形劇、そして石鹸の匂い——。五年後も、もっと先までも、ずっとこのままのヒカルでいて欲しいと願ってしまう...。

——言葉で言うのはやめておくよ。どんな言葉も嘘になりそうな気がするから...。いつか、俺のメロディが君に届くように、届けられるように...、ちょっとひとりで頑張ってみるから、この風景と空気と君の匂いを焼き付けさせて——。

「...先輩?」

フェンスと響の間に閉じ込められているヒカルが振り返った。

「...ん?なに?」

「素敵なデートに誘ってくれてありがとうございました」

「...いや」

響は掴んでいたフェンスから両手を放した。

「私、きっと今日のこの色も景色も忘れません...」

ニッコリと笑うヒカル笑顔はいつもと同じはずだ。だが、今日は背中に広がるオレンジ色の
せいか少しだけ儚く見えた。

もしも願いが叶うなら 最後に君を抱きしめたい
遥かな想い覚えていたい君のぬくもり キラキラヒカル
永遠（とわ）に悠久（とわ）に...

またひとつ、大切なフレーズが生まれた。

三月一一。明日からの期末試験が終われば卒業式まで試験休みになるため、三年生にとって学舎での高校生活は今日が最後だった。卒業式は三月十五日。響がアメリカに発つのは同じ日の夜の便。

田村はミキシングの専門学校に進路が決まり将来はレコーディングエンジニアを目指す。柏木と太郎次郎もそれぞれ大学への進路が決まり、あとは卒業式を待つばかりとなっている。

今、響は音楽室のピアノの前にたたずんでいた。ヒカルがあかねをつれて初めて音楽室に乗り込んで来た日のことが脳裏に浮かんでいた。挑むような目つきで自分を睨んでいたヒカル。からかうと鼻を膨らませてまるでチャウチャウのような顔になったヒカル。泣いたり笑ったり怒ったり、その時のありのままを素直にぶつけてきたヒカル…。たった二年前のことなのに、もうずいぶん昔のように感じる。あかねがここでピアノを弾き、田村がそこでギターを持ち、自分がマイクを握り、その横でヒカルがマラカスを振っていた部活動。『キララ』の台本を初めて読んだのもこの場所だった。ふと窓の外を見下ろすと、ヒカルが忙しそうに走り回っていた体育祭のあのころが幻のように目に浮かんだ。今は誰もいない校庭に、ヒカルが元気に走る姿が想い描かれる。

いつもこの場所から無意識にヒカルの姿を探していた。ヒカルがバタバタ出入りしていた演劇部の部室も今はひっそりと静まり返っていた。高校生活と云ったら教室よりもこの音楽室。響にとっては忘れることの出来ない場所――。

作りかけの曲の仕上げはこの音楽室のピアノしかない。そう思って響はここに来た。響はピアノの前に座ると、今、頭の中で仕上がったばかりのメロディを奏で始めた。

◇

ヒカルが下校しようと教室を出た時、二年C組にやって来たあかねとドア前の廊下で会った。「群竹くん、あかねちゃんが来たよー」

教室を振り返り、帰り支度をしていた颯土と呼ぶと、ちょっと待ってという返事。ふたりはこれから公民館の学習室に行き、明日の試験に備えて颯土があかねに数学を教えることになっている。

「いいな―あかねちゃんは一。あたしも行っちゃおうかな～」

数学が苦手なのはヒカルも同じ。

「いいよ？ヒカルちゃんも一緒に勉強しようよ」

あかねは優しく誘ってくれた。

「冗談だよー。ふたりの邪魔するようなヤボなことしませんよ。というか、私がミジメだし…」

何言ってるの、とあかねは笑った。そこへ仕度を終えた颯土が来た。

「ごめん、俺ちょっと顧問に呼ばれてるんだ。先に行っててくれないか？」

公民館は学校の隣だ。

「分かった。先に行って待ってるね」

「三問ぐらい解いてる間に行くから」

颯土は真顔で言って職員室へ向かった。

「群竹くんの三問と私の三問じゃかかる時間が全然違うんだけどな...」

あかねとヒカルと一緒に昇降口まで行きそこで別れた。

自転車を連れて校門を出たところでヒカルは雪乃にバツタリと出会った。雪乃は誰かを待っているように校門の壁にもたれかかっていた。

「あら、浅倉さん」

雪乃は優しい笑顔で声をかけてきた。

「こんにちは雪乃先輩。ヒビク先輩を待ってるんですか？」

「ううん、違うの。友達」

雪乃は首を振ってあっさりと言う。いつも必ずとっていいほど登下校時には響と一緒に、変だな、とヒカルは思った。

「私ね、風間くん追いかけるのやめたのよ」

追いかける？と、ヒカルの頭に疑問符がついた。

「風間くんには私の魅力が分からなかったみたいだし」

「は？」

ヒカルには雪乃の言葉の意味がさっぱりわからない。追いかけるとか魅力が分からないとかどうということだろう。二人はつきあっていたのではないのか。

「でも私は満足できたからそれでいいの。まあ、ショックはショックなんだけどね」

「雪乃先輩、何言ってるんですか？」

ヒカルは思っていることをそのまま訊いた。なにか嫌な予感がしてならない。

「私と風間くん、つきあっていたわけじゃないのよ。私が押しかけ女房を気取っていただけなの」

——...え？

「どうして.....」

雪乃は寂しげに首を横に傾けて笑った。

「もしかしてつきあっていると思っていた？」

当たり前だ。いつもあんなふうと一緒にいればそう思わない方がおかしい。自分だけでなく颯土もあかねも麻耶たちもみんなそう思っているはずだ。もう何ヶ月も——。

「風間くんはずっと同じ風間くんだったわけ。ちょっとは私になびいてくれるかもって期待していたんだけどね」

どうして響は何も言ってくれなかったのだろう。つきあっていると思い込んでいるみんなに...、

——...私に、弁解してくれなかったんだろう。

誤解されたままでよかったのかと思うと、ヒカルの胸に言いようのない悲しさが込み上げた。響が誰を特別に想っていてもそれは仕方がないと思っていた。だが、もしも恋愛感情だけではなくひとりの近しい人間としても眼中に入っていなかったとしたら、きっと立ち直れないぐらいに

悲しすぎる。鬱々と沈み込むヒカルに、雪乃は淡々と次の言葉を発した。

「とにかく、もういなくなってしまう人をいつまでも思い続けても無駄に年をとるだけだし、風間くんのことは青春の一ページとして残すことにしたの」

――いなくなる...？

ヒカルは呆然と立ちすくんだ。

「いなくなるって...」

――どういうこと...？誰がいなくなるの...？

「あれ、浅倉さん、風間くんから何も聞いてないの？」

ヒカルは激しく首を横に振っていた。雪乃は屋上を見上げてあからさまにムツとした。

「...言ってあげてって言ったのに...。何考えてるんだろう風間くん...」

ヒカルの真剣な眼差しを受け、雪乃はふう...と小さな息を吐いた。

「彼、アメリカに行って音楽の勉強をするんですって。卒業式が終わったらすぐに行ってしまうのよ。五年は帰ってこないって言ってたわ」

――そ、んな.....。

ヒカルの頭の中は真っ白になった。そして目の前は真っ暗になった。血の気が頭からつま先にサーッと落ちて行くような感覚が走る。

「いくら私でもアメリカまではついていけないじゃない？」

雪乃の言葉はもうヒカルの耳には入っていなかった。雪乃が待っていた友人が現れ、それじゃね浅倉さん、と言って去って行ったこともヒカルにはわからなかった。文字どおりその場に固まって立ちつくしていたのだ。

「ヒビク先輩がアメリカに...？」

ずいぶんたってからヒカルは声に出してつぶやいていた。

「会えないの...？もう、会えなくなるの...？そんなの...ヤダッ！」

ヒカルは校舎にかけ戻った。そして三年生の回廊に向かう階段を駆けのぼり三年F組の教室に飛び込んだ。

「ヒビク先輩！」

突然飛び込んで来た下級生を、教室に残っていた数人の生徒が唖然とした顔で見つめる。

「ヒビク先輩、風間先輩はどこですか？！」

ヒカルはそばにいた男子生徒をつかまえて響の居場所を訊いた。

「さあなあ...。カバンはまだあるみたいだけど...」

ヒカルは教室を飛び出し隣のE組そしてD組と順番に響を探して回った。最後のA組に飛び込もうとした時、勢いあまって追突した背中では田村だった。

「痛って.....」

「田村先輩！」

背中に直撃を受けた田村は痛そうに背を伸ばし振り向いて、そこでヒカルの今にも泣き出しそうな顔を見て驚いた。

「ヒカル、どうした...？！」

「ヒビク先輩は？！ヒビク先輩どこですか？！」

「おい、どうしたんだよ、ヒカル…」

「ヒビク先輩、アメリカに行っちゃうって本当なんですか？！」

田村は息を飲み込んだ。

「本当なんですね…っ」

「ああ…。ヒビクから聞いたのか？」

「雪乃先輩です…。ヒビク先輩、私には何も…雪乃先輩のこともアメリカのことも何も…！」

——……言ってくれなかった…。

ヒカルの目から涙がポロポロこぼれ落ちた。

「な、泣くなよヒカル…。ヒビクが言わなかったのはあいつなりの想いがあってのことだ。あいつ、ピアニストになるって言ってた。そのためにアメリカでピアノの勉強をするって」

「ピアニスト…」

「ああ…。今、ヒビクは音楽室にいると思うよ」

ヒカルは涙を拭かないままコクンとうなづく走り去って行った。とうとうヒカルを泣かしちまったな…、と田村はため息をついた。

◇

出来上がった曲を楽譜に書き終えると、響はその一番上にタイトルを入れて譜面を閉じた。夏から数えて出来上がるまでに半年もかかった一曲だった。だが今、満足している。

——今の俺の全てを注ぎ込んだから。

響はピアノから立ち上がろうとして、ふと思い止どまった。そしてもう一度座り直しポロンと鍵盤をなでた。その一瞬後、響の指は軽やかに鍵盤を滑り始めた。その昔、まだ若く駆け出しのピアニストだったジャックが作った曲。別れ行く母を想い弾いた曲。

スイートラヴー。

今、その時の父と同じ想いを自分もかみしめている。昔の父の気持ちに想いをはせ、そして今の自分の想いを重ねて甘くせつないメロディを、ひとりきりの音楽室に響き渡らせる響だった。

音楽室の回廊に差しかったヒカルは、遠くから聴こえる聴き覚えのあるメロディに耳をすませた。

「ピアノ…？」

ヒカルはゆっくりと音楽室に近づいた。聴こえてくるのはいつかラジオから流れていたメロディだ。ジャックが響の母に贈ったという曲。

「ヒビク先輩…」

響が奏でるピアノをヒカルは初めて聴いた。ピアノは弾きたくないと言っていた響が今、父親の曲をせつなく甘くそして豊かに奏でている。音楽室のドアの外で呆然と立ちつくしていたヒカルは、するするとその場に座り込んでいた。

父親のジャックがいるアメリカでピアノの勉強をするという響——。響に会っていったい自分は何をしようとしていたのだろう。行かないで、と言うつもりだったのか。それとも話してくれ

なかったことを責めるつもりだったのか…。

——そんなこと言えるはずがない…。

長い間の心の確執をぬぐい去り、夢を抱いて旅立とうとしている響に対して、行かないで欲しいなんて言えない。責めることだって出来ない。こんなに素敵な、胸が苦しくなるぐらいに優しいピアノを奏でている響に行かないでなんて——。

——でも…！

ヒカルはひざを抱えてまろくなった。声を殺して泣いた。

——ヒビク先輩に会えなくなる…！もう、声も想いも届かない…っ！

ヒカルの想いに重なるように、優しいピアノのメロディがいっそう胸をしめつける。ヒカルはいたたまれなくなり耳をふさいで駆け出した。とめどなく流れる涙をぬぐうことなく校舎の廊下を走った。

「浅倉…？！」

昇降口前の廊下で、階段から駆け下りて来たヒカルとぶつかった颯土は驚いてヒカルの名を呼んだ。ビクッとして顔を上げたヒカルの顔は涙で濡れていた。ついさっき、教室で別れた時はいつも通りに笑っていたのに、あれからほんの少ししか経っていないというのに、

「何があったんだ？！」

颯土はヒカルの両肩に両手をついて問いただした。

「な、何もない、何でもないよ…！」

「何でもないことないだろう？！」

「何でもないったら！」

ヒカルは叫ぶと急いで涙をぬぐう。

「浅倉！」

いつものヒカルとは明らかに違う。こんなに取り乱したヒカルを颯土は初めて見た。

「ホントに何でもないの！部室に忘れ物したから取りに行くだけだよ！」

ヒカルは颯土の手を振り払って渡り廊下に飛び出した。

「おい！」

颯土はしばらくヒカルの背中を見送っていたが、やっぱり後を追って駆け出した。

ヒカルは夢中で部室の前まで走って来ていた。明日からの期末試験を控えて部活をしているクラブはない。演劇部の部室ももちろん誰もいなかった。校庭を望む手すりの前に立つと、「こちら！ヒカル！」と叫ぶ響の声が耳の中でこだまする。錆びた手すりに手をかけると赤茶色の粉がサラサラと舞った。

「ヒビク先輩…！」

下をのぞいてもそこに響の姿はもちろんない。

——こんなにもろい…。

雪乃とつきあっていてもよかった。会えば「ヒカル！」と声をかけてくれるだけでよかった。ずっと後輩のままだでもよかった。どこかで繋がっていると信じていたから頑張れた。見守っていてくれていると信じていたから笑っていた。

――それなのに...！

響は自分には何も言わないで卒業してアメリカへ行ってしまうつもりでいた。もう会えなくなってしまうのに、響はそれでよかったのだ。

――ひどいよ...っ。

今まで必死にこらえていたものが一気にガタガタと崩れ落ちてゆく。

遠くの音楽室の窓の向こうに、まだピアノに向かっている響の金色の髪と背中が見えた。

「ヒビク先輩...！」

ヒカルは思わず手すりにもたれかかり身を乗り出した。

「危ない！」

斜め後ろからの颯土の叫び声と手すりが崩れるのが同時だった。

「え...？」

「浅倉！」

階段を駆け上がってきた颯土が大きく手を伸ばした先から、ヒカルの姿が下へと消えて行く。

「浅倉！」

颯土が際に駆け寄ると、手すりと共に落下したヒカルが地面の上に横たわっていた。

「くそっ！」

颯土は再び階段を駆け降りてヒカルの元に走る。

「浅倉...？浅倉！」

落下した手すりの土煙がまだ収まらない中でヒカルは身動きひとつしない。

「おいっ！浅倉ヒカルーっ！」

颯土はヒカルを抱き起こした。額から流れる一筋の赤い線が涙の跡と混ざり合い、そしてヒカルのまぶたは固く閉じられたままだ。

「何があったんだ？」

「どうした？」

物音に気がついた生徒達が次々と集まってきた。

「誰か、救急車を！早くっ！」

集まってきた生徒達に向かって颯土が叫ぶと、一人の生徒が弾かれたように駆け出して行った。
。

校庭がざわついていることに気がついた響は音楽室の窓から外を眺めた。部舎の前に数人の生徒達が群がっているのが見えるが、ここからは遠くて何があったのかよく分からない。しばらくすると救急車のサイレンが聴こえ、車が校庭に入ってきた。

「まさか...！」

いやな胸騒ぎがした。演劇部の部室の前だ。見ると並んでいる手すりが不自然に途切れている。

「ヒビク！大変だ！ヒカルが...！」

田村が駆け込んで来た時には、響は反射的に音楽室を飛び出していた。

「ヒカル！」

響が駆けつけた時はヒカルは既に車に乗せられていた。担任の及川先生と颯土と一緒に乗り込んでいる。車の中から響の姿を見つけた颯土は、

「風間先輩も早く！」

と、手を伸ばし響を車に乗り込ませた。

ヒカルの意識はなかった。涙を流した跡が顔にはっきりとついている。

「ヒカル...？」

救急隊員が走る車の中でヒカルの出血をぬぐっている。顔の汚れをふき取るときにその涙の跡もきれいにふき取られた。

救急車が病院に到着すると、ヒカルはすぐさま処置室に運ばれて行った。学校から連絡を受けたヒカルの母親もしばらくして駆けつけ、待ち合い室で及川先生と颯土、そして響の三人は待つことになった。落ち着かない響はウロウロと歩き回る。颯土は自動販売機からコーラを買って一本を響に渡した。

「あ、ああ、サンキュー...」

響は気もそぞろといった様子でそれを受け取った。

「先輩、あいつは大丈夫ですよ...」

「ああ...、分かってる...大丈夫だ、あいつは...」

響は言葉にならない言葉をつぶやく。

「ただ...、」

颯土はつぶやいて次の言葉を止めた。

「群竹...？」

「風間先輩、浅倉と何かありましたか...？」

「いや、何もないぜ...。どうしてそんなことを訊く？」

「...あいつ、泣いてたんです。泣いて走って来たんです。すごく取り乱していて、俺、今まであいつのあんな姿見たことなかったから気になって追いかけてました」

涙の跡は響も見ている。だがそれが自分を想っての涙だとは夢にも思わなかった。響はヒカルがいる処置室の方を見つめた。

「群竹がいてくれてよかったな...」

「え？」

「いや、あいつを追いかけてくれてよかったと思って...。そうじゃなきゃあいつ...」

「でも、俺、間に合わなかったから...」

と、颯土は自分を責めるように言った。

「群竹...」

――どうして俺じゃなかったんだ。

泣いているヒカルを追いかけたのが自分ではなく颯土だったことが、響は悔しくてならなかった。たまたまヒカルが走った先に颯土がいたから、そして颯土は当たり前のように気になったから追いかけたのだ。そんなことは分かっている。でも、ならば何故自分がそこにたまたま居なかったのだ。少しでも窓の外に目を向けていれば部舎に行くヒカルを見つけられたのに。事故が起こるほんの少し前まで、その部舎にヒカルの幻を見ていたというのに。

――俺は...っ！

沈めていたヒカルへの想いが激しく強く浮かび上がり、響は爪が食い込むほどに拳を強く握っていた。

カチャリとドアノブが回る音がして、ヒカルの母親が処置室から出てきた。母親はまず及川先生の方に行きヒカルのケガの様子を説明した。その後離れた場所で立っていた響たちの元にやって来た。

「颯土くん、ヒビクさん、心配かけてごめんなさい」

「ケガの具合はどうなんですか？」

颯土が訊いた。

「たいしたことないのよ。左の腕の骨がちょっとヒビ入ってるみたい。でも他は足も擦り傷程度らしいし打撲もたいしたことないって。頭を少し打ってるからこれから脳波の検査があるけれど、多分大丈夫だってお医者様がおっしゃっているから」

「そうですか、よかった...」

颯土は胸をなでおろした。

「あの、ヒカルには会えるんですか？」

「今はまだ眠っているわ。これから検査もあるから...」

「そうですか...。じゃあ、顔だけ見て帰ります」

響は処置室に入った。

ヒカルは眠っていた。上着を脱いだブラウスの襟元から八分音符のペンダントがベッドにたれていた。

「ヒカル」

響は小さく声をかける。だがヒカルは目を覚まさなかった。

「このまま検査室に移動します」

看護師が移動の準備を始める。

「じゃ、俺はこれで失礼します」

響はヒカルの母親に一礼をして処置室を出る。先生も一緒に帰るというので母親は病院の出口まで二人を見送った。

「ヒビクさん、また明日来てくださる？」

「はい...」

母親は安心したようににっこりとほほ笑んだ。

そしてヒカルは脳波の検査のため検査室に運ばれて行った。とりあえず大事にはいたらなく安心した颯土は、自分も帰る支度をはじめた。すると、

「颯土くん、まだ時間ある？」

困ったような顔でヒカルの母親が訊く。

「はい...」

「悪いんだけど、もう少しここにいてもらえない？ 哲平を幼稚園に預けっぱなしなのよ。慌てて出て来てしまったから...」

「いいですよ」

「検査は三、四十分で終わるらしいのだけど、もしもヒカルが目が覚めた時に誰かがいてやらないとやっぱり可哀想だから。すぐに戻ってくるわ」

「わかりました」

「ありがとう。じゃ、お願いね」

母親は颯土にヒカルの付き添いを頼み玄関の前で待機していたタクシーに乗り込んだ。ふと、颯土が時計を見ると午後五時を回ったところだった。

◇

三問解く間に来ると颯土は言ったのに、もう一時間も経っている。確かに三問はまだ解けていないが、最初から公式が頭に入っていないのだから一問だって解けるはずがない。どこかで颯土がこっそり見ていて三問解き終わらなければ出てこないつもりなのだろうか...、とあかねは辺りを見回した。

「そんなはずないから...」

自分の愚考に情けなくなったあかねは、公民館の外に出てみた。ちょうど目の前を一台の救急車が勢いよくサイレンを鳴らして通り過ぎて行った。ふと隣の校庭を見ると、生徒や先生がたくさん集まって騒いでいる。そして校庭の門は不自然に開け放たれている。たった今走り去った救急車は、あのいつもは閉まっているはずの門から出てきたのではないだろうか――。

――群竹くん.....っ。

一時間も来ない颯土に何かあったのではないだろうか。あかねはいてもたってもいられなくなり、開いている校庭門から中に駆け込んだ。すると、すぐに、

「あかね！」

向こうから田村が走って来た。

「田村先輩っ！ 何があったんですか？！」

「ヒカルが部舎の二階から手すりごと落ちたんだ」

「ヒカルちゃんが.....？！」

あかねは呆然となった。血の気が引き、足が震える。

「ヒカルちゃん、大丈夫なんですか?!」

田村の両腕にしがみつき、あかねは半分泣き叫ぶように問いただした。

「ヒビクと群竹と一緒に病院について行った」

「群竹くんが...?」

一時間前、昇降口でヒカルとは別れ、自分はそのまま公民館に行きヒカルは自転車を取って下校するだけのはずだったのに、何故ヒカルが部舎から落ちることになったのだろう。そして颯土は――。

「どうして.....」

呆然としたまま呟くあかねに、田村はさっきのヒカルの様子を話した。

「ヒカルちゃん.....っ」

堪えきれずにあかねは泣き出した。

「泣くなあかね。とりあえず俺はもう少しここで待っててみるから。あかねはどうする?」

「私は...群竹くんと公民館で待ち合わせの約束をしています。もしかしたら後で来てくれるかもしれないからあっちで待ってます...」

そうか、と田村。

「じゃあ、群竹が来てなんか分かったら報せてくれよ。俺もヒビクが帰って来たらそっちに行くから」

はい、と返事をしてあかねは公民館に戻った。時計を見ると午後五時になろうとしているところだった。

◇

脳波の検査が終わるとヒカルは病室に移された。颯土は付き添いとして一緒に病室に入った。看護師が点滴を刺したり脈拍を取ったりの仕事を済ませて出て行くと、颯土はベッドの横のスツールに腰を下ろした。ヒカルはまだ眠っていた。時計を見ると五時四十分。そろそろヒカルの母親も帰ってくるころだろう。ヒカルの頭に巻かれた包帯が痛々しい。自分が手を伸ばした先から地面に落ちて行ったヒカルの姿がよみがえって来て、颯土は思わず身震いした。

――この程度のケガですんで本当によかったぜ...。

あの時は身動きしないヒカルが死んでしまったのではないかと思い全身が冷えた。あんな手すりを放置しておいた学校にも腹が立つ。だが、もう少しのところでヒカルの手をつかまえることが出来なかった自分に一番腹が立った。

「うん...」

ヒカルが声を出した。

「浅倉...?」

颯土はヒカルに近寄り声をかけた。

ヒカルはゆっくりと目を開いた。目の前がぼんやりとかすんでいる。

――ここはどこ...?

頭を上げようとした時、激痛が走った。

「いったあ！」

ヒカルは頭を押さえた。

「大丈夫か？」

颯土が慌ててヒカルを支えた。

「群竹くん...？」

ベッドの上にポツンと座り、ヒカルは辺りを見回した。どうしてここに颯土がいるのだろうか？

「私、どうしたの...？」

「部舎の二階から落ちたんだよ。覚えてるか？」

ヒカルは目を閉じて思い出した。

——そうだった...。手すりにもたれかかったら手すりが崩れて...

ヒカルは颯土の「危ない！」という叫び声を聞いたのをはっきりと思い出した。颯土は自分を追いかけて来てくれたのだ。

——追いかけて...？

そこまで思い出してヒカルの胸に再び強烈な哀しみが襲って来た。

「ヒビク先輩が...」

ヒカルの目から涙がじわりとあふれ出る。ヒカルのそんな様子を颯土はじっと見つめていた。階段から駆け下りてきたヒカルは、まるで小さな子どものように取り乱して泣いていたのだ。

「何があった...？」

優しい声とまなざしで自分の顔をのぞきこむ颯土の顔を見た途端、ヒカルは張り詰めた糸が切れたように声を上げて泣き出した。

「ヒビク先輩が行っちゃう...！もう、会えなくなっちゃうっ...！」

「え...」

「ヒビク先輩が誰を好きでもよかった...。なのに、アメリカに行っちゃう...。そのことヒビク先輩は一言も言ってくれなかった...。雪乃先輩のことも...っ」

ヒカルは包帯だらけの両手を顔にあてて肩を震わせ泣きじゃくる。断片的なヒカルの言葉の意味は分からなかったが、響がアメリカに行ってしまうということとヒカルが深く傷ついていることは分かった。

——風間先輩、ひでえよ……。大切なものをこんなに傷つけて、自分はひとりで行っちゃうつもりなのかよ。

大切な人を失う時の絶望——。颯土が今までずっと恐れていた感情だった。どんなに大切に思ってもずっと一緒にいられるわけじゃない。いつかは別れなくてはならない時が必ずやってくる。相手を想う気持ちが大きければ大きいほどその時の絶望も大きい。そんなつらい思いをするくらいなら最初から人を求めないほうがいい...。ひとりでいればいい...

——でも...

「浅倉...」

颯土はそっとヒカルを抱きしめた。

「泣きたいだけ泣けよ...」

「群竹くん...？」

颯土はためらいながら言葉を選ぶようにして言った。

「...お前にはあかねや、結野、大久保も伊藤も、そして俺だって...、みんながお前の傍にいる。風間先輩だけがお前の全てじゃないだろ？」

——そうさ...。ずっと一緒にいられるわけじゃないけれど、今は仲間が傍にいる。

「絶望するために人は出会うわけじゃない...よな？好きになるのだってさ...。上手く言えないけど...そうじゃないから...」

ヒカルはうん、とうなづいた。不器用な颯土の優しさが胸に染みこんだ。

「今は泣けばいい。お前の気がすむまでここにいてやるから」

「何だか群竹くんじゃないみたい...。カッコいいよ...」

泣きながらヒカルは颯土の胸に顔を埋めた。

「ばーか...」

颯土は照れ臭そうに言った。だが自分でも思う。今までの自分からは考えられないことをしている。でも、今は傷ついたヒカルの傍にいてやりたいと思った。ヒカルはかけがえのない、大切な仲間だから——。

颯土の胸を借りて随分泣いた。泣いても泣いても悲しみは襲って来るばかりで癒えはしなかった。だが気は済んだ。あきらめはついた。覚悟は決められた。だからヒカルは泣きやんだ。

「群竹くん、ありがとう。もう大丈夫だから」

ヒカルは頑張って笑顔を作った。

「引きつってるぜ、顔」

「うん...。でもいいの。いつまでも泣いていても仕方ないもん」

「そうだな」

颯土は微笑む。

「群竹くん...」

「ん？」

目の前で颯土の真っ黒な瞳が揺れた。

「...何でもないよ」

ヒカルはうつむいた。

——群竹くんががいてくれてよかった。今日ここに群竹くんがいてくれて...。きっと、これからは私たち親友になれるね...。

そう思った時、さっきとは違った涙がヒカルの頬をつたっていった。

いつまで待っても颯土は来なかった。公民館の外はもう真っ暗だ。田村はどうしただろう？何か分かっただろうか...、そう思ったとき、ちょうど公民館の自動ドアが開き、きょろきょろと周囲を見回しながら田村が駆け込んできた。

「田村先輩！」

あかねは座っていた椅子から立ち上がって田村に駆け寄った。

「群竹来たか？」

いいえ、と、あかねは首を振る。

「さっき及川先生が帰ってきたからヒカルの様子を訊いたよ。あちこちに怪我は負ってるみたいだけど大事にはなっていないらしい」

「よかったぁ.....」

あかねは胸を撫で下ろした。

「ヒビクは学校に寄らずに帰っちゃったみたいだから俺はもう帰るけど...。先生が病院を出るときは群竹はまだ残っていたらしいぜ？」

「もうこんな時間だし、ヒカルちゃんの様子も分かったから私も帰ります...」

颯土が来ないのは、きっとまだヒカルに付き添っているからだろう。友達なのだから当たり前だ。

「じゃ、一緒に帰ろうぜ？もう暗いしな」

「はい」

砂の一粒ほどの痛みが走ったが、あかねは田村と並んで公民館を後にした。

◇

「ごめん...」

颯土があかねとの約束を思い出したのは、翌朝、ヒカルを心配してC組にやって来たあかねの顔を見た時だった。昨日、あれからすぐに母親は病院に戻ってきたが、元気なヒカルを見て安心した母親は家のことをするために再び家に帰り、颯土は夜になるまでヒカルに付き添っていた。あかねが田村と公民館を出る頃にはまだ病院にいたが、約束をしておいて今まで思い出せなかったことに颯土は沈んだ。

「いいんだよ。ヒカルちゃんを放っておけなかったんでしょ？」

「...ああ。でも...」

傷ついたヒカルを放っておけなくて、あかねを傷つけてしまっていたらそれは本意じゃない。

「優しいね、群竹くん。だから好き」

あかねはにっこり笑った。あまりにもハッキリとさり気なく「好き、と言われて、颯土は耳まで赤くなった。

「ヒカルちゃんも群竹くんが傍にいてくれて心強かったと思う...。今、すごく傷ついていると思うから」

「ああ...」

ヒカルの脳波に異常はみられなかったが大事をとって数日入院ということになった。今日は当然欠席だ。

「風間先輩...、ヒカルちゃんのお見舞い行くのかな...」

「.....どうだろな」

予鈴が鳴り、あかねは自分の教室に戻って行った。一時間目から数学の試験だ。やがて試験が始まり問題用紙を見たとき、昨日あかねに教える約束をしていた公式問題が並んでいた。

――あかね...、すまん...。

心でもう一度詫び、颯土はサラサラと問題を解いた。

◇

放課後、ヒカルの災難をききつけたクラスメートや先輩、後輩たちが次々と見舞いに訪れ、ヒカルの病室は花束でいっぱいになった。

「まるで花屋の開店セールみたいだな...」

ヒカルを見舞った響が呆れて言ったが、自分も大きな花束を抱えてやって来たひとりだ。

「花に囲まれ眠る白雪姫になった気分です」

これだけの花束を挿す花瓶もないから、それらはヒカルのベッドの周りにとりあえず置かれている。ヒカルは本当に白雪姫のように花に埋もれている状態だった。

「しかし昨日は驚いたぜ...。だからあの手すりには気をつけろとさんざん注意しただろうが...。

ほんととストコドッコイのおたんこなすっ！」

響はベッドの脇のスツールに腰掛けるついでにヒカルのおでこをちゃんと突付いた。

「すみません...。まさか本当に崩れるとは思ってなくて...」

いくら錆びているとはいえ一応手すりだ。ちょっと体重を乗せたぐらいで崩れるとは普通は思わない。

「ちょっとじゃなくて全部の体重をかけたんじゃないのか？ヒカルだし...」

「ヒカルだしって...ヒドイ...」

だが、確かに響の言うとおりであった。遠くに見えた響の背中に届きたくて、全身全霊をかけて手を伸ばしたから――。ヒカルの胸に、また鈍い痛みが込み上げる。だが、それはもうどうすることも出来ない痛みだ。自然に治癒するまでこのまま放って置くしかない傷。

「学校も怠慢を責められてちょっと問題になってるぜ」

「えーっ、どうしよう！わたしのおたんこなすのせいで！」

「いいんだよ。怠慢だったのは事実なんだから。おかげでヒカルは死ぬところだったんだ」

響はまるでPTAの会長のような顔をして言った。

「ヒカルは期末試験どうするんだ？まさか留年なんてことはないよな？」

「大丈夫です。今までの貯金がちゃんとありますから。けど追試は受けなきゃいけないみたいです。たぶん卒業式が終わってからだと思うんですけど...」

響はふーん、そうか、とつぶやいた。

「卒業式、出られなくなっちゃいました...」

ヒカルはポツリと言った。

「...しかたないだろ？」

響もポツリと答えた。

「先輩にお祝いとお別れが言えないな...」

響の出発は卒業式の当日だと聞いた。お祝いは新たな旅立ちに対して、お別れはもう会えなくなることに對して...。

「ヒビク先輩、アメリカに行っちゃうんですってね...」

そう言ってヒカルは響を見つめた。

「...ヒカル...、知ってたのか...？」

「雪乃先輩に聞きました。おめでとうございます...」

「ヒカル...」

響はゴクリと息を飲み込む。

「水臭いですね、何も言ってくれないんだもん。ちょっと恨んじやいましたよ...」

「わ、悪かった...」

ヒカルはうつむいた。顔を上げなければ、と思うのに、やっぱりせつない。気を緩めると涙が零れてしまいそうだった。

――でも。

「卒業式出られなくてよかったかも！私、きっと泣いちゃうもん！」

顔を上げた時、ヒカルは笑顔を作っていた。うまく笑えている自信はなかったが、精一杯の笑顔を響には見せたいと思った。

「お、俺も泣いちゃうかもな...！ヒカルに見送られたらさ！」

響も笑った。

「それじゃ、お互いよかったですね！先輩が鼻水たらして泣いてる顔なんか見たくないし！」

えへへ、とヒカルは笑い、この！と響は手を上げる。

――今までのヒビク先輩と私...。

――いつものヒカルと俺...。

「がんばってくださいね、先輩！」

「ああ。がんばるよ...」

「私...、」

ヒビク先輩が好きでした、という言葉はヒカルは飲み込んだ。今、ここで打ち明けたらきっとまた泣いてしまう。もう泣かないと決めたのだ。最後は笑顔を作って響を見送ろう。そして、

――あきらめよう...。

「...応援していますから！」

「...サンキュー。ヒカルが応援してくれたら百人力だな...！」

ヒカルはうん、とうなづいた。

――あと少しだけ、もう少しだけヒビク先輩と話を繋げていたい。

――なんでもいいからこのまま何かを話して、ヒカルという時間を少しでも伸ばしたい。

ふたりは口に出さないところで同じことを考えていた。だが、響のアメリカ行きの話題の後は

互いに言葉を探すような会話しか出来なかった。

――もう、これまでか…。これで、さよならか…。

笑顔のヒカルを見つめ響は胸の塊を飲み込んだ。

――もう…、さよならだね…。

ヒカルは上手く笑えているかどうかを気にした。

そして、`またな！、と手を上げて響は帰って行った。ヒカルは笑顔で見送った。これが最後の別れになるということをそれぞれの胸でかみ締めながら――。

三月十四日――。帰宅した門の前で颯土は隣家の窓を見上げた。今日は入院していたヒカルが退院してきているはずだ。だが、窓に明かりはなくカーテンも閉まったままだ。自室に上がり、窓を開けてみたが向こう側に人の気配は感じられない。

「浅倉……」

今日はホワイトディという、巷ではバレンタインディと同じぐらいに盛り上がるイベントらしいからあかねを誘い、いわゆる「デート」ということをしてきた。だが、あかねはヒカルのが気になってばかりのようで、そして自分も気がつくといつもヒカルのことを考えていた。

――明日の卒業式、あいつはどんな想いで迎えるのだろう……。

気になるのはそのことばかりだ。五日前のあの日、泣きながら廊下を走ってきたヒカルを追いかけて間に合わなくて、気がついた病室のベッドの上で泣きじゃくるヒカルを抱きしめた。ヒカルが紡いできた響との時間のひとつひとつが、何故だか自分のもののようにダイレクトに胸に突き刺さる。

あの時も、あの時も、あの時も、響だけを真っ直ぐに見つめて響のそばで笑って輝いていたヒカルが眩しすぎて、あの日の涙が胸に痛くて仕方がなかった。あれからヒカルは元気を取り戻したように見えた。だが、明日はどうなるか――。

――もう、あいつのあんな涙だけは見たくない…。

明かりのつかない窓を見つめ、颯土は心の中で呟いた。

夕食を終えてヒカルが部屋に戻ると、さっきは真っ暗だった向かいの窓に明かりがついていた。今日はホワイトディだから颯土はあかねと過ごして来たのだろう。

左手の三角巾を外してヒカルはベッドに横たわった。明日は卒業式。でも、行かないつもりだ。ただ別れるためだけに響に会うのはもうつらい。今までなら、それでもひとことでもお祝いを言おうとか、最後にやっぱり顔を見たいとか話がしたいと思ったかもしれないが、今はもうそれもうつらい。アメリカに行ってしまうことも雪乃のことも、自分にはひとことも言ってくれなかった響。響にとっての自分がこんなにも薄い繋がりしかない存在だったことが何よりもつらい。

傷ついて傷ついて傷ついて――、あの時、颯土の胸を借りてさんざん泣いたから…、あの時の想いは全部颯土に受け止めてもらったから――、

――だからもう…、早く諦めて忘れなきゃ……。

それでも込み上げる熱くて苦い想いに潰されそうになって、ヒカルはベッドから起き上がって窓を開けた。机の上の消しゴムを投げる前に向かい側の窓も開いた。窓の外はチラチラと粉雪が舞っていた。

「…本当のホワイトディだね」

ゆっくりと降りてくる粉雪にヒカルは手をかざした。

「積もるかな？」

「三月だし、どうだろな…」

「ヒビク先輩たちの卒業式は雪の中なのかな...」

手のひらの上に乗っては瞬く間に消えていく雪を見つめながら呟くヒカルを、ただ言葉もなく見つめるだけの颯土だった。

◇

昨夜からサラサラと降り続く粉雪の中を、響は田村たちいつもの仲間と学校までの道を歩く。まさか三月の卒業式が雪になるなんて思ってもいなかった。パウダースノウは道に少しでも白い幕を作っているが、それはあまりにも儚く積もる前に消えていく。その上を一步一步をかみしめるようにして響は歩いていた。

三月十五日――。

「とうとうこの日が来ちゃったな...」

一歩後ろから田村が横に並んで小声で言った。

「...ああ、そうだな」

響はポツリと呟きながら、田村がじっと自分を見つめている視線を感じた。

「...あれはどうするの？ヒカルは来ないんだろ？」

――ヒカル...。

「...あかねに託すさ」

響は内ポケットにあるものを制服の上から押さえた。

「最後ぐらい自分の想いを通せよ...」

田村はさり気なく言う。

「は...、お前だって...」

響は肘で田村をつつく。

「俺とお前じゃ状況が違うの...！」

田村は柄にもなく赤くなって言った。

――叶わない想いを抱えているのは田村も同じ...。

そして、それを今日限り思い出に変えていかなくてもならないということも。

校門の前まで来ると向こう側から歩いて来たのは颯土だった。

「よお、群竹」

声をかけると、傘を差しうつむき加減の姿勢から顔を上げた颯土の目は、鋭くまっすぐに響を捕らえた。その視線を受け、響は固唾を呑んだ。

「...ヒカル、どうしてる？帰って来たんだろ？」

「昨日退院してきました」

颯土は響から視線を外さずに答えた。

「そうか...。いろいろ世話になったな、群竹」

「.....」

「あの時あいつを追いかけてやったように...、これからも力になってやってくれよな」

「...風間先輩は、もうあいつの支えにはなってやらないんですか？」

颯土の言葉に響も隣にいた田村も息を呑んだ。

「今更言っても仕方ないけど、あいつは...、」

言いかけて颯土は思いなおしたように口をつぐみ、

「...こちらこそ、色々世話になりました」

と、頭をひとつ下げて校舎の中に入って行った。その背中を見送っていた田村が呟いた。

「...あいつが言いたいこと、俺にはわかるぜ...」

「田村...」

「やっぱ、ヒビクの口から聞いたかっただろうなヒカルは...」

渡米することをヒカルに黙っていたのは、言ってしまったらその後続く言葉を言わずにはいられない自分を恐れたからだ。

待っていて欲しい。ヒカルの未来を予約しておきたい。

大切なものを縛り壊したくないから、あの光に負けなくらいの自分になるために決意したこれからの道なのに、いつになるかわからない未来にヒカルを縛りその上で築く己であっては本末転倒。自分の中で譲ることの出来ないこだわりだった。

でも.....。

「さ、行こうぜ」

田村に肩を叩かれ響は校舎に入る。三階の廊下で田村たちとそれぞれの教室に分かれ、最後の三年F組に。

「...メロディは繋がった？」

窓辺に立ち校庭の梅の木を見つめる響に柏木が声をかけた。

「ああ。メロディはな...」

――けど、想いは...。

最後まで書くか書かないかを迷いに迷ったその想いは、最後に「詞（ことば）」として書き残したが...。鋭く自分を見た颯土の目に、今頃になって全身を貫かれる思いがする響だった。

◇

「ヒカルちゃん、本当にこないの？」

卒業式の会場である体育館に向かう廊下を歩きながら、あかねは颯土に訊いた。

「ああ...」

「今までのヒカルちゃんなら、たとえ入院していたとしても絶対に来たよね...」

「ああ、そうだな...」

「風間先輩に会えるのは、本当に今日が最後なのに...」

響が卒業式を終えた直後にアメリカに発つということを知った時、あかねはまっさきにヒカルの気持ちを思った。ヒカルがどんな気持ちでこの事実を受け止めたのかと思うと胸がつぶれそうだった。もしも自分ならどうしただろう。颯土がたった二十日、沖縄に行って会えなかったときでさえあんなに寂しかったのに、ヒカルと響は五年も会えないことになるのだ。

五年――。

一言でいうのは簡単だがその月日は果てしない長さだ。五年後の自分たちは明らかに今とは違っているはずで、まるで想像もできない程遠い未来だ。

卒業式の会場は、中央に花道を設けた両サイドにイスが並べられていた。その前方に空席を残して在校生たちは一足先に着席していた。やがて拍手の中、卒業生たちが花道を入場してきた。胸に花を飾った三年生たちはA組から順に入場し着席していく。通路際に座っていたあかねは卒業生の顔を一人一人確認するようにして見つめ、最後に入場してくるはずの響の姿を探していた。

「あかね、頼みがある」

花道をあかねの真横に来た時、響は立ち止まった。

「これをあとでヒカルに渡しておいてくれないか？」

響があかねに手渡したものは一枚の折りたたみである楽譜だった。

「風間先輩...？」

「じゃ...、頼むな」

響は手早くそう言うと、少し間のあいてしまった列を大股に歩いて縮めていった。その後ろ姿を見送ってからあかねは楽譜をそっと開いた。

「これ...?!」

楽譜の中の音符を追うあかねの瞳から涙の粒がぽつりぽつりとこぼれ落ちた。あかねはそっと座席から離れ、目立たないようにしゃがみながら会場の出口に向かう。

「どこに行くんだ...？」

あかねの行動に気がついた颯土が小声でささやいた。

「ヒカルちゃん連れてくる...！」

あかねはそっと体育館を出た。

「あかねちゃん、どうしたの?!」

全く思いもかけなかったあかねの突然の来訪にヒカルは目を丸くした。今、本城高校では卒業式がおこなわれている時間ではないのか。

「ヒカルちゃん、学校に来て!」

あかねは目に涙を浮かべていた。

「ど、どうしたの...?」

「風間先輩、行っちゃうんだよ?今日、行っちゃうんだよ!」

「そんなこと分かってる...」

ヒカルはあかねから目をそらしてうつむいた。

「あたしはもう、ヒビク先輩とはさよならがすんでいるからいいの」

今はもう、一分でも早く響を乗せた飛行機がアメリカに飛び立ってしまい、どうしようもなくなったところで響をあきらめたい。

「駄目!とにかくもう時間がないから引っ張ってでも連れてくよ!」

あかねはヒカルの家に入り込み、勝手にヒカルの部屋に入るとクロゼットにかかっている制服を取り出した。

「やだよ!」

「いいから言うことを聞いて!お願い!そうじゃなきゃ、ヒカルちゃん一生後悔するよ!」

「何で...、何でなの...?!」

ヒカルはあかねに渡された制服を手にしたまま涙声になって叫ぶ。

「今は説明している時間がないの!とにかく、一緒にきてくれないんだったらもうヒカルちゃんとは絶交するよ!」

「あかねちゃん...」

あかねのせっぱつまった気迫に押され、ヒカルは渋々制服に着替えた。

学校に到着すると、体育館からは『仰げばとおとし』を歌う声が聞こえていた。だが、あかねはヒカルを体育館には連れて行かず、そのまま校舎に入って行った。

「どこ行くの?!」

ヒカルは叫んだ。

「音楽室!」

あかねはヒカルの手を引いたまま答える。

「音楽室?何で?」

あかねはずんずん歩くばかりで答えない。ヒカルは手を引かれるまま音楽室についていった。そしてあかねは真っすぐにピアノにむかったのだ。

「何するつもりなの?」

あかねはヒカルに、さっき響から受け取った楽譜を開いて見せた。

「これ、風間先輩がヒカルちゃんに渡してくれって」

「ヒビク先輩が...？」

ヒカルは差し出された楽譜に見入った。

「私が弾くから、ヒカルちゃん聴いていてね」

あかねはスーッと深呼吸をしてから鍵盤をたたきはじめた。

優しいバラードだった。ジャック・ベリーの『スイートラヴ』を思わせるような甘くせつない旋律。だが、心の奥をくすぐられるほどに懐かしい気持ちになるメロディだ。初めて聴く曲のはずなのに胸の奥の方から言葉にできない想いがこみ上げてくる。

「.....っ」

気が付くと、頬が涙で濡れている。せつなく優しいメロディがやがて最後のフレーズに繋がっていく。そのラストはゆっくりと言葉が紡がれるように繊細なメロディを紡ぎ、耳元でささやかれるようなピアノシモのせつなく優しい旋律で曲は終わった。聴き終わっても、ラストの四小節がずっとずっと耳から離れない、涙が出るほどに優しい余韻が残った。

「この曲は...？」

「タイトル見て」

あかねが楽譜をヒカルに手渡した。

「Shine...」

ヒカルは楽譜の一番上にある字を見つめる。

「この曲にはね、こんな詞（ことば）がついてるんだよ」

あかねは楽譜のたたんだ背表紙を指さした。そこには響の走り書きの文字が連なっていた。

「これ...！」

ヒカルは立ちつくした。

◇

花道を退場し校庭に出た。粉雪はさっきよりも降り方が激しくなったようで、学校全体を粉砂糖をまぶした景観に変えている。響は足跡のついていない校庭を梅の木の下までゆっくりと歩いた。

「ヒカルこそ奇跡...」

ピンクの花に白い雪が重なっていく様子をただぼんやりと見上げながら、この場所から繋がった想いの旋律を頭の中で奏でる――。

――Shine。

あの時に直感したタイトルをつけ、さっきあかねに託したその曲。

[君といた日々が輝いている まぶたを閉じれば浮かぶ夏の日

ふりむけばまぶしい君の笑顔が太陽の下 キラキラヒカル 僕を優しく包む]

――水飲み場の出会いから始まって、夏の湖から、

[君を見つめていた時が憂いてる 耳をすませば聴こえるメロディー

心に響く君の声が優しい旋律こだまのように キラキラヒカル 僕をせつなく包む]

――ヒビク先輩、と、名を呼ぶ声に抱きしめられ、
[言葉に出来ない思い出を 心にとじ込め僕は行こう
君と出会えた時を明日へとつなぐために キラキラヒカル ぼくらの未来のために]
――ためていた想いを胸にしまった秋の日々と、
[もしも願いが叶うなら 最後に君を抱きしめたい
遥かな想い覚えていたい君のぬくもり キラキラヒカル 永遠に悠久に...]
――屋上で見た冬の夕焼けと、あの時に込み上げた願い、そして、
[君を守りたい Shine いつもどんな時も 君と生きたいMy Shine いつかきっと
空よりも星よりも 光輝く僕のShine 空よりも星よりも 遠い遠い僕のShine]
――昨夜最後の詞（ことば）を書くまでの...。

「ヒビク――」
田村の呼ぶ声に響はゆっくりと頷いた。

◇

最後の方は涙でぼやけて読めなかった。
「ヒビク先輩...」
ヒカルは楽譜をぎゅっと抱きしめた。
「ヒカルちゃん、わかるよね？これ、風間先輩からヒカルちゃんへの心からの恋文（ラブレター）だよ...！」
ヒカルはうん、うんと何度もうなづいた。
君といた日々――。夏の日――。響はこんなにも大切に想っていてくれた。
――こんなにも...！
ずっとずっと心に残る最後の四小節。涙が出るくらいに優しい余韻が残るその四小節に当てはまる詞は...。
「それでもヒカルちゃんは風間先輩に会わないで別れるの？ヒカルちゃんの心は風間先輩に伝えてあげないの？！」
あかねが涙声で叫ぶ。ヒカルは顔をおおった。
――ヒビク先輩.....っ！
「ヒカルちゃん...」
「ヒビク先輩に会ってくる！」
ヒカルは音楽室を飛び出した。

体育館に行くと卒業式はすでに終了していて、卒業生たちは校舎や校庭に散り散りになり、友達と別れを惜しんでいたり記念撮影をしていたり、もう既に帰り始めた卒業生もいた。校内に残っている卒業生の中には響の姿は見当たらない。田村や柏木たちの姿も見えないということは、もう既に学校を出てしまったようだ。ヒカルは急いで校門に向かった。数人の卒業生たちが花で飾られた看板の前で写真を撮っている。その一人一人の顔をのぞきこんでもそこには響はいなかった。

「ヒカルちゃん！」

歩道の向こうからヒカルの姿を見つけた麻耶が走って来た。

「風間先輩、今、田村先輩たちと行っちゃったよ！」

麻耶が指を指した彼方に響たち一行の後ろ姿が見えた。もう、そこは曲がり角。粉雪の舞う中、すぐにその姿は見えなくなりそうだった。

「ヒビク先輩っ！」

ヒカルはこん身の力を込めて叫んだ。だが、往来する車の音で声はかき消され響の所までは届かない。

「風間先輩！」

麻耶も一緒に叫んでくれた。それでもまだ届かない。響は振り向きもせずに曲がり角を曲がろうとしていた。そこへヒカルを追ってきたあかね、颯土や勇斗、祐輔がヒカルのまわりに集まり、

「風間先輩っ！」

一緒になって大声で叫んだ。

◇

ヒカルの声が聞こえたような気がして響は立ち止まった。

「どうした？」

「...いや」

振り返ってみたが粉雪に視界を邪魔されて校門の方までは見えない。

「行こうぜ？」

太郎がそう促そうとするのを、田村が手で制した時、

「風間先輩っ！」

複数の声が混ざって呼ぶ声が聴こえ、響はじっと歩道の先を見渡した。誰かがこちらに向かって歩いてくる。粉雪がその姿をなかなかはっきりと見せてくれないのがもどかしい。

「...ヒカル？」

半信半疑で呟いた。傘もささずに歩いてくるのは確かにヒカルだ。響はゆっくりと歩道に戻り始めた。その歩調は段々早くなり、気持ちに抵抗する傘は邪魔で放り投げた。

——ヒカルがどうして...？これは夢か——

走りながら響は目をこすった。左腕の三角巾をもどかしそうに取り払い、見間違いではないヒカルが確かに走ってくる。

「走るな！転ぶぞっ！」

そう叫んでもヒカルはきかない。少しでも早く傍に行かないと雪にヒカルの足を取られてしまいそうだ。

「ヒビク先輩...！」

ヒカルが名を呼び、

「ヒカルッ！」

響が名を呼んでふたりは粉雪の歩道で出会った。しばらくの間、響は言葉も出せずに自分を見

上げるヒカルを呆然と見つめた。

――ヒカルだよな...？夢...じゃないよな？

さっきから何度も心の中で呟いている。そっと手を伸ばし、夢じゃないことを確かめるように響はヒカルの両肩に触れた。

「...どうした？今日は来られないって言ってただろ...？」

やっと言葉にした声はカラカラに乾き掠れている。だが、手にはしっかりと伝わってくるヒカルのぬくもり――。自分を見上げ、微かに微笑むヒカルの頬が濡れていた。雪のせいじゃない。瞳はキラキラと潤み、吸い込まれていきそうな温かな輝きを、涙のいくつもの筋が放っている。

「...ヒカル？」

響は息を呑み込んだ。こんなにもヒカルが美しく見えたのは初めてだった。まるで――、

――女神.....。

「ヒビク先輩...」

女神の唇が動いた。

「...ヒビク先輩が好きです」

――なんて...？

耳から聞こえたヒカルの言葉を心で受け止めるまでの間に、ヒカルはもう一度、

「.....ヒビク先輩が大好きっ！」

と、叫んだ。そのあと、鼻を膨らませてわっと泣き出したその顔はいつものヒカル――。

――ああ...！

ヒカルを見下ろしたまま響は立ち尽くす。

――その言葉...、ヒカルに先に言わせちゃうなんて.....。

「...ありがとう、ヒカル」

そう言うのが精一杯だった。全身にメロディーが駆け巡り、言葉が出てこない。

「その言葉がどれだけこれからの俺を勇気づけてくれるか.....」

――どれだけ.....。

[もしも願いが叶うなら 最後に君を抱きしめたい

遥かな想い覚えていたい君のぬくもり キラキラヒカル 永遠に悠久に...]

――もしも願いが叶うなら...。

響はヒカルを両腕に包み込むようにして抱きしめた。そのぬくもりをずっと覚えていられるように、強く、強く。

「...俺、ヒカルのところに帰ってくるから。ちゃんと帰ってくるからな」

抱きしめたまま言うと、ヒカルは大きく何度も頷いた。

「ヒカル」

「ヒビク先輩」

ふたりは互いに名を呼び合い見つめ合う。

――メロディだけを繋げても、想いを繋げなければ意味がない...。

迷いに迷い、それでも最後に書かずにはいられなかった詞（ことば）、その心からの想い

を――、

――俺を大好きだと言ってくれた、その唇に....、
響はヒカルの唇にそっと自分の唇を重ねた。

――I love you....

今紡げる詞（ことば）はこれだけ、いつかきみに伝えよう――。

ヒカル、愛してる。愛してる――。

――この言葉が言える俺になれた時に。

[Thank you for your smiles Thank you Thank you See you again at some time

Thank you for my Shine Thank you Thank you See you again

I love you...]

――My Shine（俺のヒカル）.....。

歩道でいつまでも抱き合うふたり。通り過ぎて行く本城生が冷やかしの言葉や憧れのため息を落として行く。

やったなヒビク、と、遠くで見守っている田村は小さくガッツポーズを送った。よかったねヒカルちゃん、と、あかねは涙を流した。

粉雪は抱き合うふたりの髪や肩に白く寒々しく降り積もる。だが、ふたりを見守る仲間たちみんなの心までも温かくするようなヒカルと響だった。

長い時間が過ぎ――。

「またな、ヒカル！」

響はいつものように手を上げた。

「ヒビク先輩、また！」

ヒカルもいつものように笑った。ふたりはこれまでと変わらない別れを交わし、それぞれの待つ仲間の元に背中合わせに歩き出した。互いの顔に晴れやかな優しい笑みを浮かべて――。

再び春が巡って来た。本城高校では新入生も入学し、また新しい風が吹き始めた。三年生になったヒカルたちは教室が中庭を挟んだ向こう側が変わった。去年までは近寄り難いと思っていた回廊に、今自分がいるということが不思議でもあり時の流れを感じる。

新学期になって十日目の朝、三年F組の教室から祐輔が机とイスのセットを引きずりながらヒカルのC組にやって来た。

「ちょっと伊藤くん、今日からC組に編入？」

ヒカルがその奇行にあっけにとられている。

「違うよ。ほら、浅倉の机とイスをこっちによこしなって」

祐輔はヒカルが座っていた机とイスと自分が引きずってきたそれを取り替えた。

「いったい何なの？」

「僕が持って来た机をよ〜く見てみな」

祐輔に言われた通り、ヒカルは机の表面を見てみたが別に変わったところは見当たらない。

「よ〜く見て、右の方」

ヒカルは顔を机にくっつけるようにして見た。そして、

「あっ！」

と、声を出してその場に固まった。机の右端の方に小さく彫られた文字があったのだ。

——LOVE HIKARU——

「ハイハイ...って感じでしょう？僕も昨日気がついたんだ。これは僕が使っていくよりも本人に渡した方がいいと思ってね、こうやってわざわざ引きずって来たってわけ」

「この机って...」

「風間先輩が使ってた机だろうね。きっと」

ヒカルの顔がみるみるうちに赤く変わる。

「ということで、僕はこれで」

祐輔は再び机とイスを引きずりながら自分のF組に帰って行った。

LOVE HIKARU

響はいったいつ、こんな赤面ものの文字を刻んだのだろう...。きっと響にとって退屈な英語の授業の時に、ヒマをもてあましてこんないたずらをしたに違いない。

——ここに、あたしはちゃんといたんだね...。

ヒカルは机を抱きしめるようにしてうつ伏せた。そうすると、一年間の染み付いた響の匂いがあるような気がする。じわじわと感動が胸に込み上げ、思わず顔がニヤけてしまう。

「...お前、具合でも悪いのか？」

頭の上から声がして見上げると颯土が立っていた。突っ伏しているヒカルを心配したのだ。

「群竹くん、これ見て見て！」

ヒカルは颯土の頭をグイッと机に近づけて、

「これ、ヒビク先輩が使ってた机なんだよ。さっき伊藤くんがF組から引きずってきてくれ

たの！」

と、顔を輝かせた。

「...伊藤が？何でわざわざそんな...」

「だからここを見て！素敵な文字が刻まれてるでしょ？」

「素敵な...文字？」

颯土は目を凝らして右上を見つめ、しばらくしてから、

「...あほらし」

冷ややかなひとこと呟いた。

「...あほらし、ですって？」

ヒカルはムッとして言い返した。

「風間先輩ってすげーや.....。こんなことやっちまう人だったんだ」

響がチマチマと机にヒカルの名を彫る様子を想像するとこっちが恥ずかしくなる颯土だ。くすぐったくて痒くて、机もヒカルの顔も見えてられない。

やたらとクールな颯土の言動にヒカルの鼻と頬がみるみる膨らんでいった。

「ひっどい！群竹くんはいいよ、あかねちゃんといつもらぶらぶだもんね！あたしはこの机があたしのとこにきてくれたことだけで凄く感動してるんだよ！運命を感じてるのに！」

「運命ねえ.....」

颯土の反応は冷たい。ヒカルの鉄拳が颯土の背中をバコン、と打った。

「いてっ！グーで背中殴るか、普通！」

「パーじゃ生ぬるいの！あんた少しデリカシーってやつを勉強した方がいいよ！女の子っていうのはちょっとしたことで浮くし、ちょっとしたことで沈むの！まったくもうっ！いい気分が台無し！」

叩かれた背中をスリスリとさする颯土は、

「はいはい....。浅倉と風間先輩は運命の糸で結ばれてます...」

と、言い直した。だが、ヒカルは、

「ダメ！全然気持ちがかもってないっ！フンッ！」

おもいきり顔を颯土から背けて教室を出て行ってしまった。

「.....だって、`LOVE HIKARU`に、どんなコメントしろっていうんだよ.....」

「よかったなー、浅倉ー、とか、`熱いねー、風間先輩、とか言えばよかったのだろうか...？一日口を利いてくれないヒカルに謝るにも謝れず、颯土はただ困惑するしかなかった。」

その日の放課後――。ヒカルが帰り支度をしていると、廊下をパタパタ走って来たあかねがC組のドアからひょいと顔を出して言った。

「麻耶ちゃん来てないよね？」

「来てないけど...、どうしたの？」

鞆に荷物を詰め終わったヒカルがそれを持ってあかねの元に行く。

「最近、麻耶ちゃんったら冷たいんだよ。わたしに何も言わないで帰っちゃったりして。今日は

まだ帰ってないみたいだから探しているの」

「じゃあ、一緒に探してあげるよ」

ふたりは麻耶が行きそうな場所を考え、まずは剣道場に行くことにした。途中、校庭を横切ろうとするとヒカル足元にサッカーボールが転がって来て、二年生の部員がそれを追いかけて来た。

「すみませーん！蹴ってもらえますか〜？」

ヒカルがおもいきりよくボールを蹴ると、ちょうど追いかけて来た二年生の元に届き、彼はお辞儀をして練習に戻って行った。

「サッカー部といえば、卒業した先輩で麻耶ちゃんに交際を申し込んだ人、いたねー」

と、あかねが思い出したように言った。

「いたいた！あの時、麻耶ちゃんったら...、」

——冗談じゃないわよ！強くなってから言ってよね！弱い男は大嫌い！なよなよ男は大っキライ！

「.....なんて言って、振っちゃったんだよね...」

「麻耶ちゃん、男の強さにこだわりがあるもんね...」

と、ふたりは懐かしい話をする。

「あんなに美人なのに浮いた話がひとつもないのは、あのこだわりのせいだって思うんだけど」

「わたしもそう思う...」

そんな話をしながらふたりは剣道場に到着した。道場では防具をつけた部員たちが、やー！めーん！と、声を出しながら竹刀を振っている。

「そういえば、次郎先輩が剣道部の部長さんと打ち合いして勝っちゃったって、麻耶ちゃんが興奮してたこともあったね」

と、あかね。

「あったあった！次郎先輩ってああ見えて運動神経は学校一って言われてたもんね」

「体育祭の時とか大活躍していたし」

「文化祭の招待試合なんか、部員じゃないのに野球とかサッカーとか、レギュラーに混じって試合出ていたし」

「次郎先輩ぐらいに何やっても強かったら、麻耶ちゃんのお眼鏡にもかなったんじゃないかなあ？」

麻耶は剣道場にいないと分かり、ふたりは次に屋上へ向かった。

「次郎先輩ってさ、今だから言っちゃうけどなんか損な人だったよね」

屋上への階段を上りながらヒカルはしみじみ言った。

「太郎先輩がねえ...」

と、あかねは苦笑いをする。

「ふたりともバカだったけれど、太郎先輩のバカに次郎先輩は巻き込まれちゃっていったって感じだったもんね」

「バカってヒカルちゃん...、そんなはつきりと...」

と、言いながらもあかねは否定をしない。

「だってさ？去年の文化祭のときめき写真館で、太郎先輩ったらセーラー服着てポラロイド写したんだよ？」

「う...うそっ？生足、出して？」

「しっかり出してたよ。しかもスカートをさらに短く巻いちゃって、超ミニだよ？群竹くん、汚いものは撮りたくないって絶句してたよ...」

「うう...。群竹くんかわいそう...」

太郎のセーラー服と生足を想像して胸に悪いものがこみ上げてしまったあかねは、その塊を苦しそうに呑みこんだ。

「あれは伊藤くんのジュリエットとはワケが違ったよ。ただの変態だった！」

ヒカルも当時の光景を思い出し身震いをする。

「そんな太郎先輩とおんなじ顔に生まれついちゃった次郎先輩は、中身までおんなじだって思われちゃってるところあったけど、お弁当を忘れちゃったあたしにコロッケパンをくれたことあったなあ」

屋上への扉を開け、ヒカルはいつも響がいたフェンスの前の特等席に目を向けた。あの場所で響と一緒に夕焼けを見たのはつい二ヶ月前のことだ。今日も薄ぼんやりと遠くの空がオレンジ色になっている。ヒカルは少しだけ響が恋しくなった。今頃、響はアメリカで何をしているのだろうか――と、遠い空を見つめて思う。

「ここにもいないね、麻耶ちゃん」

あかねは屋上をぐるりと見回すが、誰もいない。

「どこに行っちゃったんだろう...」

ふたりは踵を返して、今上ってきた来た階段を下る。そして、ポピーが風に揺れる花壇の前を通りかかった時――。

――揺れるコスモスがあかねちゃんて揺らしてる風が群竹。

あかねはふと、柏木の言葉を思い出した。

「秋になったらここにコスモスが咲くでしょ？」

「うん」

「今年の秋に咲くコスモスは、柏木先輩がとった種が咲くんだよ」

嬉しそうに話すあかねの顔を、ヒカルもにこやかに見つめる。

「去年、花が終わったあと柏木先輩がひとりで種を回収していたの。わたしもちょっと手伝ったんだけどね」

「へえ...。そうなんだあ」

「柏木先輩って本当にカッコよかったね？知的だったし優しかったし、言うことも詩人っぽくて...」

「詩人？」

ヒカルが首をかしげた。

「あのね....、」

——コスモスはゆらゆら揺れて美しいだろ？でも風がないと揺れないしね。あかねちゃんと群竹はそんな感じでよく似合ってるよ。

「うわーっ。そんなこと柏木先輩が？」

「うん。でも私、嬉しかった」

ヒカルは花壇の前の図書室に視線を向けた。

「放課後、ここに来ればだいたい柏木先輩がいて読む本を選んでくれたり、話を聞いてくれたりしたな。ドラムを叩いている姿より図書室にいたり読書してたりする印象の方が強いね、柏木先輩は」

「うん、そうかも.....」

その時、ふたりは校庭のフェンスの向こうを歩いている麻耶を発見した。

「マズイ！麻耶ちゃん帰っちゃったよ！」

「追いかけてよう、ヒカルちゃん！」

駅に続く商店街の入り口あたりでふたりは前を歩いている麻耶に追いついた。が——。

「あれ？麻耶ちゃん、お店に入っちゃった」

ふたりは麻耶が入った店の前まで来て、やや呆然とした。

「...手芸店？麻耶ちゃんが...？」

そこは生地や手芸雑貨が売っているファンシーなソーイングショップだった。

「ここで、何を買うんだろう...？」

「武道具店っていうなら分かるけどねえ...手芸店って麻耶ちゃんぽくないよね...」

ふたりは店の窓から中を覗く。麻耶は生地を選んでいるようだった。

「なんだか楽しそうだけど...」

しばらく出てくる様子もないので、ふたりはその場で待つことにした。

ふと、向かいの店に目を向けたあかねは、

「サスケ、まだいるかなあ...」

と、呟いた。

「サスケって？」

「このペットショップで、田村先輩が可愛がっていた犬」

「は？」

ふふ、とあかねは思い出し笑いをする。

「売られている犬に勝手にサスケって名前をつけて。その犬と遊んでいる田村先輩を見ちゃったことがあるんだ。すごく意気投合しちゃってて、サスケも先輩に懐いてて...」

「でも、売られていた犬なんでしょ？」

「そう...。だから、いついなくなっちゃうかって田村先輩もどこかせつなそうだった」

「そういう田村先輩も意外かも...」

あかねは道を横切ってペットショップの窓から中を覗いた。だが、もうサスケはいなかった。

「いい人に飼ってもらえていたらいいな...」

「そうだね」

先輩たち、元気かなー。

ふたりは同時に言って顔を見合わせた。田村も柏木も太郎も次郎も、そして響もこの間卒業していったばかりなのに、彼らがいない学校はとても寂しい。まるで、自分の体の一部がなくなってしまったような喪失感がある。

「学校の中にも商店街にも、たくさんの思い出を残していったね、先輩たち」

と、ヒカル。

「うん...」

ハッと思い出して手芸店を振り返ると――、

「麻耶ちゃん、いないよ?!」

「うそ! 気づかないうちに帰っちゃったのかな?」

「追いかけよう!」

ふたりはそのまま駅になだれ込んだ。

「げっ！来たのーっ?!」

ヒカルとあかねを玄関で迎えた麻耶は仰天した。結局、麻耶は一足違いで電車に乗ってしまったらしく駅で捕獲することが出来なかったのも、ふたりはそのまま麻耶の家に押しかけた、というわけだ。

「ちょっ、ちょっと待っててね！部屋、片付けてくるから...」

麻耶が慌てて奥へ下がろうとすると、

「いいよ、ちらかってても。ね？あかねちゃん！」

ヒカルは勝手に上がり込んで麻耶の部屋に向かった。

「あーっ！ちょっとヒカルちゃんたらーっ！」

麻耶にしては、らしくないうろたえを見せる。

「いったい何があるのよ、麻耶ちゃんの部屋に」

ますます気になるヒカルはスタスタと前に進み、麻耶の部屋のドアを勢いよく開けた。部屋の真ん中にあるテーブルの上に、色とりどりの布が散乱していた。そして麻耶が座っていたであろうクッションの上には、大きなフープに挟まれた作りかけのパッチワークの作品が放り出されていたのだ。

「何、これーっ？」

ヒカルが手に取って広げた。

「あーっ、見ちゃダメー！」

麻耶はそれを奪い返す。

「いいじゃない、見せてくれたって！」

ヒカルはまたそれを奪い返して広げた。

「きゃーっ！」

麻耶は真っ赤になって顔を覆う。その作品はアップリケとパッチワークがミックスされた、かなり手のこんだものだった。剣道着の剣士が竹刀を振り上げている様子がアップリケされていて、その回りのボーダー部分がパッチワークになっている。そして防具の垂れに刺しゅうされているネームは....、

「伊藤...。伊藤...？これ、伊藤くん?!」

「やーだーっ！」

麻耶は湯気が出るほど赤くなって、ヒカルの手からパッチワークを奪い返した。

「うそーっ、麻耶ちゃんと伊藤くんがだなんて全然知らなかったーっ！」

「違うんだって！全然違うの！」

「何が違うのよ？」

「あ〜ん、とにかくお茶もってくるからその辺に座ってて！」

麻耶は二人を部屋に残して出て行った。

テーブルの上にホットココアとクッキーが並んだ。

「んじゃ、麻耶ちゃんは伊藤くんの誕生日プレゼントを作ってるんだ」

ヒカルが早速クッキーをほおぼる。

「そういうこと」

「知らなかったな、麻耶ちゃんが伊藤くんのこと想ってたなんて…」

とあかね。

「だって言えるわけじゃないじゃない。一応、にぎやか組の仲間として付き合ってるのにさ」

「そんなこと言ったらあかねちゃんと群竹くんはどうなるのよ？」

ヒカルの言葉にあかねはポッと赤くなる。

「伊藤くんは麻耶ちゃんの気持ち知ってるの？」

「知ってるわけじゃない！このプレゼントだってまだあげるかどうか決めてないんだよ」

麻耶はまた赤くなる。

「どうして？こんなに一生懸命作ってるのに…。でも麻耶ちゃんってこういうの苦手なんじゃなかったっけ？」

中学からの麻耶を知るあかねが首をかしげる。

「そうなんだけどね、前に兄貴の同僚の編集者さんが家に来た時、パッチワークの作品集を持っていたの。その作品集を編集した人なんだけど、それを見せてもらったら何か心があったかーくなって私もちょっとやってみようかなー、なんて思ってやり始めたら、こんなことになってしまったってわけ」

麻耶は自分の作品を指さした。

「この麻耶ちゃんに裁縫しようと思わせるなんて…、」

「すごい人だね…、」

うんうん、頷いている麻耶だが、

「伊藤くん」

あかねとヒカルが同時にその名を出した時、違うわよ！と麻耶はますます赤くなった。そんな麻耶がとてつもなく可愛いから、あかねとヒカルはますますからかいたくなって、

「違わないよねえ？だって伊藤くんのことを想っているから、作品集を見て心があったかーくなったんでしょ？」

「伊藤くんのために作りたーいって思って」

「麻耶ちゃんてば、お・ん・な・の・こ！」

両脇から麻耶にすり寄りながらガールズトークを展開する。ふたりにいじられっぱなしの麻耶は、ほとんど涙目になって、もうやめてーと叫んでクッションに顔を押し付けてしまった。三人は散々きゃあきゃあ騒いだ後に、

「で、伊藤くんの誕生日っていつだっけ？」

ヒカルが話を元に戻した。

「…九月一日。でもね、誕生日プレゼントがクリスマスプレゼントになるか、はたまた卒業記念になるか全然未定…。配色とか型合わせとかすごく難しくて、何回も色変えたり布替えたりして

作り直してるから…」

「それで、手芸店にいたんだね」

「見てたの?!」

「ていうか、尾行してた」

「やだな!なんで〜?」

「それは麻耶ちゃんが何も言わないで帰っちゃったり挙動が不審だったからだよ」

う...、と麻耶は詰まる。

「だって...なんだかこっ恥ずかしくてさ。あの手芸店、毎日寄ってたし...」

ヒカルとあかねは思わず顔を見合わせた。これが、弱い男は大嫌い!なよなよ男は大っキライ!と、先輩に向かって吼えた麻耶なのだろうか。と、いうことは――。

「麻耶ちゃんのこだわりに伊藤くんがかなった、ということなの?」

と、ヒカル。

「私のこだわり?」

「男の強さにやたら厳しいこだわりがあったじゃないの」

ああ...、と麻耶はまた赤くなる。

「負けたんだよ、去年の合宿の時、伊藤くんと試合して。あっさりと二本負けしちゃった。それから何度やっても勝てない。完全に越えられちゃったよ、私...」

負けた、越えられた、と言いながら、麻耶はちっとも悔しそうじゃない。それよりも嬉しそうに笑みを浮かべている。

「そっか...。伊藤くん、一年の最後に自分で言った目標をクリアしたんだね」

「も、もういいでしょ?ほんと、もう許してくださいお願いします。あたし、恥ずかし死にしそうだから!」

「恥ずかしがらなくたっていいじゃない。麻耶ちゃん、可愛いよ」

「と、とにかく、このことはナイショね?あかねは群竹くんにも言っちゃダメだからね!」

「.....うう。言いたい...」

「絶対にダメ!!」

麻耶がすごい剣幕で言うので、あかねは仕方なく頷いた。

「じゃあ、わたしも群竹くんに何か作ろうかなあ」

と、あかねは天井を見上げながら考える。そして、

「お揃いのマスコットとか.....」

と、思いついたものを口にした。

「あんたは何でもお揃いが好きだねえ...」

自分のことから話題がそれたとたん、麻耶はいつもの調子で言い放った。

「いいの!お揃いのものを持ってるだけで嬉しいんだもん」

「だったらあかねちゃん、群竹くんはもうちょっと乙女心が分かるような男にしつけておかないとね!」

ヒカルは突如、学校での今日の颯土の言動を思い出し怒りが再発した。今のままの颯土にお揃

いのマスコットなどあげたら、`あほらし...、なんてことを言いかねない。

「ほんと、デリカシーのない男だよ群竹颯士！」

今度は人の彼氏を捕まえて言いたいことをいうヒカルに、あかねは苦笑するしかなかった。

「まあまあ、ヒカルちゃんも風間先輩人形でも作ってさ、気持ちに余裕を持とうよ～」

と、麻耶。

――ヒビク先輩人形？！

ヒカルの目がきらきら輝いた。

「作りたいかも……」

「じゃ、明日はみんなであの手芸店行こうよ！」

と、こんな風に、三人娘たちにいきなり手芸ブームが訪れたことによってお揃いグッズを次々と与えられることになった颯士は、

「……どうコメントすりゃいいんだよ」

と、嘆く日が続いたとかそうでないとか。

「今時、高校生の修学旅行に京都ってのもレトロだよな～。ハワイまで連れて行けとは言わないけど、せめて九州、沖縄、北海道あたりまでは連れてって欲しいよなあ」

初夏の爽やかな風が薫る屋上で、購買部のジャムパンを口の中いっぱいにはおぼりながら喋る勇斗の声が青空に高く上っていった。本城高校の三年生は来週から修学旅行に出発することになっているが、クラスもバラバラのにぎやか組がどうやって一緒に現地行動をするか、今日はここに全員集合してランチしながらの作戦会議だ。だが、勇斗はその行き先に不満があるらしい。

「オイラ、中学の時も京都だったんだぜ？なあ、ゆうちゃん？」

「そうだったなあ」

祐輔だけではなく、颯土も麻耶もあかねも京都修学旅行経験者だった。しかも行動範囲もほとんど変わらない。多少その散策範囲が広がったということと完全自由行動日が一日あるということ以外、中学の修学旅行と変わりばえのない行程日程メニューだ。

「せめて広島とか萩とかくっついてればまだ許せるけど、高校の修学旅行で京都オンリーってのもアッパレすぎるぜ」

「こうゆう所に都立と私立の差ってものが出るんだよねえ」

ランチがすんでいる麻耶は雑誌をパラパラめくりながらシビアなことを呟いたあとに、

「わっ。今月は恋愛運絶好調！意中の人とおでかけのチャンス、だって」

と、夢見がちな発言をした。それなになに？と勇斗が麻耶の雑誌を覗き込む。そんな中で、ひとりだけ目を輝かせながら京都散策ガイドブックを見ているのは京都初体験のヒカルだった。

「へえ～、三十三間堂ってところには千体の観音像があるんだって。え？千の像の中には会いたいと思う人の顔があるって書いてある！知ってた？」

ヒビク先輩の顔もあるのかなあ、とヒカルは千体の観音像が並ぶ中に響がいたる図を想像したが、

「.....純和風の観音様と金髪のヒビク先輩じゃちょっとイメージ違うなあ...」

頭の中に浮かんでいるそのチグハグな光景にひとり首を傾げる。

「まあ、そーゆー中にいるヒビク先輩の顔も見たい気がするけど、うふふ.....」

「ヒカルちゃん、独り言が声に出ているよ～」

勇斗に指摘されてヒカルは、え？と、ニヤケた顔を上げた。

「しょうがないよ。なんたって `LOVE HIKARU、だから...」

ニヤケの素をC組まで配達した祐輔がサラッとと言うと、

「ヒカルちゃんの今月の恋愛運は、相手をどこまでも信じれば未来は明るいでしょうだって！」

と、麻耶は見ていた雑誌をヒカルに差し出した。どれどれ私にも見せて、とあかね。

「いやだあ。壊れ物に注意ってある...。私は今月の恋愛運不調みたい...」

あかねは恨みがましい目を颯土に向けた。女子たちの興味にはたいして興味のない颯土は、自分に対するあかねの目つきの意味がよく分からず、いつものようにぼーっと空を見上げながらランチパンをかじっている。

「しかも群竹くんの今月は絶好調...意中の人と再会の兆しだって...。ふーん。再会ねえ...」

あかねの気配が怪しくなって来たので颯土はやっと、

「再会する意中の相手なんかいないから。そーゆー目で見ろな」

と、反応した。

「とにかく、京都だろうが広島だろうがハワイだろうが、みんなで行けばどこだって楽しいと思うよ！っていうか楽しもうよ！」

ヒカルはガイドブックをパタン、と閉じていつもの調子で号令をかけた。

「そうだね。高校最後の旅行なんだから文句言っちゃもったいないよね！」

あかねも気を取り直してヒカルの意見に同調した。

「何か最近のあかねちゃんって、ヒカルちゃんみたいになってきたよね～」

勇斗の言葉に、確かにそうだ、と颯土はチラリとあかねを見た。最近のあかねは考え方も行動もヒカルのそれと似てきたように思う。今までのように危なっかしくて心配だ、と思うこともあまりなくなったし、ツッコミも厳しくなった気がするし....。

――女っていきなり変わるんだな....。

と、密かに思っているところだ。

「じゃあ、最終日は一度班で散ってから京都タワーに集合っていうのはどうだ？」

祐輔の提案に麻耶がすかさず同意したので、他の皆も異議なし、ということになった。

「市内をふらふらしてると先生たちに見つかりやすいから、その後は京都を脱出した方がよさそうだね」

どこへ行く？と皆は顔を見合わせる。

「奈良...とか？」

思いつきで颯土が言うと、定番過ぎるけどそれでいいよ、と麻耶。

「奈良といえばシカこうえん！」

勇斗も思い付きを口に出す。こうえん(公演)、という言葉にはすぐさま反応するヒカルはさらに目を輝かせた。

「シカこうえん？そんなのがあるの？そこ行こうよ！シカが公演するなんて楽しそう。何やってくれるの？」

ヒカルの発言に皆は目を丸くした。

「え？なんか違う？じゃあシカダンスとか？」

「シカダンス...妄想もここまでくればアッパレだな」

と、祐輔。

「じゃ、目的地は奈良公園ってことで」

颯土がクールに勇斗とヒカルの過ちを訂正し、にぎやか組が向かう目的地は奈良公園に決定した。

◇

「シカこうえんって公園だったのね....。シカもシカの放シカ(飼)いの」

公園内を普通に歩いているたくさんの鹿たちを見てヒカルは驚くと同時にガッカリもしたよう

な口調で言った。

「まさか本当にシカダンスを期待してたとか？」

「うんまあね。でも、シカがダンスするわけもないし、シカたないよ」

「さっきからシカシカうるせえよ...」

あかねとヒカルの変な会話に颯土がつっこむ。修学旅行は一日目は学年全体での見学旅行、二日目はクラス単位での体験学習旅行、そして三日目の今日は小人数班単位の自由行動日。ヒカルたち六人のにぎやか組は作戦通りそれぞれの班で各地に散った後、班から離脱して奈良公園にやって来たのだ。

「鹿せんべいだって！あげてみようよ！」

ヒカルたち女子三人組はさっそくシカせんべいを買ってシカに与えた。最初は可愛いね、などと呑気にしていたが、シカはせんべいを持っている人間をめがけて方々から集まって来る。一頭二頭なら可愛いものだが、群れをなして集まると脅威だ。

「うわわっ」

ヒカルと麻耶は即座に逃げたが、鈍いあかねは逃げ遅れてシカに囲まれてしまった。逃げようとするシカたちはあかねの後をゾロゾロとついて行く。

「いや〜ん、誰か助けてよ〜」

あかねは半ベソをかきながら逃げ回るがシカはあかねが手に持ったままのせいべいに集合してどうにもならない。そんな様子を勇斗や祐輔は笑いながら見守り、颯土はカメラを向けていた。

「群竹く〜ん！助けてってばー」

あかねは颯土名指しで助けを求めた。

「せんべいを捨てりゃいいだろう...」

颯土はシャッターを切ってから、面倒くさそうにあかねを助けに行った。そんな微笑ましいふたりのやりとりを眺めながら、

「一年の時、ホームルーム合宿の実行委員と一緒にやったころはさ、あいつが一人で輪の外側にいたんだよな。なんか今からしてみればウソみたいだけど...」

祐輔が感慨深げに言った。

「しゃべんなかったもんね、あの頃の群竹くん」

麻耶も過去の颯土を振り返る。その颯土は今、あかねにまわりつくシカたちを追い払いながらも、わざとシカせんべいをあかねの近くで振ってシカをおびき寄せたりして、あかねに背中を叩かれたりなだめたり抱きつかれたり...のじゃれ合いを展開している。

「名前なら今朝言った...。あんたたち覚えてるじゃないか...な〜んて斜めに構えてたんだから。私、あの時の群竹くんの印象がまだ忘れられないよ。怖かったもん」

「でもさ〜、オイラたちいい仲間にめぐり会えたよね〜。だから群竹ちゃんだって変わったんじゃない？」

勇斗がめずらしくまともなことを言った。

「そうだね。群竹くんだけじゃなく、みんな変わったと思うよ？あかねちゃんも麻耶ちゃんもあたしもきっと」

ヒカルは出会った頃の皆の顔を思い出していた。泣き虫だったあかねは強くなった。麻耶には柔らかな女らしさが出た。そして自分は――。

「変わってないのが約一名いるけどね」

という麻耶の言葉にやっぱりそうか...、と頭を抱えたヒカルだったが麻耶の矛先は勇斗だった。

「オイラかよ〜？」

勇斗は心外とでも言いたげに口を尖らせている。

「あんたしかいないでしょうが。いつまでもヘラ男でさ。女の子のことばかり言ってるし、ワケのわからない発言ばかりするし」

「それキツツイなあ、麻耶ちゃんてば...」

やっぱり麻耶ちゃんも変わってないかも...、とヒカルは密かに苦笑した。

だが勇斗はどうだろう？変わってはいないのかもしれないが、何事も意に介さない性格で一見何も考えてないようなつかみどころのないキャラクターの勇斗がいたからこそ、いびつになりそうなサークルをどうにかこうにか修正できてきたのではないだろうか。

振り返ってみれば、思っていることを口にせず仲間から距離を置こうとしていた颯土と自分たちはしょっちゅう気まずい雰囲気になった。それを勇斗のキャラクターがうまく中和してきたのだ。勇斗は最初から颯土に好意を持ちそれを態度に表してきて、それは今も変わっていない。颯土も颯土でうざったそうにしていながらも、強く拒絶しなかったのはやっぱり心の奥では勇斗と同じ気持ちだったのではないか。今はあかねという優しくてかわいい彼女がいる颯土だ、勇斗とは男同士の目に見えない、そして言葉には出さない絆が深くあるに違いない。

「でもさ、大久保くんって偉大だと思う！」

ヒカルは堂々と言い切った。

「へ?!」

当の勇斗が目を丸くしている。

「ヒカルちゃんもしかしてオイラのことほめてる？」

「うん！」

ヒカルの言葉に勇斗は満足そうにニッと笑って胸を張った。

「ところでまだやってるよ、あの二人...」

麻耶がまだシカと戯れているあかねと颯土を指さした。

「群竹くんがあんな楽しそうに笑っているのも不思議といえば不思議なんだけど、ちょーっと見せつけすぎだよね〜？」

「確かに！」

ヒカル、祐輔、勇斗が思いっきり同調する。

「ちょっと意地悪して邪魔したくなるよね〜？」

三人はニヤリとうなづく。

「それじゃ...」

麻耶はスタスタとあかねの元に歩きだし、

「ハイハイ、仲がいいのは分かったからあかねちゃん、私たちとお土産買うの付き合ってくれる？」

と、棒読みで喋りながらあかねと颯土の間に割って入った。

「え？あ、うん、もちろん…」

あかねは貼り付いた笑顔のまま答えた。

「じゃ、三時にここで待ち合わせしようね！」

と約束を交わし、女子三人組、男子三人組は別行動を取るようになったのだった。

ヒカルたち三人が入った土産物屋は焼き物専門の店だった。茶わんや湯飲み、そしてかわいらしい小物まで、店内にある全てがきれいな色で染められた焼き物だ。あかねは棚にあったペアーのマグカップを手にしていて。淡いブルーと淡いオレンジの趣のある色合いだ。ワンポイントにうさぎの焼き印が茶色く押されている。

「いいなあこれ。こんなカップでお茶飲んだらそれだけで幸せな気分になれるやいそう…」

颯土とペアーで使いたい。ひとつが千五百円で高校生にはかなり値の張るものだが、他のお土産を何も買わなくてもこのマグカップが欲しい。

「それ、買うの？」

両手にマグカップを持って考えているあかねにヒカルは訊いた。

「ちょっと高いけど、すごく気に入っちゃった…」

「うさぎのマークがあかねちゃんぽいね」

そうかな、とあかねは嬉しそうに笑う。

「本当に気に入るものってあんまり出会えるものじゃないよね」

というヒカルの言葉が決め手になり、あかねはレジで会計をすませた。

――ひとつは群竹くんにあげよう。

颯土はあまりペアーのものに興味がない。ヒカルと響にはペアーのペンダントを買ってあげたくせに自分は持ちたがらない。だが、これならば持ち歩かなくても自宅で毎日使える。颯土がこのカップでお茶を飲む姿を想像するだけでドキドキしてしまう。

「先に外に出ているね」

まだ買い物が済んでいないヒカルと麻耶に声をかけ、あかねはマグカップを包んで入れた紙袋を大事に抱えて狭い出入り口のドアをまたごうとした。

同じ時、何かを話ながら数人の他校の制服を着た男子たちが、同じドアを向こう側から店の中にまたごうとしていた。

「おい、後ろ！」

正面を向いていた男子の注意の声よりも先に、後ろ向きで店に入ろうとしていた先頭の男子が勢いよくあかねにぶつかった。

「きゃっ！」

バランスを崩したあかねは、手に持っていた買ったばかりのマグカップをコンクリートの地面に落としてしまった。カチャン、と陶器の割れる音がした。

「あ！ごめんっ！」

あかねにぶつかった男子があわてて落ちた紙袋を拾い上げ中を確認した。ブルーのマグカップが割れてしまっていた。

「あ…」

紙袋を渡されたあかねは絶句した。

——群竹くんにあげようと思っていた方が…。

「本当にごめん…。それ、弁償するから…」

男子は同じマグカップが並んでいる棚の前に立った。だが、

「あれ…？」

割れたブルーと同じ色のものがない。

「これ、ひとつだけだったの…」

あかねがポツリとつぶやく。

「でもいいです。私もちゃんと前を見てなかったから…」

「ダメだよ。こっちの色はきれい？」

男子は淡いグリーンのマグカップを手にとってあかねに見せた。

「本当に、いいです…」

あかねは首を振る。きれいな色ではないが、颯土にはブルーだと最初に見たときに直感で決めてしまったので、他の色ではさっきまでのドキドキも沸かない。男子は店員にブルーの在庫を確認してくれたが、手焼きのものだから同じ色合いのものは最初からないのだと説明された。

「どうしよう…」

男子は大真面目に悩んでいるようだ。つい可笑しくなってあかねは笑った。

「本当にいいの。そこまで考えてくれてありがとう」

「そういうわけにはいかないよ。大事なものだっただんじょ？やっぱりこれを弁償させてもらうよ」

男子はさっき手に取ったグリーンをレジに持って行く。

「あっ…」

あかねが後を追う間もなく男子は会計をすませ、それをあかねに渡した。

「同じものじゃなくて本当にごめんね」

彼は申し訳なさそうに言った。

「いえ、ありがとう…」

「ありがとうなんて言わないでよ。俺が悪かったんだから。じゃあね」

男子はあかねに手を上げて仲間たちが待つ場所へと戻って行った。

——爽やかな人…。

仲間たちに頭を小突かれ、こちらを見ながら照れたようにその男子は笑っている。そんな笑顔はまるで…、

「ヒカルちゃんが男の子になったみたい…」

思わず声に出して呟くと、

「ん？あたしがどうかした？」

いつの間にか買い物を済ませたヒカルと麻耶がそこにいた。あかねは今ここであったことをふたりに説明した。

「ふ～ん。なかなかカッコいい子だね。でもあの顔、どっかで見たことあるような...」

麻耶は遠くにいるその男子を見つめながら顎に手を当てて考える。

「麻耶ちゃん、あの人が知ってるの？」

「誰だったっけ...？芸能人じゃないし...、ダメ、思い出せない」

麻耶は悔しそうに首を振った。

「そろそろ三時になるよ。行こうよ」

そうだね、と三人はそろって店を出た。最後にあかねが振り返ると、その男子もこちらを見つめていた。

奈良の焼き物専門店で出会った女の子は、まるで砂糖菓子のようにふんわりとした甘さがあった。大事そうに抱えたマグカップが、自分が不注意でぶつかったために落とさせて割れてしまった時の泣き出しそうな顔が今でも脳裏に焼きついている。

「ナンパしときゃよかったじゃん！」

仲間はそんなことを言ってたが、あんなに大事そうに抱えたマグカップだ。彼氏のものに決まっている。

——でも、確かに可愛かったよなあ。ちょっと惜しかったかな。

そんなことを考えながら少年はロビーに下りてきた。これから点呼までは自由時間だが、あまりフラフラしていると他校の女の子に逆にナンパされる。この修学旅行の間だけでも何人の女の子に声をかけられたかわからない。それは別にかまわないのだが、髪の毛をむしられたりするのは勘弁して欲しい。だが、それも仕方がないと言えそう。

——でも、あの子だったらオッケーだったなあ。電話番号ぐらい聞いときゃよかったかなあ。

やや後悔しながらふと売店の中を覗いて見ると、

——あれ?! あの子!

たった今、電話番号を聞いときゃよかった、と思ったばかりの少女が、ふたりの友人と共に土産を見ていた。

◇

ヒカルたち六人は門限ギリギリに京都の宿舎に戻った。班から離脱して別行動をしたことも先生たちにはバレずにすんだようで、一同はホッとして各クラスに戻り夕食を済ませた。これから夜九時の点呼までは自由時間だ。ヒカル、あかね、麻耶は再び三人で宿舎内の土産物屋をのぞいていた。すると、

「君、さっきの！」

ひとりの少年がロビーの方からやって来た。

「あっ！」

あかねが声を上げた。制服を着ていないからすぐにはピンとこなかったが、声をかけてきた少年は奈良の土産物屋で会った男子高校生だったのだ。

「奇遇だね? 君も同じ宿舎だったんだね? 修学旅行？」

「うん、そう。あなたも？」

「そうだよ。Y東高校」

そういえば宿舎の入り口にある『歓迎〇〇高校』という看板にそんな名前の高校が出ていたな、とあかねは思った。

「あーっ! 思い出した！」

いきなり麻耶が叫んだ。ヒカルもあかねもそしてY東高校の少年も驚いて麻耶に注目した。

「Y東校サッカー部キャプテンの、名前は、えっと確か中川…」

「中川亮太」

彼は自分の名前を言った。

「そう！中川亮太くん！」

「麻耶ちゃん何で知ってるの？」

ヒカルが首を傾げた。

「去年の全国大会優勝校。国立競技場での決勝戦はテレビでも中継したでしょう？」

「それでさっき見たことあるって言ってたんだ...」

さすがスポーツ万能の麻耶だと、ヒカルは別のところで納得した。

「それに中川くんは人気者だもん。今でも女の子たちがキャーキャー言って騒いでるし」

そうなんだ...とあかねは亮太をまじっと見つめた。亮太の方は、そんなことないよ...、と頭をかいて照れる。

「君たちの本城高校って向島にある本城高校？」

「そうだよ。うちの学校知ってるの？」

サッカー部はたいして強くないはずだけど...、とヒカルが考えていると、

「俺、子どものころ向島に住んでいたことがあるんだ。この宿舎に来て本城高校の看板を見た時、近所にそんな名前の学校があったなって思って」

「この子、現在向島の住人です」

と、麻耶がヒカルの肩をポンと叩いた。

「へえ、そうなんだ。面白い偶然だなあ」

亮太がそう呟いた時――。

「麻耶ちゃんたち何やってんの～？」

勇斗が颯土と共に現れた。

「知り合い？」

勇斗は亮太をチラッと見て、負けた...とひとこと呟いた。

「さっき話したでしょ？奈良のお土産屋さんで私が群竹くんにあげようと思ったマグカップを...、」

「群竹...？」

あかねの言葉を最後まで聞かずに亮太は颯土を見て凍結していた。颯土は自分を見つめる見ず知らずの亮太をにらみ返す。

「彼、Ｙ東高校サッカー部のキャプテンで中川亮太くん」

麻耶の紹介を聞いて颯土の目が剣呑に光った。

「中川亮太...？」

颯土は亮太を鋭く見る。

「あれ？二人は知り合いなの？」

二人の間に立っているヒカルは颯土と亮太を見比べた。

「颯...、」

「亮...、」

互いにつぶやくと、颯土は亮太を一瞥し突如踵を返して土産物屋を出て行ってしまった。

「群竹くん、どうしたの?!」

驚いたあかねが颯土の後を追いつきに消えて行った。

「ちょっと!」

麻耶も二人の後を追う。ヒカルは立ち去る颯土の背中を見つめて立ちつくす亮太を見ていたが、

「それじゃ...」

と自分も行こうとした。すると、

「あ、待って!」

亮太がヒカルを呼び止めた。

「さっきの群竹の家って、隅田川のほとり?」

「うんそう。あたしの家は群竹くんちの隣なの」

亮太は目を見開いた。

「そ、そうか...。君はあの家に住んでいるんだ...」

「あの家って、あたしの家知ってるの?」

亮太はうん、とうなづいた。そして、

「昔、俺が住んでいた家なんだ...」

と、苦しげにつぶやいた。

◇

「群竹くん、待って、どうしたの?」

足早に歩く颯土の後をあかねは追いかけた。

――何だってこんな所で亮（あいつ）に再会（あ）うんだ...。今ごろになって、そしてこんなに突然に、しかもよりによって俺の知らない所であかねと関わっていたなんて。

爽やかな人だったんだよ!と、土産物屋で会った亮太のことを、あかねはそう言っていた。

――ムカつく。

「群竹くんたら!」

あかねは怒った声で颯土を呼ぶ。

「こら、颯土!」

いつまでも自分を無視して行く颯土に、あかねはとうとう怒ってそう叫んだ。

「ああ?」

颯土はやっと立ち止まって振り返った。

「こら、颯土?」

その言葉を放ったのがあかねだということが信じられないといった感じで颯土は辺りを見回した。ヒカルでもいるのかと思ったが、そこには腕を腰にあてて自分をにらんでいるあかねしかいない。

「何、怒ってるのよ?」

「別に何も怒ってないよ...」

「うそ! 何回も呼んでるのに全然知らん顔していたじゃない。さっきの中川くんと知り合い

なの？」

あかねは颯土に詰めよる。

「.....」

颯土は言葉につまる。

「さっきすごく感じ悪かったよ、群竹くん」

「――そりゃ悪かったな」

颯土は吐き捨てるように言った。

◇

「あのマグカップ、颯にあげるものだったんだな...」

刺すような目で自分を睨み、顔を背けて立ち去った颯土を追いかけて行くあかねの後姿が胸に痛くて亮太はうつむいた。電話番号を聞いておけばよかったなどと脳天気なことを考えていた自分が恥ずかしくて仕方がない。

――亮ちゃん、元気でな！オレ、三年生になったら絶対に亮ちゃんちに行くから！ひとりで行くから！

――うん！颯ちゃん、忘れるなよな！絶対に来てよな！

引越しのトラックを追いかけながらずっと手を振ってくれた`颯ちゃん、の姿が未だに目に浮かんでくる。

「中川くん？」

うつむいたままの亮太を心配してヒカルが声をかける。そして亮太をロビーの椅子にいざなった。亮太はしばらく颯土が去った方を見ていたが、ヒカルに従って長椅子に座った。

「昔、颯に...、あ、いや群竹に取り返しのつかないことをしちゃったんだよ、俺...」

「取り返しのつかないこと？」

「俺と颯は同じ年にあの川べりの家で、あ、俺は今君が住んでいる家で生まれたんだ。だから俺たちは生まれた時から兄弟のようにして育った。七才になるまでね。でも小学一年の夏に俺ん家は横浜に引っ越すことになって颯とも別れなきゃならなくなったんだ」

ヒカルは亮太の顔をジッと見つめながら話を聞く。

「俺が引っ越す日、颯は言ったんだ。三年生になったら俺の誕生日に横浜に会いに行くから、って」

「三年生？」

「そう。三年生ぐらいになれば、きっと一人で電車に乗って東京から横浜まで行けるからって」

ああ、そういうことか、とヒカルは納得した。子どもの可愛い発想だ。颯土にもそんな時代があったのかと思うと少しだけ笑える。

「三年生の俺の誕生日に会おうって俺たちは約束した。指きりをして約束したんだ。なのに...」

そこまで言って亮太は絶句した。

――えっと...誰だったっけ？

――オレだよ？ソージ...。約束、忘れてないよね？

――...あ...。うん。でも今、友達が来てるからまたね！

八年前のことがフラッシュバックする。いたたまれなくなる――。

「中川くん...？」

「.....俺、その約束を忘れてたんだ。あいつはきっと不安な気持ちで電車を乗り継ぎながら、そして何回も道に迷いながら俺に会いに来てくれただろうに、俺は引っ越した先で出来た新しい友達と毎日遊ぶことが楽しくて、向島に住んでいたことも颯のこともすっかり頭からなくなってた」

忘れるなよ、絶対来てよ、と言ったのは自分だったのに、約束を忘れたのは自分の方だった。「颯が俺に会いに来たのは約束通り誕生日でさ、俺は新しい友人たちと誕生会をやってて、颯のこと、思い出したのに家にも上げないで追い返したんだよ」

「そんな...」

颯士の過去を初めて知ってヒカルはショックを受けた。颯士が友達や仲間を拒絶していた理由が亮太との間にあったこのことだとしたら、三年生の頃に受けた傷を癒さないまま最近まで生きてきたということになる。

「ひどい野郎だよな、俺。でもその時は自分のしたことの意味なんてちっともわからなかった。ずいぶんあとになってからだよ、俺が三年生の時に颯にしてしまったことが、どれだけヒドイことだったかに気がついたのは...」

三年生といったらまだ九才だ。友情や友達の大切さもやっと分かりかけるころだろう。だから、今が楽しすぎて昔を忘れてしまった亮太が颯士に対してしてしまったことは小さな罪だったはず、とヒカルは思った。

けれど...

亮太に冷たくドアを閉ざされた九才の颯士が、来た道をひとりで電車に乗った帰り道を思うとヒカルの胸は痛んだ。うつむきながら涙をこらえる小さな颯士の姿が目浮かぶ。

「俺はあの時のことを颯に謝りたいってずっと思っていた。けど今更どうやって謝っていいのかもわからなくて...」

「謝ってあげて欲しかった...」

ヒカルは言った。

「仲間とか友達とかそういう仲良しごっこは大キライだって言ってたんだよ。あたしたちが出会ったころの群竹くん」

「そうか...」

亮太はうつむいた。

「ずっと友達を作らないで生きてきたんだと思う。友達に期待して裏切られるのが怖かったんだと思う。それほどに深く傷ついていたんだと思う」

「俺のせいだ...」

「うん。中川くんのせいだよ」

ヒカルのストレートな言葉に、自分の非を分かっているながらも亮太は少し傷ついた。にぎりしめているこぶしが後悔に震える。そんな亮太の手をじっと見つめていたヒカルは言った。

「でもね、今の群竹くんは違うよ。だってあたしたち、今、最高の仲間だもん」

亮太が顔を上げるとヒカルが微笑んでいた。

「仲直り出来るよ。今からでも中川くんの気持ちを彼に伝えて」

「けど、さっき…」

亮太は自分を斬るような目で睨み無言で去って行った颯土の態度を思い出した。

「恨んでいて当たり前だよな…」

「ああ…、あれにはきっと別の意味があったんだと思うよ？うん」

ヒカルはニマツと笑った。

「別の意味？」

「小学校三年生のころのことを、いまだに根に持っている群竹くんじゃないよ。彼はそんな奴じゃない」

ヒカルはきっぱりと言い切った。

「確かに中川くんとのことがきっかけになってトラウマになって、友達とか友情を信じられなくなっていたのは事実かもしれないけれど、それはあくまでも群竹くん自身のことで中川くんに対しての恨みとか憎しみっていうんじゃないと思うんだ」

ヒカルの言葉に亮太は救われたような気持ちになった。

「だから、中川くんが中川くんの言葉で三年生の時のことを謝れば絶対に仲直りできるよ。お互い心にあったしこりを取り除いて、ここからまた新しい友達として出発してほしいって思う」

ヒカルはニッコリと笑った。

「君…」

亮太は呆然とヒカルを見つめ、ヒカルの深い魂に急速に惹かれていく自分を感じた。さっきまでは砂糖菓子のようなあかねが可愛いと思っていたのに、その思いに向日葵の笑顔が上書きされてしまった。

「…今日ここで君に出会えてよかったよ…」

「えっ…？」

ヒカルは亮太の素直な言葉に少し驚いた。

「颯土のところに行ってくる。ありがとう！」

亮太は立ち上がってロビーを後にした。

「はあ……」

ヒカルは感心のため息を吐き、あかねが土産物屋で会った亮太のことを、爽やかな人だと言っていた理由がよく分かった。

◇

「その言い方、すご〜く感じ悪い」

あかねはムツとして颯土に詰め寄った。

「どうせ俺はいつだって感じ悪いですよ」

颯土も言い返す。その言葉にあかねはまた腹が立った。

「ヘンだよ、群竹くん。どうしてそんな言い方するの？」

嫌な雰囲気になってしまった、と、颯土は思っていた。ここであかねとケンカする理由などな

いのだ。なのに無性に腹が立ってしょうがない。とにかくイライラする。それを自分じゃどうすることも出来ない。

――アホらしいくらいにガキみてえだ、俺…。

自分で自分がイヤになった時、

「颯ちゃん」

懐かしい呼ばれ方で声をかけられ、振り向くとそこに亮太が立っていた。

「亮…」

あかねは颯士と亮太を見比べて、やっぱり知り合いだったんだ…と、つぶやいた。

「今、ちょっといいかな？」

亮太は颯士とあかねを見比べた。颯士は言葉を返さなかったがあかねは、どうぞと颯士のそばから離れた。亮太はあかねに、悪いね、と言葉をかけて颯士の目の前に立った。颯士は亮太を見ている。その目はさっきと同じ、鋭く刺すような目だった。亮太のにぎった手のひらに汗がにじんだ。その時、中川くんの言葉で、と言うヒカルの声が亮太の耳に蘇った。

「――颯ちゃん、ゴメンな」

素直に口から出た言葉は、幼かった頃、喧嘩したあとに必ず口にしまった言葉だった。

ごめんな、颯ちゃん。ごめんな、亮ちゃん。

――これが、俺の言葉だ…。

「亮…」

耳が覚えている素直な言葉を聴いた時、颯士は自分の心を縛っていた鎖が一瞬のうちに消滅したのを感じた。

「俺、颯ちゃんにひどいことしたと思ってる。あれからずっと気になっていたんだけど謝れなくて…。怒ってただろ？」

「ああ」

颯士は亮太を見据えてひとこと言った。

「俺、ガキだったから人の気持ちを考えられなかったんだ。その時が楽しいとそれ以外のことに頭も心も回らなくてさ。後になって自分がしたことがとんでもないことだったんだって気がついた」

いつも亮太とは一緒だった。幼馴染以上の友達、当時の颯士にとって一番大切なものだった。そんな亮太が引っ越してしまったときは自分の一部が無くなってしまったと言ってもいいぐらいに寂しかった。だから亮太が引っ越してしまった後も、三年生になって八月の亮太の誕生日に一人で電車に乗って亮太に会いに行く約束を目標にして、その日を待ち望んでいた。

だが、亮太の方は颯士のことなどすっかり忘れ、新しく出来た友人たちと楽しい日々を送っていた。亮太に冷たくドアを閉ざされた時、颯士は深い闇の中に取り残されたような絶望を感じた。引っ越してしまった時以上の例えような絶望に襲われたのだ。どうやって自分の家まで帰ったのかまるでわからなかった。暗闇の中をたったひとりでどこまでも歩いていた、という感覚だけをいつまでも覚えていた。友達なんてしょせんはこんなものだ。生まれたときから一緒にいても無くなる時は一瞬で無くなる。そんなものを大切にしたらそれは無駄なこと――と

、それ以後颯土の心は頑なに友達というものをシャットアウトした。

小学校三年生のあのころは、亮太に対して確かに恨みも憎しみも感じた。だがそれは年を重ねるごとに薄れていった。そして大切だった人に裏切られた時の絶望、深い闇の中に取り残された恐怖という感情だけが颯土の心にトラウマとして残った。友達も仲間も必要ない。ひとりで生きていければそれが楽でいい。そうやって心の中のどしゃぶりをごまかして生きて来た。ヒカルやあかね、今の仲間たちに出会うまでは...

「...本当にガキだったんだからしょうがないだろ。そんなことにいつまでもこだわっちゃいけない...」

颯土はポツリと言った。

「颯ちゃん、俺たちこれから友達になれるかな...？」

「こんな所で会わなかったら、一生なれなかっただろうな...」

颯土は亮太を見てニヤッと笑った。

「許してくれるのか？」

「お互いガキのころの話だし、許すとかそういうのはもう関係ないよ」

亮太は安心したように笑った。そして、

「あの子の言う通りだったな...。颯ちゃん、ほんとにいい仲間を持ってるな」

と、ロビーの方に目を向けた。

「あの子？」

「いや、何でもない。今度、向島に行ってもいいかな？」

「...ああ、来いよ」

「よかった...。ずっと颯ちゃんに謝りたいって思っていたからさ。さっき売店で会った時はどうなるかと思ったよ。あの子に会ってなかったら、きっとあのまま何も言えずに明日横浜に帰っていた...」

「あの子ってもしかしてヒカルちゃん？」

「ヒカルちゃんっていうのか、あの子...」

亮太は眩しそうに目を細め、ロビーの方向を見つめる。根が素直なのか、そんな亮太の顔には誰が見ても分かるぐらいにヒカルへの好意が現われていた。

「あいつに惚れても無駄だぜ？」

颯土が冷たく水を注した。

「そう。ヒカルちゃんはダメ」

さらにあかねも追い打ちをかける。クスクス笑いながら、だが。

「そっか、ダメか...」

ああダメ、うんダメ、と颯土とあかね同時に声を揃えて言われた亮太はややガッカリし、そして腕時計を見た。

「そろそろ点呼があるな。じゃ、またな。颯ちゃんに会えてうれしかったよ」

まっすぐな亮太の言葉と呼び方に颯土は赤面し、

「...颯ちゃんってのはもうやめろよな。いつまでも七才のガキじゃないんだからさ」

ニコニコしながら自分を見ているあかねを気にする。

「ああ、そうだな。じゃ、今度会うときまでに違う呼び方を考えておくよ」

亮太は颯土とあかねに手を上げて去って行った。

「爽やかだよ、中川くん」

あかねは亮太の後ろ姿に手を振りながらポツリと言う。颯土はまたムッとしてあかねを見た。

「さっきお前がくれたマグカップいくらした？」

「え？千五百円だけど...？」

颯土はポケットから財布を出してあかねに千五百円を渡した。

「ちょっと、何？あれは私が群竹くんにあげたんだから...」

「いいんだ。俺、自分で金払って買ったことにするからな！」

颯土は`自分で、を強く強調した。

「変な群竹くん...」

あかねは啞然としながら千五百円を握り締め、

「群竹くんと中川くんっていろいろあったんだね」

と、颯土を見つめた。

「ガキのころな」

「じゃあ、何でさっきあんな態度をとったの？あれじゃ誰が見たって怒ってると思えなかった」

颯土はあかねを見つめ、

「ムカついたからさ...」

と、つぶやいた。

「どうして？」

「.....」

——お前があいつのことをうれしそうに爽やかな人、だなんて言ってたからだよ。

「忘れちゃった！」

颯土はあかねから顔を背ける。

「ねえねえ、もしかしてやきもち...？」

あかねは手の中にある千五百円と颯土の顔を見比べる。

「さあな！俺たちもそろそろ行かないと点呼に間に合わなくなるぜ！」

颯土はさっさと歩きだした。

「あ、待ってよ！」

その後をあかねは少し顔を赤らめながら追いかける。

修学旅行最後の夜——。長い間、遠いところに忘れてきてしまっていたものを、やっと取り戻せた颯土だった。

——ごめんな、颯ちゃん…。

たったひとことだけで、それまで自分の心を縛っていた鎖が一瞬のうちに消滅した。決して亮太を恨み続けていたわけじゃないし謝って欲しかったわけでもなかったのに、昔と同じ亮太の声の響きが心の中に充満した時に感じたのは、幼い頃毎日朝から日が暮れるまで一緒に遊んだ、柔らかな時間の感触だった。

——トモダチ…。

しばらく忘れていた間にぼやけてしまっていた物が、心の空いていたスペースに確かな形を取り戻して返って来た手ごたえがあった。

仲間、友達っていったって、いつまでも一緒にいられるわけじゃない。相手を想う気持ちが大きければ大きいほどそれを失い壊れた時の絶望は大きい。そんな思いをするくらいなら最初から人を求めないほうがいい。友達なんていない。ひとりでいればいい——。

いつからこんな風に思う自分だったのだろう。そして、いつからそれが少しずつ変わってきたのだろう——。

友達なんかいないと心に闇を引き入れてしまったのはやはり小学校三年生のあの時だ。自分で決めたとおりそれから中学を卒業するまでトモダチと呼べる相手などひとりもいなかったし作ろうとも欲しいとも思わなかった。それが少しずつ変わりはじめたのは……、

颯士はふと、カーテンの隙間から向かいの窓を見た。薄いピンク色のカーテンの向こうが明るい光を灯している。微かに漏れてくる音楽は聴いたこともないピアノのジャズ。

——音痴の浅倉があんな洒落た曲聴くのかよ…。

あまりにも似合わなくて思わず吹き出す。

——…浅倉のおせっかいとあかねや大久保たちの功績はでかいよな。

ひとつひとつゆっくりと組み立てるようにして出来上がった心のパズルの最後のピースが亮太のひとことだったのかもしれない。トモダチはいらない、他人のことなどどうでもいいと思いながらもずっとどこかに存在していた亮太。きっと心のどこかではトモダチが傍にいてくれる柔らかな時間の感触を恋しく思っていたのかもしれない。

——颯ちゃん、レンジャーバッチつけて来た？

——うん！ほら！

ふたりで夢中になっていたレンジャーの隊員バッチを胸につけて、剣と銃を手にして公園で暴れていたあの頃の亮太と自分。喉でコロコロ笑う幼い頃の自分たちの声とその記憶と共に聴こえてきた。

「トモダチ…か」

隣の部屋から漏れて来る明るいジャズの調べに耳を傾け、颯士はゆっくりと目を閉じた。

◇

修学旅行から帰ってからの颯士と勇斗は、夏の大会を目前に控えて後輩たちをしごく毎日を送っている。この仕事を最後に二人は引退することになる。だから夏の試合は二人にとっては引退

試合でもあるのだ。

周りではそろそろ受験という空気が漂い始めていた。本城高校は進学率が高く生徒のほとんどが大学を受験する。進路相談室には自分の進路を相談する生徒が毎日のように訪れるようになり、ヒカルやあかねたちも例外ではなかった。

「あかねちゃん、今日もまた進路相談室に行ったみたいだね～」

「ああ」

颯土と勇斗は部活帰りにいつもの牛乳屋に立ち寄った。颯土はコーラ、勇斗は珈琲牛乳を手にして歩道のベンチに座る。

「やっぱ彼女は音大でしょ？」

「そのつもりみたいだな。千田と毎日のように大学の資料を検討しているよ」

「そっか…。でも、あかねちゃんみたいに特技のある人はいいな」

勇斗は珈琲牛乳をグビグビと飲み干した。

「お前だってあるじゃないか。黒帯なんだから…」

すると勇斗は肩に下げた空手胴着を無造作に道に落とした。

「…黒帯なんかオイラにとっちゃ特技でも何でもないよ。だいたいこんなの何の役にたつんだ？オイラの手は凶器なんだぜ。これで人をぶん殴ったらオイラはタイホされちゃうんだからさ」

勇斗は右目の横に貼り付けてある粘着テープをさすった。勇斗の右目に昨日はなかった痣と傷があることは颯土ももちろん気がついてた。だが、どうした？とは聞かないのが颯土だ。

「オイラは別に師範になろうとは思ってないし、これからずっと空手をやってこうとも思ってないし。あ～あ、オイラもピアノとか習ってればよかったよな～。どーしてうちのかーちゃんは空手じゃなくピアノにしてくれなかったんだろ～」

「お前の空手ってのも似合っていないけど、ピアノじゃもっと似合わなかったからじゃないか？」

颯土はシラッと言い放つ。

「あのさ～、群竹ちゃんにいっぺん聞いてみたかったんだけどさ～、もしかしてオイラのこと嫌ってない？」

まじめな顔をして言う勇斗に、颯土は飲みかけていたコーラをグツとのどにつまらせて、危ういところで吐き出しそうになった。そして勇斗の顔をジッと見つめ、ぶはっと吹き出した。

「何を今さら…？」

「やっぱそうなの？オイラはこんなにキミのことが好きなのに、ヒドイわぁ～！」

勇斗はムンクの叫びのような顔とポーズで絶叫する。

「気持ち悪いからよせよ。俺はそんな趣味ないからな！」

颯土は半分マジになって退いた。

ふと、通りに目を向けると目の前の横断歩道を一人の老婆がおぼつかない足取りで渡っていた。そして向こうからは一台のオートバイが猛スピードで接近して来る。オートバイは少しも減速しようとしな

「危ないよ、あのおばあちゃん」

勇斗が横断歩道に向かって飛び出して行った。老婆はオートバイが近づいて来ることに気が焦

っているようで、無理に急いで渡ろうとしている。だが、焦っているせいか体がいうことをきかないらしく、とうとう横断歩道の真ん中で転倒しそうになった。そこに勇斗の手が間に合い、勇斗は直前のところで老婆を支えたのだ。オートバイが急ブレーキをかけて停まった。

「モタモタ歩いてんじゃねえよ、クソばばあ！」

オートバイに乗っていた少年が老婆に向かって怒鳴った。

「そりゃないでしょう？こんなに見通しのいい道路なんだよ～。おばあちゃんが歩いてるの見たでしょう？減速してあげればいいことじゃない」

勇斗が少年に意見をした。

「なんだと？！」

少年は目をむいて、勇斗につかかった。ヤバイ雰囲気になったのと、牛乳屋で傍観していた颯土が横断歩道の真ん中に出て行った。

「こんな道路の真ん中でケンカなんかよせよな」

「うるせえんだよ！正義の味方ぶってんじゃねえ！」

少年がいきなり颯土を殴った。

「群竹ちゃん、大丈夫か？！」

道路に倒れた颯土に勇斗が駆け寄って手を貸した。

「あんた、ヒドイ人だね～。何でそんなに荒れてるの？」

「やめろよ、大久保。こんな奴には何を言っても無駄だ。それよりもおばあさんを早く向こうに連れて行ってやれよ」

颯土は切れた口から流れる血をぬぐい、横断歩道の真ん中でおたおたしている老婆を指した。すぐさま勇斗は老婆の手を引き、道路の向こう側に連れて行った。老婆は勇斗に何度も何度も頭を下げて、再びおぼつかない足どりで歩き去って行った。

「行こうぜ」

勇斗が向こう側から戻ってくると、颯土はバイクを停めてつつ立ったままの少年を無視して立ち去ろうとした。

「待てよ、てめえ！」

少年はわめく。だが、二人は応えずに歩きだした。

「ムカつくんだよ！」

少年は颯土の背中をつかみ自分に向かせてまた殴った。

「何すんだよ！」

勇斗が抗議する。

「相手にすんな、行くぞ！」

颯土は少年に今にもつかみかかりそうな勇斗を引っ張る。あくまでも自分を無視する颯土の態度に腹が立つ少年は、さらに颯土の肩をつかみ殴り倒した。そして倒れた颯土を何度も蹴る。颯土は抵抗せずにまるくなってただ耐えた。

「あんたねえ！」

少年につかみかかる勇斗に、

「手を出すな！大会の前なんだぞ！」

颯土が叫んだ。

「腰抜けが偉そうなこと言ってんじゃねえよ！」

荒れる少年はさらに颯土を殴る。

「いいかげんにしろよ！」

とうとう勇斗が少年の腕を引っ張って颯土から引き離し、そのまま地面に叩きつけた。勢いよく地面と衝突した少年は、一度軽くバウンドしてから道の上を転がった。

「大久保...！」

「仲間がやられてるのに黙って見てられっかよ！」

牛乳屋にいた数名の本城高校生たちが騒ぎに気がついて出て来た。

「てめえ！何にイラついてんのかしらねえけど、人に当たるのはガキのすることだ！道の真ん中に迷惑に停めてあるバイクをどかしてとっととうせろ！」

まるで今までの勇斗からは想像できない凄みのある言い方と態度だった。

「こ、このやろう！」

地面に転がされた少年はそろそろと立ち上がって、今度は勇斗の腰に両手を巻き付けて来た。勇斗はそれを悠々とはがし少年を突き飛ばした。そこに、

「何やってるんだ、お前たち！」

数人の教師たちがやってきたのだ。

颯土は始末書、勇斗は停学、そして空手部は大会出場停止処分を食らった。学校の目の前で交通に迷惑をかけ、トラブルを起こしたことに対しての処分だった。トラブルの原因についてはいちいち弁解しなかったが、大会出場停止処分に納得出来ない颯土は顧問教師に抗議した。自分たちだけが出場停止になるのならいいが、一生懸命練習に励んで来た後輩たちまで巻き込むわけにはいかなかった。

だが、勇斗が突き飛ばした少年は怪我をしており、空手部元主将であり黒帯をしめる勇斗が暴力をふるったという責任は重大だったのだ。勇斗の取った行動は確かに軽率だった。だが、あれは事故のようなものだ。それを空手部全体に責任を負わせるのはやっぱり我慢がなかった。

「すまない...」

颯土は後輩たちの前で頭を下げた。後輩たちは何も言わずに、ただくちびるをかみしめて颯土を見つめた。手を出さずに殴られ続ける颯土の為に勇斗が手を出してしまった気持ちは分かる。だが、それによって自分たちが出場停止になってしまったことはやはりくやしい。無言の中には彼らのどこに向けたらいいのか分からない怒りがこもっていた。

「みんな怒ってるだろ...？」

停学をくらって自宅で謹慎している勇斗を訪ねた颯土に勇斗はポツリと言った。

「ああ。口には出さないけどな...」

「悪かったね、群竹ちゃん。オイラの代わりに頭を下げさしちゃって...」

「そんなこと...、」

――当たり前じゃないか。俺の為にお前は停学をくらっちゃったんだからな...。

あの時の勇斗はいつものヘラヘラした勇斗ではなく颯土を守ろうと真剣だった。

「お前の停学と俺の始末書であのおばあさんを助けることが出来たんだ。空手部の奴らには申し訳ないことをしたけれど、俺たちが言い訳をしないで奴らの怒りのハケ口になればいい」

落ち込む勇斗に颯土は言った。

「群竹ちゃん、イイこと言うなあ。そうだよな〜。今の時代、人助けにも代償があるんだね〜」
と、勇斗は苦笑する。

「ああ、そうかもな...」

颯土も笑った。

「オイラさ、空手をやめる。黒帯も捨てる」

いきなり勇斗がサラリと言った。颯土はそんな勇斗をジッと見つめた。どうして？と問いたださないのである。

「群竹ちゃんはさ、やっぱりカメラマンになるんだろ？」

「さあな。そんな簡単にはなれないだろう...」

「カメラマンってのも才能だよな、きっと。いくら写真やカメラの勉強をしたってなれないやつはなれないんじゃないの？けど、群竹ちゃんなら大丈夫。ぜったいいいカメラマンになれると思うよ。何で？って聞かれると困るけど、そーゆー才能があると思う」

と勇斗は笑う。

「前にさ、オイラの身の上話をしようとしたら、群竹ちゃんにやめろって言われたよな〜」

「そんなことあったか？」

颯土は勇斗がいつのことを言っているのか分からない。

「一年の合宿の時だよ。ヒカルちゃんと群竹ちゃんが気まず〜い雰囲気になっちゃってさ」

「ああ...、」

初めてヒカルとぶつかったあの時か――と颯土は当時のことを脳裏に呼び起こした。

「もう、してもいい？」

「あ？ああ話せよ」

えへへ、と笑ってから話し始めた勇斗の身の上話は――。

「オイラ、四才の時に空手道場に入れられたの。四才だよ。まだ幼稚園の友達はおやつを食べて昼寝して遊んで、の生活をしているところに、オイラは毎日のように道場に通わされてぶん殴られてたんだ。しんどかったな〜」

勇斗は懐古に浸るように天井を見上げた。

「かーちゃんはオイラをどうしても強い男に育て上げなくちゃならなかったからなんだ。群竹ちゃん、今日オイラんちにきて気がついたことない？」

勇斗の家は豪邸だ。高い塀に囲まれ強面の数人の男が敷地内をウロウロしている。確かに普通じゃない雰囲気には気がついてた。

「一般の家じゃ、こんな鉄格子のはまった窓なんかないでしょ？」

勇斗は自室の出窓にはめ込まれた鉄格子を指さした。確かに、そうだな...と、颯土はつぶやいた。

「おまけにこれ、強化ガラス...」

勇斗はためいきをつく。

「オイラのとーちゃん極道なんだ。しかも親分...」

「ああ?! マジ...っすか...?」

「マジっす」

勇斗はアハハ、と笑った。

「このまま行くと、オイラも襲名しなくちゃならないの」

「お前が極道の親分...?!」

まるで似合わない。空手もピアノも似合わないが、これが一番似合わない。

「だけどね、オイラはずっと普通の人になりたいって思っていたんだよ。とーちゃんがおもいきり普通じゃないからオイラは普通の大学に行って、普通のサラリーマンになって、普通のかわいいお嫁さんをもらって...って小学校のころからそんなことを考えていた」

「小学校のころから...、」

と言ったきり、颯土には後の言葉が続かなかった。

「この前さ、進路のことでとーちゃんと大ゲンカになったの。オイラは極道やらないって言ったら、あいつ日本刀抜いたんだぜ？」

勇斗は右目の粘着テープを指差した。

「おいおい、まさか...」

自分の息子に刀で斬りつけるか？普通！と、颯土。

「ま、これはかすただけだけどね。オトシマエをつけろなんて言うんだぜ。頭おかしいよ、あいつ」

「オトシマエ...?」

颯土はゴクリと息をのんだ。

「そっ、道の人が足を洗う時のオトシマエのつけかたってあるでしょ？」

颯土は思わず自分の小指をなでる。

「でもさ、オイラはまだ極道やってないし、そんなのおかしいじゃない？」

「そ、そうだな...」

「だからね、オイラは家を出ることにしたんだ。家も空手も黒帯も捨てちゃう」

勇斗はニマツと笑った。

「...それでどうするんだ？」

さすがの颯土もこの時ばかりは訊かずにはいられなかった。

「バイトしながら夜学の大学に行こうと思ってる。な？それって普通っぽいよな？」

「そうだな。すごく普通っぽい」

「あ～、よかった！群竹ちゃんに聞いてもらって何だかスッキリしたよ～」

勇斗抱えていた重い荷物を知って颯土は少しショックを受けていた。こんなに重くて潰れそう

だというのに勇斗はそんな思いを表には出さず、人一倍普通じゃないキャラクターで生きてきたのだ。だが、勇斗は勇斗で自分の人生をまじめにとらえ真剣に考えていた。それも小学生のころから…。

――あの時、ちゃんと聞いてやればよかったな…。

颯土は二年前の合宿で自分が勇斗に取った態度を少し後悔していた。

「伊藤はもちろん知ってるんだろ？」

「ああ。うちが極道だって知っていてオイラと友達になってくれたのはゆうちゃんだけだ」

「友達…、そうか…」

祐輔にとっては家がどうなど全く関係ないことだったのだろう。

――ただ大久保って人間が好きで仲間として大事だっただけのこと…。

「仲間の荷物を一緒に背負うってのもいいものなんだな…」

今、颯土は本当にそう思えた。

「群竹ちゃんがそう言ってくれるとうれしいぜ！」

勇斗は顔を輝かせて笑った。

数日後、謹慎がとけた勇斗と颯土は校長室に呼び出された。

「校長室なんて今まで入ったことないよ～。校長直々にまだ何かしぼられるのかな」

勇斗はビクビクしている。

「ま、それもいいだろ。もう何でも来いって感じだぜ...」

「悪いね、群竹ちゃん。オイラのせいでキミまでさあ...」

「何、言ってんだよ...」

颯土は校長室のドアをノックした。中から、入りなさい、という校長の穏やかな声があり、颯土と勇斗は一礼をして中に入った。はじめて入る校長室は、窓から射し込む光が優しい空間だった。

「この子たちですよ！」

突然、しわがれた声が興奮したように叫んだ。二人が顔を上げて見ると一人の老婆とその付き添いのような婦人が応接ソファーに腰掛けていたのだ。

「おばあちゃんはその時の...？」

数日前、横断歩道で勇斗と颯土が助けた老婆だった。

「あなたたちに助けてもらったことを、母がどうしてもお礼が言いたいというので伺ったんです」

婦人が立ち上がって言った。

「はあ...」

勇斗はポカンとしている。

「この方を助けたあと、君たちがオートバイの少年と喧嘩になってしまった、ということを気にされているんだ」

老婆の名前は稲葉トメ。学校の近くに住んでいる。

「私のためにケガをなさっていたら大変なことだと思ひましてね」

トメはしっかりと口調で言った。実際、颯土はかなり怪我を負ったのだが今はもうずいぶん癒えている。が、

「ああ、ああ...、あなたのその顔はあのバイクの人にやられたんですか？」

顔に負った傷はまだ微かに痣を残していた。

「いえ...、これは転んだんです」

颯土はトメの心を慮り咄嗟にそんなことを言ったが、事実ではないことは誰が見ても聞いても明らかだ。トメはごめんね、と颯土に頭を下げた。付き添いの婦人も深々と頭を垂れる。颯土は恐縮してしまい、校長に目で助けを求めた。

「あのトラブルにこんな理由があったなんてこと、私は聞いていないがね。どうして言わなかったんだね？」

校長が颯土に向かって言った。

「...やってしまったことに言い訳しても仕方ないと思ったから...」

「潔いですね…」

校長はやれやれといったため息をひとつ吐いた。

「君たちが人にケガを負わせたのは事実ですから君たちの処分は訂正しませんよ。ですが空手部の大会出場停止処分は取り消しましょう」

校長は穏やかに言う。

「本当ですか？！」

二人は声をそろえて叫んだ。

「本当です。ただし君たち二人は出場停止ですよ」

「分かってます、分かってますとも！ありがとうございます、校長先生！」

勇斗は舞い上がった。そして、

「おばあちゃん、ありがとう！ありがとう！」

と、トメの手を取ったのだ。

「私にありがとうなんておかしな子だね。こっちがお礼を言いに来たのに…」

トメは勇斗のはしゃぎように微笑んで言う。

「あなたたちには何かお礼をしたいので、これから家に来てくださいますか？」

婦人が言った。

「お礼なんていいですよ！後輩たちが大会に出られることになっただけで！」

他意のない勇斗の笑顔を見て、トメと婦人は顔を見合わせ笑った。

「それじゃ、何かご馳走させておくれ」

と、トメ。せっかくの厚意だから受けなさいと校長が言うので、勇斗と颯土は放課後トメの家に行くことになった。これによって空手部の全体責任は取り消され、勇斗と颯土を除いた部員たちは大会に出られるようになったのだ。が――。

「なんでだよ〜！」

勇斗はへ口へ口と床に崩れた。空手部全員が大会出場停止処分の取り消しを辞退するというのだ。

「お前ら、どういうつもりだ！」

颯土も怒鳴った。

「先輩たちのトラブルがなぜ起こったのか、その理由を校長から聞きました！我が空手部として永遠に誇れることだと思いました！その先輩たちが最後の引退試合を出場停止処分を受けたのなら、後輩である自分たちもそれにならい、同じ処分をもって先輩たちに従いたいと思います！」

と、現主将が声高らかに叫んだ。

「お前ら…！」

と、颯土は言葉につまる。

――こんなこと、永遠に誇らなくたっていいぜ！

ところが…、

「よく言った！それでこそ我が空手部だ！心意気だ！」

と、元主将の勇斗は手を鳴らして叫んだ。

「お、おい、大久保?!」

「我ら空手部の日々の精進は技のためだけにあらず!心だ!仁義だ!」

おいおい、それじゃまるで極道の世界だ、と颯土は頭をかかえた。

「お前たちが我ら先輩の心を受け継ぎ、同罪をもって謹むという心意気は公式大会優勝の誉れにも値する!」

勇斗は堂々と演説する。横で聞いていた颯土は、やはり親分の息子だ、と変な感心の仕方をしていた。

ということで、やはり空手部の大会出場はなくなった。それによって颯土、勇斗の部活も終了した。勇斗にとっては四才以来続けてきた空手を文字通りやめた日でもあった。

◇

「で、群竹ちゃん。おばあちゃんちに行ったらどうすればいいんだ?」

「俺に訊くなよ...」

放課後、ふたりは揃ってトメの家へと向かっている。招待を受けたものの、何をすればいいのか、ただ戸惑っているだけの颯土と勇斗だ。トメの家は牛乳屋の前の横断歩道を渡り、道を一本奥に進んですぐのところにあった。

「ここだね...」

勇斗は書いてもらった地図と目の前の建物を見比べた。ときわ荘というアパートがあり向かい合うようにして家が一件ある。トメの家はこのアパートの大家らしい。ふたりが玄関の前で呼び鈴を鳴らそうかどうしようかと迷っていると、

「うちになんかご用ですか?」

後ろから幼い声がかかり、ふたりは同時に振り向いた。黄色い帽子に赤いランドセルを背負った少女がひとり、不思議そうな顔で勇斗と颯土を見ていた。

「あ...、えっと...。キミはここの家の子?」

少女は応えずにじーっとふたりを見ている。まるで不審者を見るような目だ。

「あ、えっとね。オイラたち別に怪しい高校生じゃないよ?今日はここんちのおばあちゃんに呼ばれて来たんだ」

「おばあちゃんに?」

少女はやっと口を利いてくれた。

トメの家では勇斗と颯土のために夕食の用意がされていた。こんなふうに招待を受けたことなどないから、はじめはふたりともかしこまって足も崩せないでいたが、玉子焼きや茄子の煮物、肉じゃがに春雨サラダ...といった、普通の、それでいてものすごく味のいい料理にいつしか気持ちも柔らかくなり、食事が終わった頃にはさっきの少女ートメの孫娘で美香と一緒にトランプをしたり人生ゲームをしたり、すっかり稲葉家に打ち解けていた。

「美香ちゃんはオイラとこっちのお兄ちゃんだったらどっちが好み?」

悪ノリの勇斗が訊くと、美香はふたりをじーっと見比べて、

「こっちのお兄ちゃん!」

と、颯土を指差した。

「ええ？なんでだよぉ～」

「だって、顔がいいもん！」

颯土は何て応えればいいのか分からず、あはは...、と笑うが勇斗は口を尖らせる。そして、
「残念だったね～。こっちのお兄ちゃんにはもう彼女がいるんだよ～」

と、意地悪な目をした。だが、

「勇斗くんには彼女いないんだ？顔が悪いから？」

と、無邪気に逆襲され大真面目に落ち込んだ。

「あははは。面白い子たちだねえ」

孫娘と勇斗たちのやりとりを見ていたトメが本当に可笑しそうに笑った。

「おばあちゃん...、そこで面白いはないでしょう？オイラのことフォローしてよぉ」

勇斗はぶつぶつ文句を言って、再び食卓に着いた。テーブルの上にはまだ玉子焼きが残っている。

「こーゆー食事、オイラあんまり食べたことないんだよねえ」

トメは、え？と聞き返した。颯土も首を傾げる。勇斗が言ったのは普通の玉子焼きだ。弁当には毎日と言ってもいいぐらい入っている。

「あ、玉子焼きを食べたことないってゆう意味じゃなくて、こういう雰囲気ってこと」

勇斗は残っている玉子焼きをパクッと口に入れた。

「じゃあ、どういう雰囲気で食べているんだい？」

「んー、怖いお兄さんとかおじさんとかが部屋の周囲にズラッと座ってて一、上座にもっと怖い親父がいて、座ってるお兄さんとかおじさんが親父の杯に杓しに来て、食事の間は喋っちゃダメで...、そんな感じ」

なんだいそれ、とトメは呆れたが、颯土はゴクリと生唾を吞んだ。

「だからさ、味なんかちっとも分かんないんだよね。何食べてもおんなじ味って気がして。玉子焼きってこんなに美味かったんだー」

にこにこ笑いながら美味しそうに玉子焼きをほおぼる勇斗に、颯土は今までに感じたことがない情が込み上げた。

トメの家を出る頃は、すっかり夜になっていた。またおいで、というトメと、また遊びに来てねという美香の声に見送られてふたりは帰り道についた。牛乳屋の横断歩道まで戻り、勇斗は駅へ颯土は反対側へと行く道が分かれるのだが、

「駅までつきあってやる...」

と、颯土は勇斗と同じ方向へ歩みを進めた。

「さんきゅー」

勇斗は嬉しそうに笑う。車のヘッドライトが明るい夜道でも、空では星がチラチラ輝いていた。勇斗は頭の後ろで両手を組んで夜空を見上げて言った。

「今日はいいい一日だったなあ...」

結局大会出場はならなかったが後輩たちのわだかまりも取り除けたし、トメの手料理は美味

しかっし、颯士は駅まで送ってくれるし、と勇斗は笑った。

「オイラたちの部活は終わっちゃったけどさ、楽しい二年間だったねー」

「そうだな...」

颯士は自転車をゆっくりと転がしながら真っ直ぐ前を見て歩く。

「オイラ、絶対家を出るよ。バイトして金ためて受験勉強もやって大学にも合格するからさ！」

「...頑張れよ。俺に出来ることがあったら協力するから」

「じゃ、数学教えて？」

颯士は、ハッと笑った。そして、

「俺も決めた」

と、呟いた。

「ん？進路？」

ああ、と颯士は頷く。

「じゃ、これからは一緒に受験勉強、がんばろーぜ？」

「一緒にかよ？」

「そうだよ？オイラたち仲間だろ？」

仲間、と颯士は心でかみ締めるように呟き、ああ、そうだなと、笑った。満面の笑顔で勇斗が颯士の肩に手を回す。

「おい、これはやめろよ。気色悪いから...」

夜の道を男子高校生ふたりが肩組みながら歩くというのはどうよ、と颯士。

「いいじゃないの。友達なんだからさ！」

「歩きにくいの！俺、チャリ転がしてるし！」

「いいの、いいの～」

「よくないからっ」

勇斗の手が肩に回ったまま自転車を転がして歩くのはハタから見れば滑稽だか、まあいいか...、とどこかで諦め、駅までの道を勇斗に付き合う颯士だった。

期末試験も終わりもうすぐ夏休み。試験休みの今日、ヒカルは颯土の母親にお茶に誘われた。颯土の父親がこの春から単身赴任になり、無愛想な息子と二人暮らしになってしまった母親は相当ヒマを持て余しているようだ。その無愛想な息子は今日、あかねのショッピングにつきあわされている。いつ来てもスッキリと片付き、パッチワークのインテリアがかわいい颯土の家のリビングにはうっとりとするものがある。

「受験が終わったら私もパッチワークやろうかな...」

ヒカルはつぶやいた。

「いいわね～！おばちゃんがいつだって教えてあげる！ヒカルちゃんはどこを受験するつもりなの？」

「横浜に新しく開校したY短大が今一番の有力候補かな...」

「どうしてそこ？」

そう聞かれてヒカルは答えに躊躇した。短大を志望しているのはもちろん将来の夢のためではあるが、Y短大志望の理由はすごく単純で、港の近くにあるからだ。響のいる遥かなアメリカ大陸につながっている海をいつもキャンパスから望むことができるから。

「...将来になりたいものがあるんだ。そのための勉強をするのに何もかもが揃ってる学校なの」

去年ぐらいから漠然と考えている将来の夢と響の存在は無関係ではない。響がいたからこそ自分の中に少しずつ積みあがってきた夢だった。

――頑張れヒカルって...、いつも見ていて欲しいから...。

三月の卒業式以来、響からはハガキひとつこない。今、響がアメリカのどこにいるのかもわからない。それが時々たまらなく不安になる。必ず帰って来るからと約束してくれた響だが、やっぱり会いたい、声を聞きたいと思う時がある。だから少しでも日々の生活の中に響を感じるものが欲しいと思うのだ。

「になりたいものかぁ...。颯土は自分の将来のこと考えているのかしら...」

と、母親はため息をついた。

「あの子ったら何も言わないし、今日だってどこに行ってるんだか...」

あかねとデートだなんて颯土が母親に言うわけないな、とヒカルは思った。

「ヒカルちゃん、颯土から何も聞いてない？」

「進路のことですか？」

「そう」

「具体的な進路については何も聞いていないけれど...、」

颯土が自分の将来をどう考えているのかは何となく分かる。聞いたわけじゃないが伝わってくるものがある。颯土が撮る写真の中に、漠然としたその言葉があったような気がしたのだ。その時、リビングのドアが開き本人が帰って来た。

「浅倉、来てたのか...」

自分の母と隣家のヒカルがこんなふうにお茶をしている光景は珍しくない。母はヒカルをよく

お茶に誘うし、ヒカルは喜んでそれに付き合う。若いのにオバサンの長話に付き合わされて大変だな、と颯土は内心想っている。

「いつもお留守中にお邪魔してすみませんね」

「退屈だからお茶につきあってもらってたのよ」

母親は「退屈だから、」を強調した。そこには無愛想な息子に対して、もう少し話し相手になりなさい、という母の願いが込められているのだが、颯土にそれが分かるはずもなく、

「あっそ...」

と、ひとことであしらわれ、母親はまたため息だ。

「そういえば、この前亮からハガキが来たんだ。お前、今度の日曜ヒマか？」

外は暑かったようで、汗を流している颯土は冷蔵庫の中から飲み物をあさる。

「あたしはいつでもヒマですよ。誰かさんと違ってデートする相手もないしね」

颯土はバツが悪そうに母親の顔をチラッと見ながら缶コーラを開けた。

「来るんだよ、あいつ」

「本当？」

「ああ。前に住んでいたおまえの家にも行きたいって書いてあった。どうする？」

「いいに決まってるじゃない！中川くんが来たら二人でおいでよ！」

「ならそう言っとく」

ゴクゴクと喉を鳴らして一気に缶コーラを飲み干す颯土。そんな息子を見つめながらふたりの会話を聞いていた母親は、

「ヒカルちゃん相手だとコーラ飲みながら普通に喋るんだ...」

と、感心したように呟いた。

◇

そして翌週、夏休みに入って最初の日曜日に颯土と亮太がヒカルの家を訪れた。亮太は十年振りに幼い頃に過ごした家にやって来て、懐かしそうに家の中を見回しながら二階に上がった。そしてヒカルの部屋に入った時、真っ先に亮太が進んだのは柱の前だった。

「あったあった！この傷、俺と颯がつけた傷なんだよ」

亮太は二本の線を指さした。颯土もその場にしゃがんで傷に見入った。

「ええ？そうだったの？ここに引っ越して来たときからどんな傷なんだろうって思っていたの」

まるで子どもがいたずらにつけたようなギザギザの傷は本当に子どもがつけた傷だったのだ。しかも、その子どもは隣んちの颯土と幼馴染の亮太――。ヒカルはふたりの顔を交互に見つめた。

「俺たちが六才の時につけた背くらべの傷だよ。高い方が颯、低い方が俺」

二本の線の間は五センチぐらいある。その一本一本を亮太は指でなぞった。

「俺、いつまでたっても颯に追いつけなくてくやしかったことを覚えている。俺が五センチ伸びると颯も五センチ伸びるんだもん。誕生日も颯の方が早いし、けっこう対抗意識燃やしてたんだぜ」

亮太は颯土を見て笑った。

「ふ～ん、そうだったのか？」

颯土は呆けて言う。今は二人とも長身でその差はほとんど無い。

ヒカルはこの部屋に初めて入った引越しの日を思い出した。いびつに曲がった柱の線を見て、子どもがつけた傷かな、と想像した。この傷の中にどんな表情が染み込んでいるのだろうか、部屋の目立つ場所にある線を見るたびに思っていた。

颯土と亮太。

颯土が抱えていた心の傷も、亮太が颯土に与えてしまった傷も、今はこんな再会が出来るほどに癒えて幼馴染同士は過去に自分たちがつけたという傷を前にして笑っている。まだ小さかった頃のふたりがこの部屋のこの場所で背比べをしていた姿が、これまで顔も姿も漠然としたまま想像していた`傷をつけた小さな犯人、のそれにピッタリと重なった。

「この傷には、こんな表情が刻まれていたんだね…」

ヒカルは二本の線を指でなぞり、呟いた。最初からどういうわけか愛着を感じていた柱の傷――。ん？と颯土。

「群竹くんにもかわいい子供時代があったんだなって思って」

「どういう意味だよ…」

「かわいっていうよりカッコよかったよな、颯は。幼稚園の女の子はみんな颯のことが好きだったんだぜ」

「あー、何となく分かるような気がする。あたしの幼稚園にもそんな子いたもん。ちょっと大人っぽくて落ち着いていてクールでカッコよくて」

「いやいや、そういうカッコよさじゃないんだ。何をやるのも一番に出来て、おしゃべりでおもしろくてさ、女の子がいじめられてるとササーッと助けにいっちゃったりしてさ。そのころやってたテレビのなんとかレンジャーに成り切ってたんだよな。ま、俺もだけどね」

という亮太の説明をヒカルはポカンとしながら聞いていた。今の颯土からはまったく想像もつかない正反対のキャラクターだ。いつか哲平の幼稚園に行った時に園長先生もそんな話をしていたがとても信じられなかった。

「それがどーしてこんな…」

ヒカルは颯土をまじっと見つめた。それから亮太を見た。こいつのせいではないか、と。

「ガキのころの話はやめようぜ…」

と、颯土は言うが、もしも颯土がなんとかレンジャーに夢中になっていた子どものまま大きくなっていたらどんな颯土になっていたのだろう。そう思ってまたヒカルは亮太を見る。こんな颯土になっていたのかもしれないと。

――……ダメだ。爽やかな笑顔は浮かばない…。

亮太のような爽やかな颯土というのは想像も出来ない。ネクラで寝癖つけてぼそぼそしていて、それでもたまにとてつもなく優しい、そんな今の颯土がいいと思う。

「群竹くんってまるで哲平だったんだね」

哲平が颯土に懐く理由が、今分かったような気がした。

「同類…類は友を呼ぶ…、なるほどー。哲平には人の本質を見抜く素質があったんだ…」

「浅倉っ！」

颯土はカーッと赤くなって顔をそむけた。

「ね、この柱に新しい傷つけようよ」

ヒカルはふたりの手を取って立ち上がらせた。

「今度はあたしもまぜてね。ほらほら、中川くんそこに立って！」

ヒカルは亮太を柱の前に立たせた。そして机のイスを持って来てその上に乗り、亮太の頭の上
に下敷きを乗せ柱に傷をつけた。

「うわーっ、こうやって六才のころの傷と比べるとすごく大きくなったんだね～」

「大きくなったって...そりゃそうだろう...」

「はい、次、群竹くん！」

ヒカルは呆れたように呟く颯土の腕を引っ張り亮太と同じようにして背を測った。

「あっ、やっぱり颯の方が高いな。」

亮太は柱についた自分たちの背の傷に顔をくっつけて見つめながら言った。後から測った方が
わずか一センチほど上についていた。

「次、あたしのも測って！」

ヒカルは柱の前に立った。颯土と亮太がヒカルを囲むようにして両側に立ち、亮太が下敷きを
ヒカルの頭に乗せ、颯土が柱に傷をつけた。

「今日の日付と名前を書いちゃおう！」

ヒカルは一番上の線に[そうじ]二番目に[りょうた]三番目に[ヒカル]と書き込んで日付を入れた。

「何か、あたしたち幼馴染みたいだね！」

ヒカルは無邪気に笑う。

「そんなに幼い頃に出会ったわけじゃないけど、この傷はあたしたちの幼馴染の証明ってことに
していいよね？」

「べつにいいんじゃないか？」

颯土はきっと何気なく言ったのだろうがヒカルは嬉しかった。

――幼馴染になれたよ...。

二年前からの妄想劇がここに完結したわけだ。これからは妄想は現実になっていく――。

「あたしね、これをつけたのがふたりで本当によかったって、今思ってる！」

ヒカルちゃん...、と呟いて亮太も嬉しそうに笑った。

そして、颯土にとって、ヒカルのこの無邪気さが今救いになっていた。心の確執は取れたとい
っても、やはり亮太は十年ぶりの友人だ。もともと人とのかかわりが苦手な颯土は、今日亮太と
どのようにして会えばいいのが不安だったのは確かだった。

それは亮太の方も全く同じで、颯土の隣で笑っているヒカルを思わず見つめていた。颯土との
十年のブランクを忘れさせてくれるほど、本当に昔からの幼馴染のような錯覚を起こさせる女
の子...。

「ヒーねえの周りにいる男の子ってどうしてこうもイイ男ばっかなんだろうね～。本人はこんな
にヒドイのに...」

久美子が颯土と亮太にお茶を運んできた。

「群竹くんは最初見た時からシブめのイイ男だと思ってたし、まあ、性格は別として…」

颯土は久美子の頭をパンとはたく。

「こっちの中川くんもスポ根もののマンガの主人公みたいだし、ヒビク先輩は文句のつけようもないくらいに超カッコイイし！」

久美子のはたかれた頭をさすりながら最後まで言い切った。

「ヒビク先輩？」

と、亮太がヒカルを見る。

「久美子！くだらないこと言っていないで、それ置いたらとっとと行きなさいよね！」

「はいはい…。どーぞごゆっくり～」

久美子は部屋を出て行く。実は昔この家に住んでいたという颯土の幼馴染を品評しに来たのだ。

「全く、あの子ったら男の子の評価ばかりなんだから。あれで一応受験生なんだよ…」

ヒカルは久美子が置いていったお茶とお菓子を颯土と亮太に差し出した。

「お前ら姉妹ってマジでセーカク似てるよな」

「あたしは久美子みたいに男の子のことばかり考えてませんよ」

「そういうことじゃなくて、物おじしない図々しさのことを言ってるの」

「どーせ私は図々しいですよ。でもこの図々しさのおかげで今までたくさんいい思いをしてきたんだから」

そうかもな、と颯土は思った。ヒカルのイヤミのない図々しさがきっとヒカルの周りにたくさんの仲間を集めているのだろう。

ふたりのやり取りを見て亮太は不思議な気持ちになった。このふたりの関係って何なのだろう、と。恋人じゃない、本当の幼馴染でもない、だが互いのことを分かり合っているような雰囲気漂っている。

「颯って彼女いるんだよな？」

亮太はポツリと言った。

「京都で会ったあの子が彼女なんだろう？」

「そう、あかねちゃん。かわいいと思ったでしょ？」

「ああ。奈良の土産屋で会った時なんか、あとになって電話番号聞いとけばよかったな～って後悔したからね」

これは本当だ。あの時は砂糖菓子のようなあかねに一目惚れに近い感情を持った。だが、その一瞬後には――。

「聞いてなくてよかったね。群竹くんの空手でのされてたよ」

「だな！」

亮太はぶ然としている颯土を見て笑った。

「そうだ、あかねちゃんもここに呼ぼうよ？」

「あいつ、今日はレッスンだよ」

あかねは音大のピアノ科を受験することに決め、そのためのピアノのレッスンに忙しい毎日を送っている。

「よくまあ、あかねちゃんのスケジュールを把握してますね」

「まあな。一応彼女だから」

颯土は照れたように笑った。

「あかねちゃんは音大か…。群竹くんは…写真だよね？」

颯土は一瞬間を置いてから、

「まあな…」

と答えた。

「写真？颯はカメラマンをめざすの？」

「そこまで考えているわけじゃないけど、近専を受けようと思ってるんだ」

「近専って…神戸じゃない…。そんな遠くに行っちゃうの？」

一瞬、ヒカル頭に過ぎったのは、明かりが点かなくなる向かい側の部屋のイメージと寂しいという気持ちだった。

「純平さんがこの春からあっちの支社に転勤になってるだろ？近専には写真科があるから。俺、写真の勉強してみようと思ってるし、俺の師匠は純平さんだから…」

「あかねちゃん寂しがるよ…。それ、知ってるの？」

「あかねにはまだ言ってない…」

「どうして？早く教えてあげなきゃ！」

「……そうだな」

どんな言い方をしてもきっとあかねは嘆くだろう。神戸は新幹線に乗れば三時間ちょっとの距離だが、今のようにならば一緒にいられなくなるのは確かだ。それをあかねに告げた時の悲しむ顔を見たくない――。

「群竹くんの気持ちが決まっているなら早く言ってあげて？そうじゃないとあかねちゃん、余計に傷つくと思う…」

私もそうだったから、とヒカル。颯土はヒカルを見た。そして、病院のベッドで泣きじゃくっていたヒカルを思い出して胸が痛んだ。

「あかねちゃん、きっと分かってくれるよ」

笑うヒカルにあの時の泣き顔が重なる。

「ま、受ければの話だぜ」

「そうそう、落ちるかもしれないしな！」

「落ちるって言うなよ…」

嫌な言葉だぜ…、と颯土。

「中川くんは進路決めた？」

「俺は地元の大学を受けてみるつもりなんだけど今いち頭が足りなくてね～。かなり苦戦しそうだな」

「サッカーで推薦とかないのか？」

「あったけど家から遠いんだよね。俺、今家を出るわけにいかなくてさ」

うつむく亮太を颯土は見つめた。決して、なぜ？とは聞かないのが今までの颯土だった。だが、

「何かあったのか？」

と、颯土は訊いた。ヒカルが横で微笑む。

「うん。親父の具合が悪くてさ。今は俺、おふくろの側にいてやらないとね」

「そうか…。そうだな」

全国大会でチームを優勝に導いた元主将の亮太が、サッカーを諦めると決意するまでには相当の葛藤があったはずだ。十年の間には亮太にも颯土の知らない苦しみや悩みがたくさんあったに違いない。

「地元って言うとＹ大学？」

「そうだよ」

「私、Ｙ短大志望なの。確か学校同じ敷地内だったよね？」

亮太の顔が明るく輝いた。

「そうだよ。姉妹校だからね」

「じゃ、来年の春からは同じキャンパスだね！」

「ヒカルちゃんと一緒かぁ〜！」

と、目を輝かせる亮太に、

「落ちるかもしれないけどな…っ」

颯土がさっきの仕返しをした。

◇

颯土と亮太は駅までの道をゆっくりと散歩するように歩いていた。辺りはもうすっかり暮れ、車のライトが時々ふたりの顔を明るく照らす。

「久しぶりに颯ちゃんと遊べて楽しかったよ」

「俺もだ、亮ちゃん」

ふたりは幼い頃の呼び方で言って笑った。

「俺、Ｙ大学に合格できるように本気でがんばろう」

「亮…」

「ヒカルちゃんのこと、好きになってもいいよな…？」

亮太は確認するように颯土の顔を見た。

「好きになるのは自由だけど…」

と、颯土は言葉を濁す。

「颯？」

「あいつの心はたぶんお前には向かない。友達以上を望むのはやめたほうがいいぜ」

「何で？彼女、フリーだろ？！」

亮太は少し声を荒げた。

「あいつの心はもうある人と結ばれてる。俺はそれをずっと見てきた…」

――ずっと...だ。

おそらく、本人同士が自覚する前からふたりの`絵、を見ていた。それは純粋な想いと互いを照らし合うヒカルと響ふたりの光だ。卒業式の日、粉雪の舞う中で抱き合ってキスを交わしたヒカルと響は、人目をはばかり事なく堂々と互いの想いを確認し合っていた。その光景は甘く美しく温かく、今でも颯土の脳裏に鮮明に焼き付いている。

「さっき、あの子の妹が言っていたヒビク先輩って奴か？」

颯土はうなづいた。

「風間先輩は卒業と同時にアメリカに行ったんだ」

「じゃあ、ヒカルちゃんはそいつの帰りを待ってるのか？」

「それは分からない...。将来を約束したってわけじゃないだろうし、けどあいつは風間先輩以外の奴を好きにはならないと思う」

――なるはずが...ない...。

「そっか...。よっぽどの奴なんだろうな、その風間って奴」

「ああ」

言って颯土はうつむく。

「でも全くチャンスがないってわけでもないだろ？俺、あきらめないぜ」

「おい、亮...」

変わってないな...、と颯土はため息をついた。亮太は昔からあきらめが悪かった。お菓子でもおもちゃでも、欲しいものは手に入るまで欲しがり続けていたし、鉄棒もうんていも出来ないことに諦められなくて出来るまで練習していた。そういう亮太だからこそ、サッカーでも高校生での頂点に立てたのだろうとは思う。

「あんな子初めてなんだ。明るくて素直で優しくて懐かしい...。今時珍しい国宝級の女の子だぜ？」

修学旅行の京都の宿舎で初めてヒカルに出会った時から、亮太の心はものすごいスピードでヒカルに向かっていた。あの時、颯土にもあかねにもヒカルはダメだと言われたが、それでも出会ったばかりのヒカルを諦めることが出来なかった。今日こうして再会してみてその気持ちは一層強くなり、もう後戻りは出来ないところで心が決まってしまうている。

「きっとツライ想いをすると思うぜ？あいつが風間先輩への想いを捨てるとは思えないからな」

――絶対に...。

「道が険しければ険しいほど闘志がわくってもんだぜ。それがスポーツマン精神！」

そう言い切る亮太に、颯土は、

「想いは勝手だが、あいつを傷つけたり泣かせたりするのだけはやめろよな」

と、少し厳しい口調で言った。

――もう、あいつが傷ついて泣く顔だけは見たくない...。

「颯はヒカルちゃんの保護者か？」

ヒカルに対してムキになる颯土に亮太はややムツとした。

「友人代表ってところだ...」

颯土はニヤッと笑った。

「友人代表か…。いいよな、颯とヒカルちゃんの関係って」

「俺と浅倉の関係？」

「ああ。全部分かり合っている親友みたいだ」

「親友か…」

そうかもしれないな、と颯土は思った。衝突したり支えられたり支えたり、友達として自然なことをヒカルとは最初からやってきた。今は、なんの気負いもなく当たり前のように一番近くにいる友人――。

「お、おい、颯とヒカルちゃんって本当にただの友達だよな？颯の彼女はあかねちゃんだよな？」

黙り込んで物思いにふける颯土に、少し心配になった亮太がもう一度確認する。

「当たり前だろう。変な心配するなよな！」

颯土は亮太の心配を一笑に付した。

やがて駅に到着し、亮太は改札の中へと消えて行った。十年振りに友達に戻ることが出来た自分と亮太。もう心になんのしこりもわだかまりも無い。そのふたりの間の橋渡しはヒカルだった。

――浅倉ってヤツはいったい何なんだろう…。

普通の高校生。音痴でにぎやかな隣人。だが、その中にあるのは暖かく輝く深い魂だ。

「親友…か…」

颯土はそうつぶやくと、今きた道を再び戻りはじめる。ふと、夜空を見上げると、決して手の届かないところで小さな星がひとつ、キラキラと周りの闇を照らすようにして輝いていた。

亮太からヒカルとあかねを誘って海に行かないか、と颯土に連絡があったのは八月に入ってすぐのことだ。ヒカルに自分をアピールしようという亮太の魂胆が少し気になった颯土だが、その心配を隠してヒカルに話を持っていくと当然のごとく、行く行く！と即答だったし、あかねも、「...うん、いいよ。水着着るのはちょっと恥ずかしいけど...」

という返事だったので、横浜で亮太と落ち合い四人で湘南片瀬海岸にやって来た。

砂浜にシートを敷いて落ち着く場所を確保したあとも、日焼けが嫌なあかねは水着の上に羽織ったパーカーを脱ごうはせず借りたパラソルの下から動こうとしない。だが、ヒカルはすぐさま波打ち際まで駆けて行った。その後を当然のように追いかけるのは亮太だ。

亮太の気持ちが真っ直ぐにヒカルに向いていることは颯土には分かっている。先週、帰りがけの亮太を駅まで送った道中で亮太自身がはっきりと言い切っていたし、取り戻した亮太との昔からの感覚がそれを自分に教えている。だが、その亮太の想いにどこかで反発したい自分がずっといることも自覚している。それは、ヒカルの気持ちが響から動くはずがないという確信と、ヒカルが何かに傷つく姿を見たくないという想い。亮太がヒカルを傷つけるというわけではなく、それは.....

「...群竹くん？」

コーラの缶を手にしたまま呆っと波打ち際で遊ぶヒカルと亮太を見つめていた颯土は、

「ん...？」

と、あかねに顔を向けた。

「...中川くんとヒカルちゃん...、何だかいい雰囲気だね？ふたりとも明るくてキラキラしててお似合い...」

颯土の顔色を見るようにしてあかねは言った。

真夏の太陽――。

いつか、こんな光景を見たことがある。太陽の光を一杯に浴びて広がる海を背景にキラキラと水しぶきを飛ばしていた人。あの時ファインダーから見えたのは今、そこで笑っているヒカルと同じ笑顔だった。

「お似合い...か？」

颯土は目を細めて二人を見た。

「うん。もちろんヒカルちゃんには風間先輩が一番だけど、ああしてふたりでいても違和感ないよね。中川くんって爽やかだし明るいし...ふたりとも真夏の太陽みたい」

あかねはまた颯土をじっと見る。颯土は答えずにコーラを飲み干しただけだった。

「あかねちゃんも群竹くんもこっちにおいでよ～！」

ヒカルが向こうで大きく手を振る。あかねが颯土を見るとまたぼんやりと向こうを見ている。眩しいものに目を細めながらもその明るさを見たくて仕方がないといったように...

本当は海は苦手だった。肌が弱いから真夏の直射日光ですぐに真っ赤になってしまうからだ。だが、もしも自分が海はいやだと断ったとしても、幼馴染の亮太とそしてヒカルがいれば颯土

はきっと…。

「群竹くん…？」

呼んでも颯土の耳に自分の声が届いていない。さっきから颯土はずっとヒカルと亮太を見たままで、隣にいる自分を颯土から見ようとはしていない。

「おーい！颯、あかねちゃん！みんなでやろうぜ？」

亮太がビーチボールを上になげながら誘う。颯土はどんな想いであのふたりを見ているのだろうか？どんな想いでヒカルを見ているのだろうか――？あかねはずっと前を向いたままの颯土の横顔を見つめた。

「せっかく海に来たのにずっとパラソルの下にいるなんてつまらない？」

呼んでも反応しないふたりに業を煮やしたヒカルと亮太が波打ち際から戻ってきた。

「…うん。私はこうしているだけで楽しいよ？群竹くんがここにいるし…」

と、あかね。

「らぶらぶだなあ～、颯～」

亮太は颯土をつついた。こうなると、本当にあの修学旅行であかねにちょっかいを出さなくてよかった、と心から思う亮太だ。もしもちょっかいを出していたとしてもその後に出会ったヒカルに気持ちを奪われていた自信はあるが――。

颯土にはヒカルに恋愛を求めるな、と言われた。ヒカルには心で結ばれた`ヒビク先輩、がいるから、どんなに想ってもヒカルの心を掴むことは出来ないと言い切られた。それはたぶん事実なのだろうが、ぶつかりもしないで諦めることは自分には出来ない。だから――。

「ヒカルちゃん、颯たちはふたりがいいみたいだから、俺たちはあっちで休憩してこようよ？」

亮太は海の家を指差した。

「うん…。でも…」

と、ヒカルは颯土を見る。自分は颯土の友達だから、とヒカルが多少躊躇しているのはわかる亮太だが、ここまで来たら少し強引にでも…、と、思った時だ。颯土がスッと立ち上がり、亮、と、ひとこと言った。その鋭い眼差しが胸に突き刺さった。まるでヒカルをカードするような目つきだ。

「…わかった」

そう言うしかなくて、ふと颯土の隣にいるあかねに視線を流すと、じっと颯土を見上げている瞳が潤んでいるように見えた。

◇

横浜で四人で食事をし、ヒカルとは互いの志望校合格を目指して激励し合い、颯土とはまた近いうちの再会を約束して亮太は帰って行った。これから三人は一緒に東京に戻る。

――でも…、

あかねは颯土を見た。颯土とヒカルは家が隣り。最後の一步までふたりは一緒。

電車がホームに到着するアナウンスが流れた時、その声に重ねるようにあかねは颯土の腕を取って言った。

「…私、まだ帰りたくない。群竹くんと一緒にいたい…」

――え...？

颯土もヒカルも息を呑んだ。

「一緒にいたい...」

時計を見るともうすぐ九時になる頃だ。

「...でも」

迷う颯土の腕にしがみつこうようにしてあかねは小刻みに震えている。電車はホームに滑り込み、ゆっくりと停車の体勢に入っていた。ヒカルはしばらくふたりを見つめていたが、やがて電車のドアが開くと、

「じゃ、あたしは先に電車に乗るね...」

と、ひとりで乗車した。あかねはじっと堅く目を閉じ、颯土はあかねを見下ろしている。そこから動かないふたりだ。やがてドアが閉まり、ふたりをホームに残したまま電車は動き始めた。

ドアの前に立ったまま変わっていく明るい夜の景色を見つめていたヒカルの胸に痛い塊が込み上げて来た。それが何なのか自分でもわからない。ただただ、胸が苦しくて体の奥が熱くて、涙を呑みこんだ時のような痛みだった。

その夜、向かいの窓に明かりはつかなかった。朝になっても昼になってもカーテンは開かなかった。

新学期――。颯土を迎えに来たあかねと、教室から飛び出して来たヒカルがC組の前の廊下で危うく衝突しそうになった。

「わぁ！ごめん、あかねちゃん！」

ヒカルはひっくりかえりそうなあかねの腕を瞬時に掴んだ。

「どうしたの？そんなに慌てて...」

「別に慌ててたわけじゃないんだけど...」

あはは、とヒカルは笑う。バタバタと賑やかに動くのはヒカルの常だ。

「今日は群竹くんと一緒に帰るの？」

「うん。その予定」

新学期になってから、互いの進路相談やあかねは帰ってからのピアノのレッスンの時間の関係などで中々颯土と時間が合わなかったが、今日は久しぶりに駅まで送ってくれると約束してくれた颯土だった。

「そっか！気をつけてね！あたしはこれから進路相談室！じゃあね〜！」

ヒカルは手を上げて廊下を走っていった。C組からD、E、Fの前を通って西階段を下りていくまでの間に少なくとも七人ぐらいの友人から声をかけられ、その都度高らかな笑い声を響かせながら。

「...ほんと、向日葵娘だな、ヒカルちゃん」

ヒカルがひとりいるだけで薄暗い午後の廊下も明るくなる。それは今に限ったことじゃないが、時々改めて知るヒカルの明るさだ。

「どうした？」

教室から出てきた颯土が、西階段の方を見つめながらぼんやりしているあかねの肩に手をかけた。

「今、ヒカルちゃんに会ったから」

あかねは颯土に向き直り、バタバタ走って行っちゃったけど...と、笑った。

「いつものことだろ...」

颯土も西階段の方向を見て微笑んだ。

――その目なのよね.....。

ため息が出そうになったあかねだが、それを吐く前に深呼吸で吸い込んで、「行こ？」と、颯土を促した。

――...群竹くんは――、私のこと本当に好き...？

海に行った夏のあの日、颯土の腕の中で訊いた。あの日のふたりだったから訊けた。あの時に言葉にしなればきつといつまでも訊けなかった。付き合って欲しいと言われた一年前の夏から、一番訊きたくて一番欲しかった想い。ふたりでいる時もそうじゃない時も変わらずに自分を見ていて欲しいと願うのはわがままなのだろうか――。

颯土は少し驚いたような目をしてからすぐに微笑んだ。

『...あたりまえだろ？』

『本当に？こんなふうにならなくても好きだった？』

『...だった、じゃなくてずっと好きだよ...。どうしてそんなことを訊く？』

嘘じゃないってわかった。でも、欲しかったのはもっと、もっと――。

『群竹くん...、ずっとここにいるよね――？』

泣き声にならないように気をつけて言ったら、

『...何言ってるんだよ？当たり前だろ？変なあかねだな...』

と、抱きしめてくれた。

それでも感じる温度の差。きっとこれからもヒカルを見ていたあの目と同じ目では見てくれない颯土だから――。

校舎の裏の駐輪場に颯土が自転車を取りに行っている間、あかねは花壇の前で颯土を待った。つい数ヶ月前までここはランニングをする颯土を待っていた自分の定位置だ。咲いたばかりの秋桜が微かな風にゆらゆらと揺れていた。そう言えば、去年ここで柏木に言われた。

――揺れるコスモスがあかねちゃんて揺らしてる風が群竹。あかねちゃんと群竹はそんな感じでよく似合ってるよ。

自分は秋桜。そして颯土が風。あの時は柏木の言葉が嬉しかった。秋桜のような可憐で儂い花に例えてもらい、風のような颯土と似合っていると言ってくれた柏木に感謝した。

――でも、ね...。

花壇の秋桜は風が通ると嬉しそうにサラッと揺れ、風が行ってしまったあとは寂しそうに沈黙する。風は気まぐれに通り過ぎて行くだけ。秋桜は揺らされているだけ。まるで本当に自分たちのようだ、とあかねは思った。風の態度にゆらゆら揺れて、ただただ儂いだけの花――。

――揺れて儂いだけなんて...。

風がどんなイタズラをしてもそれをおおらかに受け止められる花になれば...。

――向日葵...。

あかねは空を見上げた。雲と雲の隙間から太陽が覗いていた。遠くて手が届かないけれど背伸びをすれば少しは近くなる。手を伸ばせば少しだけ距離は短くなる。

――真似ならできる...。

颯土が駐輪場から自転車を転がして戻ってきた。いつもなら黙って颯土の後をついていく自分だが...、あかねはスッと背筋を伸ばし真っ直ぐに颯土の顔を見つめた。

「...ん？」

あかねの足元の辺りをぼんやりと見ていた颯土が顔を上げた。

「秋桜、キレイだね」

「あ？ああ...」

颯土は今初めて花壇に秋桜が咲いていることに気がついたようだ。

「去年はここにずっと一年生たちが並んで群竹くんを見てたね」

「...は？」

「私がここにて、一年生たちはあの辺で」

あかねは花壇の向こう側を指差す。

「そうだったか？」

颯土は感心なさそうに首をかしげる。

「あなたはいつも何を見ているんですか？」

「...何をとって...」

颯土は困ったように頭をかいた。あかねは颯土の先を歩き、校門の手前でくるっと振り返って言った。

「今日はレッスンないの。どこかで寄り道して行かない？」

「...いいけど」

颯土はまた首をかしげる。

――私、向日葵になりたいから...

自転車の前カゴに自分の鞆をサッと入れいつもより半歩歩幅を大きくして、あかねは自転車を転がす颯土の前を跳ねるようにして歩き出した。

響の特等席だったフェンスの前は、いつの間にかヒカル、麻耶、あかねの特等席になっていた。あまりにも暑かったり寒かったり雨の日以外はほとんどここでランチをしているヒカルたちだ。ただし、あかねはたまに颯土と中庭デートをするためメンバーから外れることもある。そして今日はちょうどその日でヒカルは麻耶とふたりのランチを摂っていた。

「何か寒くなって来たね。そろそろカーディガンが着たいかも...」

麻耶が自分の両腕を抱きながら言った。

「うん...」

ヒカルはぼつりと相槌を打った。せっかくのお弁当も半分も進んでいない。ぼんやりとフェンスの向こうを見つめて時々ため息を吐く。

「ヒカルちゃん？どうしたの？元気ないよ？」

麻耶はヒカルの顔を覗き込んだ。

「そんなことないよ？あたしはいつも元気だもん」

ヒカルは止まっていたフォークをまた動かし始めた。考えないようにしていることが、時々何の前触れもなく降ってくる。響がアメリカに旅立って七ヶ月が過ぎたというのに未だにハガキ一枚届かない。アメリカの何処でどんなことをしているのか、何でもいいから知りたくてもそれを知る術がないことにたまに不安になることがある。秋が深まり空気が澄んで冷たくなってきたからなのか、今日は朝からそんな寂しさに憑りつかれているヒカルだった。

「風間先輩のこと考えてるんでしょう...？」

麻耶がさり気なく言うと、

「...べつに」

ヒカルはフォークで刺したうずらのたまごを口に放り込んだ。だが飲み込むのが辛くて、うっ...とむせた。

「田村先輩なら風間先輩の居場所とか近況とか知ってるんじゃないの？聞いてみればいいんじゃない？」

ヒカルが何故それをしないのか、かえって不思議に思っているような麻耶の口ぶりだ。

「...ううん。いいんだ。聞かない。ヒビク先輩はきっと今いろいろ...」

――...大変で、女の子のことなんか考えてる場合じゃないんだ。ヒカルのところに帰ってくるから、と約束してくれたんだから信じて待っていたい...。

ヒカルはまだ半分も中身が残ったままのランチボックスをしまった。

「...あら、そんなに残しちゃって...ヒカルちゃんらしくもない」

「なんか、食欲なくて...。ごちそうさま」

ヒカルはランチボックスに向かって手を合わせた。

教室に戻る途中の廊下で颯土とあかねに会った。麻耶が早速あかねに駆け寄り、
「ヒカルちゃん、今日お弁当を半分以上も残したんだよ...？食欲がないんだって」

と、小声で言った。

「えっ！？ヒカルちゃんが食欲がないって...！？」

と、あかね。隣にいた颯土も、まさか？な顔をしてヒカルを見る。

「...どうも、風間先輩シックにかかっているみたいで.....」

「...あ、わかるよ...。秋、だもんね...」

あかねは妙に納得して頷いた。

「...そういえば、朝からあんな感じだったぜ、あいつ...」

「やっぱり...」

麻耶とあかねは顔を見合わせる。そんな友人たちの心配をよそに、ヒカルは無言で教室に入って行った。

放課後、麻耶にパフェでも食べて帰ろうよ、と誘われたヒカルだったが、食欲ない...、と断った。

「パフェは別腹に入らないの？ヒカルちゃんお昼もろくに食べてないのに」

「うん。ごめんね...」

ヒカルはそのまま昇降口を出る。どこかで何か違和感を感じながらも歩き、墨田公園の手前まで来た時、

「何やってんの、あたし！自転車を学校に忘れたじゃんっ！」

違和感の原因に気が付き、くるっと回れ右をして再び来た道に戻り始めた。

――何だかぼっとしてるよ...。今日は全然ダメだな...。

こんなにもマイナーな気持ちを一日中引きずったのは三年生になって初めてだ。たまに仲睦まじいあかねと颯土を見たりするときゅん、と心が痛んだりわけのわからないヤキモチが出たりもしたが、食欲がなくなるほどの寂しさに襲われるのはやっぱり秋だからなのかな...、と、思いながら学校の手前まで戻ってきた時、向こう側から颯土がやって来た。あかねを駅まで送り戻ってきたところらしい。

「浅倉？何でこんなとこ逆方面に歩いてるんだ？」

颯土は自転車を止めた。

「...べつに」

と、ヒカル。

「だって変じゃん。自転車は？」

「.....学校に忘れたから取りに戻るところ...」

単調に答えてスタスタと歩き出した時、ヒカルはふらふらっとよろめいた。お弁当をほとんど食べてないからかな...、と思いながら体勢を戻してさらに歩き出したが、

「おい、浅倉？足元ふらついてないか？」

という颯土の言葉に、はじめて自分の体に変なことに気がついた。

「...足元ってというか、全部がぐるぐる回ってる...」

「全部がぐるぐる？」

颯土は自転車を降りてヒカルの顔を覗き込んだ。

「顔真っ赤だぜ？熱でもあるんじゃないの？」

「え...？熱？」

ヒカルは自分のおでこを触る。

「あるかもお.....」

食欲がなかったのも気分がマイナーだったのもふらついてたのも熱のせいだったのか、と自覚してしまったらもうダメだ。その場にヘナヘナと座り込んでしまった。

「おいおい...」

颯土はヒカルの腕を引いて立ち上がらせ、乗れよ、と後ろの荷台を顎でさす。

「...だって、あたしの自転車...」

「別に失くならねえから大丈夫だろ」

どうにも立ってられないヒカルは、こくと頷いて颯土の背中にもたれかかるようにして荷台に乗った。

「あかねちゃんの特等席...ごめん」

「ばーか。ちゃんとつかまってるよ。落ちるぜ？」

――俺にしっかりしがみついてろよな！

一年生の時もこんなことがあった。熱を出して立てなくなって。だが颯土の背中はその時の響の背中とはやっぱり違う。

――ヒビクせんばい。会いたいよお.....。

温かった響の背中を思い出しセンチメンタルになって涙がこぼれそうになった時、

「...しかし、重っ！あかねと十Kgぐらい違う？」

という颯土の言葉で、胸に詰まっていたせつない塊が見事にひっこんだ。だが、バシッ！と勢いよく颯土の背中をはたきたいその手にも力が入らず、その夜は高熱にうなされた。

◇

ヒカルが風邪で欠席！こんなことは入学以来はじめてのことだ。

「ヒカルちゃん、熱何度あるの？」

「ちゃんと食べてるのかな？」

あかねと麻耶が隣人の颯土に詰め寄ったが、

「...俺は知らねえって...。隣って言ったって別に始終あいつのこと見てるわけじゃねえし」

颯土は困ったように返答する。

「...まあ、そうだよな。じゃあ、帰りに様子を見に行こうよ？それぐらい、いいよね？」

放課後には勇斗と祐輔も加わり、元一Fにぎやか組が勢ぞろいしてヒカルの家に向かうことになった。

「仮にも相手は病人だぜ...？大勢すぎるだろ...」

颯土はぶつぶつ言うが、そんなことはみんなおかまいなしだ。

「ヒカルちゃんにとりつく風邪ってどんな風邪なのか見てみたいじゃん～」

勇斗が冗談交じりに言うと、その後頭部をパンッ！とはたたいたのは麻耶だ。

「麻耶ちゃん、思いっきり後頭部じゃんっ！」

勇斗ははたかれたところを押さえながら苦情を言う。

「あんたはヒカルちゃんをわかってないよ！ヒカルちゃん、あれでも結構ナイーブなところあるんだから！好きな人と音信不通っていうのがどれだけつらいか知ってる？！」

「音信不通でなくてもつらいっす...」

勇斗は後頭部をさすりながら呟く。

「...まあ、そういうこともあるだろな、浅倉だって。置いてった自転車も届けてやらないといけないだろうし、ちょっと顔見て帰ってくればいいよ」

祐輔が言うと、麻耶はそうそう、と大きく頷いた。

ヒカルのおまんこ好きは音痴と同じぐらいにみんなが承知しているので、途中のコンビニに寄ってお見舞いに買った。

そしてヒカルの家。チャイムを鳴らして出てきたのは妹の久美子だ。

「ヒーねえ、死んでる」

久美子は単調に言い放った。

「そんなに悪いの...？」

「鬼の霍乱ってヤツ？昨日から何も食べられないし熱は下がらないし」

「じゃあ会えない？」

「会ってもつまんないと思うよ？」

そーゆー問題じゃないんだけど...、と一同はあっさりな妹の言葉に首を傾げながらも、今は寝ているのかと訊くと、久美子はちょっと待って、と二階に上がって行った。そしてしばらくして、

「大丈夫だって。どうぞ上がってください」

オッケーが出たので一同はぞろぞろと上がりこむ。その様子を一番後ろで見ていた颯土は、自分はここで待ってるからと引き下がった。

おでこにアイスノンを巻き付けたヒカルが真っ赤な顔をしてベッドで体を起こしていた。

「みんなあ...来てくれてありがとお...」

話す声にも力が入らず掠れている。

「昨日から食べてないって本当なの？」

「うん...。食欲が全然わかないの。でもダイエットになっていいかもお...」

ヒカルは笑うがその笑顔も何だか痛々しい。

「あんまん買って来たよ！ヒカルちゃん好きでしょ？甘いよ〜！」

あかねはヒカルにまだほかほかしたあんまんの袋を手渡した。

「...ありがと」

袋の中にはみんながそれぞれひとつずつ買った五つのあんまんが入っていた。

「あんまん...大好きなんだけど今食べられなくてごめんね。冷めちゃうからみんなで食べて」

ヒカルはひとつずつ祐輔たちに配る。こりゃ相当な重症だわ、とみんなは顔を見合わせ、手渡されたあんまんをとりあえず食べてから長居をしないように部屋を出た。帰りがけに残ったひとつを久美子にあげると、

「ラッキー！」

と、大喜び。いったいこの妹...、とそれぞれの腹の中で思いながらヒカルの家を出ると颯土が待っていた。

「ヒカルちゃん、あんまんも食べられないほど重症だった。熱もずいぶん高いみたい」
あかねが早速報告する。

「結局オイラたちがあんまん食ってきちゃった」

颯土は、はっ！と笑い、

「まあ、いくらあいつでも風邪ひきやなあ...」

と、二階の窓を見上げた。

「あの様子だとしばらく無理だろうな。浅倉も色々あって疲れもたまった頃だと思うし、ゆっくり休めばいいさ」

と、祐輔。うんうん、と思い切り首を縦に振って麻耶は同意する。

「でも、ヒカルちゃんが元気ないと寂しいね」

あかねが呟くと、みんなは無言で頷いた。

――しかし、あんまんも食えないのか...。

駅までみんなを送ったあとの夕暮れの帰り道で颯土はぼんやりと考えた。あのヒカルが、大好きなあんまんも食べられないほどぐったりしている様子など想像もできないが、

――確かに、こりゃ相当な重症だな...。

麻耶が言ってたこと、祐輔が言ったこと、当たってるだろうな、と颯土は思った。

い～しゃ～～～きいも～～～ おいも～

自転車をこぐ後ろから、石焼きいもの販売カーがゆっくりと近づいてきた。この秋になって初めての遭遇だ。

――ま、食えないだろうけど初いもでも届けてやるか。

颯土は石焼きいも販売車を止めた。

◇

「群竹くんから...？」

久美子から焼き芋の袋を手渡されたヒカルは、芋と向かいの窓を交互に見比べた。

「食べられなかったらあたしが食べるからちょーだい」

と、久美子。それを無視して袋からほかほかのお芋を取り出してふたつに割ると、こおばしい匂いと温かな湯気が立ち込める中、ほくほくでつやつやの黄色い実が現れた。ヒカルはパクリと口をつけ、美味しいっ！と、声を上げた。

「...はっ！食べるんだあ。残念...。あたしも初芋食べたいなあ」

と、久美子。

「何か食欲わいて来たあ」

「...あっそ。まあ、いっぱい食べてガス抜きして早く元気になってよね。ヒーねえがくたばってるとつまないから！」

久美子は部屋を出て行った。あったかくて甘い焼き芋をゆっくりと味わいながら食べ終わった

ヒカルは、カーテンをほんの少しだけ開き、二メートル向こうの明かりを見つめ、ありがとう、と呟いた。

ヒカルの体調も回復し、ますます秋も深まった頃、三年生だけの特別課外授業、芸術鑑賞会がおこなわれた。本城高校の三年生は上野の美術館に集合しこれから館内の鑑賞をする。その後は現地解散だから午後の時間は自由になる。

颯土はカメラを持って来た。今、上野公園は紅葉と銀杏が鮮やかな季節だから、自由になる午後は公園内を散策しながら写真撮影をするつもりでいる。

美術館で颯土はあかねと一緒に印象派画家の絵画を観て歩いた。

「ルノアールだって」

じっと絵をみつめているあかねの横顔と、今日の前にある有名な「イレヌ・カーン・ダンヴェールの肖像（Irene Cahan d'Anvers）」の少女がどこことなく似ていた。

「ん？どうしたの？」

見つめられていることに気がついたあかねが颯土を見上げた。

「い、いや？」

颯土はルノアールとあかねを見比べ、同じ陶器のような白いキレイな肌に何故かひとりで赤面した。

次に見たのはゴッホだ。一番に目に入ったのは山吹色の十四本のひまわりたちだった。

——でも、このひまわりは…。

颯土の中にあるひまわりとは随分違った印象の絵だ。花びらが落ちているものもあり下を向いているものもありどう見ても元気がない。たぶん、これが本当のひまわりの姿なのだろう。いつもいつも太陽ばかりを見上げているわけじゃないし萎れることもあるだろうし花びらだって落ちるだろう。もしかしたら自分は向日葵という花をずいぶん誤解しているのかもしれない。

——あいつのせいで…。

颯土はすぐそこで勇斗と一緒に絵を観ているヒカルを見る。

「ねえねえ、どうして絵画ってそのまんまのタイトルをつけるのかな？これなんか、『帽子をかぶった農家の若い娘』だよ？あたしだったら『帽子の娘』だけにするなあ。何で『かぶった農家の若い、までいれるんだろ？長いよねえ？』」

ヒカルはピサロの絵の前で控えめにケラケラ笑っている。

「このピサロさんは自分の嫁さんが若くないおばばでさあ、しかも若くないから農作業もはかどなくてさあ、そのあてつけにこのタイトルをつけたんじゃない？」

と、勇斗。

「なるほどっ！自分の奥さんを刺激しようと思って！」

「きっとそうだよっ！」

——…んなわけねえだろ…。

どこにいても明るいヒカルと目の前のゴッホの『ひまわり』とは印象が違いすぎる。

——あいつは印象派…じゃないってことだよな、少なくとも…。

颯土が一人納得して笑う隣で、あかねは首をかしげた。

美術鑑賞を終えにぎやか組の六人は皆で上野公園を歩いていた。もみじの緋色と銀杏の黄色が混同する空間は鮮やかすぎるほどだ。

「みんなでこーやっていると修学旅行の奈良公園を思い出すね」

もみじを背景にして佇むあかねの姿はやっぱりさっき見た印象派の絵画のようだ、と颯土は思った。

「あかね、そこに立てよ。写真撮ってやるから」

「え？私を撮ってくれるの？」

あかねはうれしそうに顔を紅く染めて言われるままの場所に立った。

――さっきの絵は....、

ルノアールの『Irene Cahan d'Anvers』に描かれていた少女のアングルを思い出し、
「ちょっとナナメに横向いて」

と、指示するとあかねは言われたように横を向いた。背景はもみじ一色の印象派のできあがりだ。

――こーゆーシチュエーションはやっぱあかねだよな....。

と、思いながら颯土はシャッターを切った。

「あ！こんなところでまたふたりでラブってる」

シャッターを切る音に反応したヒカルが、自分たちはとっくに通り過ぎてきた場所で写真を撮っている颯土とあかねを指差した。

「あんたたちさあ....、みんなと一緒にの時はみんなに合わせようよねえ？」

麻耶も腕を組んでふたりを睨む。颯土は何気なくファインダーを覗いた。たまたまアングルの中にいたのはヒカルだ。ふたりでラブってる！なんて文句を言っておきながら、自分はもう向こうの方で落ちしてる銀杏の葉を拾い集めている。鮮やかな銀杏の黄色が空から木立の間を通して届く光に反射してヒカルの周りを明るくしていた。

響とふたりの`絵、は今までにたくさん観てきたが、ヒカルシングルをちゃんと覗くのは始めてかもしれない。ファインダーから見える絵は鮮やかで透明でシャープで、いくつもの光の玉が空を泳ぎ、それはまるで形が決まってない抽象画のようだ。じっとしていないヒカルはしゃがんだ体勢のまま、ぴょんぴょんとウサギのようにあちこちに移動する。そのたびに颯土のカメラもそれを追う。そんなヒカルの行動に気がついて寄って来た勇斗がアングルの中に入ってきた。

――...ったく、大久保邪魔だよ。

ただでさえじっとしていない被写体なのにそれを塞ぐ異物の勇斗。

「ヒカルちゃん、群竹ちゃんがオイラたちを撮ってくれるって！」

颯土がカメラを向けていることに気がついた勇斗が言うと、

「え？ほんと？」

ヒカルは勇斗を押しつけて立ち上がった。都合よく勇斗はアングルから消え、その一瞬の引き締まった空気と、揺れた髪と、舞い上がった銀杏の葉と、笑顔のヒカルに焦点を合わせ、颯土はシャッターを切った。カシャッという音が自分の心臓に響くのを、この瞬間に感じた颯土だ。

――なんだろ、今の？手ごたえみたいな、なにか――。

感覚だけは覚えていてもその意味は分からない。だが、どこかで何かが満足している感じがある。

――ま、いいか…。

「ひっでえよ、ヒカルちゃん…。オイラ写らなかったじゃん！」

勇斗はヒカルに文句を言い、ヒカルはごめんごめんと手を合わせて謝っている。颯土は、わり一な大久保、と心で呟きながら、

「じゃあ、みんなでそこに並べよ」

銀杏の前を指差した。琴線に触れたひとつの感覚――。銀杏の絨毯の上に並んだ仲間たちをファインダーから覗きながらその感覚を思い出すように考え、颯土はシャッターを切った。

◇

にぎやか組たちは公園内のガーデンカフェテラスに落ち着いて軽いランチを摂った。丸いテーブルに六人が仲良く集まる昼下がりで。

「あかねちゃん、今からピアノを習うのって難しいと思う？」

やや唐突に、ヒカルはあかねに訊いた。

「ヒカルちゃんが習うの？」

「そう。左手で伴奏して右手でメロディ弾けるくらいになりたいんだけど…」

ヒカルはテーブルの上でピアノを弾くように指を動かす。

「一からやれば大丈夫じゃないかな？でもどうして？」

あかねは音痴のヒカルが言い出したことに首をかしげた。

「課題であるらしいんだよね。まあ短大に入ってからの話なんだけど…」

「ピアノの課題？」

「うん。あたし、保育科に行こうと思ってるの」

「ということは…」

「えへへ。幼稚園の先生になりたいな～、って思ってる」

「それじゃ、ピアノは必修課題だね～」

と、勇斗。

「でしょ？だから、今のうちから習っておいた方がいいかな～って思ってるんだ。絶対苦労すると思うから」

皆が大いに納得してうなづいた。特に、時々聴こえてくるヒカルの大きな鼻歌に安眠を妨害されたり数学の公式を忘れてしまったりの被害をこうむっている隣人は、

「……ついでに歌のレッスンもした方がいいぜ…」

ぼそりと呟いた。

「幼稚園の先生なんて浅倉らしいな」

と、祐輔が言った。

「そうでしょ？自分の将来、もうこれしかないだろうって思ってるの」

「私の知っている先生にヒカルちゃんの個人レッスンを頼んでみるよ」

「よろしく頼みますっ」

ヒカルはあかねにぺこりと頭を下げた。

「まだまだ先だって思っていたけれど、僕たちもいよいよ受験の時が来たんだよな」

祐輔がいくらか深刻な顔をした。

「一年が終わった時、群竹ん家でみんなで目標を言い合ったよな」

「そうだったね〜」

「あの時はまだ一年が終わったばかりなんだから将来のことを焦って考えなくてもいいよ、なんて大久保が言ってたけど、僕はあれから色々悩んだな...」

祐輔は真顔になっている。

「伊藤くん、真面目だからね」

と、麻耶。

「群竹がカメラマンを目指すか目指さないかで悩んでいたろ？」

「俺は別に悩んじゃいなかったよ。あのころはまだカメラマンになろうなんてちっとも考えてなかったし...」

——まだ...？.....ということは、今は...。

気になったことを訊こうとしたあかねだが、颯土は祐輔を向いて話が続いている。

「そうだったかもしれないけど、僕は群竹がうらやましかったんだ。少しでも可能性をためそうと動き出していたじゃないか。苦手な早起きに挑戦して新聞配達してた群竹のこと、くやしいくらいにカッコイイと思った」

「よせよ...」

照れて祐輔から目を反らした颯土があかねを見た。だが、

「群竹く...、」

「で、伊藤くんは悩んでいたことに答えは見つかったの？」

あかねの声に麻耶の言葉が重なってしまった。あかねはため息を吐いて言葉を呑みこんだ。

「不確かだけど方向は見つかったよ」

祐輔はやや緊張した面持ちで勇斗を見た。

「へ？」

勇斗は呆けた顔を祐輔に返した。

「大久保、お前は家を出るんだよな？家は継がないんだよな？」

「もちろんだよ。オイラは絶対に家を出る」

そのために今、受験勉強と両立しながら夜中に工事現場で警備員のアルバイトをしている。勇斗はM大学の二部を受験する予定でいるが、合格すれば家を出て自立する。その場合入学金その他は家から一切出ない。不合格なら無条件で将来の二代目襲名に向かうべく準備とあいなるわけだ。

「じゃ、お前に絶交される心配はいらないな...。それだけが心に引っ掛かっていたんだ」

祐輔はホッとしたように胸を撫で下ろした。

「何だよ、ゆうちゃん」

「僕、警察官になろうと思う...」

「えっ...」

勇斗は絶句してしまった。極道と警察官では決して相容れぬものだ。

「まずいか？」

祐輔は言葉をなくした勇斗の顔を心配気に見る。

「もしかしたらゆうちゃんがオイラの親父をタイホするなんてこともあるわけだよな？」

「色んな状況が重なれば、ありえないとは言い切れないだろうな...」

祐輔の言葉に勇斗は考え込む。

「ま、オイラは家を出るんだから関係ないさ！」

「...そうか」

祐輔は笑った。

「これで、僕の進路決定。とりあえずは体育大で剣道続けるよ」

「っていうか、親父のことよりオイラじゃん！オイラ、絶対不合格になれないじゃん！」

勇斗は青くなった。大学に不合格だった場合は襲名する未来が確定してしまうのだ。

「ヤバイヤバイ...。ゆうちゃんとオイラの将来のためにも、絶対合格しなきゃっ」

勇斗はぶるっと武者震いをした。

「大久保くんは将来をどう考えてるの？」

と、ヒカル。

「オイラは普通のサラリーマンになるんだ。そんでもってかわいいお嫁さんもらって、子供たくさん作って小さくてもいいからマイホームを持って幸せな暮らしをするのが夢！」

「大久保くんにしちゃ普通の夢だね」

麻耶がサラリと言った。

「普通が一番だよ。麻耶ちゃんの夢はなんなの？」

私？と、麻耶は考え込んだ。そして、祐輔の方をチラリと見て、

「私は普通の可愛いお嫁さんがいいかな...」

と、真顔で答えた。

「麻耶ちゃんがかわいいお嫁さんなんてウソみたい！バリバリの体育の先生って言うかなって思っていたのに...。体育大志望だし」

と、ヒカル。

「私、人に何かを教えたりするの苦手なんだよね〜。体育大を志望してるのは...」

麻耶は再び祐輔を見て、祐輔が気づかないうちにそれを反らし、

「とりあえずは体育しか得意なものがないから！」

と、笑った。祐輔が同じ大学を受験するから、という本当の理由は麻耶しか知らない。

「んじゃ、麻耶ちゃん、オイラのお嫁さんになってよ！」

勇斗が唐突に言った。

「はぁ?!」

麻耶は耳を疑って勇斗をマジマジと見た。

「だって、オイラはかわいいお嫁さんが欲しくて麻耶ちゃんはかわいいお嫁さんになりたいん

でしょ？ちょうどいいじゃない？」

「だからって相手が誰でもいいなんて言ってないでしょうが！私もあんたも！」

「誰でもよくないよ。オイラは麻耶ちゃんがいいんだ」

一瞬の沈黙がその場に流れた。

「オイラ何か変なこと言った？」

勇斗は自分に注目している一同を見比べて呆ける。

「お前、今、みんなの前で堂々と告白したの分かってる...？」

祐輔がやや引きつった顔をする。

「告白？ああそうか...。そうだよな～。何だ、オイラ言っちゃったんじゃない」

アハハ...、と乾いた笑いをしながら勇斗は頭をかくが、その横で麻耶は真っ赤な顔をしてうつむいた。

「大久保くん、ホンキなの？」

あかねが疑いの目を向ける。女の子が大好きでいつもあっちこっちと目移りばかりしている勇斗だからだ。

「オイラが麻耶ちゃんを好きだってこと？」

麻耶はますます赤くなって、

「へんな冗談はやめてよね。そんなわけないでしょ？私たち仲間なんだから！」

と、叫んだ。少し離れたテーブルにいる婦人が怪訝な顔をにぎやか組に向けた。まったくうるさい高校生ね、とその顔が言っている。

「仲間を好きになっちゃいけないってことはないでしょ？群竹ちゃんとあかねちゃんだって惚れ合ってるんだぜ。白状するとね、オイラ、一年の時からずっとだよ～。麻耶ちゃん一筋三年間！」

「な、な、なにが一筋よ！女の子大好きなくせに！」

「それは照れ隠してやつですか～？カムフラージュってやつですか～？えへへっ！」

麻耶の顔は湯気がたちそうなくらいにますます真っ赤になった。

「し、信じらんない！普通こーゆー場でそんなこと言う?!」

「普通じゃないのが大久保でしょ...」

と、祐輔。

「そうだな...」

と、颯土。

「別に今すぐ結婚してって言ってるわけじゃないんだからゆっくり考えてよね」

勇斗は本気とも冗談ともとれる言い方で言った。

「そ、そんなの考えるわけないでしょ！」

言い返す麻耶に勇斗はニヤニヤ笑うだけだった。

「じゃ、告白の記念に一枚.....」

颯土は手元のカメラを構え、真っ赤になっている麻耶と照れ笑いの勇斗をアングルに入れた。が、撮ったらコロス！！と、ものすごい剣幕で麻耶が手を上げ、

「しゃ、写真を撮る時の群竹ってカッコイイよなあ！」

不自然に祐輔が話しかけて来たため、記念撮影は中止された。撮ったらコロス...ってあんまりじゃん、と勇斗はしょぼんとするが、そんな友を横目にして祐輔は話を続ける。

「一瞬の引き締まる空気っていうのかな、ピリッと何かが走るんだよな」

「そんなことないだろ」

「あるよ。さっきも色々撮ってたけどすごい真剣な目をしてたぜ？」

そうかな、と颯土は手にあるカメラを見つめた。

「俺、写真科に行こうと思ってる」

え？とあかねが颯土を見つめた。

「近専を受験する...」

颯土はあかねを見て言った。マジか？と勇斗と祐輔も驚いているが、

「近専...神戸...？どうして？写真科なら都内にだって...」

あかねは呆然として呟いた。

「もしかして...兄貴？」

「べつに純平さんに言われたわけじゃないぜ？俺が純平さんの傍で写真の勉強をしてみたいって思ったから...」

へえ、そうなんだ、と麻耶は呑気に言うがあかねの方はそうはいかなかった。颯土が自分にひとこともなく神戸の大学を受験すると決めてしまったこともショックだったし、何よりも合格したら離れ離れになってしまうことが悲しかった。それに――。

――どうしてヒカルちゃんは驚かないの...？

みんなが颯土の進路にそれぞれ思う反応をしている中で、まるでひとりだけ初めから知っていたようにヒカルは冷静だ。唇を一文字に結び、膝の上に置いてスカートを握り締めるあかねの手が震える。

「ヒカルちゃんは聞いてたの...？」

あかねはヒカルを見た。

「...うん」

そっか...、と呟いてあかねは俯いた。

――ヒカルちゃんには何でも話すんだね、群竹くん...。

でも――。

どうしていつもヒカルが先なのだろう。そう思うと、あかねは胸が張り裂けそうになった。自分にひとこともなく受験を決めてしまったことよりも、近専に合格したら離れ離れになってしまうことよりも、先にヒカルに知らせたことにあかねは傷ついた。

――やっぱり群竹くん...。

颯土は気づいてないだけ。でも、気づいて欲しくない。だから――。

「もう！いつから決めていたの？私、ずっと気になっていたのにヒドイよ」

あかねは口を尖らせ、拗ねた口調で颯土に文句を言った。

「...ごめん。言い出しにくくてさ...」

「近専...神戸っていったって日本だもん。アメリカに行っちゃうわけじゃないし新幹線に乗れば

すぐに会いに行けるし電話も出来るもん。群竹くん、もしかして私が泣くかと思った？」

と、あかねは笑ってみせた。

「泣くとまでは思ってたけど...、」

落ち込ませてしまうだろうとは思っていた。だから、皆がいる前で話したのだ。

「そりゃ、群竹くんが近専に合格して神戸に行っちゃったら寂しいけれど、でも私は大丈夫だよ。群竹くんの夢を応援したいから」

「...そっか。ありがとう」

颯土はホッとしたように笑った。

――泣きたいよ.....。

「あー、はいはい。ラブラブはふたりになってからやってちょうだいねー」

まったく...、痒い台詞だわ、と麻耶。

「んじゃ、未来のお嫁さん！ツーショットは撮れなかったけどオイラと痒い台詞言い合っちゃう〜？」

「だ、誰が未来のお嫁さんなのよ！」

麻耶はテーブルから立ち上がり、スタスタとカフェテリアを出て行ってしまった。待ってよ、と勇斗が追いかけて、おい！と祐輔がその後を追いかけて行く。

「私たちも行こう？」

ヒカルがあかねと颯土を促して先に駆け出して行った。颯土もその後をゆっくりと歩いていく。あかねはテーブルの傍に立ったまま、緋色の中を駆けていくヒカルとその背中を見ているような颯土を見つめていた。

「どうした？行くぞ？」

振り返った颯土に、あかねは、

「...うんっ」

ニッコリ笑って駆け寄った。

あかねがすぐに知り合いのピアノ講師を紹介してくれたので、ヒカルはさっそくピアノのレッスンを受け始めた。自宅にはピアノがないので卓上のキーボードを購入し、毎日ドレミファソラシドと指を動かす練習をしている。もともと音痴のヒカルにとって音符を読むのも一苦労なのに、リズムを取りながら両手の指を違う音階をなぞって動かすのはとてつもなく大変なものだった。

「こんなに難しいものを、よくあかねちゃんやヒビク先輩は苦労なくスラスラと弾けるものだわ...」

ヒカルは思わずため息がもれた。

「ヒビク先輩、今ごろどこで何してるのかな...」

急にせつなくなっって自分の机の引き出しにしまっってある三つの宝ものを次々と出した。ひとつは颯土が撮った文化祭の時の写真、ふたつ目はおそろいのペンダント、そしてみつつ目は卒業式の日に響からもらった『Shine』の楽譜だ。響がアメリカに渡っってからもうすぐ十ヶ月がたとうとしている。だが響からは何の連絡も来ない。ヒカルは毎日のように自宅のポストをのぞき、響からのエアメールを待っている。響に送ろうと書いた宛先のない手紙もずいぶんとたまってしまった。

「ヒビク先輩...」

ヒカルは楽譜にある響の詞を読み返していた。

[言葉に出来ない思い出を心にとじ込め僕は行こう 君と出会えた時を明日へとつなぐために キラキラヒカルぼくらの未来のために]

[もしも願いが叶うなら 最後に君を抱きしめたい 遥かな想い覚えていたい君のぬくもりキラキラヒカル永遠に悠久に]

[君を守りたいShineいつもどんな時も 君と生きたい My Shineいつかきっと]

[空よりも星よりも 光輝く僕のShine空よりも星よりも 遠い遠い僕のShine]

独特な響の走り書きの文字ではあるが、そのひと文字ひと文字に響の想いが染められている。

――君と出会えた時を明日へとつなぐために キラキラヒカルぼくらの未来のために。

このフレーズがヒカルの心に悲しいくらいにせつなく響いてくる。響と一緒に過ごした日々を思い出として残すだけじゃなく、未来へとつないでいくためにひとりアメリカに渡った。そしていつかきっと自分（ヒカル）と共に生きたいと、このメロディの中で語っている。だから会えなくても信じて待っていようと、あの粉雪の中、響がくちづけをくれた瞬間にヒカルは心に決めたのだった。

「全然遠くなんかないよ、ヒビク先輩...。私の心はこんなに先輩のそばにいるのに...」

今、何の連絡もくれない響の方がヒカルには遠く感じる。いつだって響のことを忘れたことなどない。ふと気がつくと、いつも響のことを考えている。

ヒカルは楽譜を机に置き、そのまま立ち上がってカーテンを開いた。外は輝く冬の星空。オリオン座が近くでキラキラと光っている。この同じ星空を響もアメリカで見あげているのだろ

うか...、と考えてヒカルは首を振った。

「アメリカは今、朝だって...！」

言葉に出して言う前からヒカルはまたせつなくなかった。昼と夜が逆転するほど遠いところに響はいるのだ。

目の前の颯土の部屋のカーテンが微かに揺れた。きっと颯土が窓の前を横切ったのだ。ヒカルは消しゴムをつかむと颯土の部屋の窓に向かってそれを投げた。

すぐに向かいのカーテンと窓が同時に開き、タオルで濡れた頭をゴシゴシとぬぐいながら、片手に缶コーラを持った颯土が顔を出した。

「なんだよ？」

「別に用はないんだけど、勢いで消しゴム投げてみた」

「なんだよ、それ。勢いで投げるなよな。下に勢いの残骸がいっぱい落ちてるぜ...？」

颯土が軒下を指差すと、

「あとで拾うよ～」

ヒカルも下をのぞいた。確かに勢いとか、ちょっと心寂しい時とか、思考のループにはまり込んだ時の転機のために投げた消しゴムが何個か落ちたままになっていた。

「腐ったカフェオレ捨てるよりまだ消しゴムの方がマシでしょう？」

というヒカルの言葉には、颯土も黙るしかない。

「...ま、いいか。消化不良になりそうなピアノの音が鳴り止んでくれたから」

「失礼ね！それでも一生懸命やってるんだよ～！」

「ま、頑張って練習してください。ピアノが下手な幼稚園の先生ってのはカッコつかないし、幼子の教育上にも問題が生じるからな」

「あんたに言われなくてもわかってますよ～だ！群竹くんこそ...！」

受験勉強がんばりなさいよ、と言いかけてヒカルは言葉を止めた。

「なんだよ？」

颯土は怪訝な顔をしてヒカルを見る。颯土が受験に成功したら神戸に行ってしまう。あかねが寂しい思いをする。今の自分のように...

「群竹くんさあ...、本当に近専を受験するの？」

「何を今更...」

「そうだよな...」

ヒカルは、はあ...と息をついてうつむいた。

「どうしたんだよ？」

「...あかねちゃんを悲しませないでよ？毎日ちゃんと電話するんだよ？」

「おいおい...。まだ受験もしてないのに何言ってるんだって」

颯土は呆れ、缶コーラに口をつける。が、

「そうだけど...！いつも当たり前のようにそばにいた人がいなくなっちゃうのって本当に寂しいんだからね！」

半分べそのヒカルを見て颯土はやっと気がついた。ヒカルは今、響が恋しいのだ。

――あたりまえ...だよな...

「何笑ってるのよ～」

「いや、べつに...」

――こいつも普通の女の子なんだよな...

いつも当たり前のように傍にいるから、そういうことを時々忘れてしまうけれど――。

「分かったよ...。極力、努力する」

「うん。そうして。今から、そういう心がけは大事です」

と、ヒカルは笑う。

――いつも、当たり前のように傍にいた人がいなくなる...か。

そんな時の絶望を恐れていたのは、ついこの間までの自分だ。今は一緒にいても、いつかは遠く離れて行ってしまう仲間や友達、そして好きな人。

――でも...

それは、決して絶望に結びつくものじゃないんだな、と颯土はヒカルの笑顔を見て思った。

その時、

「ヒカル～、電話よ～！」

階下で母親の呼ぶ声がした。

「じゃね！おやすみ～！」

ヒカルは颯土に手を振り窓を閉めた。

「おやすみなさいませ...、お嬢さま...」

颯土はもうカーテンが閉められたヒカルの部屋の窓に向かってつぶやいた。

◇

ヒカルが階下に下りていくと、

「中川さんって人から」

母親はヒカルに受話器を渡した。

「はい、ヒカルです」

『中川亮太です。わかるかな？』

受話器の向こうで聞き覚えのある亮太の声が響いた。

「久しぶりだね！」

亮太とは夏に会ったきりだった。

『暮れの忙しい時に突然電話して悪かったかなあ』

「全然悪くないよ！忙しいのはお母さんで、あたしは別に忙しくないから」

ヒカルは母親をチラッと見た。明日は大みそかで紅白が始まるまでには大掃除もおせち作りも全て終わらせてしまおうと、母親は今忙しく換気扇の掃除に励んでいる。

『元旦、一緒に初詣に行かないかな、の誘いの電話なんだけど...』

「あ、合格祈願ね？」

『そう。一応ヒカルちゃんとは同じキャンパスを目指しているからどうかなって思ったんだけど』

「いいよ、行く！あっ、群竹くんも誘おうか？」

亮太は一瞬言葉につまり、

『颯はきっとあかねちゃんに行くんじゃないかな...』

と、歯切れ悪く呟いた。

「そうか...。せっかくのデートを邪魔しちゃ悪いね。じゃ、あたしと二人でいい？」

二人がいいんだ、と、亮太は心の中でつぶやく。

『ああ、俺、上野まで出るから、また電話するよ』

「うん、そうして！誘ってくれてありがとう！」

元旦の約束をして電話は終わった。

「何？デートのお誘い？」

母親が油まみれの換気扇と格闘しながら訊いてきた。

「そんなんじゃないよ。合格祈願の初詣に行こうって誘ってくれたの。中川くんって覚えてるでしょ？前にこの家に住んでいたっていう群竹くんの幼馴染」

「ああ、あのカッコイイ男の子ね。いいなあヒカルは。カッコイイ男の子に囲まれてさ！」

「いいだろ～」

「でも、お母さんはやっぱりヒビク先輩が一番いいわ！」

と、母親は言い切った。

「あたしだってヒビク先輩が一番だよ！」

ヒカルも負けずに言い切る。

「好みが似てるのよね～、親子だから...」

と言う母親に、

「それにしてもあなたのだんな様はあんななんだよね～」

ヒカルは和室のこたつで口を開けて寝ている父親を指さしてうんざりといったため息を吐いた。

「ヒビクさんもそのうちああなるのよ」

母は自分の旦那を見つめ、やれやれといったため息をつく。

「絶対にならないっ！やだ、もうっ！」

ヒカルはそう叫んで和室の襖をおもいきり勢いよく閉めた。

一九九四年 元旦――。ヒカルが外出の仕度をして外に出ると、隣の家からちょうど颯土が出てきた。

「群竹くん、あけましておめでとう！」

元気に新年の第一声を颯土に放つヒカルとは対照的に、颯土はまだ眠そうな顔と声で、
「おお...」

と、応えた。それでも、ちゃんと外出の仕度をして出てきているということは...、
「これからあかねちゃんとおでかけ？」

ヒカルの問いに、颯土はまた面倒くさそうに、ああ...とだけ応える。

「じゃ、駅まで一緒に行こう」

ああ...、と言いながら大きなあくびをする颯土の横でヒカルは跳ねるようにして歩く。何を話しても、ああ、とか、おお、としか言わずにだるそうにチンタラ歩く颯土は盆も正月も普段の朝と変わらない。

「新年早々、もっとしゃっきりしなよ！」

ヒカルが喝を入れると、

「新年早々、もっとしとやかにしろよ...」

颯土はうざったそうに言い返す。だが、互いに言い合ってから、新年早々くだらない言い争いをするのはやめよう、と目と目で会話をして気を取り直した。

「今年は羽根つきはやらないのか？去年は凄い顔見せてもらえたけどなあ」

「うん。毎年お正月って暇でしょうがないんだけど、今年の元旦は中川くんのおかげで退屈なくてすみそうだよ」

と、ヒカル。

「...亮のおかげ？」

颯土は怪訝な顔で聞き返した。

「誘ってもらってこれから中川くんと湯島に行くの」

「亮と...？」

颯土の目が一気に覚めた。

「群竹くんも誘う？って聞いたんだけど、あかねちゃんに行くだろうからって」

「ああ。俺たちもこれから湯島に行く予定...」

「じゃあ、向こうで会えたら一緒におしるこでも食べに行こうよ、ね？」

駅に到着し、あかねを迎えに行く颯土と真っ直ぐ上野方面へ向かうヒカルは上り下りのホームに分かれることになった。ホームへ続く階段をパタパタと駆け上がっていくヒカルの後姿を見送る颯土は、どこか釈然としない顔だ。

――亮のヤツ、浅倉直かよ...。

別にヒカルの保護者ではないし、知り合いになった亮太とヒカルが自分を介さずに約束することと問題がある訳ではないのに、心がざわざわして仕方がない。

――俺には、関係ないこと。

そう意識してざわつく心を静めたとき、ホームに電車が入ってくる音がして、颯土も慌てて階段を駆け上った。

亮太と無事に会えたヒカルは、そのまま湯島天神に向かった。颯土たちがいるかもしれないということと、会えたら一緒におしるこ食べようと言ったことを亮太に話しながら参道の入り口まで来たが....、

「うわ...！すごい人だね～！はぐれたら二度と巡りあえなさそう...」

参道をあますところなく埋めつくす人の波にヒカルは圧倒された。これでは颯土とあかねがいたところで会える確率はゼロに等しい。

「うん。はぐれないように気をつけないと...」

と、亮太。

「手をつなぐしかない？」

ヒカルは亮太の顔を見上げた。

「手をつないでても気がいたら全然別の人の手を握ってたってこともあるからなあ...」

と、亮太も考え込む。

「じゃあ、はぐれちゃった時の待ち合わせ場所を決めておこうよ！」

「...そうだ！絶対にはぐれない、いい方法を思いついた！」

亮太は手を鳴らして言った。

「ヒカルちゃん、俺の前に正面を向いて立って」

ヒカルは言われた通りに亮太の前に立った。亮太は後ろからヒカルを包むようにして自分の両手をヒカルの前で組んだ。

「そんでヒカルちゃんは俺の腕を持つ。これなら俺からはヒカルちゃんが見えてるから絶対にはぐれないよ」

「いいけど、これじゃ中川くん歩きづらくない？素直にあたしが中川くんの腕に、離さないようにしがみついて歩いた方が良くない？」

亮太は赤くなった。それはもちろんヒカルの言う通りなのだが、それを言うのはあまりにも魂胆見え見えという感じがして言えなかったのだ。

「それはそうだね...」

「こうでいい？」

ヒカルは亮太の左腕に自分の両腕を絡ませてしがみついた。

「はい、上等です」

「じゃ、出発しましょう！」

二人はやっと人づくめの参道に足を踏み入れたのだった。

◇

湯島駅から湯島天神に続く道は初詣の人の波ができていた。流れに沿って歩かないと押し潰されそうなほどの人だ。あかねは颯土の腕にぎゅっとしがみつき、

「はぐれたら二度と会えなさそう...」

颯土を見上げて笑う。入り口の鳥居をくぐり参道に入ると、どこから溢れたのかその人の数は数倍に増えたようだ。ほんの数十メートル先の参拝所までたどり着くのに何時間もかかりそうだ。颯土は首を伸ばして辺りを見回し、ヒカルと亮太の姿を探してみたがこの人の中では会えないだろう。

――あいつら、どうやってこの人ごみの中を歩いてるんだ？

颯土は自分の腕にしっかりと絡まっているあかねの手を見下ろした。

――俺には関係ないけど...。

そうとは分かっているけどやっぱりどこかがざわざわと騒ぐ。このざわついた心の中を神様に見られたら集中しろ！と、怒られそうだ。だが、気になって仕方がない。

――何でこんなに気になるんだ？

相手が響ならきっとこんなにざわついたりはしなかっただろう。ヒカルの隣に響がいるのは当たり前だと認められる。なのに、亮太だとこんなにも心が騒ぐ。幼馴染だからなのか、それともまだ自分は子どもの頃のことに拘っているのか、あるいは――。

頭の中で思考を巡らしていた颯土は、腕に感じていた感触がなくなっていることに気がついて隣を見た。

「あかね...?!」

ずっと自分の腕につかまりながら一緒に歩いていたはずのあかねがいない。その場に立ち止まって辺りを見回してみたが、人の波に押されて留まっていられない。

「あかね！」

颯土は後方を向いて叫んだ。

「群竹くん...っ！」

ずっと後ろの方であかねが呼ぶ声が聞こえた。流れる人の波に逆流して颯土は参道に戻るがあかねの姿は見えない。見えるのは人の頭ばかりだ。

――いつはぐれたんだ...？

まったく気がつかなかった。気がつかないままひとりで歩いていた自分をイメージして颯土は愕然とした。

「あかね！どこだ?!」

「ここ...！」

人々の頭の中からはよきと伸びた白い手の場所まで颯土は人を押しのけて歩き、ようやくその手を捕まえた。

「ああ...、よかった...！もう会えないかと思った...」

あかねは颯土のブルゾンに顔をくっつけて泣きたいのを必死にこらえているようだった。

「どうして手を離したんだ？」

「足を踏まれて靴が脱げちゃったの...。すぐに呼んだけど群竹くん聴こえなかったみたいで...」

あかねの白いタイツの先が薄黒く汚れていた。自分がぼんやりと余計なことを考えている間にあかねはタイツを汚し痛い思いをして必死に自分を呼んで心細かったに違いない、と、颯土の良

心はキリキリと痛んだ。

「...ごめん」

声が掠れた。

「しょうがないよ。この人だもん...。でも私、何だか人に酔っちゃった...」

「ああ。俺もだ...」

「神様に頼らなくても...自分たちが頑張れば大丈夫だよな...？」

あかねは遙か彼方の参拝所を見つめながら言った。この位置からなら出口に逆行した方が随分近い。

「...そうだな。神様に頼るのはやめようか」

「うん...」

颯土はあかねの手をしっかりと握り締め逆行を開始した。人々の冷たい視線も気にせずに。

——元旦早々最低だな、俺.....。

握った手に思わず力が入る。

「...群竹くん、手痛いよ？」

あかねが言った。だが、颯土はもう二度とあかねとはぐれないように、あかねを離さないようにますます強く握り締めた。

◇

絵馬に志望校の名前と自分の名前をしっかりと書いて合格をよくよくお願いすると、ヒカルと亮太は再び同じ参道を戻り始めた。

「本当言うと、俺、こーゆー神様ってあんまり信じてないんだよね〜。学問の神様って言ったってもともとは生きていた人間で大昔の貴族様だったわけじゃん。なんかうそっぽいよな〜」

亮太は歩きながら無遠慮に言う。

「ちょっと中川くん、まだ参道の途中でそんなこと言って、もしも神様に聞こえたら大変だよ！」

ヒカルはあたふたしながら言い返した。亮太はアハハ、と笑って、

「そうだよな。マズイよな！神様今のはうそですから！」

と、言い直す。

「とりあえず今はどんな神様にもお願いしとかなないと、俺本当にヤバイから...」

「それって全然フォローになってないと思う...」

ヒカルは笑った。実際、亮太は進路相談の教師からY大合格はかなり厳しいだろうと言われていた。だが、どうしてもヒカルと同じキャンパスに行きたいため、勧められる別の大学の推薦を蹴ってY大に入ることに今、全力を尽くしているのだ。

「俺、がんばるよ。絶対Y大に合格してみせる」

亮太はヒカルを見つめた。

「ヒカルちゃんは本当にY短大に行くんだろ？」

「うん」

「じゃ、ヒカルちゃんもがんばれな。同じキャンパス歩こうぜ」

「うん。同じ所を目指している仲間がいると心強いね」

やっと人であふれる参道を抜け出した。

「結局、群竹くんたちとは会えなかったね」

「この人だもんね。仕方ないよ」

「みんなでおしるこ食べたかったのに...」

ヒカルはフーッと息をついて亮太の腕にからませていた自分の両手をほどいた。そのヒカルの右手を亮太は力強く掴んだ。

「俺がY大に合格できたら俺とつきあって欲しい」

「え...？」

あまりにも突然の交際の申し込みに、ヒカルは驚いて言葉が出なくなった。

「返事は今すぐじゃなくてもいいよ。大学に入ったら今と同じことをもう一度言うからその時でいい」

「そんな、私は...」

ヒカルの心は決まっている。亮太と付き合うことなんて出来ない。

「風間って奴のことは颯から聞いている。颯にはヒカルちゃんには友達以上を求めても無駄だ、って言われた。それでも俺は自分の心に正直でいたいんだ」

ヒカルは亮太の真っすぐに自分を見つめる目を見た。

「私も自分の気持ちに正直でいたい。私はヒビク先輩以外の男の子のことを考えることはできない。だから春まで待っても答えは同じだよ」

亮太は微笑んだ。ヒカルがそう言うのは最初から分かっていた。

「だから俺は待つよ。ヒカルちゃんが俺を見てくれるまでいつまでも待つ」

「そんなの困るっ」

ヒカルは言い切った。

「わかった。今の話はとりあえず忘れてもらっていいよ。俺の勝手な想いだから。けど勝手ついでに言わせてもらうけど、俺、あきらめないから。君が好きだから」

こんなにもストレートに想いをぶつけてくる亮太に、ヒカルは妙な快感を覚えていた。気持ちよすぎるくらいに爽やかな快感。それは亮太に好きだと言われたことに対してではなく、竹を剣で斬るように潔い亮太の性格に好感を持ったからだ。

「中川くんの気持ちはわかった。でも私の気持ちもわかって。私はヒビク先輩が好き。中川くんのことは好きだけど恋愛感情は全然ない。これからも絶対ないから」

「はっきり言うよな～。でも、そのほうが気分いいか！」

亮太はやや困ったように笑った。

「とにかくお互い受験をがんばろう。この話の続きはそれからだな」

「だから...、続きはないから...」

「俺はいつまでもコンティニューなの」

「もう...」

ヒカルはあきれた。

自分の気持ちをヒカルにストレートに伝え、まったくストレートにふられた亮太。そして亮太に好きだと告白され、その気持ちを受け止められなかったヒカル。それでもその心は晴れやかに爽やかだった。

——こんなこともあるんだな。

亮太はヒカルを見て笑う。

——こんなこともあるんだね。

ヒカルも亮太を見て笑った。

「合格祈願も終わったしこのまま別れる？それとも映画でも行く？」

「元旦だもん、受験生だって少しは骨休みをしたってバチはあたらないと思うよ？」

「よし、決まり！」

亮太はヒカルの前を歩きだす。ヒカルはそんな亮太の清々しい背中を快活に追いかけた。まるで、昔からの友達の背中を追いかけるように——。

颯土からはじまった入試も一番最後の勇斗で終了し、合格発表も順次行われにぎやか組全員の進路が確定した。入試日の勇斗は直前までのバイト生活がたたったのか大熱を出しての受験だった。気合と根性で試験にのぞみ、翌日からの一週間は合格発表の日まで寝込んでいた。インフルエンザだったらしい。ぼーとした頭で受けた試験に自信などあるはずがない。病み上がりで祐輔に付き添ってもらい、M大構内に発表を見に行った日はどうしても自分で結果を見ることが出来なかった。だが、

「この一年のお前の結果だよ！しっかり自分の目で見ろよ！これからひとりでたくましく生きていかなきゃならないんだぜっ！」

と、祐輔に背中を押され、

「...え？ひとりでたくましく生きてくってことは...？」

おそるおそる顔を上げたところに、

「...あったよお。オイラの番号...っ！」

思わず祐輔に抱きついて男泣きした勇斗だった。

来週はとうとう卒業式。寒さもいつの間にか和らぎ梅の花が満開に咲いた三月の初め、にぎやか組が集まったのは颯土の部屋。今日は高校生最後のクラス会といったところだ。

「初めてここにみんなで押しかけてきた日の群竹、怒ってたよなあ...」

あかねを隣にしてにこやかに微笑んでいる颯土を見つめていた祐輔がしみじみとつぶやいた。

「あの頃は何を言ってもニコリともしなかったくせに、今じゃ毎日らぶらぶモードだからなあ」

受験が終わったあとの颯土とあかねは今までも増していつもくっついた状態だ。来月から神戸と東京の遠距離恋愛が始まるふたりだから一緒にいる時間はもう、ふたりの間に入っていけないほどの甘い雰囲気醸し出している。それが、みんながいる前だろうがなんだろうがお構いなしなものだから、当てられる方としては文句のひとつも言いたくなるのも仕方がない。麻耶などは、

「はい、そこ、くっつきすぎっ！」

「はいはい、ラブラブぶりはわかったから、あとでふたりでゆ〜っくりやってちょうだい！」

「もう、いいかげんにして〜！」

と、突っ込んでばかりだ。

「仲がいいってことはいいことだよ。あかねちゃんは今のうちにう〜んと群竹くんにごえちゃいなね？」

と、ヒカル。

「...うん」

ヒカルの言葉に背中を押されてかどうか、あかねは遠慮なく颯土にピタッとくっつく。とうとう離れ離れになってしまうその日を目前にして今は寂しくて仕方がない。だから、みんながいようが何だろうが颯土に触っていたいのだ。あかねにくっつかれている颯土は、自分は確かベタベタするのが苦手だったはずなんだよなあ...と思いながらもすっかりベタベタしているここ最近の

現実に思いきり首を傾げ、苦笑いで誤魔化すしかない。

「あかねちゃんと群竹くんの遠距離恋愛もそうだけど、大久保くんはこれからどうするの？」

受験に成功した勇斗はこれから勘当される運命にあるわけで、手放しで喜んでもいられない状態だ。

「昼間のバイトはもう決まってるんだ。問題は住むところ。安くてオバケの出ないアパートをこれから探さなきゃ…。タイムリミットは今月一杯だから！」

と、勇斗は笑った。

「まあ…、適当に助けてあげるから何かあったら言ってよね…」

麻耶はさり気なく言葉をかける。多少勇斗を見直したところもあるし、芸術鑑賞会後の勇斗が放った、「オイラのお嫁さんになってよ！」発言をどこかで気にしているようだ。だが、

「ありがとう、麻耶ちゃん！やっぱオイラの…」

調子に乗って先を続けようとする勇斗の口の前に手をかざした麻耶は、

「その先を言ったら斬るっ！」

と、その手をナナメに振り下ろした。

「斬るってさあ…麻耶ちゃあん…」

父の日本刀がかすった右まゆを押さえながら祐輔に抱きついて嘆く勇斗にくすっと笑うあかね。

いつもいつも一緒にいたわけじゃないが、集まった時に流れるのは絶対的な信頼の風。この仲間たちの誰もが自分の味方だし自分もみんなの味方だ。

ヒカル、颯土、あかね、麻耶、祐輔、勇斗。あのときも、あのときも、あのときも傍で支えてくれた仲間たち――。

「さあ！じゃあ、恒例の夢語りと行きますか！」

叫んだのはヒカルだ。

「一年の終わりに初めてここで言い合ったよね？そして去年進路について語り合って今ひとつの結果が出た。これからあたしたちどうする？どんな未来を目指す？はい、群竹くんからどうぞ！」

ヒカルはいきなり颯土に振った。

「俺からっ？！」

「そ！いつも群竹くんの発言が一番最後だったけど、夢の為に自分で行動したのは一番最初だったでしょ？あれからみんなきっとそれぞれ自分の未来を考えたと思う。みんなのキッカケは群竹くんだよ！だから最初にどうぞ！」

うーん…、と颯土はうなった。ごくごく自然に歩いてきた結果が今現在というだけだ。だが、そうやって自然に歩いて来られたのはたぶん……、と、颯土はみんなを見回した。

「…自分の写真が撮りたい。今言えるのはそれだけ」

颯土はぼそっと呟いた。

「何となく感じてるものがあるんだ。でもそれが何だかわからない。一瞬…っていうか瞬間…っていうか…。それが何だか知りたいって思うし」

「自分探し...みたいなもんか？」

と、祐輔。

「大げさだけどそんな感じ」

颯土は照れくさそうに笑った。時々感じる何かの符合。それが何なのか突き詰めてみたいと思う颯土だ。

「じゃ、次は浅倉だ」

颯土に指名されたヒカルは、コホン、と咳払いをひとつして、

「優しい先生」

と、笑った。

「ヒカルちゃんならそのままで大丈夫だよ」

あかねが言うと、

「優しいにも色々あるでしょ？私、まだ本当の優しさがどんなものかってわからない。けど、群竹くんが言ったみたいに一瞬とか瞬間の何かを感じられる自分になりたい。そんな自分で未来は子どもたちに接したいな...」

「それも自分探しみたいなもんだな？」

と、再び祐輔。

「うん！まずは自分。今、やっと見えてきた夢に手を抜かないで真っ直ぐ歩いて行きたいな！」

「手を抜かないで...か」

と、颯土は呟いた。

「うん！これはヒビク先輩に教えてもらったこと」

「そうだな。風間先輩は手抜きをしないで真っ直ぐ夢に向かって飛び立ったもんな」

祐輔の言葉にヒカルをはじめ、みんなは頷いた。

「私の夢はいつか優しい幼稚園の先生になること！そのために今を精一杯頑張ります」

「ヒカルちゃんらしいっ！」

麻耶が手を叩いた。

「今を精一杯やるっていいね！あたしもそれ真似しよう！」

「オイラは今を生きてくことが精一杯な来月からかもしれないけど...！」

と言う勇斗に、みんなはそれぞれ激励を飛ばす。

「群竹...」

祐輔が颯土の目の前に右手を出した。颯土はきょとんと祐輔を見たが、やがてニヤリと笑ってその手を握り返した。颯土の手が放れた後の祐輔の手は、ヒカル、あかね、麻耶、勇斗と次々と仲間たちの温もりを染み込ませた。それに習い、みんなが同じように手を出し合いひとつひとつ握り合い温もりを染み込ませる。

——今を精一杯！

これを合言葉に、仲間たちの笑顔と温もりをしっかりと心に刻んで歩いていこう——。いつまでもにぎやか組はにぎやか組のままで。

一九九四年三月十五日。粉雪が舞っていた一年前の卒業式とは違い、澄み渡る青空が広がった。

式が始まる前の最後の三年C組で最後のホームルーム。礼装に身を包んだ担任の千田先生が慈しむような眼差しで教室の生徒たちを見回し、いつものようにのんびりとした口調で話し始めた。

「ではみなさん。これから最後の成績表を配ります。その前にちょっとだけみなさんに話しておきましょう。いいですか？」

生徒たちは沈黙したまま頷いた。

「この成績表では一から十までの数字であなたたちを評価しています。私は本来人を評価したりすることはあまり好きじゃないんですよ。でも先生ですから仕方なくやってます」

千田先生はおちゃめに笑った。

「先に生まれたから先生です。先に生まれたんであなたたちより少しだけ色々なことを知っているから教えているだけです。なのに一とか十とかで人を評価するのはどうもねえ～」

千田先生は教壇にある一番上の成績表を開き、「...うーん」と、笑った。出席番号一番の会田という名の男子がバツ悪そうにして頭をかいた。

「いや、素晴らしいですよ。数字の後ろにある会田くんの人柄が見えますからね」

と、千田先生は優しい眼差しを向ける。

「私が思うに、大切なのは目に見えてないところにある人間そのものです。数字はそのひとつの目安に過ぎません。これに拘るばかりでは本来の目的を見失ってしまうこともあります。あなたたちの高校生活は成績表の数字を上げるためだけではなかったはずですから」

千田先生はちょうど目が合った真ん中の席のヒカルを見て微笑んだ。

「三年間の高校生活が終わって、十六才だったあなたたちは十八才になりました。今十六才だった頃の自分たちに会えたとしたらきっと愛しく思うんじゃないでしょうかね？」

千田先生は何気なく颯土に目を向けた。

「これが本当の意味で評価する成績表です。あなたたちよりも後に生まれた人たちに人としての何かを教えてあげられるような一年一年をこれからも積み重ねて欲しいと思います」

ヒカルはそっと振り返り、一番後ろの席にいる颯土を見た。颯土もヒカルを見ていた。

「それでは...」

千田先生はひとりひとりの名を呼びながら自らその生徒の席まで歩き成績表を手渡した。生徒たちは先生の手から伝わる温かな想いも一緒に受け取った。

「それでは、そろそろ式が始まります。このままみなさんは速やかに体育館前に移動してください」

「...群竹くん」

廊下に出る前にヒカルは颯土に呟いた。何かを言いたいのだが、その言葉が見つからない。ただ颯土の目を見つめて笑うことしか出来なかった。

「浅倉…」

颯土も同じ。言葉は出てこないがヒカル目は真っ直ぐに見つめ返すことができる。クラスメートたちは次々と廊下に出て整列をしている。教室に残っているのはヒカルと颯土だけだった。

「…いよいよだね！行こう？」

ヒカルが言った。

「ああ、行くか」

颯土はヒカルの前を歩き出す。堂々と姿勢を正して。

最後に三年C組を出る時、ヒカルはもう一度教室を振り返り見回した。

——もしも今、十六才だったあたしたちに会えたら…、無愛想だった群竹くん、頼りなかったあかねちゃん、そして、何でもがむしゃらに突っ走っていた私。麻耶ちゃん、伊藤くん、大久保くん…、みんな、みんな、愛しくて抱きしめてあげたいくらいだよ——。

そして、本城高校卒業証書授与式——。最前列に着席している卒業生たちは、A組から順に一人一人名前を呼ばれ壇上で卒業証書を受け取る。

◇

「水沢あかね！」「はい！」

壇上に上がる時は、風のない体育館で長い髪がヒラヒラ泳ぐぐらいに颯爽と歩いて行こうとあかねは決めていた。

——胸を張って、上を見上げて。

入学した頃は毎日が不安で仕方がなかった。ホームルーム合宿の実行委員をやることになってしまった時は、学校に来るだけで一日の全部のエネルギーを使い切ってしまうぐらい気を張って緊張していた。自分に自信がなくて人に嫌われたくなくて泣き虫の自分が情けなくて、消えてしまいたいって思った時もあったけれど…、

——涙が出てくるのは悪いことじゃないよ。あかねちゃんの心だもん。

いつも向日葵のように笑っているヒカルのような女の子になりたいって思ったことが、少しだけ自分を拓くキッカケになった。一緒に演劇部と軽音楽部を掛け持ちして、大きな声を出して演劇をやってバンドをやってそして、

——本気で恋をした。

時々不安にもなるけれど、泣きたくなることもあるけれどほんの少しは強くなれたと思う。

——だから、みんなありがとう。とっても素敵な高校生活だったよ。

◇

「結野麻耶！」「はい！」

キビキビとした足取りで麻耶は壇上に上がる。

——とうとうこの日が来ちゃったかぁ。

浮かんでくるのはやっぱりぎやか組のみんなの顔だ。昼休みに机をくっつけて実行委員の話し合いをしていた頃は、自分が出来ることをサクサクやっていればいいと思っていたけれど、

——どんな小さなことでも、ひとつひとつ真剣に大事に取り組んで高校生活を楽しみたい。

真っ直ぐに言い切ったヒカルの言葉が心の奥に届いていくのを感じた。それまで真剣に取り組んできたのは剣道だけだったけれど...

――あれからの私は、けっこうヒカルちゃんのあの言葉を指針にしてきたんだよ。

部活も学校の行事も、そして恋も――。出来上がったパッチワークのタペストリーはまだ渡せていないけれど...

――結野麻耶、これからも恋に剣道に心を込めて頑張りますっ。

サッパリと卒業証書を受け取り、麻耶はサバサバと壇上を下りた。

◇

B組の授与が終わり、今、C組の卒業生がひとりずつ壇上に上がっている。ヒカルは前の列に座っている颯土の背中を見つめた。三年前の入学式の日はこの同じ会場で、何度名前を呼ばれても返事がなかった「ムラタケソウジ」。千田先生が諦めて次の生徒の呼名に移ろうとしたとき、後方の入り口から髪に寝癖をつけたままタラタラと入場してきた度胸に感動すら覚えた。

家がお隣さんだと分かったのは入学して三日が経った頃だった。無愛想で性格が悪いムラタケソウジと仲良くなってやろうと、最初は半分意地になってもいたけれど、いつの間にか自然に「仲良くなろうぜ祭り」が「仲良し祭り」に変わっていった。今は幼馴染の証明を部屋に刻めるほどに――。

傷ついて泣きじゃくったあの日、不器用に慰めて抱きしめてくれた。重い荷物を半分持ってくれたあの日から、親友になれた気がする。四月から向かいの窓の明かりは消えたままになってしまふのは寂しいけれど...

「おめでとう、群竹くん...」

ヒカルは颯土の背中に向かってそっと呟いた。

◇

「群竹颯土！」「はい！」

凛々しく立ち上がった颯土が壇上に上がる。今日は寝癖もついていない。

――今、十六才のころの自分に会ったらどうするかな...

ただ家に近いから、という理由だけで来た本城高校だった。適当に勉強して部活をやって毎日が過ぎて行けばそれでいいと思っていた。友達とか仲間とか、その言葉を聞くだけでさえもうざったくて、自分に近寄ってくるもの全てに対して拒否反応を起こしていた三年前の自分が、今もしも目の前に現われたら――。

放っておいて欲しいのに放っておいてくれなかった仲間たち。ホームルーム合宿、体育祭、文化祭...、どういうわけか一緒に行動させられた。誰も自分に気を使わない。ヒカルはいつも自分のペースでうるさく話しかけてきたし、勇斗はいつもまとわりついてきたし、麻耶はギクリとする突っ込みを入れてきたし、祐輔はさり気なく手を取ってくれた。そして戸惑いを隠せないでいる自分にいつも優しい微笑みを向けていたのがあかねだ。

だが、自分以外の誰かや何かに依存し仲間に囲まれ馴れ合うのがイヤだった。いつかはこいつらに裏切られる、こいつらは離れていく、と最初から決め付けていたから。もしも、そんな自分と今ここで会えたら言ってやりたい。

——こいつらは絶対にお前を裏切ったりしないぜ。

一度だって、裏切られたことはなかった。誰からも——。離れるどころかずっと…。

——大切なものをたくさん手の中に入れた、俺の高校時代…。

背筋を伸ばし堂々と礼をして颯土は卒業証書を受け取った。そして自分の席に戻る時に、じっと自分を見つめて笑っているヒカルと目が合った。

図々しくてでしゃばりでおせっかいでうるさい奴——。ヒカルの最初の印象はこうだった。一番苦手で一番関わりたくないタイプの人間だった。だが、気がつくといつの間にか変わっていた。いつ変わったのかどこで変わったのか分からない。本当にいつの間にか、だ。ひとつだけ確実に言えることは、もしもヒカルに出会えていなかったら今の自分はないだろうということ。

「サンキュー、浅倉…」

颯土はそっとつぶやいていた。

◇

「浅倉ヒカル！」「はい！」

ヒカルはゆっくりと踏みしめるように壇上までの道を歩いていく。

——いろんなことがあったね…。

ホームルーム合宿から始まったにぎやか組。ウォークラリーと「なにわロミオとジュリエット」。演劇部と軽音楽部のコラボレーション。夏の合宿、そして…、

——ヒビク先輩…。

人形劇をやったことで見えた自分の夢。響がいたから頑張れたたくさんのことたち。どんなときも味方でいてくれた仲間たち。どんなときもみんなの味方でいようと思っていた自分。高校での三年間は毎日がキラキラ輝く宝石だった。今、そのひとつひとつがちゃんと見えてくる。傷ついたことも泣いたこともあったけれど、それ以上に笑っていた輝かしい日々——。

——みんな、ありがとう。

そして、

——ヒビク先輩、私も卒業するよ…。もう、先輩と共有した思い出の学校にはいられなくなるけれど、これからもずっと信じているから。

ヒカルはにっこり笑って卒業証書を手にした。

◇

「大久保勇斗！」「はい」

あ、返事の仕方間違えた、と頭をかきながら勇斗は壇上へ躍り出た。

——楽しかったなあ。本城高校！

勇斗の頭の中には、今それしかなかった。うるさがる颯土にまとわりついてしたのは、たぶん自分と同じように心のトラウマを隠そうとしているのが分かったからだ。放って置けないとも思っていたけれどそれだけじゃない。

——冷たい目の中に時々見せる頼りなさがオイラに響いちゃったんだよね。

女の子が大好きでふらふらしてるヘラ男だと皆には思われているけれど、勇斗はそれでよいと思っている。でも…、

――麻耶ちゃん、オイラのお嫁さんになってよ！って言ったあの気持ちは嘘じゃない。

これからの生活を思うと途方にくれてしまうけれど、この気持ちがあれば頑張れる。こんな出会いと仲間をくれて、

「ありがとうっ！本城高校っ！」

勇斗は思わず口に出して証書をくれる校長先生に言っていた。

◇

「伊藤祐輔！」「はい！」

祐輔は大きな歩幅で颯爽と歩き出した。

ほとんど、剣道一筋の高校生活だった。

――結野に勝ちたい…。それだけを目指にして。

最初から目標は麻耶だった。同じクラスで同じ剣道部。しかも自分は男だというのに一度も勝てないことが悔しくてならなかった。最初は女子に負け通しは悔しい、ただそれだけだったけれど、いつからか…。

稽古して稽古して稽古して…、そしてやっと勝てたのは二年の合宿の時だ。これでよし！と思ったのもつかの間…、

――大久保め…。

あんなふうに必要な前で告白されてしまったらどうすることも出来ない。ちょっとせつないけれど、今はこれでいい。

――浅倉、群竹、結野、水沢、そして大久保。出会いと思い出をサンキュー。

いろいろなことがあった。うれしいことも悲しいこともたくさん経験した。そして、かけがえのない財産を手に入れた。

仲間――。

今、それぞれの未来に向かって翼を広げて巣立って行く。

◇

『仰げばとおとし』が終わり、在校生の拍手に送られる。あかねは涙を流し、麻耶は涙をこらえ、勇斗は鼻をこすり、祐輔は照れ臭そうに微笑み、颯土はまっすぐ前を向き、そしてヒカルは晴れやかな笑顔で退場した。

会場の出口でヒカルたちは次々と出て来る仲間たちを待っていた。あかねはまだしくしくと泣いていた。卒業の感動もあるが、それよりもやっぱり颯土との別れが寂しいからだ。

「あかね…」

そんなあかねの気持ちを知ってか知らずか、颯土はあかねをそっと腕の中に包んで柔らかな髪を撫でた。もうあかねの涙に対してどうしたらいいのかわからずに、泣くなよ！と言っていたころの颯土ではない。

「うう…、当てられるけどいい光景…」

そんなふたりを見て、麻耶も式の間ずっとがまんしていた涙がポロリとこぼれ落ちた。そこへ、

「じゃあ、オイラがっ！」

勇斗が飛んできて颯土を真似ようとして、
「触ったら殴る！」

麻耶におもいきり突き飛ばされた勇斗は、
「ううう…。ゆうちゃあああんっ」

最後に会場から退場してきた祐輔に抱きつき、祐輔はよしよし、と勇斗のツンツン頭を撫でた。

「みんなそろったから写真撮ろう！群竹くん、お願い！」

ヒカルの号令に皆がうなづいた。

「どこで撮る？」

祐輔が辺りを見回した。会場の入り口の『卒業証書授与式会場』とある花輪の前も、校門の前の『本城高校卒業証書授与式』という看板の前も記念撮影の卒業生たちで混んでいる。

「校庭の真ん中がいい！」

ヒカルが校庭を指さした。

「じゃあ、校舎をバックにして撮る？」

という祐輔に、

「いや、あの梅の木をバックにしよう」

颯土が一本の幹から枝が大きく広がり、そこに薄いピンクの花を満開に咲かせている校庭の隅の梅の木を指さした。

「あれ？」

麻耶と祐輔は顔を見合わせた。颯土はニヤリと笑った。

「あの幹の前に並んでこの辺りからシャッターを切れば、広がった枝が俺たちの背中で翼を広げたような格好になる」

「なるほど…、さすがカメラマン！」

感心したのは祐輔だ。

「オイラたち、今日からそれぞれの翼を広げて飛び立つんだもんな～」

「じゃあ、みんなそこに並べよ」

颯土が指をさした場所に一同はパタパタと移動した。その間に颯土はカメラに三脚を取り付けて位置を決め、ファインダーをのぞいてアングルを確認する。

「あかねの横に俺入るからあけといってくれよな」

颯土があかねの隣のスペースを指差すと、

「そんなの言われなくても分かってるよ～」

ヒカルが言い返した。麻耶を真ん中にして祐輔と勇斗が左右に並び、颯土を真ん中にしてヒカルとあかねが左右に並ぶ。六人が横に一行に並んだその後ろに薄ピンクの翼が広がるように颯土はアングルを決めた。

「左右の伊藤とあかねは真ん中の大久保と浅倉を中心にして少し弧を描くように前に出てみてくれないか？」

祐輔とあかねは言われた通りに前に出た。だが、ファインダーから覗いたみんなの顔は卒業式の直後だからなのか少し硬い。勇斗は変にすましているし、祐輔は生真面目に口を結んでいるし、あかねと麻耶も緊張気味で、いつもと変わらない笑顔でレンズを見ているのはヒカルだけだ。

――せっかく背中に翼を広げてるっていうのにこれじゃ飛び立っても失速しそうだなぁ…。

それでも、笑って笑ってというお決まりの台詞なんか言いたくない。そんな言葉で無理に作った笑顔はこいつらには似合わない。カメラには三枚連続撮影機能がついている。今まで一度も使ったことのないその機能だが、この時の為にあったんだなと颯土はニヤリ。

「オッケー！バッチリ翼が広がったぜ！じゃ、撮るからな！」

颯土はカメラをオートシャッターにセットして自分の場所に駆け込んだ。数秒してカシャッという音。皆がホッと気を緩めた瞬間にもう一度カシャッとシャッターの切れる音。

「へ？何で？」

皆がそれぞれ疑問の表情とポーズをとった時にまたシャッターの切れる音。

「連撮シャッターだ。一枚目はみんな緊張してるだろ？二枚目の写真がきっと自然な表情が出てと思うぜ。そして三枚目はまぬけな顔かな」

「それもカメラマンの知恵か…」

祐輔がまた感心する。

「私、三枚目の写真はぜったいやだーっ！バカみたいに口開けちゃったもん！」

あかねが颯土に抗議した。現像した写真を一番最初に颯土に見られるのは恥ずかしすぎる。

「いいじゃないの。口開けてても鼻膨らませててもさ、思い出だよ思い出」

勇斗がじたばたしているあかねをなだめた。

「オイラの三枚目なんてきつともっとひどい顔してるぜ？」

「ほんと、そうだよ。泣いてる顔も怒った顔も笑っているものぜーんぶ思い出だよ！あたしたち、みんなで最高の思い出作ってきたよね！」

ヒカルが笑うと、

「そうだな！最高だったな！」

颯土が応え、その後皆が大きくなづいた。

「でも、今日が終わりじゃないんだぜ。まだまだこれからだって僕たちの未来は続いていくんだ」

祐輔は先を見据えて冷静だ。

「そうだね！でも、今はここでみんなにありがとうって言いたい！」

麻耶がひとりひとりの顔を見回した。

「そしてみんなにおめでとうも！」

あかねも皆の顔を見て笑う。

「うわ～！青春ドラマみたいだ！」

勇斗はぴょんと飛び上がった。

「それも最高にクサイ青春ドラマだ…」

颯土はカメラを手にして苦笑い。

「クサクたって何だって、これが私たちなんだから、いいの！」

ヒカルはもちろん満面の笑顔だ。

「じゃあ、みんなで思いっきりクサ～～く言っちゃおうよ、ね？」

にぎやか組は校庭の真ん中でまあるく円陣を組んだ。ヒカルが両手を青空に向けて大きく伸ばすと、颯土があかねが麻耶が祐輔が勇斗が同じように手を広げ、校庭の真ん中に快活な青春花が咲いた。

「いくよ～！せ～の！」

みんな、思い出をありがとう！

未来への旅立ち、おめでとう！

『きみにとどくまで～V i v a c e』完

『きみにとどくまで～D o l c e』につづく

東京は梅雨に入り、蒸し暑い日々が続く六月の終わリー。

ポストを開くと、響宛てに一通のエアメールが届いていた。まだ母も帰宅していないリビングで、学生鞆をソファの上に投げたまま響は封を開く。差出人は父のジャックだった。

親愛なる息子へ

手紙とともうれしかった。キミもユリも元気そうでなによりだ。

さて、私の夏の全米ツアーが八月六日のボストンから始まる。キミがこのツアーに参加してみたいというのなら、キミに与える仕事はある。私の方はいつでも歓迎するからユリとも相談して決めたまえ。また連絡を待っている。

父より

簡単な内容ではあったが、響が欲しかった答えはこの中に全てあった。

ーーよしっ！

思わず右手を握り締めた響だ。

ジャック・ベリーのツアーに参加してみたい。ジャックの側で、ジャックが弾くピアノを感じたい。そう、夢を見始めたのは三月にジャックの来日コンサートを聴いたあとだった。ピアノに対する想い入れは昔から自分でも不思議なくらいに持っていた。それを自分自身が素直に受け入れられずに心の奥底に無理やり沈めてきたが...

ーー今、本物のピアノを知りたい。

自分でもどうすることも出来ないくらい、ふつふつと沸いてくる`何か、が憧れを越えたものになった時、想いのままを手紙にしてジャックに宛てた響だ。

ーー考えているだけじゃ何も始まらない。自分で見て聴いて肌で感じたいんだ...。今はただそれだけーー。

◇

「ジャックから手紙が来た」

夕食が済んで母が珈琲をいれてくれた時、響はわざとさり気なく言った。

「あら？何だって？」

母もさり気なく聞き返す。

「夏のツアーに参加させてくれるって」

「響を？」

「ああ」

「ふーん。よかったじゃない？」

こういう時は、深刻になって根掘り葉掘り訊いて来ない母の性格をありがたいと思う。

「...だから、行ってくるから」

少し照れくさそうに響が言うと、うんわかった。頑張ってね、と、母はあっさり承諾した。

——サンキュ、おふくろ…。

言葉に出すのは照れくさいから心の中で呟き、響は笑った。

「あ、そうだ！響～、あの曲弾いてくれないかなあ～？」

母は突然思い立ったように、両手をパチンと叩いた。

「あの…曲？」

「ジャックの曲」

「…ああ、あの曲か…」

響はソファから立ち上がりピアノを開けた。

「でも、ジャックのように…弾けないぜ？」

「そんなのわかってるよ」

母はくすくす笑う。

「…あっそ」

ポロン、と鍵盤を撫でてから響は、昔父が母を想って作曲した甘いメロディーを奏ではじめた。そして、弾きながら思う。

遠く離れて互いの人生を生きている父と母が、長い年月を経た今も大切にしているふたりのメロディー。このひとつひとつの音符をジャックはどんな想いで繋いだのだろう。どんな想いを込めて弾いたのだろう。

——おふくろのために…。

ジャックのメロディーはジャックの想い。自分もいつか、想いをメロディーに繋ぐことが出来るのだろうか。

——あいつのために…。

「…やっぱりいい曲～」

演奏を終えた後、母はうっとりとしたように言った。

「響が弾く『スイート・ラブ』もなかなかよかったよ？」

「…なかなか、ね…」

響は少し不服そうに苦笑した。

「だって、響はまだまだちゃーんと恋してないでしょ～？」

「えっ!？」

母の発言に、ピアノを閉めようとしていた響はギクリとして固まった。

「ちゃーんにとって…」

「だって、彼女いないでしょ？」

サラリという母にカーッと赤くなる響。

「お、俺、シャワー浴びてくる…っ!」

響はさっさとピアノをしまい、そのままバスルームに飛び込んだ。

「青いなあ～響くん」

と、母が茶化す声を背中で受け止める響だ。

——…まったく、何ておふくろだよ…。確かに彼女はいないけど…、俺だってせつない恋してん

だぜ...？

今はこれが精一杯。でも、いつかきっと...。

――とにかく歩き始めなければ。

今年はきっと長い夏になるだろう。すぐそこまで来ている夏に想いを馳せ、胸の高鳴りを抑え切れない響だった。

放課後の音楽室――。今年度、新しく軽音楽部に入部した一年生は全部で十一人。あかねは部長の大任を響から引継いだため、二年生たったひとりで十一人の新入部員をまとめようとしている。だが、去年までの派手なバンド活動と違い、今年の軽音楽部はほのぼのと活動していきたいと考えているあかねの想いは新入生たちにはなかなか伝わらないでいた。

ヒカルや田村たちと楽しく部活動をやっていた去年が恋しくて、部活だけじゃなく新しいクラスにもなかなか馴染めなくて、毎日が憂鬱で仕方ない。だが、ヒカルは部員二名の演劇部を一から盛り立てなくてはならないのに弱音なんてひとつも吐いていない。いつも前向きに新しいことを考えながら笑顔を忘れないでいる。

――私もヒカルちゃんみたいになりたいよ....。

新学期からどうもナーバスになっているあかねだ。ちょっとしたことで悲観してせつなさのどん底に沈んでしまう。部活にとっても、ヒカルや麻耶や、そして颯土にとっても、自分は必要とされていない人間なんだと、考えなくてもいいことを考えて何もかもが寂しくて仕方がない。

――やだ！こんな自分！

あかねは気分を変えに、一年生を残したままそっと音楽室を出た。部長のそんな行動にも一年生たちは無頓着。全然気がついてない様子だ。ドアの前でしばらく佇み、また深いため息をひとつ吐いてからあかねはそのまま演劇部の部室がある部舎に向かった。ヒカルからパワーをもらおう。ヒカルの笑顔を見たらきっと元気が出るから.....。

「おお、あかね！」

渡り廊下に出ようとしたところで声をかけてきたのは田村だった。

「元気ないなあ？肩が下がってるぜ？」

――う....。

明るい田村の顔を見た途端涙が込み上げてきた。それをグッと下に沈めるためにあかねは深呼吸をしてから、

「元気ですよ？」

と、笑顔を作った。だが、

「部活の方はどうだ？新入生たちはおとなしく言うこと聞くか？最近は俺たちも全然顔出してないし心配してたんだ」

あまりにも優しい田村の声と言葉に、せっかく沈めた涙がまた溢れ、無理してこらえようとしたら、

「ふ...ふええん...っ！」

と、変な嗚咽が漏れてしまった。

「お、おいっ！？」

焦ったのは田村だ。

「す、すみません...っ！何でもないです！」

あかねはそれ以上の感情を必死に抑えて言った。

「.....あかねえ？かなり無理してるなあ？」

田村があかねの歪んだ顔を覗き込む。そんな田村の優しい目を見たらそれでもう限界。とうとうあかねは顔を覆って泣き出した。

◇

「...まったく、一人で我慢してないで相談してくりゃよかっただろ？」

中庭のベンチに腰掛け、購買部で買った珈琲牛乳をあかねに差し出しながら田村が言った。

「だって...、もう三年生は忙しいかと思ったし...」

ぐすん、と鼻をすすりながらあかねは呟く。

「そりゃ暇ってわけでもないけど部活のことは俺たちだって関係ないわけじゃないんだからさ」

「ひとりで頑張れると思ってたんです。ヒカルちゃんだってたったひとりで頑張ってるし、私だってって...」

「...気持ちはわかるけどさ、ヒカルとあかねじゃ中身が違ುದろ？無理すんじゃねえよ」

う...、とあかねはまた詰まる。

「あとでヒビクとも相談してみるよ。とりあえず俺たちで今後の方向を決めておこうぜ？」

「はい。ありがとうございます！」

やっと本当の笑顔に戻ったあかねを見て、田村も安心したように笑った。

——田村先輩って優しいな...。こんなふうに、群竹くんともいつも色々なことを相談し合えたらいいのに...。

「田村先輩は好きな人いますか？」

田村からもらった珈琲牛乳をただぼんやりと見つめながらあかねは言った。

「...な？！なんで？」

「田村先輩の彼女になる人ってきっと幸せだろうな、と思って」

「そうかなあ...？」

田村は複雑な表情を隠せないでポリポリと頭をかきながら上を見上げる。

「そうですよ」

「...しかしこれが非モテなんだなあ.....」

そうなんですかと、あかねは笑った。

「...好きな子はいるよ。その子は俺のことなんかまったく眼中にないけどな」

と、田村。

「ええ？ほんとに？」

「ああ。彼氏(なのか?)いるし...ね」

田村は自分の珈琲牛乳の蓋を指でクイッと下に押して器用にあけた。そして、なかなか上手くあけられず、丸い蓋の縁だけがどんどんめくれていくあかねの瓶を取り上げ、同じようにクイッとやってあかねに戻した。あかねは、すみません...、と小さくなってから、

「なんか意外です。田村先輩がそんなにせつない恋をしてるなんて...」

と、呟いた。

「好きな人に見てもらえないってせつないですよ〜」

田村はうつむくあかねを見つめ、ニヤッと笑ったあとに、
「その子が幸せならボクは幸せなのさあ〜」

と、冗談交じりに言う。

「先輩優しすぎ…。でも、田村先輩に見守ってもらっているその人は幸せですね」

田村はあかねのおでこをちょん、とつついた。

「…いいこと言うな、あかね。何か救われた感じだぜ？」

「え…？そうですか？」

「おお！」

と、田村は笑う。

「…私も田村先輩を見習おう」

――群竹くんの気持ちがどこにあっても私はずっと…。

「…部活も頑張ります」

「そうか」

田村は空を見上げて大きく息を吸い込んだ。

「さーて！じゃあ今後の軽音楽部のことは俺たちにまかせておけよ。あかねはあかねらしくしていればいいんだぜ？あんまり肩に力を入れないで、そのままでな」

「…はい！頑張れるような気がしてきました！先輩、ありがとう」

「どういたしまして！問題があったらどんな細かいことでも相談に来いよ？」

田村もベンチから立ち上がった。

「じゃ、昇降口でヒビクたちが待ってっから行くぜ？」

「…え？！そうだったんですか？すみませんっ！」

あかねもスクッと立ち上がった。

「なーに、いいって！奴らよりあかねの方が大事！」

冗談とも本気ともとれるような言葉を残し、田村は手を上げて中庭から出て行った。

――やっぱり田村先輩って優しい…。優しすぎるよ…。先輩の片想い、実って欲しいな――。

田村があけてくれた珈琲牛乳はまだ口をつけないまま手の中にあった。それをゴクッと飲み干してから、あかねは音楽室に戻って行った。

本城高校の体育祭は、一年から三年の各クラスを縦に割ってA組からF組で成績を競う。そして、体育祭と言えば断然張り切るのが三年E組松山太郎、三年B組松山次郎、二年E組大久保勇斗、そして二年C組浅倉ヒカルだ。

「大久保！女子たちにいいところ見せようなっ！」

松山太郎が同じクラスカラーの勇斗の肩をポンと叩くと、

「がってん承知でい！！」

と、勇斗は気合を入れた。

「麻耶ちゃん、俺らも負けずに頑張るぞっ！」

B組のクラスカラー、グリーンの鉢巻を結び凜とたたずむ麻耶に張り切って声をかけたのは松山次郎だ。麻耶は、そうですね、と、答えつつ、

――何、張り切ってたか…。

と、心で呟いた。

「群竹くんっ！」

俺は関係ないぞ、な顔をしていた颯土はビクッと肩を震わせ呼ばれた方に顔を向けた。

「うちらも張り切って行くよ！優勝を狙うからねっ！」

黄色の鉢巻をしっかりと結んだヒカルが腰に手を当てて言い切った。

「…あ、ああ」

――やべーよ…。目が燃えてるよ…。

と、颯土は半ば慄く。

「あ～、あかね。まあ、適当に頑張ってみようぜ？」

運動音痴で体育祭を心の負担に感じているあかねを励ましたのは同じA組の田村だ。

「私は…みんなの足を引っ張っちゃうから…」

「大丈夫。その分俺が押してやるから」

――田村せんぱ～い…。

と、あかねは始まる前からうるうる。

「あの一、風間先輩たち…」

仲間たちの盛り上がりを一歩下がったところで見ている響と柏木に、祐輔が申し訳なさそうに声をかけた。

「みんなあーやって気合いれてるんで、一応僕たちもどうかな、と…」

どう見ても体育祭モードになっていない柏木に、人ごとのような眼差しで全体を眺めている響。

――去年はガラにもなく張りきっちゃったからな…。

元一Fにぎやか組たちと盛り上がり、クラス対抗リレーまで走った去年の体育祭を振り返って響は苦笑し、

「まあ…、適当に頑張るから心配すんなって、な！」

と、祐輔にウィンクを飛ばした。秋の晴天の下、本城高校体育祭の開会式が行われようとしている直前の面々たちだった。

そして――。

スタートラインで待つのは体育祭実行委員同士のヒカルと颯土がペアーを組んだ男女混合二人三脚のアンカー。先頭を走るのはE組のオレンジ。黄色のC組は二番手を走っていた。

「群竹くん、抜かすよっ！」

「おお」

「あんたのペースで走っていいからね。あたし、ちゃんと合わせるから」

「おお」

「じゃ、宜しくっ！」

ヒカルと颯土は身体を寄せ合い互いの腰に手を回して足踏みをならしてスタンバイ体勢に入った。

――う～、群竹くんったらあんなにヒカルちゃんにくっついてる…。

と、あかねはやきもき。

――群竹え、変なところ触るんじゃねえぞ…。

と、響も密かにやきもき。

黄色のタスキを受け取ってヒカル&颯土ペアーがスタートした。いち、に、いち、に、と声を掛け合いながら、五メートルほど先を走るオレンジを追うふたりだ。颯土はヒカルをグッと寄せてなるべくふたりの間に隙間が空かないようにしてから走るピッチを上げた。

――いやーん。そんなにくっつかないでよお～。

と、あかねはハラハラ。

――転んで離れろ～。

と、響。

「浅倉、大丈夫かっ！？」

「全然オッケー！」

「んじゃ、もっと上げるぞ」

「了解っ！！」

ピタッと呼吸の合ったふたりのペースはどんどん上がって行き、追われるオレンジは一瞬息が乱れてペース落とした。

「チャンスッ！」

ヒカルと颯土は同時に叫んで一気にオレンジを追い抜いた。そして、そのままゴール。

「お疲れーっ！」

と、ハイタッチのヒカルと颯土。

――あいつらいつの間にあんなに息が合うようになったんだよ…。

トラックの外から黄色のハチマキのふたりを見つめ、響は密かに慄然とした。

◇

「…群竹くんと同じクラスがよかった」

昼休みのランチタイムであかねはポツリと呟いた。今日は久しぶりに元一Fにぎやか組が揃って梅の木の下でお弁当を広げている。

「え？あかねちゃん何か言った？」

ヒカルがサンドイッチをくわえながら言うと、
「なんでもなーい」

やや不機嫌にあかねは答えた。
「けど、さっきの二人三脚は燃えたねえ？ヒカルちゃんたち凄かったよ」
と、麻耶。
「あったり前だよ、群竹くん？」

「あ...まあな...」
あかねの刺すような視線を気にしながら、颯土は曖昧に答えるしかなかった。
――そんなに睨むなって...。しょうがないだろ？競技なんだからさあ...。
――そんなことわかってますよお～だ。
と、目で会話をしている颯土とあかねだ。

クラス対抗応援合戦の後、午後の競技は借り物競争、クラブ対抗リレー、クラス対抗リレーがあり閉会式だ。ヒカルはクラス対抗リレーまで出番はないし、あかねはもう出番はないし、忙しいのはやっぱり颯土ですべての競技に出なければならない。

――俺、随分活躍してるよな、今年...。
去年に比べて密度の濃い体育祭を颯土はしみじみと感じている。それもこれも全部ヒカルのせい。体育祭の実行委員を決める時も、「中央委員だしね～」のひとことだった。
――ま、お祭り好きのあいつと同じクラスになっちまったのが運のツキだよな...。
もう半分は諦め、そして半分は楽しんでいる。
「さーて、午後も頑張ろう～っ！」

ヒカルがハチマキをキュッと結び直しながら言った。

◇

午後の競技、借り物競争。選手の中には響や柏木もいる。スタートしてから途中で並べられている封を開き、中に書かれているものをギャラリーから借りてゴールする、という半分はお遊びの競技だが得点には反映される。封を開いた颯土は、

――げっ！
一瞬固まった。そしてそのあと、ギャラリーを見回しヒカルの姿を探すけどどこにも見当たらない。

――あいつ、こんな時にどこに行きやがった？！
封の中の紙に書かれていた `借り物、は...、
「浅倉ヒカルッ！」

颯土はギャラリーに向かって叫ぶ。
――何でヒカルちゃんなの？！
と、またあかね。

――何であいつがヒカルを呼ぶんだ！？

と、またまた密かに響。

「浅倉ヒカルッ！」

声を出しながらギャラリーの中を探し回り、やっと見つけた借り物は呑気に田村と話込んでいた。

「おい、ヒカル、呼んでるぜ？」

田村に言われてヒカルが振り向くと、同時に颯土に手を引かれた。

「`浅倉ヒカル、借りるからなっ！」

「あたしー？！なんでー？」

「知るかっ！ここに浅倉ヒカルを借りて来いって書いてあんだよっ！」

手を繋いでトラックを走る颯土とヒカル。

――またヒカルちゃんとお～！

と、ベソをかくあかね。

――...ったく...っ。

と、密かに舌打ちする自分の隣で、

「もしかしたら、大島雪乃っていうのもあるかもしれないね？」

無邪気に言う柏木を思わずキッと睨みつける響。

――まあ、しょうがねえよな...。けど、今年はつまんねえ体育祭だぜ...

響はため息を吐きながら仕方なくスタートラインに立った。ピストルが鳴り封筒までだらだらと走る。ちょうど真ん中にあったものを適当につかみのんびりと封を開けると。

――ん！？

響はとっさにギャラリーの中にヒカルの姿を探した。

「ヒカルッ！」

大声で叫んだ時、

「はい！？」

間髪をいれずに返事が返って来た。ギャラリーの一番前にいたヒカルの手を取り響は走り出す。ヒカルの黄色いハチマキが風になびいた。

「また、`浅倉ヒカル、が借り物ですか？」

走りながらヒカルは響を見上げて言った。

「...いや」

響はそのままヒカルを連れてゴールに飛び込んだ。係に紙を差し出すと、係は、え...？と紙とヒカルを見比べ、

「あの...」

と、困った顔をする。

「いいだろ？ここにちゃんとまいてるし」

響はヒカルの頭をくしゃっと撫でながら言った。

「ヒビク先輩、なんて書いてあったんですか？」

「ん？黄色いハチマキって…」

――けど、ハチマキだけじゃつまないだろ？

響はヒカルを見てニカッと笑った。ヒカルも嬉しそうににんまりと笑った。

C組は晴れて優勝。ヒカルと颯土は敢闘賞に仲良く選ばれふたり並んで賞状と記念品をもらった。

――最後までヒカルちゃんと一緒に…。

と、あかね。

――群竹え…っ。

響は密かに唸った。

稲穂祭——。たった一日のこの日のために、生徒たちは何ヶ月も前からアトラクションの計画を立て準備に奔走する学校行事中のビックイベント。各学年クラスは、学習関係に重点を置いた研究発表やエンターテイメントを狙った活劇やゲーム関係、そして模擬店などのアトラクションにそれぞれの教室を変身させるわけだが、実行委員に立つ人間がお祭り好き盛り上げ好きか否かによって中身には若干の差があるようだ。

お祭り好きと言えば三年E組松山太郎、二年E組大久保勇斗、そして2年C組浅倉ヒカル。松山太郎と勇斗は実行委員ではないが、3E2Eそれぞれの模擬店の呼び込み隊長として盛り上げ隊に徹している。そしてヒカルはもちろん実行委員。もうこれは一年しょっぱなのホームルーム合宿以来のお約束だ。

——お祭りといえば実行委員。実行委員といえば浅倉ヒカル、って決まりだよなあ…。

と、呑気に腹の中で思っていた颯土は、いつもそこにいつの間にか巻き込まれている自分、という構図に気がついていなかった。中央委員だしねえ～、のひとことで今回もヒカルのお伴になって初めて、あれ？と首をかしげたようだ。それだけでなく、2年C組のアトラクションは、[本城高校が誇る写真家群竹颯土（ピクチャーライフ大賞受賞賞金10万円獲得!）が撮る!]

というキャッチコピー付きの、『ときめき写真館』。お客は普段あまり着られないような衣装をまとい、模造紙に描いた背景の前でカメラマンの颯土にポラロイド撮影をしてもらえる。出来上がった写真は可愛い手作りのフォトフレームにセットしてもらえる、という夢のようなアトラクション、というわけだ。

「本城高校が誇る写真家、っていうのはやめてくれないか!？」

と、訴えてはみたものの、もちろん却下。そして、『ときめき写真館』は大繁盛している、というわけだ。クラスメートたちのコネをつたい集めた衣装は十点。長ラン、セーラー服、ひらひらのエプロンドレス、チャイナ服、意味不明なピカピカ服、男女サンタクロース、近衛兵、忍者、そしてウェディングドレス。お客は女子が中心で、ウェディングドレスやチャイナ服が人気だが、たまにノリノリの男子たちが近衛兵や忍者に化けにやって来た。

「ヒカルちゃん、麻耶ちゃん連れて来た!」

と、麻耶の腕を引っ張って来たのは勇斗だ。

「あら、悪いねえ～、クラス違うのに客集めしてもらっちゃって!」

「気にしない気にしない!オイラ今フリータイムだし」

勇斗は麻耶を衣装たちの前に連れて行き、

「ここから好きな選んだってさ!これなんていいと思うんだけどねえ～」

と、ウェディングドレスを手にした。麻耶は真っ白なドレスをじっと見つめた。柔らかなレース仕立てで腰からふわっと膨らんだ女の子の憧れの形。

「ブーケもあるからね～」

と、ヒカルが声をかける。

——すっごく着てみたいけど…群竹くんが撮ってもらうんじゃ何だかこっぴどかしいしなあ…

。

「じゃあ...こんなの着てみようかなあ」

麻耶が手にしたのは長ランだった。

「えええ〜、麻耶ちゃん.....」

――麻耶ちゃんのウェディングドレスが見たかったから連れて来たのにさあ....。

と、勇斗はガックリ。麻耶が着替えをしている間にさっさと自分のクラスに帰って行った。

そのあと、松山太郎と柏木が覗きにやって来た。

「先輩たち！一枚どうです？」

ヒカルに勧められて、

「んじゃ一枚撮ってもらえるかな〜」

と、太郎たちは衣装を選ぶ。

――あっ！憧れの...！！

柏木が手にしたのは長ランだ。

「柏木先輩っぽくないな、それ...」

ヒカルは首を傾げた。

「あ...うん。俺中学もブレザーでさ、学ランって着た事ないんだよね。だからこんな記念写真もいいだろ？」

「そうだったんですかあ。じゃあ、どうぞ！群竹くんが素敵に撮ってくれますよ！」

そして、松山太郎が選んだ衣装は――。

「タロ先輩...、それ絶対に危ないです...」

「こーゆー時ぐらいしか堂々と着れないじゃん！」

「こーゆー時も堂々と着ないでください...！」

セーラー服に着替えた太郎が桜並木を描いた背景の前に立った。

――変態....。

ファインダーから見える絵があまりにも汚なかったので颯土はさっさと撮影し、

「次の人！」

と、叫んだ。

◇

ずっと撮影しっぱなしの颯土に少しの休憩、ということでときめき写真館は三十分のクローズ。ヒカルは模擬店で買ってきたみそおでんを颯土に渡した。

「サンキュー」

「そういえばあかねちゃん来ないね？あっちはまだ終わらないのかな？」

二年A組のアトラクションは活劇と音楽コンサートで、舞台は学校に隣接している公民館だ。

「そろそろ来るんじゃないかな...」

と、颯土は腕時計を見る。そんな颯土の仕草を見て、

――ちゃんとあかねちゃんのスケジュールを把握してるんだね。

ヒカルは笑った。

――ヒビク先輩は…。来てくれないよね、きっと…。

響の三年F組のアトラクションはホラーハウス。さっき柏木から聞いた話によれば、響の役目は柏木とダブルキャストでドラキュラ伯爵らしい。見てみたい気もするが、あまり自分から響の元に行くのも考えるところだった。今までだったら、例えば柏木から聞かなくてもちゃんと響から直接情報が届いていたはずなのに、今はもう以前のような交流がほとんどない。

――仕方ないことだけど…。

「…ん？」

急に黙り込んだヒカルに颯土は首を傾げた。

「え？あ～、あかねちゃんはきっと、ウェディングドレス着るだろうね。群竹くん、可愛く撮ってあげるんだよ？」

と、ヒカルは思い直したように言って笑った。

「あ…、ああ…」

颯土はやや赤面して苦笑した。

◇

あかねは田村と一緒にやって来た。公民館で一緒だったらしい。

「二Cはまた随分面白いことやってるなあ…」

「でも群竹くんはここから出られないね…」

「あ、大丈夫だよ。あとでまた少しクローズするからふたりで文化祭見てきなよ」

あかねの気持ちを察したヒカルはそう言って笑った。

――あ、ヒカルちゃん…。

あかねはヒカルの想いを察した。ヒカルだって本当はきっと…。

いったいこんな衣装たちをどこから集めて来たんだよ、と言いながら衣装を眺めていた田村が

、

「で、あかねはどれを着るんだ？あかねの忍者ってのも面白そうだなあ？」

と、忍者の衣装を手にして笑った。

「いやだあ、田村先輩！私は…、」

あかねは衣装たちを次々に見ていき、

「やっぱりこれ！」

と、手にしたのはウェディングドレス。ヒカルは颯土を見てにんまりと笑い、颯土はうつむいて鼻の頭をポリポリとかく。

――群竹くんのための衣装、か…。

田村はため息をついて笑った。

ウェディングドレスに着替えたあかねがチャペルの背景を背にしてブーケを持った。

「あかねちゃん、可愛い～！」

と、ヒカルが手を叩く。その様子を廊下から眺めていたのは響だ。

――ときめき写真館か…。面白いこと考えたな。

「へえ～。私もあれ着て写真撮ってもらおうかなあ～。風間くんと並んで！」

傍らの雪乃が言った。

「...撮るなら行ってこいよ。俺はこーゆーの好きじゃないから...」

と、響。

「浅倉さんが頑張ってるのに好きじゃないなんて、その言い方は冷たいんじゃない？」

雪乃はさりげなく言う。

「.....」

群竹くん、一番素敵なあかねちゃんを撮ってよ～、というヒカル声を聞きながら、響はそのまま廊下を歩き出した。

「風間くん？」

「もうすぐ出番だし、さ...」

——今までだったら...、きっとあの場でヒカルを盛り上げてただろうな...。でも今は、『ときめき写真館』は遠いぜ.....。

◇

結局颯土の次の休憩が取れたのは、もう文化祭も終わりに近づいた頃だった。外は薄暗くなり、本城高校生以外の来訪者たちはほとんどいなくなっていた。颯土とあかねは校内を一通り巡って歩いた。勇斗や松山太郎の模擬店はもう売るものも尽きて片付けをやっていたし、客のいない教室とまだ盛り上がっている教室と極端な差があった。

その中でも特に客が集まっていたのは三Fのホラーハウスだ。

「怖くて素敵なモンスターたちがあなたの生き血を欲しがってるよお～。カップルにはもってこいのホラーハウス！ささ、どうぞ入った入った～！」

と、呼び込み隊長が颯土とあかねを入り口の方に押した。

「入ってみる？」

と、颯土が訊くと、

「...うん」

あかねは颯土の腕をぎゅっと掴んで頷く。ホラーハウスの中は真っ暗で足元にかすかな明かりがあるだけだった。迷路のように入り組んだ道をゆっくりと歩きながら進んで行く間にゾンビやフランケンやらのモンスターが飛び出してきて、そのたびにあかねは大きな悲鳴をあげ颯土にしがみつく。

——こいつ...マジで怖がってるし....。

颯土にしてみればまったくの子どもだましな脅かしなのに、あかねはぶるぶると震え歩く足もおぼつかない。ふらふらのあかねを支えるようにして歩き、少し広い場所に出たところに棺のようなものが横たわっていた。

「中からオバケなんて出てこないよね...」

あかねが震える声で言った時、棺の蓋がゆっくりと開き.....、

「そなたの生き血を我に...！」

と、あかねに襲い掛かったドラキュラ伯爵。きゃあああ！！と、あかねはドラキュラを振り払って颯土の陰に隠れた。だがすぐにそれが響だとわかったようだ。

「風間先輩...！」

「あ？」

尖った牙のドラキュラ伯爵が間抜けな声を出した。

「なんだ。お前たちだったのか...。随分怖がってくれちゃって、ドラキュラ冥利に尽きるぜ！」

「だって...ぞくぞくするぐらいに怖かった...」

「適役だろ？」

響ドラキュラはニッと牙を出して笑った。そこ、世間話してるなよ、と注意され、あかねと颯土はドラキュラ伯爵に別れを告げて先に進んだ。

「風間先輩のドラキュラ...カッコよかったね」

ホラーハウスを出たあかねが言った。

「...まあな」

「ヒカルちゃんにも見せてあげたいな...」

と、あかねはもう一度三Fを振り返った。窓の外はもう、すっかり暮れていた。

◇

「楽しんでこられた？」

二Cに戻ると、もう待っている客もいないようでときめき写真館もそろそろ閉店の空気が流れていた。

「うん。もうほとんどが終わっちゃってたけどね」

「うちもそろそろ閉店！」

「ヒカルちゃんは写真撮ってもらったの？」

「撮ってもらってないよ？それどころじゃなかったもん」

そう言いながら、ヒカルはてきぱきと衣装を片付ける。

「せっかくなんだから撮ってもらいなよ？もうお客さんも来ないみたいだし。ね、群竹くん？」

――別に何だっていいけど...。

と、颯土は半ばくたびれモード。

「そっか。せっかく名カメラマンがいるんだもんね！じゃ、撮ってもらっちゃおう～！」

と、ヒカルは片付け途中の衣装をもう一度引っ張り出した。

「チャイナ服っていうのもいっぺん着てみたいし、あ、でも近衛兵もかっこいいなあ」

ぶつぶつ言いながらヒカルは衣装を吟味する。

「でも、やっぱり私もこれかな！」

ガバッと開いたのはウエディングドレス。

「あかねちゃんが着たの可愛かったし。ちょっと着替えてくるね～！」

元気に更衣室に飛び込んだヒカルがしばらくしてまた元気に出てきた。

「どう？似合う～？」

――馬子にも衣装...、ってやつかも...。

颯土は心の中で呟いた。

「やだヒカルちゃん...。似合いすぎてから涙が出てきちゃったよ...」

あかねは涙ぐんだ目をこすりながら言った。

「やだあかねちゃん！本当に泣いてるし...！」

あかねがそっと颯土を見ると、颯土は微かに頷いた。

「ヒカルちゃん、ちょっとそのまま待っててね？すぐに戻って来るから！」

「え？何処に行くの？」

「ちょっとね！」

あかねが向かったのはもちろん三年F組。ちょうどホラーハウスも終了したところで、ドラキュラ伯爵の衣装を着たまの響が廊下で柏木と喋っていた。

「風間先輩！」

「おお、あかね？どうした？」

「ちょっと私と一緒に来てください！」

あかねは響の腕を取る。

「え？んじゃ、着替えてくるから...」

「そのままだいいんです！素敵な花嫁さんが待ってますからっ！」

「...は？」

わけがわからないまま、響はあかねに連れられて.....、

「ヒカル...？」

「ヒビク先輩...！？」

二年C組の教室でウエディングドレスを着たヒカルに会い響はボーゼンとした。

——素敵な花嫁...。確かにな。

「んじゃ、ときめき写真館最後の写真を撮りますから...」

と、颯土は見つめ合うヒカルと響を促した。

——あかねちゃん...！

ヒカルはあかねを振り返った。あかねはそこでにっこり笑っている。さっきまではしゃいでいたのに急におとなしくなってしまったヒカルだ。響が隣にいるというだけで足が震えている。

——ドレスで隠されてよかった...。

チャペルの背景の前にドラキュラ伯爵と花嫁は並んで立つ。だが——。

「その背景はいらない...な」

颯土が指示を出し、背景は取り除かれた。

——純白の花嫁と漆黒のドラキュラ伯爵...。ふたりがいれば背景なんてなくていい。

ファインダーを覗いて見る絵は去年の文化祭で見た `絵、と同じ輝き。

——これだよな。

「...ドラキュラと花嫁だったら...、やっぱポーズは...！」

響はヒカルをひょいと抱き上げた。その瞬間、シャッターを切った颯土だ。そして続けてもう一枚。ふわりと舞ったドレスの花嫁とドラキュラ伯爵、その後見つめ合うふたりの絵が出来上がった。

「...ヒカルはどっちがいい？」

二枚を見比べて響が言った。

「うーん…。どっちも捨てがたいけど…、」

ヒカルが手にしたのは二枚目の方。

「じゃ、俺はこっちのハリウッド風をもらうかな！」

響はいつものようにニカッと笑う。

――あかねちゃん、群竹くんありがとう！

ヒカルと響はそれぞれ手にした写真を見つめながら、

――最高のときめき写真館。

と、心の中で呟いた。

ついこの間まで部舎前の花壇ではコスモスが儚く揺れていた。空手部のランニングを見守るにはちょうどいい場所がここで、いつもあかねは花壇の前にしゃがみこんで颯土を待っている。

そして、少し離れた向こうに立ち並ぶのは一年生の女子たち。目当ての先輩が格技場に入ってしまったら見学は出来ないの、ランニングをしているわずかな時間だけがその勇姿を見るチャンスだからだ。

彼女たちの目当ての先輩はたったひとりー。

刺さるような視線を感じる方向にあかねが顔を向けると、五人の一年生たちがじっと自分を睨んでいた。

――怖いなあ…。

あかねはサッとうつむいた。もうずっと前から彼女たちのあの視線に耐えているのだ。

――群竹くんって下級生にすごく人気があるんだよね…。

きっと下級生たちは颯土の見かけしか知らないからだ、とあかねは思う。そしてもう一度下級生たちをチラリと見た。一年生たちは固まってなにやらヒソヒソと話をはじめた。

――どうせ、何で群竹先輩はあんなどんくさい水沢先輩なんかと付き合ってるんだろう？ぐらいなことを言ってるんでしょう…。

「体育祭で一緒に二人三脚やってた先輩の方が群竹先輩には合ってたよねえ？」

「うん。息もピッタリだったしね？」

「あの先輩、明るくて好感度抜群だよね？」

――う…。そうきたか…。

多少傷ついた。

――でも群竹くんの彼女は私なんだよ～。

あかねは心の中であっかんべーをした。それから自分で、今思ったこともやったこともヒカルっぽい、と思った。

「ホンジョーウ！ファイト、おーっ！ファイト、おーっ！」

先頭で勇斗が掛け声をかける空手部の白い集団が花壇の前を通過して行った。そして最後尾の颯土が通過していくとき、

「群竹先輩っ！」

一年生たちは控えめに手を振った。自分たちがここで見ているのよ、ということをさり気なくアピールしているつもりなのだろう。だが、こちらをまったく見向きもせず、ただ真っ直ぐ前を向いて走り去る颯土だ。

――ってというか、あなたたちになんて気がついてないのよ～。

へへん、と、あかねは心でにんまり。こういう時は颯土のああいう性格に感謝したい。でも、一年生たちだけじゃなく自分の前も見向きもせずに通過する颯土にはやや不満が残る。

――私まであの子たちと同じ扱いみたい…。

すると、涼しい顔をして走る颯土が急に憎たらしくなるあかねだった。

カサッと背後で音がしてあかねが振り返ると、花壇の中のもう花が落ちたコスモスの間で腰をかがめてる人がいた。

「柏木...先輩？」

ややギョッとしながらあかねは呟いた。時々よくわからないことをする柏木だ。こんな花壇の中で腰をかがめているなんて行動が怪しすぎる。

「やあ、あかねちゃん」

ひょいと背筋を伸ばして柏木は笑った。

「ずっとそこにいたんですか？」

「うん、いたよ」

——じゃあ、一年生たちのあの会話もそこで聞いてたってこと...ですね。

いったいこんなところで...

「...何をしてるんですか？」

「ああ、コスモスの種を取っているんだ。また来年まけるだろう？」

——え？コスモスの種を...？

よく見ると、柏木の手には透明なビニール袋があり、その中にたくさんの種があった。

「俺、美化委員だしさ」

「ひとりでですか？」

「あ、うん。急に思い立ったから」

この間まで綺麗に揺れていたコスモス。花がなくなった後は誰も見向きもしない花壇——。来年また花を咲かせるためにひとりで種を取る柏木に不思議な感動を覚えるあかねだった。

「私も手伝います」

「え？いいよ。あかねちゃんは群竹を待ってるんだろう？」

「いいんです。もうすぐに格技場に行っちゃうしその後はどうせ暇だから」

「そう？じゃあ頼むよ」

柏木は自分が持っていたビニール袋をあかねに渡した。そして、

「俺はあかねちゃんと群竹、すごく似合ってると思うよ？」

と、言った。あまりにもさり気なく言われたので、あかねは、

「...え？」

と、立ち尽くした。

「花が咲いてる時によく思ってたんだけど...、あ、ほらここは図書室からよく見えるからさ」

柏木はすぐ目の前の図書室の窓を指差した。

「揺れるコスモスがあかねちゃんて揺らしてる風が群竹」

——え？

あかねは目を真ん丸くして柏木を見た。

「コスモスの前でしゃがんでるあかねちゃんを見てて何となくそう思った。コスモスはゆらゆら揺れて美しいだろ？でも風がないと揺れないしね。あかねちゃんと群竹はそんな感じでよく似合ってるよ」

柏木の言葉は一年生たちにも届いたようだ。ポカンとした顔を柏木に向けている。

「...私、コスモスですか...？」

「そんな雰囲気でしょ、あかねちゃんは」

——うう....

あかねは感激のあまり涙ぐむ。

「あ、泣かないでね〜。俺、風間くんや田村くんみたいによしよしするのはちょっと照れるからさ」

と、柏木に言われ、あかねは涙をぐっと飲み込んだ。気がつくと、いつの間にか一年生たちがいなくなっていた。空手部はまだ走っているというのに——。

——群竹くんは風で私は風に揺れるコスモスかぁ...。何て詩的なことを言う先輩なんだろう...っ！

えへ、と笑い、あかねはまた種とりをはじめた。

——あかねのやつ...見てねえじゃん。

花壇の前を通過する時、柏木と楽しそうに話をしながら種を取るあかねをチラリと横目で見ると、颯土は心の中で呟いた。

「あかねちゃん、ごめん！今日一日群竹くん借りるね！」

ヒカルが拝むように両手を合わせて言った。今日は文化祭実行委員の反省会＆打ち上げがあり、いつも颯土が駅まで送っているあかねに先に帰ってもらわなくてはならないからだ。

「うん。じゃあ今日はひとりで帰るね」

あかねはヒカルと並ぶ颯土に向かって言った。

「ああ。転ぶなよな…」

——転ばないよ…。群竹くんったらいつまでも私のこと、一年の時のホームルーム合宿の印象なんだから…。

まるで信用されていないことに不満はあるが、心配してくれることには嬉しさもあり、あかねは笑って颯土に手を振った。

校門を出て駅への道をひとりで歩く。そう言えば、この道をひとりで帰るのは随分久しぶりだった。学校を出てしばらく行くと駅前まで商店街が続く約十分の道のりだ。

ふと前を見ると、茶髪に赤メッシュが輝いた見覚えのある姿勢のいい長身の後ろ姿がひとりで歩いていた。

——あ、田村先輩だ。

ひとりなんて珍しいな、とあかねは思った。声をかけようと小走りで近づこうとした時、田村は進路を変えて真横のお店に入っていった。

——ここって…。

一年ほど前に出来た新しいペットショップだ。あかねはたまに、飼っている熱帯魚のえさを買って帰る。

——田村先輩も何か飼ってるのかな？

ショーウィンドウにいる子犬があまりにも愛くるしく尻尾を振っているので思わず笑みがこぼれ、あかねも店の中に入った。

熱帯魚のえさを買い、会計を済ませた時に聞こえた、

「おーすっ！サスケ〜！」

という声がする方に顔を向けてみると、そこにしゃがみこんだ赤メッシュが見えた。田村はこちらには背中を向け、ショーケースの間から指を突っ込んで中できゃんきゃん吼えながらくるくる回って尻尾を振っているポメラニアンをかまっている。

——サスケ…？あのワンちゃんの名前サスケっていうのかな？

「まだいたかぁ！」

「きゃん！」

「俺に会えなくて寂しかったんだな？」

「きゃんきゃん！！」

「そうかそうか、可愛い奴め〜！」

「きゃんきゃんきゃん！！」

ひとりと一匹はずいぶん心が通じ合っているようだ。田村の言葉にサスケはちゃんと答えている。その、ひとりと一匹の間に入ってはいけないような気がして、あかねは少し離れたところから様子を見ていた。何となく、ずっと見ていたい気がした。

――田村先輩、サスケに会いにここに寄ってるのかな？

お店で売られている犬に、たぶん勝手に名前をつけて呼んでいる田村が可笑しかった。しかも、よく見るとショーケースの札にはメスと書いてある。

――きっと名前なんて何でもいいんだね。

と、あかねは笑った。

ずいぶん長い間田村はサスケと遊んでいた。それをじっと見ている自分もずいぶん長い間このペットショップにいる。

――あんなに仲良い`ふたり、だけど...、もしもサスケが誰かに買われちゃったらどうするんだろう...

あまりにも心を通わせ合っているようなふたりだから、つい余計な心配をしてしまう。今度田村がここに来た時にももしもサスケがいなくなっていたら...、と想像しただけで涙が出てきそうになった。

「んじゃ、帰るからな！また明日も無事にここにいろよ？」

と、田村が立ち上がるとサスケは、

「くうん...くうん...」

と、寂しそうに鳴いた。

「おい、サスケ～、そんな声出すんじゃねえって...」

とてつもなく優しい声で言い、田村がもう一度しゃがみ直してケースの間から指を入れると、サスケは名残惜しそうに田村の指をぺろぺろ舐めている。そして、また田村が立ち上がると鳴く。田村はしゃがむ...。その繰り返しが何度かあった。

――田村先輩って.....。

泣きたいような、笑いたいような光景――。

茶髪に赤いメッシュを入れて、バンドの時はノリノリでギターを弾いて、響や松山双子たちの中では一番落ち着いてる先輩だが、商店街のペットショップにいる仔犬と仲良しで、帰るに帰れなくて立ったり座ったり...。

――.....可愛いな。

「じゃ、本当に帰るぜ～」

田村が思い切ったように立ち上がりこちらに歩いて来たので、あかねは慌ててペットショップを出た。外は陽が落ちて薄暗くなっていた。何となく田村に会うのが恥ずかしくて、夕方の商店街をせわしなく急ぎ足で歩く人々の間を縫いあかねは駅に急ぐ。だが、後ろを気にしながら歩いていたのがいけなかった。前から来た恰幅のいいおばさんに思い切り体当たりしてしまい、跳ね返されたあかねは派手に尻餅をついた。

「あらあら、ちゃんと前を向いて歩かないと...」

おばさんは忙しそうに歩いて行ってしまった。

――あたしってやっぱりどんくさいかも…。

だから颯土に転ぶなよなんて言われるのだ。はぁ…、とため息をひとつ吐いて立ち上がろうとしたとき、腕を引っ張ってくれたのは…、

「――田村先輩っ！」

「…あかね、何やってんだ？」

顔が赤くなっていくのが自分でわかり、あかねは思わずうつむいた。

――何で私が恥ずかしがってるのよ…！！

と、自分でもわけがわからない。

「大丈夫か？」

「は、はい…」

おい、サスケ～、そんな声出すんじゃないって…。

さっきの"サスケ"との別れ際、立ったり座ったりの光景が浮かび上がってくる。だが、今、目の前にいる田村はいつもと変らない頼りになる先輩だ。

「群竹は？」

田村は辺りを見回した。

「今日は実行委員の反省会で…」

「ひとりか？それにしちゃずいぶん遅くねえ？」

ドキッ。

「ちょ、ちょっと商店街をふらふらしてたから…」

「ふーん…。ま、俺もずいぶんふらふらしてたけど」

――うん、見てた…。

あかねは思わずくすっと笑った。

「…ん？」

「いえ。何でもありません…」

田村は疑わしそうな目をしてあかねを見、あかねの手にあるペットショップの袋を見てギョッとしたようだ。

「………あぁ～」

と、目を空に泳がせて頭をポリポリかく。あかねはハッと気がついて慌てて袋を鞆の中にしまった。

「あ…、あかね？制服にほこりがついてるぜ？」

転んだときについたブレザーの背中の埃を田村がパンパンとはたいてくれた。

「ありがとうございます…」

「…じゃ、帰ろうぜ」

と、田村は前を歩き出した。

――サスケが田村先輩を好きな気持ちがわかるなぁ…。田村先輩に飼ってもらえたら幸せなのにね…。

あかねはペットショップを振り返った。

――アカネってつけてなくてセーフだったぜ…。

あかねの前をゆっくり歩きながら、田村は茜色の空を見上げほんと胸を撫で下ろしていた。

11月22日は本城高校の開校記念日。この貴重な休日を有効に使いたいというあかねから、「ディズニーランドに行かない？」

と、誘われたのは一週間前の帰り道だった。

「ディズニーランド……？」

ミッキーマウスやくまのプーさんの着ぐるみが陽気に歩いているあのテーマパークか？と、颯土はそのラブリーな世界を想像しただけで赤面した。

「…俺はディズニーランドってキャラじゃねえし…、映画とかじゃダメ？」

どう考えても自分がそのラブリーワールドを歩く姿をイメージできない颯土だ。

「ダメ。群竹くんと遊園地に行った事ないし…、卒業までにいろんな思い出を作りたいの。だって卒業したら群竹くんは神戸に行っちゃうんだもん…」

しゅん、とうつむいたあかねの様子に心のどこかがチクチク痛み、

「そうだな」

と、OKをした颯土だった。

がー。

入場ゲートをくぐった途端に広がったドリーミーでラブリーでワンダーな世界にしばし呆然となった颯土だ。耳につく軽快な音楽と焼き菓子のような甘い匂い。信じられないようなコスプレで歩く一般の人たち。大人から子供まで笑顔、笑顔、笑顔ー。

ー遊園地ってこんななのか……。

小学校三年生の時以来、遊園地と名のつくところに来たことがなかった颯土は自分がひとり、この夢の世界から浮いているような気がしてしょうがない。隣のあかねを見ると目をキラキラと輝かせてもうすでにこの世界観の中に同化している。

ーでもまあ…、ここなら絶叫マシンなんてなさそうだな…。

エントランスからぐると園内を見渡ながらその部分ではほっとした颯土だ。最後に遊園地に行った小学三年の夏、はじめて乗ったジェットコースターに死ぬ思いをしたことがトラウマになっている。自分にはこんなハードなマシンは合わない、もう二度と乗らないと心に誓い、その誓いを今日までちゃんと守ってきたのだ。

あかねはさっそく変な耳のついた帽子を買った。それを被り、どう？と、訊く。

ーどう？と訊かれても何てコメントすりゃあいいんだよ…。バカくせえとしか言いようがないじゃん…。

という本心は心の一番奥に沈めて、

「…いいんじゃない？」

と、颯土は小声で呟いて目をそらした。恥ずかしくて見てられないというのが本音だが、周りにはそういうヤツらがたくさんいる。大人も子供も年齢に境界がない。みんながみんなラブリーワールドの人間に成り切ってるようだ。

ーまあ、これがこの世界での常識らしいからしよーがねーな。

颯土はどうかこの世界観に慣れる意識をするよう心がけるようにした。

「群竹くん、笑顔が引きつってるよ？」

「何か硬いよ？」

と、あかねに笑われながらもいくつかのラブリーなアトラクションをそれぞれ数十分かけて並んだ後に体験したことで、ヒカル之歌と同じぐらいに耳につく音楽にも頭がぼーっとしてくる甘い匂いにも歩き回る着ぐるみにもわざとらしい笑顔と演技のコンパニオンたちにもどうか慣れたようだ。あかねはまるでヒカルの機関銃のようにさっきから喋りっぱなしだ。そのハイテンションはあかねらしくないが、こんな笑顔が引きつった自分でも、一緒にいることに満足してくれてるということに颯土は喜びを感じる。あかねが楽しそうにしてくれているのならそれだけでOKだ。ラブリーな世界だって何にだって慣れてやる、ぐらいな気持ちにもなる。受験が成功したら来春からしばらくは神戸と東京で離れた付き合いを繋げなくてはならないのだから、せめてそれまでの間、そしてこーゆー場所ではやっぱり…、

颯土は隣を歩くあかねの肩をぐっと抱き寄せた。普段はあまり自分からスキンシップは求めず、だいたいあかねの方から腕を取ってくるが、今日はそれさえも忘れてこのラブリーワールドに夢中になっているようだから。

あかねは少し驚いたように颯土を見上げてから恥ずかしそうに微笑んだ。そんなあかねを可愛いと思う颯土だった。あかねが、

「今度はこれに乗ろう？」

と、絶叫マシン、スペースマウンテンを指さすまで――。

――あったのかよ…っ！？

心臓の悪い人は乗っちゃいけません、などいくつかの注意書きがある案内板を見つめて颯土は固まった。

「これ、すごいんだって。脳みそが拡散されちゃうってなんかに書いてあった…」

と、あかねはやや震えながら言う。

「…あかね、こーゆーの好きなのか？」

注意書きとあかねの言葉に心底慄きながら、でもそれをひた隠す態度で颯土は言った。

――イヤだ。絶対に乗りたくない。

「実は苦手なんだけど…」

「だったら無理して乗ることないよ」

颯土はほっとしてあかねの腕を引いてこの場から立ち去ろうとする。だがあかねは強引に立ち止まり、

「…キャーッて叫んで群竹くんにしがみつきたいんだもん…。そーゆーことしてみたいんだあ…。だから頑張って乗る」

「べ、べつに頑張らなくても…！」

「ううん。私だってたまには頑張るっ！」

あかねは逆に颯土の腕を引いて列の最後尾に並んだ。

――鬼…！！

待ち時間の二十分。少しずつ進んでいく列の流れはまるでへびの生殺しのよう。緊張感が高まり手に汗を握りながら颯土の内心はビビリまくりだった。

「なんかドキドキしちゃうね…。これで心臓麻痺になっちゃった人とかもいるみたいだから…」

なんて言うあかねに、

——そんなおっかないこと言うくらいなら乗ろうなんて言うんじゃないよ…！

と、バクバクしてる心臓を何度も深呼吸で沈めなきゃならない颯土だ。今すぐ帰りたい。途中にはいくつもの出口がある。列から離れてその明るい場所に歩いて行きたい！

だが、まさかここまで来て絶叫マシンはダメなんてみっともないこと言えないし、あかねは、キャーッとやりたがってるし、それはやってもらいたいような不純な思いもあるし。

——俺の方がキャーッとなっちゃったらどうすんだよ…。

ああ、このまま時間よ止まれ…！止まってしまえ…！

……心臓が止まる思いだった。あかねのキャーッも自分がその時どーなってたのかもまったく記憶にない颯土は、アトラクションを出た後、その場に座り込んであはあしたい気持ちを抑えるのが精一杯だった。頭はくらくらするし足はふらついていて立ってるのも辛い。だがそれをあかねには悟らせないように。

「面白かったね！」

と、意外に平気なあかねだ。

「二十分待ちで乗れるなんてすいてるよね？さすが平日！」

すぐ隣にいるあかねの喋る声がずいぶん遠くの方から聞こえる。どうやらさっきからずっと耳鳴りがしているらしい。

「ずっと目を瞑っちゃってたからどんな景色だったのか見てないんだ。どうだった？」

というあかねの質問に答えられるはずもない。自分だって見ていないし第一覚えてない。ただ口から飛び出してきそうになってる心臓がここにあるだけだ。でも、

「…たいしたことなかったぜ」

と一応答えておいた。するとあかねは言った。

「…じゃあ、もう一回乗ろう？」

——なっ！？

冗談じゃないぜ！と、颯土は固まった。もう一回なんて乗ったら確実に死ぬ！

あかねの言葉は聞こえなかったふりをして颯土はスタスタと歩きだした。早くこの場から立ち去りたい。

「あれ、群竹くん？」

スペースマウンテンの方に戻りかけていたあかねはついてこない颯土を振り返り追いかけて来た。だが、とにかくこの一角から遠ざかりたい颯土はそんなあかねを無視して歩く。

「ねえねえ、群竹くん？」

あかねに腕を取られ、ギクッと振り返った颯土は思わず、

「うるさいなあ！少し黙ってろよ！」

という言葉が口から出てしまった。颯土のキツイ言葉に、しばらくの間驚いたように立ち尽くしていたあかねは、

「...何でそんなふうに言うの？」

と、颯土を睨みくるりと背中を向けた。

——うるさいなんてひどいじゃない...。

そんなふうに冷たく言われなければならないことをした覚えもないし、やっぱり颯土はディズニーランドになんか来たくなかったんだ、と思うとせつなさが押し寄せて来た。颯土が近畿の大学を志望していると初めて聞いた時は一晩泣いたことも、やっとの思いでそれを受け入れたことも全然知らないで、今日のデートがどれだけ大切な思い出作りなのかもわかってないで...、とあかねは唇をかみしめる。

——群竹くんのバカ...！

たった一言でさっきまで浮いていた気持ちが沈んでしまった。

「あ——、ごめん。つい...」

颯土はぼそぼそと呟くように言った。

「つい...何よ？」

つつい出てしまった本心ってことなの？と、あかねはまた颯土を睨む。

「私、うるさかったんだ...。黙ってて欲しかったんだ...」

「そんな言い方すんなよ」

今度は颯土があかねを睨む。その目つきに傷つき腹が立ったあかねは、

「どっちが最初にそんな言い方したのよ。群竹くんの目つき感じ悪い...」

と、言い返した。こうなったらもうダメだ。あとは互いが意地になるだけ。

はあ...！

と、颯土はおもむろにため息を吐き、

「あかねがそんなに頑固だったなんてね」

と、言い放った。

「私だっていつもいつも群竹くんに合わせてばかりじゃないもん...」

「...はっ！どっちが合わせてると思ってんだよ？」

と、こんな感じで言い合いはエスカレートしていくだけ。泣きそうになったあかねがうっ...とうつむいたとき、

「...ちょっと便所行ってくるからここで待ってろよ」

颯土はあかねの返事も聞かなくうちに随分遠くにあるトイレに向かって歩いて行ってしまった。

——はあ.....。

あかねはすぐそこにあったベンチに腰掛けて肩を落とした。こんなところに来て喧嘩をしてしまうなんて思ってもいなかった。考えてみれば颯土とこんなふうには喧嘩をしたのは付き合ってから初めてのことだ。

——でも、うるさいはあんまりだよ...。人の気も知らないで...。

たいくつそうに笑顔を引きつらせた颯土に何とかして楽しんでもらいたくてテンションをあげて頑張っていた努力があだになってしまったようで、それが悲しくて悔しいあかねだ。本当はスペースマウンテンにだって乗りたくなかったけど、この雰囲気には颯土が戸惑ってるのがよくわかったから男の子が好きな絶叫マシンにも頑張って乗らなきゃって思った。今だって心臓バクバクだし、たぶんもう一回なんて乗ったら気絶しそうだ。

――やっぱり私じゃ無理なのかな…。

『あかねはあかねらしくしてればいいんだぜ？そのままな！』

前に、そう言って励ましてくれたのは田村だった。思い出した言葉と同時に、今、田村の声がリアルに聞こえたような気がしてふと顔を上げてみると、

――やだ！田村先輩！？

ベンチから少し離れた売店の前で田村が立って笑っている。あかねは立ち上がって駆け寄ろうとしたが途中でやめた。木陰に隠れて見えなかった田村が喋っていた相手が見知らぬ女の子だったからだ。

――あ…。

どこかできゅん、と胸の痛みを感じた。田村は女の子と自分の空いたジュースの紙コップをゴミ箱に投げ入れ、ふたりはあかねに気がつかずにそのまま背を向けて歩き出した。

――先輩、行っちゃった…。

あかねはまたベンチに座りなおした。いつも困ったときは相談に乗って励ましてくれた田村とこんなところでこんな時に再会したが、もう昔のままじゃないということを改めて思い知らされた気がした。

――田村先輩は女の子にうるさいな、なんて言わないよね…。

でも――、

あかねはふと気がついた。さっきの颯土の言い方はいつもヒカルに言ってる口調そのままだった。颯土とヒカルはいつだって口喧嘩をしているがカラッとしている。

『うるさいなあ、少し黙ってろよ！』

『なにさ、うるさくて悪かったわねえ！』

こんなふうに。それでいて信頼しあっている颯土とヒカル――。

――そっか。喧嘩できるっていいことなのかもしれない…。

そう思い顔を上げたところに山盛りになって溢れそうなポップコーンがあった。いつの間にか帰って来ていた颯土が目の前に差し出していたのだ。

「…さっきは悪かったな」

と、颯土。

「私こそごめん…」

あかねは差し出されたポップコーンを受け取りながら言った。颯土はあかねの隣に座り、バツが悪そうに鼻をきながら、

「俺、ああいうのダメなんだよ実は…」

と、後方のスペースマウンテンを振り返りながら言った。

「超苦手…。死ぬかと思った…」

颯土は照れくさそうに笑う。

「群竹くんも…？実は私も本当はダメ。でも、群竹くんが乗りたいかなって思って…」

颯土はへ？と呟いてから、「ば～か…」と、あかねのおでこをつついた。

「何だかくだらない喧嘩だったね？」

と、あかねは笑った。

――でも、そんなくだらない喧嘩を積み重ねながら信じ合えるようになるんだね…。

颯土との温度差を縮めるにはまだ少し時間がかかりそうだがいつかきっと、と思いながら、あかねは颯土に寄り添った。

ファインダーから覗いたみんなの顔は卒業式の直後だからなのか少し硬かった。勇斗は変にすましているし、祐輔は生真面目に口を結んでいたし、あかねと麻耶も緊張気味で、いつもと変わらない笑顔でレンズを見ているのはヒカルだけ。

――せっかく背中に翼を広げてるっていうのにこれじゃ飛び立っても失速しそうだなあ…。

だが、笑って笑ってというお決まりの台詞なんか言いたくない。そんな言葉で無理に作った笑顔はこのメンバーには似合わない。カメラには三枚連続撮影機能がついている。今まで一度も使ったことのないその機能だが、この時の為にあったんだな、と颯土はニヤリ。

「今、三回シャッター切れなかった？」

「三枚連撮シャッターボタンを押したんだ。一枚目はみんな緊張してるだろ？二枚目の写真がきつと自然な表情が出てると思うぜ。そして三枚目はまぬけな顔かな！」

校庭の真ん中で背中に翼を広げた記念写真。きっと最高の絵になっているはず、と颯土は笑った。

◇

みんなで揃って校門に向かいながら、花壇の前、部舎の前を横切り颯土はふと立ち止まった。この学び舎もこれで本当に最後、と颯土は校舎を見上げる。ただ家に近いから、という理由だけで来た本城高校だった。適当に勉強して部活をやって毎日が過ぎて行けばそれでいいと思っていた入学当時。友達とか仲間とか、その言葉だけでさえもうざったくて、自分に近寄ってくるもの全てに対して拒否反応を起こしていた三年前の自分が今、目の前を通って行った気がした。

――あいつ、どこに行くんだろう…。

髪に寝癖をつけたままうつむいた十六才の群竹颯土は静まり返った夕暮れ時の校舎の中に入っていく。颯土は無意識にカメラを握り締め、十六才の颯土が消えた昇降口へと歩き出した。

「…群竹くん？」

あとを追おうとしたあかねの腕を取って止めたのは祐輔だ。

「ここで待ってよう…」

「でも…」

「群竹ちゃんの心のアルバムが開いたんだよ、きっと」

と、勇斗が笑う。

「あんたが言うのと笑えるけど、それいい言葉だわあ…」

と、麻耶も昇降口に入っていく颯土の背中を見送りながら言った。

「群竹くんの心のアルバムか…」

ヒカルがポツリと呟いた。

◇

十六才の颯土はまだ完全に目覚めていない調子で生あくびを繰り返しながら下駄箱を開けた。頭も心も空っぽで何も考えちゃいない。ただ、だるくて重たい足を何とか前に出し、もう本鈴が鳴り終わって生徒たちの姿もない廊下を一番奥の一年F組までガラガラと歩いて行く。教室の後

方の扉を控えめに開けると、クラスメートたちが一斉に振り返って見る。だが、そんなことも別に気にせず、既にホームルームが始まっている教室に入り、千田先生にひとことふたこと遅刻を詫びて席につく――。

誰もいない一年F組の教室を颯土は見回した。真ん中に集中していた自分と仲間たちの席を見つめて思い返されることは戸惑ってばかりだった十六才の頃だ。放っておいて欲しいのに放っておいてくれなかった仲間たち。ホームルーム合宿、体育祭、文化祭...、何故かいつも一緒に行動させられた。誰も自分に気を使わない。ヒカルはいつも自分のペースでうるさく話しかけてきたし、勇斗はいつもまとわりついてきたし、麻耶はギクリとする突っ込みを入れてきたし、祐輔はさり気なく手を取ってくれた。そして戸惑いを隠せないでいる自分にいつも優しい微笑みを向けていたのがあかねだ。

だが、自分以外の誰かや何かに依存し、仲間に囲まれ馴れ合う自分が許せなかった。いつかはこいつらに裏切られる、こいつらは離れていく、と最初から決め付けていたから。

――けど、一度だって裏切られたことなかったな....。

誰からも――。そして、離れるどころかずっと.....。

机、黒板、[1-F]の札――。十六才の自分を重ね、颯土は次々とシャッターを切った。

それから西階段を上がり二階へ――。上がってすぐの角を曲がると二年生の回廊だ。

――！？

明るい光が全身に迫る中から、いきなりヒカルが飛び出して来た。

「ヒビク先輩！」

ヒカルは自分を素通りして後方の響の元に駆けていく。その行き先を見守るようにして颯土は振り返った。光の中に包まれたヒカルと響の絵がそこに見えた。これ以上の輝きはないと思うくらいの眩しい光を発散させたふたり...。仲間という時はうるさくてガサツで面倒なクラスメート。いつも唐突に部屋の窓に消しゴムを投げってくるのにもドキッとさせられてばかりだったし、音痴な歌にも頭を抱えさせられたトモダチ浅倉ヒカル...

今、この回廊で目を閉じていると、ヒカル！と呼ぶ響と、ヒビク先輩！と呼ぶヒカルの声が聴こえるような気がする。夏の合宿でたまたま覗いてしまった湖畔でのふたりの構図はまだ頭の中に焼きついたままだ。膝で眠る響を見つめていたヒカルは、自分が知っている`浅倉ヒカル、`じゃなく風間響の`ヒカル、`だった。そして響も浅倉ヒカルの`ヒビク先輩、`....。

ふたりの絵はいつも美しくてどこかせつなく輝いていた。文化祭のときめき写真館でも、その他特別なシチュエーションはなくてもふたりがそこにいるだけで見えた絵は形としてじゃない心に迫る迫力と美しさがあり、自分はそんな絵を見ていたかった。ふたりに与えてもらったものはきっと計り知れないくらい大きなものだったのだろう。

閉じていた目を開き、二年C組の教室を見回して思い返すのは、

――浅倉と風間先輩....。

響を想いながら毎日を生きていた十七才の浅倉ヒカルがこの教室に染み込んでいる。そして、そんなヒカルを見ていた十七才の群竹颯土だった。

廊下、水飲み場、音楽室、図書室。校舎の中をゆっくりと歩き最後に辿り着いた三年C組――。ついさっきまで、千田先生もクラスメートたちもいたこの教室は今もう誰もいない。窓からは明るい西日が差し込み、その光の筋が届いているのは真ん中のヒカルの席だった。

颯土は一番後ろの自分の席から真っ直ぐ前の黒板を見た。赤、青、黄色のチョークを使い、クラスメートが思い出の落書きを残していた。

―― 松井くん、ずっと好きでした！ あけみ

―― 権田先生、お説教長いよ～！ 信子

―― 群竹くん、愛してる～っ！気づいて欲しかったよぉ～！ ようこ

――群竹くん、愛してる？！

自分へのメッセージを見つけて、ハッ、と颯土は笑った。きっと、もうここには誰も戻ってこないと思った女子たちが式のあとに書き残して行ったのだろう。

――悪かったな、気づいてやれなくて。

黒板に向かい心で呟きながら、颯土はメッセージたちをカメラにおさめた。それから光が届いているヒカルの机までゆっくりと歩き、その端にそっと指で触れた。確かこの場所には素敵な文字が刻まれていたはずだ、と颯土は顔を机の右端に近づける。

――...なっ....。

―― LOVE HIKARU。

―― LOVE HIBIKU。

いつの間にか文字がふたつ並んでいた。上の文字は去年の響がヒカルへの秘めた想いを刻んだ素敵な文字だ。下の文字はあとからヒカルがこっそり刻んだのだろう。いつこんなことをしたのかななんて全然気がつかなかったが、ヒカルはきっとここに響の面影と想いを染み込ませて抱きしめながらこの一年を過ごしてきたに違いない。

――一緒にいなくても響き合いながら輝いてるんだな、浅倉と風間先輩は....。

この場所に届いている光がまるでスポットライトのようだった。颯土はカメラを机に向けて焦点を合わせた。だが、すぐその行動を中止してもう一度眼で机を見つめた。

ここに刻まれたふたつの想い...、いつまでもこのまま残しておきたい。ヒカルと響が自分に与えてくれた輝きを色褪せたものにはしたくない。このまま大切に心の中のアルバムにしまいこんでしまいたい――。

いのちの底から突き上げてくる想いがあった。全身がビリビリと震えるぐらいに感じるその想いは強烈な光への憧れだ。今まではただ闇の中から憧れていただけの光でも、今は自分も微かに見える一点に向かって繋がり始めた。それは、浅倉ヒカルというトモダチがここにいたから見る事が出来た群竹颯土の光明だ。

颯土はカメラのフィルムを巻き上げ、ポケットから白黒フィルムを取り出した。

――これに色はいらない、な....。

ヒカルと響、ふたりの想い。その輝きに魅せられた自分。そして、ここから未来を目指す自分――。モノクロの中に色褪せたりしない真実がきっとあるから。

アングルは三年C組の教室。だが、焦点は光の届いたヒカルの机の並んだ文字。

――これが俺の本当の原点...かもな...

いのちで呟き、颯土は想いを込めた指でシャッターを押した。

◇

昇降口まで戻ると、みんなが待っていてくれた。

「...待たせて悪かったな」

颯土がそう呟くと、

「いや」

「いえいえ～」

「ぜーんぜん」

と、みんなは口々言い笑った。きっと、今のみんなのこの顔も何年かしたのちに思い出になるのだろう。今までもそうやってその時その時を過ごしてきたように...、と五人の顔を見て思う颯土だ。

「写真を撮ってきたの？」

と、ヒカル。

「ああ。十六才...からのな」

「愛しく思った...？」

「...そうだな。くすぐったかったけど...」

「よかったね！群竹くん！」

――...俺の高校時代――、

颯土はぐるとみんなの顔を見回し、

「ああ...、よかった！」

と、笑った。さっき、みんなで撮ったピンクの翼を広げた記念写真のイメージが目の前に浮かんで見えた。

勇斗の引越しが行われたのは三月二十九日。牛乳屋の前の横断歩道で助けたことが縁になって知り合った稲葉トメが営むアパート[ときわ荘]が勇斗の新居で、本城高校からほんの五分ほど歩いた場所にある。

荷物は祐輔の父がトラックで運び、もちろん祐輔も手伝いに来た。そして、ときわ荘から近い颯土とヒカルもあとから手伝いに行き、もともとたいした荷物もなかった引越しは夕方にはすっきり片付いた状態で終わっていた。

「せっかく群竹ちゃんにご近所さんになれたと思ったら完璧なすれ違いなんだな…」

勇斗はヒカルが持ってきたおにぎりを手にしながらしんみりとした様子で呟いた。明日は颯土が神戸の学生寮に入寮するため、東京を離れる日だ。

「まさか大久保くんがこんな近くに引っ越してくるなんて思ってなかったもんね～」

ヒカルはみんなにお茶を配る。

「まあ、引越しが今日でよかったよ。明日以降だったら俺は手伝えなかったからな」

颯土は鞆の中から一枚の封筒を取り出した。そして、

「これ、出来たから渡しておく…」

と、ひとりひとりに配ったのは卒業式の後にみんなで撮った記念写真だ。

「わぁ！本当に翼が広がってるみたい！」

最初に感嘆の声を上げたのはヒカルだ。校庭の真ん中で横に並んだ六人の後ろで枝を広げた梅の木が薄桃色の翼のように見え、ナチュラルに笑ったみんながそのまま飛び立って行きそうな活き活きとした写真だった。

「感動もんだなあ、これ。連続撮影の効果もバッチリじゃないか」

と、祐輔。

「まあな！」

と、颯土は笑う。

「別れは寂しいけどこれがあれば十分かぁ…」

勇斗はまたしんみりと言った。

「別れたって…、もう毎日学校で顔を合わせる高校生じゃないんだし、東京にしようが神戸にしようがあんまり関係ないような気がするけどな…？」

颯土はクールに言い返した。

「大久保くんは今ちょっとおセンチになってるんだよね～？これから大変だもん」

ヒカルの言葉で颯土はなるほど、と納得し、

「夏休みには帰って来るからさ、そしたら毎日でも顔を見に来てやるよ」

と、勇斗の背中を叩く。

「…とか言ってるけど、どーせその時は毎日あかねちゃんなんだよ」

ぶつぶつ言う勇斗に、そうかも…、と答えた颯土だった。

「群竹くんはもう準備は終わったの？」

夕暮れの帰り道をヒカルと颯土は並んで歩く。

「荷物はもう送ってあるし、明日はただ身体ひとつで行けばいいだけ」

「そっか...」

と、呟いたヒカルはそのまま沈黙した。

「...なんだよ？」

隣りにいるくせに静かなヒカルだとどうも落ち着かない颯土だ。

「大久保くんの気持ち、ちょっとわかるなあ...と思って」

ヒカルは笑った。そして、

「あかねちゃんに...、」

と言いかけたあとを、颯土は、

「...毎日ちゃんと電話しろ、だろ？」

繋げて言った。このところいつも同じことをヒカルには言われているからだ。

「あたり！」

「俺ってそんなに信用ないか？」

「うん！」

自信を持って返事をしたヒカルは、ちえっ...と腐る颯土を見てくすくすと笑った。

「明日はあかねちゃんは見送ってくれるんでしょ？」

「まあ...な」

「あたしも見送りに行きたいけどやめておくね！」

「見送りなんて大げさだなあ？そんなもん別にいいって」

颯土は頭の後ろに両腕を組みヒカルよりも一歩先を歩いた。後ろで微笑むヒカルの視線をその背中に感じた。

◇

翌日、颯土が家を出ると、

「あれ？群竹くんもう出発？」

頭の上から声が聴こえた。見上げると、頭に黄色のバンダナを巻いたヒカルが窓枠を跨いだ格好で座り自分を見下ろしていた。窓拭きをしていたらしい。

「途中であかねと昼メシを食うから早めに...な」

「今、降りていくからちょっと待ってて～！」

ヒカルは言うが早いかすぐさま引込み、家の中からはバタバタと階段を駆け下りてくる音が響いた。いつでも賑やかなヤツ...、と颯土が笑っている間に玄関がバタン！と開きサンダル履きのヒカルが飛び出して来た。

「せっかくの門出にこーんな格好でごめんね」

ヒカルはバンダナからジーンズを履いた足までを両手でなぞりながら笑った。そのいつもと変わらない笑顔にどこかほっとした颯土だ。

「いや。それが浅倉ヒカルだもんな？今日はあの歌がないだけ救われたかも」

と、颯土も笑った。ヒカルが窓拭きをしているのは毎度のことだが、そういう時はいつも、
は～るの～うら～らあの一　すーみーだーがーわー

という調子っぱずれな歌がセットになっていた。ヒカルは、失礼ねえ！と膨れて、
「お餞別に一曲歌ったげる！」

あ～あ～ああ～と発声した。颯土はギョツとした顔でヒカルを見、
「お気持ちだけで十分ですからっ！」

と、両手をヒカルの顔の前でぶるぶる振る。だが、ヒカルは横目で颯土をチラッと見ただけで
発声をやめない。

――こいつ、マジで歌う気か...！？

颯土が精神的耳栓をしようとした時、発声を終えたヒカルは、
「改まって言うのもなんですがあ～、立派なカメラマンになるんだよ～？頑張ってるね！」

と裏声で言いながらジーンズで拭いた右手をサッと差し出してケラケラと笑った。

は～るの～うら～らあの一、と歌が出るかと思っていた颯土は一瞬、へ？と固まったがすぐに、

「おお...。お前も立派な...いや、優しい幼稚園の先生になれるようにガンバレな」

と、その手を握り返した。歌が聴けなかったことを少し残念に思っている自分に驚きながら。

手を握り合い、一瞬だけ目と目で見つめ合い、ふたりはすぐに空を見上げたり下を向いたりして
その目をそらし、照れくさそうに笑った。

「...それじゃ、行く」

「うん」

「じゃあな」

颯土は軽く手を上げて歩き出し、ヒカルは、バイバイ、と手を振った。歩きながら、ずっと手を
を振り続けているヒカルを背中に感じて颯土はその角を曲がってしまうのが惜しいような気がして
いた。振り返るのはためらうが歩調はだんだんゆっくりになる。

「元気でね～！頑張ってるね～！」

ヒカルの叫び声に、やっぱり角の手前で立ち止まり振り返ると右手をいっぱい伸ばしたヒカル
が大きく手を振っていた。青空と黄色いバンダナと眩しい笑顔がひとつの絵に見えた。もし
も今、カメラを手にしていたら迷わずシャッターを押した瞬間だったろう。

――今、カメラを持っていたら...

「サンキュー浅倉ヒカル...。バイバイ...」

角を曲がりながら颯土は呟いた。その声はきっとヒカルには届かなかっただろうけれど――。

部屋の大掃除が終わって一息ついたヒカルは、昨日颯土から手渡された卒業記念写真を手に取った。左から並んだ祐輔、麻耶、勇斗、ヒカル、颯土、あかねはみんな晴れやかな笑顔でこちらを見ている。背中にピンクの翼を広げたこの仲間たちはもうそれぞれの未来に向かって羽ばたき始めた。

「ほんと、群竹くん最高の写真を撮ってくれたな...」

みんなの顔をひとりひとり見つめながらヒカルは呟いた。梅の木を背景にしたことにも広がった枝を翼に見立てたアングルにも、そしてみんなの自然な笑顔を引き出した連続撮影の気転にも颯土のいのちに輝くきらめきを感じる。

颯土の撮る写真はみんなそんな輝きがあった。初めて撮ってくれたのは響と舞台を踏んだ一年生の文化祭。二年生のときめき写真館ではドラキュラ伯爵に抱かれた花嫁。秋には銀杏の絨毯が敷かれた中で、まるで光に包まれているような写真を撮ってくれた。どの写真もその時の最高が映し出され、何かが心の中に染み込んでくるようなものばかりだ。

ヒカルはしまってあったそれらの写真を取り出し、開けたままの窓際に座った。目の前の颯土の部屋はカーテンが閉められ、部屋の主はさっき神戸に旅立って行った。今頃はもう新幹線の中だろう。昨日までは開いていて当たり前だったその窓が、これからは閉まっていて当たり前の日常になってしまうことに急に寂しさを感じたヒカルだ。

昨日勇斗のアパートからの帰り道で見た颯土の背中が、ずいぶん大きくたくましく見えた。見慣れていたはずの颯土はいつもうつむくように背中を丸めていたネクラのムラタケだったはずなのに。

写真の中で颯土は真っ直ぐこちらを見て笑っている。その顔は祐輔や勇斗、みんなの笑顔と溶け合ってどこにも違和感がない。

――いろんなことがあったね...。

窓枠に頬杖をつき、向かいの窓に向かって呟いた時、春の風がサーッと通り過ぎて行った。

――ヒー姉見てよ！隣んちがこんなに近い！これじゃ、カーテン開けられないね？

初めてこの部屋の窓を開けたのは三年前のちょうど今頃だった。あまりにも近すぎる隣家の窓に確かに驚いたあの頃だった――。

◇

入学式の日には寝坊して遅刻して、髪には寝癖をしっかりとつけたままの群竹くんだった。その座った根性が気に入って友達になりたいと思って笑いかけてみたけれど思いっきり無視されちゃったよね。

席替えをした日、あたしたち六人は教室の真ん中の席に集中して、群竹くんはものすごくイヤそうな顔をしていたけれどあかねちゃんは嬉しそうだったな。だって、すぐ後ろが群竹くんだったもんね。もうあの時からあかねちゃんは群竹くんのことが好きだったんだね。

よく貧血を起こして保健室に行っていたあかねちゃんだったけれど、群竹くんは興味なさそうでいて、あかねちゃんのことを気にしてたってことわかってたよ。あかねちゃんを見てた群竹く

んの目は女の子を守るヒーローの目だったから。

ヒビク先輩たちとボーリングやビリヤードに行った時はいつもひとりでつまんなそうにしてたり、サッカー部の有志応援団も面倒くさそうだったけど、いたよね、ここに。最初からずっと、群竹くんはここにいた…。

秋の日曜日、墨田公園でおばちゃんと三人で食べたあんまん、美味しかったなあ。あの時の群竹くんはずいぶん困った顔をしていたけどあんまんを食べたあとは笑ってたよ。あたしはそれが嬉しかった。きっと、あの日が群竹くんと少しだけ近くなれた瞬間だったんだね。

除夜の鐘を一緒についたり、仲良くなろうぜ祭りを開催したり、少しずつだけど友達になれた高校一年の時。群竹くんがお隣さんじゃなかったとしても、最初から友達になりたいって思ってた。なれるような気がしてたー。

だから、クラス替えがあった高校二年の春は腐れ縁だな、って勝手に思ってニヤニヤしちゃった。群竹くんは「またうるさい浅倉と一緒にかよ…」って顔であたしを見てたけど。

中央委員、居眠りが災いして押し付けられたって思ってただろうけどそうじゃないよ。きっとみんな、群竹くんを信頼してたんだよ。だって、頼ればいつも何とかしてくれたもん。数学のプリントだってなんだった。何とかしてくれなかったのは人形劇の台詞の吹き込みだけだったね。

――二年生の夏からは…、

群竹くんがいてくれてとても心強かった。ヒビク先輩とおそろいで買ってきてくれた音符のペンダントは、見るのがつらい時もあったけど、群竹くんがあたしとヒビク先輩にお揃いを選んでくれた心が嬉しくて、だからつらい気持ちに負けないように毎日首にかけていた。このペンダントがああの頃のあたしの勇気になったのは確か。群竹くんのおかげだよ…。

文化祭のときめき写真館――。あかねちゃんのウェディングドレスを見た時、群竹くんとちゃんと繋がった思いであの衣装を着られたあかねちゃんが心の底から羨ましかった。あたしはヒビク先輩とは繋がっていないっと思ってたけど、最後はやっぱりウェディングドレスを手を取っちゃって…。まさかヒビク先輩と一緒にあんな素敵な写真を撮ってもらえるなんて思ってなかったよ。群竹くんとあかねちゃんの連携プレーに心から感謝したあの瞬間だった…。

あの頃からだよ。窓に消しゴムをぶつけても面倒くさそうにはしててもいやーな顔はしなくなったの。真冬の中一時間もお喋りにつき合わせちゃったこともあったけど、何を喋ったかなんて今は全然覚えてないよ。いつもくだらない話ばかりにつき合わせちゃったけど、あの頃はそんな時間に救われていたな…。

胸の中で思いきり泣かせてもらった時も、そしてヒビク先輩の卒業式の時も…。

三年生になってからは群竹くんとあかねちゃんに当てられっぱなしで、ふたりのラブラブぶりに妬けちゃった時もあったな。不器用な群竹くんが一生懸命あかねちゃんに合わせようとしていることが羨ましくて。なのにあたしの机の素敵な文字には、あほらし、なんて無関心で。

ふたりはいつからか、どんどんあたしの手の届かない場所に行っちゃって、そんな群竹くんとあかねちゃんを感じるたびにどこかせつなくて仕方なかった。

部屋の電気…、つかない日があったよね…。

たぶんあの頃のあたしはちょっと疲れてたんだ。ヒビク先輩から連絡が来ないことに不安で仕

方なくて。群竹くんとあかねちゃんを見ながら、もしかしたらヒビク先輩もアメリカで恋をしちゃっているのかもしれないって思ったこともあった。みんなあたしから離れて行っちゃう...って勝手に思いつめてた。

でも――。

あんまんを持ってお見舞いに来てくれたみんなと群竹くんの焼き芋...。どんなに心が温まったことかわからないくらいだよ...。そして、どんなに自分がつまんない人間になっちゃってたかってことにも気がついた。みんなはずっとあたしの味方をしてくれてる。あたしもずっとみんなの味方じゃなくちゃ...って。ペコッとへこんでいた気持ちもお腹も、あの焼き芋のおかげでまたふわっと膨れたんだよ。

卒業式の日、群竹くに言いたかった言葉は――。あの時、言葉が出てこなかったのが今ちょっと悔しい。

悔しいよ.....。

◇

サーッと通り過ぎた風に髪を持ち上げられてヒカルはふっと顔を上げた。

「...あれ？」

ぼんやりとした頭で辺りを見回すと、部屋の中はもう薄暗くなっていて、空には夕焼けが広がっていた。

「やだ...居眠りしちゃってたんだ？」

頬を撫でるとしっかりと窓枠の線の跡がついている。その手に持っていたはずの四枚の写真は風に飛ばされて部屋の真ん中に落ちていた。

「あれ～？一枚ないよ～」

颯土が撮ってくれた卒業記念写真が見つからない。ヒカルは蒼くなって部屋中を探した。

「みんな～？どこ行っちゃったの～？飛んで行っちゃったのかなあ...」

心底不安になり、窓の下を見たり空の彼方を見渡してみたり屋根を見上げてみたり、本棚の下、ベッドの下、と順番に床にへばりついていたのぞいてみてようやく机の下にもぐりこんでいた写真を見つけた。

「よかった...！」

みんなの顔にまた会えた喜びが沸々と湧き上がり涙がこぼれそうになった。すぐさま机の上に用意しておいた写真立てに卒業写真を収めて飾った。写真をおいた机のその場所がパッと明るく輝いた。

――あたし、随分長い夢を見ていたような気がする...。あかねちゃん、麻耶ちゃん、大久保くん、伊藤くん...、ヒビク先輩...、田村先輩たち...。みんなと一緒にいた本城高校のキラキラ光る思い出の欠片を夢の中で拾って来たい。出会いの時から翼を広げた卒業式までのたくさんの欠片たちを、あたしの心のアルバムにおさめるために――。

「はっくしょん！！」

と、くしゃみが飛び出して身体がふるふるっと震えた。日中は穏やかでも夕暮れ時はまだ肌寒い。ヒカルは窓を閉めるために窓際に行き、また向かいの窓を見つめた。もう、今夜からしば

らく明かりはつかない窓だ。

——これは夢じゃないんだよね…。

じゃあな、と手を上げて歩き出した颯土の後姿が瞼に浮かんできた。その背中とは昨日見たのと同じ、広くて大きくてたのもしい背中だった。

「…群竹くん」

『ヒー姉見てよ！隣んちがこんなに近い！これじゃ、カーテン開けらんないね？』

——あの時はほんとだぁ、って思ったけれど、あの窓の向こうの住人が群竹くんによかった…。群竹くんがここにいてくれて…。

卒業式の時に言えなかった言葉、今度会えた時はちゃんと伝えるね。顔を見たらきっと照れちゃうと思うけど、今、こんなにも言いたくてしょうがないの。

だから、ちゃんと。

ありがとう、って——。

番外編Memories～オモイデノ、カケラ 完

きみにとどくまで 2 Vivace -後編-

<http://p.booklog.jp/book/77811>

著者：笹竹颯夜

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/souya610/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77811>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77811>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ